
真剣に小者に恋しなさい

二葉 s

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣に小者に恋しなさい

【Nコード】

N8364Q

【作者名】

二葉s

【あらすじ】

真剣で私に恋しなさい！の二次創作作品です。主人公は現実から転生していますが原作知識はなく。前世の知識と現在の世界のギャップに翻弄されています。かつ、小心者なのであまり原作登場人物（危険人物）とは絡みたがりません。文章力がないので変な文が多々あります。更新は不定期になります。原作改変も含みます。そう言うのがダメな方は基本スルーをお願いします。

完結済み 現在不定期で番外編を追加することがあります。

プロローグ

自分には前世の記憶のようなものがある。

昔からなんとなくいろいろな物事にデジャビュを感じることが多くて。さらには知りもしないはずの知識が突然出てきたり、経験したことの無い物事が思いのほかスナリできたりとかそいったことが多かった。

それがだんだんとはつきりして。ああこれは前世の記憶的なやつだなと判ったのは比較的最近のことだ。

あるいは俺はパラノイアの類で、無意識に前世の記憶を捏造しているヤバイ人間という可能性も否定できないんだけど。

とにかく、俺には前世の記憶のようなものがある。

「ようなもの」という表現をしているが、ここが自分でもよくわからないポイントで。

前世というからには過去の時代であるはずなのだ。

つまり俺が生まれるよりも前の時代の記憶が無くてはいけない。

でも俺のもつ記憶は、現代、つまり今の俺と同じくらいの時代を生きた記憶なんだ。

テレビが液晶で携帯が普及していて缶ジュースが120円の時代だ。

前世の記憶があるというよりは一度人生を普通に生きてそれがリセットされたような記憶。

あるいはこの記憶はそっくりな平行世界を生きた記憶で、俺は異世界人なのかもしれない。

冗談みたいだけど、この「俺、異世界人説」には変な説得力があって、というのも前世の記憶と、現実、つまり今の人生にどうも誤差がある。

思いのほか早くロボットが実用化されていたり、聞いたことが無い財閥があったり。聞きなれない地名があったり、前世では見たこと無いような髪の毛の色が流行っていたり。

そして何より食い違うのは、ここにおける人間の強さ。

この人生での人間の強さは上限知らずでちよつと漫画じみている。

水上をダッシュで走れたり、チョップで建物を破壊したり、レーザー出したりする人間がいたりする。

前世の記憶にはそんなことが出来る奴はいなかったし、いたとしても陳腐なトリックを使っていた。

ここでは種も仕掛けも無くそれが出来る人間がいる。

人間全員が強いというわけではなくて、大半は前世の知識どおりの普通の強さなのだけだ。

一部にそんなビックリ人間が存在する。一部とはいえ町内の「カワカミーン」という道場あたりならばそれくらいの強さの人がけっこういるようだ。

こんな小さな町にすら結構な人数いるということは世界的にはかなりの数がいるような気がする。

俺の前世の常識が今の人生では通用しない。

そのせいでいろいろと俺は苦労するわけなんだけど、

とにかく俺は「カワカミーン」には近づかないように気をつけて

いる。

橋の上に光る物

朝の登校時間、物々と思慮に耽る。

俺は異常だ。

見た目はごくごく平凡なただの男。

俺の顔は中のげ・・・・・・・・・・いや、普通だ。普通だ。
断固普通だ。

そんで持つてそんな普通の面の男がフラグなんて建てられるはずもなく、恋愛に縁がない。

男女間にスキャンダラスな生活を送れるはずもなく、私生活も平凡。

もちろん性格だって平凡だ。

しかし、俺には前世の記憶のようなものがある辺り、異常者なのは間違いがない。

こればかりはどのようなしょうもない事実なのだ。

そして。

異常は隠匿すべきなのだ。

人は異常な存在に対しては異常な対応をする。

「おれ。前世の記憶があるんだぜ！」

なんて奴がいたとしたら、普通そんな奴とは距離をおくもんだ。

いや、距離を置かれるくらいならまだいい。

最悪、社会から排除される可能性すらある。少なくとも波乱万丈の人生は決定だ。

俺は平凡に平穩に生きて行きたい。

だから俺は、この「もう一つの記憶」を出来るだけ隠匿している。さらには普段の私生活から出来るだけ平凡であろうと勤めているわけである。

平凡最高、平穩こそ正義。

当たり前の日常のなんと美しいことが。

もし来世があるのならば今度は並平 凡という名前にでもなりたい。

そしてタイムパト……………

「おっは〜。」

何処かで聞いたような挨拶で俺の思考はさえぎられた。

後ろを振り返ると、長い髪をした美人さんがそこにいた。

「あ、榊原先輩……チツス。」

「む〜榊原先輩じゃ無くてユキ!」

俺の呼び方が気に入らないらしく訂正してくる榊原小雪先輩。

「え、じゃあ小雪先輩。おはよう御座います。」

「なんで先輩とかつけるの。ユキだっていつてるのに。あと敬語！」

どうもご下の名前で呼んでも立腹のようだ。

「いや、一応そこら辺はしっかりしておかないと、自分うつかり者だからできるだけ敬語に慣れとか無いと教師連中にもついタメ語になっちゃいますから。」

なんてことを言うが嘘だ。・・・というよりは言い訳だな。

個人的に彼女とは砕けた調子で話したくない。

別に彼女が嫌いなわけじゃあない。むしろ好きなほうだ。

榊原小雪先輩

彼女と出会ったのは俺が小学生のときだった。

前世の趣味の影響が突然釣りに目覚めて、竹釣竿片手に河原に行こうとしていた時、彼女に出会った。

道路脇にグッタリとしている彼女。

体中に打撲痕、恐ろしいほどやせ細って、明らかに異常。虚ろな目で笑いながらブツブツと何かを言っていた。

もうね。トラウマですよ。あれは。

そのとき俺は混乱しつつも平凡な対応をした。

すなわち、警察に連絡をしたわけだ。

彼女は即入院。どうも親の虐待によってあんな状況になっていたらしくて、親はポリス行き。

彼女は病院から警察を経由して、病院の経営者の養子だかなんたかになったらしい。

それらの行程のなかで俺の役割なんて本当に些細なもので、正直俺じゃなくてもあの状況に遭遇すれば警察には連絡しただろう。

それでも刷り込みというかなんとというか、彼女の中では俺に対して好印象が結構できた。

すなわち彼女の、あのどん底の状況から救われる切っ掛け的な存在なわけで、幸運の象徴的存在なわけだ。あれから数年たった今もこうしてフレンドリーに話しかけてくれる。

当たり前のようで、実はこれって結構すごいことなのだ。

虐待とかの後遺症的なもので彼女は普通の人に心を開かない、普通に接しているようでも心の内には大きな壁があるらしい。

積極的に俺に話しかけてくるあたり、俺は数少ない心を開ける相手ということなんだろう。

俺としても、一人の人間と友好関係を開けている事実は喜ばしいことだと感じている。

しかしだ、そこには一つだけ問題がある。

その原因と言うのが彼女の容姿である。

彼女は学園でも有数の結構な美人さんなわけで、それでもって彼女からは積極的に他人とかかわらない性質なわけだ。そんな人が積極的に話しかける相手がいる。しかもクラスメイトでもなんでもない、年下の後輩。

そりゃあ噂にもなります。

当然のように付き合っている説が流れ、ほかにも姉弟説、師弟説、二人は宇宙人説、二人スパイ説等、いろいろな憶測が飛び交った。

超平凡生活を目指す俺としてはこれが結構厄介だったりする。

美人との関わりが嫌だとは言わないが、それで無駄に注目されるのはまずい。

だからせめて必要以上に親密だと思われない程度に他人行儀に接しようと思っている。

……のだから。

「えい！」

まさかのボディープレス的抱きつき攻撃。

「OH！」

ムネがあたってますがな！

やめて！……いや、やめないで！いや……やめてほしいけれど、もう少しの間この感触を味わった上で、理性がハジケる寸前くらいに開放して！

「こらこら嫁入り前の女の子が気軽に男に抱きつくんじゃないやありません。」

と、後ろから声がした。

小雪先輩を背負ったままヨッコラ振り返ると見事なまでの禿が日の光を反射していた。

「あ、冬馬先輩、禿先輩、おはようございます。」

まぶしくてよく見えないけれど、この二人は小雪先輩といつもつるんでいる男2人だ。

冬馬先輩と禿先輩。

冬馬先輩は眉目秀麗、頭脳明晰、満願全席と、なんか凄過ぎるぐらい優秀な人だ。

バイで男女および男男関係に節操が無いと言うところが欠点といえば欠点だけれど、それでも嫌がる相手にしつこく付きまとうようなことは絶対にしないらしい。

その隣にいる禿が、ハゲロリコンこと禿先輩だ。なんというか、禿でロリコンだ。まあ、禿と言っても自発的に剃っているらしいのだが。

「おはようございます。」

「朝一番にそれかよ。」

笑顔で挨拶をしてくれる冬馬先輩となぜか呆れ顔の禿先輩。

「ハゲっ！ハゲっ！」

小雪先輩はハゲという言葉に妙に反応し、俺から離れて禿先輩の頭をぺちぺちとたたき始めた。

良かった、何とか離れてくれた。そして、さようなら俺のエルドラド。

俺がどんなに他人行儀にしても、小雪先輩はかなり親密にスキンシップをしてくる。

虐待の後遺症なのか、それとも元々オツムがアレなのか、彼女の行動はどうも天真爛漫すぎる。

そして、そんな彼女のブレーキとなっているのがこの冬馬先輩と禿先輩だ。

大抵この人たちは3人でつるんです。何でも小雪先輩の養子先が冬馬先輩の家系らしくて、禿先輩は冬馬先輩と家ぐるみの付き合いの幼馴染なのだそうだ。そんでもって同じクラスらしいからまあ、つるむのも当たり前か。

俺はこの三人組とは学年が違うので頻繁な交流があるわけではないけれど、顔を会わせれば結構親密に話をする。

「しかし朝からよくやるねえ。」

そのセリフは俺と小雪先輩のやり取りに対して言っているのかと思っただけで、その視線は遠くに向いていた。

突然何のことかと思ったけれど、周りが妙に騒がしいことに気がついた。

それでもつて、橋の下あたりの人ばかりをみて合点がいった。そして少し後悔した。

数十人の人ばかり。見るからに不良な集団が何かを包囲するように囲んでいる。あれはこの境界の名物だ。

名物「モモヨーチャレンジ」

モモヨという化け物に、人間が挑戦するというイベントだ。

結構な頻度でこの通学コース内で発生し、その中でも一番広い場所という理由で河原付近でよく見られる。

「川神百代」という人は、化け物ぞろいのカワカミーンでも最強の化け物らしく、その道では知らない人はいないんだそうだ。そしてそんな彼女を倒さんと、日々色んな所から挑戦者がやってくる。

もう、定番の風景になっていて誰もその光景を不思議に思わない。それどころかなり面白がって、今日も橋の上にはビッチリとギヤラリーがひしめいている。

しかし、今日の相手はなんだか雑魚くさいなあ。群れるあたり個々の力は弱そうだ。

そんなこと思っているうちに一人目が曲がった。

倒れたのでも、吹き飛んだのでもない。

文字通り曲がった。それも人間が曲がるはずの無い方向に。

ギャラリー喝采。

俺、ドン引き。

その後も次々と人間が曲げられて積み上げられる。
笑顔の女によって人間がテトリス状に積まれる光景に俺は恐怖を
覚えたね。

一応骨を折らないように間接を外すにとどめているようだけれど、
ああ無理やり引っ張ったり積み上げられたりしたら一生レベルの後
遺症が出来そうなんだ。

その後キックでそれを蹴散らす。

ギャラリイ大喝采。

俺、恐怖。

異常だ。

刹那の間に9発の蹴りを繰り出し人間を吹き飛ばす川神百代がで
は無い。

確かに彼女も異常だが、それよりも。

その周りの人間が異常だ。

これらの出来事になんら違和感を感じていない。あれらの行為を
当然と受け取り、そして笑って受け入れている。

あんな蹴りで吹き飛ばされれば人間は死ぬかもしれないと考えな
いのだろうか。それとも死んでしまっても良いと思っっているのだろ
うか。

毎度、あの光景を見るたびに俺はすごく嫌な気分になる。

前世の記憶を否定されるような不快感。

俺の常識が通用しない不快感。

強さというものに対する恐怖。

強さが引き起こす悲劇に対する恐怖。

そして何より・・・

「大丈夫か？」

俺を心配する禿先輩の声で俺は現実に戻される。
やばいな、表情に出るほどだったのだろうか。それとなく見ると、
3人の表情がどこと無く俺に対する心配を含んでいる。

「大丈夫です禿先輩。」

「・・・お前何気に酷い奴だな。」

なぜか哀愁を感じさせる禿先輩。そういえばこの人いつも変な反応をする。

「わふゝマシユマ口食べる？」

「あ、いただきます。」

小雪先輩からマシユマ口を受け取って食べる。気を使わせてるなあ。

うん、普通の味だ。

「冬馬達も」

「ありがとうございます。」

「おう。」

そういつて全員でマシユマロを咀嚼する。

かなりシユールな状況だ。

でもおかげで幾分か気分は良くなった。

こんな感じで俺を氣遣ってくれるあたり、この人たちは俺にとって結構大切な存在だ。

そりゃ、距離をとったり、他人行儀な対応をすることもあるけれど、そんな付き合い方をしても、この人たちとの関係は崩れないという、なんかよくわからない確信がある。

学年は違うけれど、この人たちとは良い友人なんだなあとしみじみ思ったりする。

辺りの喧騒はだいぶ収まって、いつもどおりの通学風景にシフトし始めている。

俺たちもそのまま通学を再開する。

いつもどおりの通学路をいつもどおりの馬鹿話をしながら。

「準はいつか警察に捕まるね。」

「縁起でもないことを言うんじゃないやありません。」

「おやおや。」

こうやって馬鹿な話をしている平和さが、とてもうれしい。

俺は異常だし、この人たちもマトモとはいいがたいけれど、それでも今の俺の状態は平凡で平穏だ。

「やーい準のかーちゃんエクソダス。」

「斬新な罵倒過ぎるだろ！」

「おやおや。」

ピョンピョンと跳ねながら突拍子も無いことを言う小雪先輩、それをたしなめる禿先輩、その横でムツクみたいに優しい眼差しを向ける冬馬先輩。そんで持ってそれをボンヤリと眺める俺。

正直この目の前の、馬鹿な遣り取りに意味なんて無い。

それでも、こんな馬鹿な遣り取りが続けられるという事実が尊いんだろう。

だから俺は、彼らの話をほとんど聞き流しながらも、こんな意味の無い会話が続く日々をこれからも続けていきたいと思う。

「じゃあ準がエクソダス！」

「意味がわからねえよ。」

ただ、この遣り取りで一つだけ気になっていることがある。

意味のない会話ではあるが。俺の知らない単語がちよくちよく登場する。

別に知らなくても害はないと思うが、会話についていけないのはよろしくない。

まあ聞くは一ときの恥とも言っし。

「あの・・・さっきから話に上がってる準って誰のことですか？」

沈黙があたりを支配する。

俺悪いこと聞いた？まさか故人とか！？

「ちよつと待て、お前、俺の名前知らなかったの？」

信じられないといった顔の禿先輩。

「え？だって始めて紹介された時、小雪先輩が……冬馬先輩とハゲ……って。」

いや、確かに禿って名前、変だとは思ってたけれど……ね。

橋の上に光る物（後書き）

用語解説。

・カワカミーン

川神院のこと。主人公は川神院を「危険である。」ということ以外よく知らないので、川神院と言う字で書くことを知らず、音で力ワカミーンと言う名前のものだと思っている。

だから川神学園と川神院の関係もわかっていない。

一応カワカミーンに川神百代らが所属していることは知っている。

・並平 凡

主人公が理想とする名前。

いかにも平凡そうな名前が主人公の好みにジャストミートしている。

ちなみに昔、コミックトムという雑誌があって・・・

・モモヨーチャレンジ

主人公の造語

川神百代の決闘及び喧嘩をこう呼んでいる。

・禿先輩

井上準のこと。

最初榊原小雪に紹介された際に、

「冬馬とね、ハゲ！」と言われたので、

本気で「禿」と言う名前だと思ってた。

手紙を切掛に別世界の扉へ。

一年B組の教室で、今朝のことを考えながら悶える俺。
あまりの異様な雰囲気のせいか、誰ひとりとして近寄っては来ない。

その後。

禿先輩改め準先輩に土下座で謝った。
て言うかあの人会ったびに俺に「ハゲ」って言われてたから変な反応をしていたわけか。
いや、よく殴りださなかったな。しかも謝る俺を笑顔で許してくれた。

かなり人間が出来てる。

しかし何だ、俺は変な悪目立ちしていないだろうか。
俺は先輩をかなり長いこと禿呼ばわりしていたわけだ。
それも堂々と。

はたから見てもかなり失礼、というか、先輩を貶しても平然として
いる輩として見られていないだろうか。

だとすれば問題だ。

変な行動をすれば、誰かに目をつけられる可能性が有る。

自分でも病的なまでに平凡を意識していることは自覚している。
しかし、やはりそればかりはどう仕様も無い。

俺はヘタレなのだ。

もう、自他共に認める小者なのだ。

少なくとも前世の記憶ではこんなにも小心者ではなかった。
度胸があるわけではなかったが、普通の一般人並みの心臓を持っ
ていたはずだ。

しかし、今の人生においては話が違う。
なにせ人間の強さというものが違うのだ。

例えば前世で不良に絡まれたとする。
最悪のケースでボコボコに半殺しだ。

それに対して今の人生で戦闘狂に絡まれたとする。
数秒後に脳漿バーン！！！！・・・なんて事になり
かねない。

強い奴コワイ。
マジ怖い。

しかもだ。

川神百代に代表される「化け物」達は、戦闘を求めている。
モモヨーチャレンジが結構な頻度で起きているし、各所で手合わ

せやら試合やらが行われている。

さらにはこの学園には、決闘システムというもので有る。

何かトラブルがあったら後腐れなく決闘しましょうというものだ。

アホかという話だ。

何故に口喧嘩（話し合い）を決闘（殴り合い）で解決しようとしてるんだ！？

決闘の申し込みと言えばちよいとばかりし聞こえがいいが、早い話が喧嘩をふっかけているに過ぎない。

つまりだ。

今の世界、特にこの学園では、しょっちゅう喧嘩を吹っかけたり、かけられたりしている。

俺の入学してしまった川神学園は、

前世の超不良校も真つ青なバイオレンス学園なのである。

だからこの世界で平穩に生きるのであれば、極力目立たないようにするのがベストだ。

なにせ目立ったが最後、誰かしらに喧嘩（決闘）を吹っかけられ、その結果・・・

・・・うわらば！！

なんて事になったら。

ああ、

「並平凡になりたい。」

いつそ平凡な世界にもう一度生まれ変わりたい。

「過去を修正したいのか？」

なんとなくの独り言に返事があつた。

顔を上げるとそこには見知ったクラスメイトの顔。

柿山衣子

美人・・・というよりはまあ、地味めにそこそこ可愛いくらいの女子。

ソバカスがトレードマークで、畏まったというか、勿体つけた言い回しが特徴的な女だ。

昔からの・・・まあ6年くらいの付き合いで、なんというか、コイツとは、

何故か気が合う。

共通の趣味があるわけではない。

境遇が似ているわけでもない。

好みが近いわけでもない。

でも、何故かコイツとは話しが合う。

友人・・・というか腐れ縁の悪友といった関係だ。

女縁も無ければ友人も殆ど居ない俺の、数少ない異性の友人といえる。

数少ないというか、小雪先輩以外ではコイツくらいしか異性の知り合いが居ないのだが。

「いやな、ほら。生涯を小市民として生きるにはどうしたら良いかを考えていたんだ。」

「あほらしいというか、いじらしいというか・・・・・・・・・・。よしよし、お星さまはきつと聞いてくださるよ。」

慈しむような笑顔で答える柿山。

なぜだろう。馬鹿にされている気がする。

「しかし君は相変わらず無駄に平凡を求めるなあ。」

「いやいや、無駄ってことはないだろう。」

平凡は人生の必須項目ですよ？

「いや、私が言いたいのはだ、平凡を求めることが無駄ということではなくだ。君は平凡を手に入れられないだろうから求めるだけ無駄だと言っ事を言っているのだ。」

なるほど、俺には無理と申しましたか。
なるほど。

喧嘩売ってるのか？
買っぞ？

他の人間からの喧嘩なら絶対に買わないけど、お前からの喧嘩なら買うぞ？

「なにせ君は天然だからねえ。普通信じないようなことを信じたり、とんでもない勘違いをしたり。

1回や2回なら、ついついてことも有るだろうけど。でもな、キミ・・・これでもう相当数だ。これでワザとでなかったら、よほどのうっかりさんだよ！」

「そんなこと・・・。」

無い！

とは言えない。

なにせ今朝もやらかしたばかりだ。

たしかに柿山の言うとおり俺には常識がズレている時がある。

なにせ前世と現世で常識が違うのだ。

普通ならばありえないことも「ひよつとして現世ならあり得るかも。」

と思つてしまった結果、とんでもない勘違いをしていた、なんて事がしばしば有る。

「気をつけたまえよ。普通の平凡な人間というものは、その平凡を意識などしない。ところがだ、君ときたらいつも平凡を求めている。これが良くない。君は平凡を求めすぎてそれを手に入れきれない。

世の中は本末転倒になりがちでね。君が平穏を求めるほどに、君の平穏は脅かされるかもしれないのだ。」

「脅すなよ。」

平穩が脅かされるとか、本気でやめろよ。

俺が何よりも恐れていることじゃあないか。

「事実と君の性格を理解した上での警告だよ。気をつけた方がいい。今日は陽気の良い一日だ。こういう日は意外なトラブルがある。そうだな、君は今日危機的な状況に陥る、時間は・夕方かな。相手は、女？とにかく、その女がきっかけでとても大変な状況になる。」

「なんだよそれ予言か？」

妙に具体的な警告に違和感を感じる。

「いや、占いだよ。Mrs・カッキーのスペシャル占いだ。」

「な・なぜ突然占いなんぞを？」

俺の知る限りこの目の前の女モドキは占いなんぞにさしたる興味を持っていなかったはずだ。

というか、そんなスイーツな発想を真正面からあざ笑う類の人間だ。

「結構当たるんだよ？私調べでは的中率60パーセントだ。」

「あんまり当たらねーじゃん。」

6割って、デタラメより少しマシってくらいだろ。

「何を言うか、本来予想というものは当たるのも外れるのも五分五分であるところをだ、少しでも越えることができるのならば十分に誇っていい。むしろだ、これ以上当たるようならそれはもはや占いではなく君の言う通り予言だ。」

柿山はなんだ変な理屈をこね繰り出す。

「まあいいや、夕方、気をつけていればいいんだな？」

「そうだが、多分君は、自分からその状況に関わっていく。」

「はあ？」

俺が？この俺が？危険から逃げることに季節風の如しでおなじみの、この俺が？

「まあ君次第で運命なんぞいくらでも変わるさ。友人であるところの私としては君の無事を祈っているよ。」

「ああ、そうですか。アリガトウ。」

不吉なことを言っておいて、無事を祈るとか。新手の嫌がらせとしか思えん。

「うむ。可憐な乙女がタダで占ってやったんだ。感動でむせび泣くといい。」

「乙女って面かよ。」

不恰好ではないが、少なくとも美人というほどではないだろう。

いや、見方によってはそう見えないことはないが、6年も付き合いのある俺に言わせれば、はつきりと見飽きたアバタ面だ。

「君は本気で失礼だねえ。そういう言い方は友達を減らすよ。ああ、失敬、そもそも友人なんて私くらいいなかったねえ。そりゃあこれ以上減らせない道理だ。」

そう言って柿山はニマニマと笑う。

コイツも大概に口が悪い。

「おま・・・おやおや、もうそろそろHRの時間だ、くだらない雑談はこの程度にしておいてお互い勉強に励もうじゃあないか。」
俺の言葉を遮るようにそう言って、彼女はそそくさと自分の席に戻っていった。

どうにも俺はアイツの会話ペースに翻弄される。

そういえば今までで一度でもアイツとの口論で勝てたことがあっただろうか。

思えばいつもアイツに言い負かされている気がする。

柿山はどうにも俺をからかって悦に入る悪癖がある。

俺はたいていそれに翻弄される。

なんていうか、付き合いが長いこともあって、アイツは俺が反応するセリフや行動を熟知している。

俺がどんなに用心深く行動しても、柿山は俺の予想外の行動をとって俺を翻弄する。

柿山とは良い友人を自負しているし。友人であるならば、からかったり、からかわれたりにはスキンシップの範疇なんだが。こうもからかわれっぱなしだと男として何というか悔しさのようなものが込み上げてくる。

いつか、柿山をギャフンと言わせたい気もするが・・・。

俺がアイツに勝利できるシチュエーションがどうにも想像できない。

というか、俺が誰かに勝利することがまず想像できない。

自他共に認める小者の俺が、誰かに勝てるとか。

まあ、無いだろうな。そもそも戦いに身を置くことが無いんだし。

そんなことを考えていると、担任が教室に入ってきてH Rが始まった。

このクラス。1ーBは極めて平均的なクラスである。

この学園のクラスはSーFで分けられている。

基本的にはSが一番成績優秀なんだけど、クラス分けにはある程度融通が利くらしくて、S相当の成績でもFクラスを希望すればFクラスに入れたりするらしい。

ちなみに俺のBクラスも自身の希望だったりする。

入学試験の結果的にはギリギリAクラスに入れるくらいだったらしいけれど。

ただ、AクラスはSクラスの予備軍的なことがあって、Sの成績が悪いのとAの成績が良い奴が入れ替わりなんてことが結構あるらしい。

正直学園生活で勉強をする気が無かった俺としては、クラスメイトが頻繁に入れ替わったり、成績でギスギスしたりするのが嫌なの

で、その一つしたのBクラスで平均的な学生生活を嗜むことにした次第だ。

Bクラス以下のクラスはFを除いてさほどの成績的な差は無く、ごくごく平凡な生徒達の集まりだ。

F組は少し毛色が違って問題児が集められる。成績が良くても素行がおかしいところにブチ込まれる。ただ、そういった奴らには変な連帯感と陽気な雰囲気が生まれるらしく、Fの独特な雰囲気にある奴も結構いる。

中には成績優秀で素行が良いのにF組を希望する生徒というのも結構いるらしい。

まあ、SとかFとかそういった特殊なクラスではなく、このクラスは平均的で平凡で普通のクラスだということだ。

担任も普通。

生徒も普通で、真面目すぎもせず、かと言って騒ぐこともせず。程々に勉強を始める。

まあ俺にとって学校の授業というのはどうにも退屈なので、授業時間な結局ノートに落書きでほとんど終わる。

ほとんど勉強していないのに成績は平均前後を維持してるあたり前世の記憶様様である。

ちなみに、前世の記憶があっても平均点程度しか取れないあたりが俺クオリティ。

まあ、そんなこんなで、俺の学園生活は実に無難に、そして平穩に過ぎていくのである。

愛すべき平穩、平凡。

思うに、この平凡のありがたみがわからない人間は最低だと思う。平穩つてのは言うならば安全で安心で安息なわけだ。

それをないがしろにするということは。安心を自ら捨てるに等しい。

「化物」しかり「カワカミーン」のマッチョ供しかり「F組の刹那主義者供」や「S組の選民思想家供」しかり。

この世の中には、平凡の素晴らしさを理解していない奴が多すぎる。

人が生きる上で、平和以上に何を求めると言うのだ。

俺はこれからもこの人生を平凡に生きて、

そして平凡な生涯を送り、

平凡に死んでいきたい。

そう、それこそが俺の夢であり……

……
……

ツンツンと脇腹にかかる感触で俺は現実に戻された。

脇腹を見ると隣の席の奴が折りたたんだノートの切れ端を寄越してきた。

これはいかにも平凡な伝統であるところの、クラスの手紙リレー。

手紙を受け取るとオモテ面に「平凡を夢見る君に」と書かれている。

これは俺だな。

俺宛じゃなくても俺だな。

というわけでそそくさと開いて中身を読む。

そこには一行。

- - - - -

君には無理だね・・・BY柿山

- - - - -

柿山の席を睨むと、もう、気持ちの悪いくらいのニヤニヤ顔で俺の方を見ていた。

「うるせえ!」

ニヤニヤ笑ってんじゃあねえよ。

授業中に手紙リレーまでして俺を小馬鹿にしてんじゃあねえよ。

喧嘩売ってるのか?

買っぞ?

さすがに買っぞ。

そら買っぞ。やあ買っぞ。

次の瞬間。

クラスのすべての視線が俺の方に向いていることに気がついた。

あれ？

俺、声出しちゃった？

「うむ！元気があるのはよろしいが、うるさいのでとりあえず廊下に立っていてください。」

教師の一言で俺は廊下への追放処置へと赴くことになった。

今週の廊下への追放はこれで3回目だ。

この頻度は平凡の範疇なんだろうか。

手紙を切掛に別世界の扉へ。（後書き）

用語解説。

・バイオレンス学園

別に決闘は必ずしも肉弾戦というわけではなく、ゲームなどでも良いのだけど、入学してから日が浅い主人公はそれを知らない。

・うわらば！！

真の天才の最後のセリフ。前世の主人公が尊敬してた人。

・あほらしいというか、いじらしいというか……。よしよし、お星さまはきつと聞いてくださるよ。

かって七タの短冊に「かしこくなりたい」と書いたメガネ君に青ダヌキが言ったセリフ。

早い話が主人公をメガネ君と同等に扱っているわけで、完全に馬鹿にしている。

・よほどのうつかりさんだよ！

某ゲームのリセットすると説教する関西弁の人のセリフをもじった物。主人公の「並平」発言に対する皮肉だと思われる。

熱量が男の一部を熱くする。（前書き）

続き書かなきゃと思いつつ、思いの外手間取っているので、
とりあえず代わりに閑話的な話を入れておきます。

いや、こんなの書いている時間があつたら話を進めるべきとは思っているのですが。

熱量が男の一部を熱くする。

すべての人間が求めて止まないものがある。

平和を見だしてでも手に入れたと思う物。

その為に人は争い、その為に人は滅びる。

ほとんどの人類が、本能の底からそれを求める魅惑の存在。

そして平凡を求める俺までも、それを手に入れる為に一日に一度だけ真剣に闘争心を燃やすほど。

それは俺にパワーを与えてくれる。

それは俺を今以上に成長させてくれる。

そう、その名は……

カロリー様だ。

育ち盛りの俺にとって、カロリー様は崇拜すべき程に尊い。

バカなことを行っているのは自覚している。

アホなのも分かっている。

しかしだ。

そのカロリー様の為にアホを本気でやるのが、平凡な男子学生と
いつものだろう。

学食タイム、弁当を持たないすべての学生は羅刹となり、学食は
戦場となる。

もちろん俺も例外ではない。

今日も今日とて俺は学食という名の戦場の最前列で、トレーを手
に戦いを挑んでいる。

「おば・・・お姉さん。唐揚げ定食！唐揚げ大きめなの頼みます！」
見え見えのお世辞を言っても、カロリーを多めにしてもらおう懇
願。

俺のこのセリフが功を奏したのか、おばちゃんは少し大きめの唐
揚げを皿いれてくれた。

もうこのおばちゃんと結婚してもいいと思ったね。

唐揚げ定食をトレーに乗せて、意気揚々と俺は事前に柿山にキー
プしてもらっていた席に着く。

混雑し、すぐに席が埋まりがちな学食において、いつも柿山は俺
のぶんの席のキープしておいてくれる。

しょっちゅう俺を小馬鹿にする柿山だが、こんなふうに俺に対し
ての気配りをしてくれるあたり、良い友人と言えるのだろう。

「よくまあ、唐揚げ一つの為にあんなお世辞が言えたもんだ。正直、聞いてて鳥肌立ったよ。」

席に着くなり隣の柿山が言ってきた。

この席からよく俺の声が聞こえたもんだ。

「なにを言うか。少し口を動かすだけでカロリーが手に入るんだぞ。ならば試しにやってみようというものだ。唐揚げのためなら、クサイ愛のセリフだって言えるね。」

「じゃあこの場で愛を語ってみろ、山賊揚げ一切れあげるよ?」

マジでか。

「柿山、お前は花のように美しく明るく 清らかで、いとおいしいお前を見つめていると私の魂はふたたびよみがえるようだ。喜びに満ちてお前の頭に私の手をあててみたくなる。愛してる!本気だ。だからその山賊揚げを一切れくれ、さあくれ、いまくれ。」

「プライド無いのか?」

プライド?なにそれ、美味しいの?何カロリー?

「いや、もういい、ほら、三切れほど持って行きたまえ。」

「マジでか、マジでか?三切れも?」

柿山。お前が菩薩に見えるよ。

「平凡を気取っていながら揚げ物一つでこのハシャギよう。君は食事が関わると本当に非凡だね。」

すこしばかり聞き捨てならないことを言うな。柿山よ。

「いやいやいや、その理屈はおかしい。たしかに俺は食い物の事になるとテンションが上がるが、それは別に変なことではないだろう？誰だって美味しいものの前ではハシャグものじゃないか。」
「にしても程度があるだろう。どれだけ食事に飢えているんだ。戦後まもなくか？」

「いや、これが普通だろ？」

これくらいのテンションがこの世界のスタンダードだと思うんだが。

「そんな輩は君だけだと思うね？」

呆れたように柿山が言う。

「そうでもないだろ・・・ほら。」

そう言っただけ俺が指を差した先には。

「肉だ！肉を食わせろ！」

「お肉！お肉！」

ガタイのいい大男と、赤毛の小柄な女性が「肉、肉」と食券の券売機の前で騒ぎ立てている光景があった。

肉一つでこの騒ぎよう。

しかも、あの光景、一度や二度ではなく、ほぼ毎日目にしている。だから俺は、ああいったふうに食に騒ぐのがこの世界の平凡なんだと認識しているのだが。

「・・・・・・ん。」

納得したようなしてないような微妙な表情で柿山は黙った。

しかし、柿山の言うこともわからないでもない。

食というものは異常性が出やすいものなのだ。

「まあ、平凡を愛する俺としては、食事に対しても平凡でなくてはと常々思っている。騒ぎすぎないラインは心得ているし、目立つ食べ方も控えてはいる。」

まあ、食べ物の好みにも平凡もヘツタクレもないんだけど、それでもほら、時々変な食べ方をして目立つヤツとか、変な好みで目立つ奴とかがいるわけで、例えば・・・

「例えばお前みたいな濃度でインスタントコーヒーを飲むような事は絶対しない。」

「・・・あれは普通だろ？」

普通なものか、何が楽しくて濃度50%のインスタントなんぞ飲んでるんだ。

「あれを見たとき、あ、こいつヤベー。舌がパラダイス銀河なんだなって思ったもんだ。そして理解した、食の偏り方は時に平凡を壊すってね。実際俺はあの時、お前のことを変なやつだと思ったしね。」

「普通だろ？」

あれが普通なら、俺は生涯においてコーヒが飲めないだろ。

「そこで問題なんだが、俺にもたしかに変わった趣向というか、好みがある。まあ50%コーヒーほど異常ではないが、普通の人は余りやらない食べ合わせだから、ちよつと不安を感じている。」

「ほう、例えば？」

柿山が聞いてきた。

少し言うべきかどうか迷った。

ココで、俺の食の好みを語って、馬鹿にされたらなんだか嫌な気分になりそうだったからだ。

しかし、俺の食の趣向について、客観的な意見を聞きたかったのも事実だ。

ここはからかわれることを覚悟で、俺の自分でもちよつと変だと思っている食べ合わせについて、変かどうか柿山の意見を聞いておいたほうがいいだろう。

「カレーに生卵とか、ラーメンに七味とか、あとナポリタンに青のりとか、サンドイッチにふりかけとか、豚汁にトマトを入れたりとか、あと唐揚げにソースとか。こう言った組み合わせが好きで。これは好みだからどうしようもないのだが、これらをやって変人に見られないだろうかと言っ不安は有る。どうだろう、はたから見えてこう言った組み合わせはやっぱり異常なんだろうか？」

好みは変えようがない。好きなモノは好きなのだ。

しかし、これらの組み合わせを人前でしたときに必要以上に奇異の目で見られないだろうかとすこしばかり不安になることがある。

「いや、全然変じゃないよ。」

おや、思いつきからかわれると思ったが、柿山は全く否定しな

かった。

もしかしたらこれらの食べ合わせはこの世界では普通なのかもしれない。

ならばだ、なんの躊躇もなくそれを食べても良いわけだ。

うむ、これで不安なく、これらメニューを食べることができるな。

「少なくとも、その君の食事の量に比べたら全然変じゃないよ。」

俺の目の前には、今俺が言ったメニューがすべて並んでいた。

育ち盛りなんだからこれくらいの量は普通だと思うのだが？

熱量が男の一部を熱くする。（後書き）

用語解説

・カロリー様。

崇拜すべき存在。

カロリー様は人にパワーを与えてくれる。

カロリー様は人を成長させてくれる。

カロリー様は人に元気を与える。

カロリー様無しで人は生きていけない。

だから人はカロリー様を求め。

カロリー様を前にすると両手を合わせ崇拜の姿勢を取り、感謝をする。

「イタダキマス」と。

・唐揚げ。

鳥肉に衣を付けて揚げたもの。主人公の好物。

・山賊揚げ

タレに漬けた大きな胸肉に衣を付けて揚げた、巨大唐揚げ。主人公の好物。

・お前は花のように美しく明るく

愛の詩。主人公の好物ではないが、好物を得るための手段としては用いる場合がある。

・プライド？なにそれ、美味しいの？

美味しくはないが中毒性があり、人によってはそれ無しで生きられないほど。

時に、このプライド中毒に陥り、食事にまで支障をきたす生活を強いられることもある。

人生を円滑に生きたいのならばプライドは求めないほうが懸命である。

主人公の好物ではない。

・お肉！

主人公の好物。

・インスタントコーヒー

粉状のコーヒーの素。

主人公の好物だが、それは普通の分量で作られたものに限る。

パラダイス銀河

しゃかりきコロンプスがりんごを剥いてくれる歌。

りんごは主人公の好物。

・カレーに生卵とか、ラーメンに七味とか、あとナポリタンに青のりとか、サンドイッチにふりかけとか、豚汁にトマト

すべて主人公の好物。

猫の目玉と放課後と

さて、放課後である。

夕方である。

夕方行ってもその解釈は様々だが、まあだいたい放課後〜日没までを夕方と呼ぶのだろう。少なくとも俺はそう認識している。

もし「Mrsカッキー」の怪しげな占いを信じるのならこの後、俺はトラブルに巻き込まれるのだろう。

それも女によって。

別にアイツの占いとやらを本気で信じているわけじゃない。

というか、占いを信じてビクビクするほど信心深いわけでも、夢見がちな乙女というわけでもない。

しかし俺は結構な確率で柿山の言うようにトラブルが起きるような気がする。

というのも、個人的な想像では、これは柿山が俺をからかうための伏線なのだと思っているからだ。

トラブルというのも柿山自身が引き起こし、俺がアタフタするサマをゲラゲラと嘲笑った拳句に。

「ほつら、当たっただろう。」

などと宣うのではなかるうか。

だとすれば非常に腹ただしいが、安心では有る。

柿山は俺を愉快的玩具か何かと勘違いしているのか、とにかく俺に悪戯の類を仕掛ける。

それでもそれらが俺の怒りの許容範囲を飛び出ることが無い。

長い付き合いの賜物なのか、あるいは純粹に柿山の才能なのか。

アイツの悪ふざけは、俺が本気になって怒るギリギリ寸前あたりを付いてくる。

言い換えるならば、シャレにならないようなことはしてこない。

まあ、シャレにならないレベルの悪戯を仕掛けるような奴なら、今日まで友人関係が続いているはずもない。

そうなるならば、アイツの占いにあった「女がきっかけでとても大変な状況・・・」の女というのは、十中八九柿山自身のことなんだろう。

つまりだ。

柿山のあの占いは、「今日も今日とて君に悪戯を仕掛けるよ」という、悪戯宣言。

猫の目玉盗賊団が盗みの前に「猫の目玉カード」を相手に送るようなことなんだろう。

まあ、気長に構えよう。

ずっと張り詰めていても逆に疲れるだけだ。

アイツがどんな悪戯を計画しているにしてもだ、流石にただ廊下を歩いているだけで、

「プレミアムに私と勝負しなさい！」

などということが……………

……………

……………

……………

ホワッツ？

突然変な言葉が聞こえたぞ？

目の前に女が一人。

なるほどコイツがこの言葉を発したのか。

俺の後ろには誰もいない。

右見て……………誰もいない。

左見て……………誰もいない。

僕見て……………。

俺しか居ない。

まあまで、きつとこれは何かの罠だ。でなきゃ夢だ。

目の前の女。

灰色っぽい髪の毛をした体操服姿の一年生。

身長は普通。

スポーツマンのように体は締まっている。

まあ、結構力ワイイ系だけど、勝気なフェイスが俺の好みからは外れているな。

そして突然「勝負しなさい。」と言い出したパープリン。

コイツとは初対面。

いや、もしかしたらどこかですれ違っくらいはしているだろうけど、こうして向かい合うのは初めてだ。

しかし、

俺はこいつのことはよく知っている。

別に好きだとか、気になっているとかでもなければ、友人でも近所さんというわけでもない。

小心者であるところの俺は、一応この学園の危険人物を網羅して、そいつらには関わらないようにしている。

その危険人物一覧の中の第3位がこの目の前の女。

1 - Sの歩く危険人物。

ムサコッスこと武蔵小杉。

自尊心が高く、何事にも一番を好み。

とにかく目立つ奴には即、喧嘩をふっかけてはボコボコにしている、硬派系番長。

プレミアム、プレミアムと意味不明なことを言いながら、瞬く間に一年を掌握中。

しかしこの女は小者を相手にすることはなかったはずだ。

俺の疑問に答えるように、武蔵が口を開いた。

「プレミアムな私にはすでに一年に敵なしと思ったけれど、意外なところに伏兵がいたものね。」

「伏兵？」

伏した兵？

兵？

兵なんているのか？

日本には軍隊はないはずだ。

すなわち兵隊も居ない。

日本いるのは自衛隊で、そこに所属しているのは自衛官だ。

すなわち・・・・・・・・・・

まあ、まで。落ち着け。現実逃避をしている場合じゃあない。

「なんだ？その伏兵って。」

「私としたことがリサーチ不足だったわ。最強へ至るため、まずは1年制覇と目立つ奴はすべて倒したと思ったら、影の薄い1ーBに

なかなかの不良がいるという情報をスルーしていたようね。まあ、小者には違いないでしょうけど、無視すると私の最強への道に染みが残るわ。」

・・・不良？

なにそれ、俺のクラスにそんな奴がいるの？

なにそれ・・・コワイ。

「21Sの先輩を禿呼ばわり、11Bで教師に反抗し罰を受ける」と多数。そして今まで誰にも負けたことがないという事実。」

あああ！

あの禿勘違いの件が、完全に俺を目立たせているうつつう！！！！
あと、色々目立つちゃってるうつ！！

「まてまて！俺はたしかに先輩をそう呼んだがそれは不幸な勘違いであって、そもそも俺が先輩を顎で使っているわけじゃあない。それに罰ってタマタ廊下に立つことが多いくらいだし。負けていないのはそもそも戦ってないからで・・・。」

「この際あなたが強いかどうかはプレミアムにどうでもいいのよ。問題なのは、あなたの事を強いと思っている人間がいるという事実と、それを私が倒すという事実なんだから。」

武蔵は俺の言葉を一蹴した。

いや、言いたいことは判る。

事実として俺がどういう人間なのかはこの際関係ないのだ。

この眼の前の戦闘民族は自分が一番でなくては気が済まないタイプだ。

それもだ、事実として自分が一番であることではなく、すべての人間が自分を一番だと認識することを求めている。名誉欲が強いタイプだ。

そんな人間にとって、戦う理由は。相手が事実強いということではなく。

周りの人間が強いと思っている人間、あるいはその要素のある人間を倒すということにある。

だから、武蔵にとっては俺が本当に強いかどうかはあまり関係ないのだ。

「じゃあ、マイッタ。俺の負けだ。」

「ふざけないで、あなたが戦いもせずに負けを認めたとしても、周りの人間は私が勝ったとは認識しないわ。」

デスヨネー！。

そう考えますよねー！。

戦闘バカの発想ですよねー！。

どうする。

逃げるか？

いや、今この瞬間逃げたとしても根本的な解決にはならない。永遠にコイツから逃げおおせるのは不可能だろう。

この状況をどう打破するか、めまぐるしく考える俺に、声をかける奴がいた。

「何やってんの？」

気がつく俺の後ろに柿山がいた。
全く気配を感じなかったぞ。

いつの間に……………。

いや、わかった。隠れてたんだな？

この状況をニヤニヤ見てたんだろ。

つまり、これがお前の仕掛けた悪戯なんだな？
武蔵とタッグを組んで俺にドッキリを仕掛けたんだろ？

きつとこの後「ドッキリでした。」といってくるのだろう。
そしたらおれも「どつきりドッキ大成功！こりゃあ一本取られたよ！バンザイ。」って言うてみんなで笑い合って終りにしよう！

全く、参ったよ。

お前の悪戯は今日も大成功だ。
占いは大当たりだよ。

武蔵も柿山の存在に気がついて、口を開けた。
さあ、武蔵よ。その口から発するのだ。「ドッキリでした」って
な。

「誰よ、あなた。」

・
・
・
・
・
・

いや。わかってたさ。

これはドツキリなんかじゃあない。

柿山と武蔵が友人のワケがない。だってこの二人の性格からしてコイツらは絶対に仲良くなつてなれない。

武蔵の事をよく知っているわけじゃないけれど、声を聞いた瞬間に気がついた。コイツは柿山の嫌いそうなタイプだって。

そんな二人が協力して俺にドツキリを仕掛けるなんてことはないだろう。

柿山は相変わらずのニヤけた顔で、武蔵小杉に自己紹介を始める。

「ああ、なに、私はそこにいる冴えない男の友人だよ。まあ。今のところそれ以上でもそれ以下でも無いがね。まあ人の縁はよくわからないから、今後この男との関係が変わらないとは言いつれないがね。そもそも人の関係というのは・・・「関係の無い人間は黙っていなさい。私はいま、その男と話をしているの！」

柿山の長つたらしい自己紹介を武蔵が遮った。

いや武蔵小杉よ、柿山はお前の「誰よ」って疑問に答えようとしたのに、そもそも友人だから「関係の無い人間」ではないし。

そんなことを思ったけれど、次の瞬間。
そんなことはどうでも良くなった。

空気が変わった。

なんだか変な不安が立ち込める。

いや、不安というならば武蔵が目の前に現れた瞬間から感じていたが。

それとは違う、なんだか異質な。恐怖に近い不安。

「話？喧嘩ふっかけてたの間違いだろ？君たちの会話・・・失礼、君の難癖は廊下の先まで聞こえていたのですね。つつい聞いてしまったよ。まあ、幼稚過ぎて笑えたがね。」

柿山よ、たしかにお前の言っていることは正しいが、面と向かってそれを言うか？

突然のまくし立てるような柿山のトーンに武蔵も驚いたように黙ってしまった。

柿山の言葉は止まらない。

「そもそもいい年をして最強がどうのこうの？今時小学生でもそんなことを言わないよ、ああ、履歴書にでも書くのかい、私は学生時代にサイキョーでしたって。はは、私が面接官ならば合否を告げる前に精神科を呼ぶね。」

やばい、この言い回しと口の悪さ。

間違いなく柿山の奴。

キレている。

柿山は以外と沸点が低い。突然へんなところで怒りだす。怒った柿山は相手に対して罵詈雑言と言うか、静かにそして論理的な言葉で相手を撃破する。

その内容は相手が膝から崩れ落ちるレベルに辛辣だ。

かつて俺が柿山の弁当の中に入っていた唐揚げを失敬した際なんぞ、激怒した柿山からとてつもない口撃を受け、俺は比喩表現ではなくマジで倒れた。

もうなんて言うか、生まれてきてスイマセンって感じになると延々と聞かされるのだ。

それは下手な暴力なんかよりずっときつくて、俺はそれ以来柿山だけは絶対に怒らせまいと心に誓った。

しかし今回は相手が悪い。

たしかにイケスカない、失礼な相手だ。武蔵の言葉の中にお前に対する地雷があつたのかもしれない。

しかしだからと言って喧嘩を売る奴がいるか。

相手は戦闘種族だ。

理屈よりも先に行動を起こす種族だ。

それに比べてお前は文系種族だろ、体育の授業を保健室で過ごすレベルの貧弱娘じゃあないか。

そこんところを理解しろよ。お前の力が通用するのは文系種族に對してのみだ。

「そもそもだ順番になんて小さいことを考えている時点でその器が知れるね。まずは一年制覇？はつ。なんのことはないトップに目をつけられないうちに自分の名前を売っておきたいのが見え見えだ。さすが最強バカ。小さい、本当に小さい。」

身の程知らずはお前だあああ！！

ある意味相手はお前に対する生殺与奪権をもっているんだぞ！

「君は強くなりたいんでも、強さの証明をしたいのでもない、威張りたいだけなんだ。自分は強いぞすごいんだゾツてね。プレミアムに小さい只のいばりやだ。」

わかった、柿山、解ったから黙ってくれ。

相手さんプルプル震えてる。彼女は老人でも生まれたての小鹿でもないから、この震えは十中八九怒りによるものだ。

「予言してもいいね、君はすぐにでも誰かに負ける。きっと無様に吹き飛ぶ。身の程を理解できない小物は無様に押し潰される。なぜなら、君は所詮その程度の器なのだよ。武蔵の家名もまったくもって地に落ちたものだね。」

その言葉で、

さすがに相手も我慢の限界が来たのだろう。

決闘システムを使う余裕のない行動をとった。

すなわち殴りかかってきた。

本当ならば許されざる行為。
同意のない一方的暴力。

確かにこの学園はバイオレンスに溢れているが、一方的に誰かを殴っていいなんてルールは無い。

こういうことが起きないためにこの学園には決闘システムがあるのだし、そもそもム力ついたから殴りました何て理由、どうしたって通用しない。

たぶんこのあと 武蔵小杉には、無抵抗の柿山を一方的に殴ったというレッテルが与えられるのだろう。

あるいは柿山としてもそれを狙っていたのかもしれない。

柿山は自分の体を犠牲に、武蔵を落とし入れようとしているのかもしれない。

だとしたら、殴られる事で柿山の策は完成する。

とすれば、俺はそれを邪魔してはいけないのだろう。

なのに。

なのに。

俺の体は動いていた。

柿山をかばうように。柿山と武蔵の間に割り込んでいた。

動いてからしまったと思った。

体が勝手に動くとはこのことだろう。

なるほど柿山、お前の占いは当たりだ、大当たりだ。

俺は大変なトラブルに自ら飛び込んでる。

なあ、柿山。

これもお前の悪戯のうちなのか？

だとしたらすごいよ。怒りを通り越して賞賛だ。自分の体をはってまで俺を動かすんだから。

戦う気なんて、微塵もなかったのに。

武蔵の拳が俺に向かってくるのが見えた。

一般人がぶつかったら一溜まりもない程の力のこもった、まっすぐな拳だ。

そして。

次の瞬間。

武蔵は吹き飛んでいた。

猫の目玉と放課後と（後書き）

用語解説

・猫の目玉盗賊団

3 / 3 トランブル

猫の目玉カードが付いているクリーチャー以外を攻撃できない。

タップ。猫の目玉カード（カウンター）を対象のクリーチャーがプレイヤーに与える。

攻撃成功時、相手に付いているエンチャントを根こそぎ奪う。

三姉妹。

ピッチピチのレオタードを着ている。

昼間は喫茶店に屯ってる。

・パープリン

頭が悪いという意味の死語。

主人公は現代と同じくらいの前世を生きたと思っているが、こんな言葉を使う辺り実は一世代前の前世かもしれない。

・どつきりドキドキ大成功！

相手がドツキリの看板を出した際。

それがどんなに非道なことであっても笑って許さなくてはいけな
い。

それは日本の、いや、世界のルールなのだ。

ちなみに主人公は藤子系の漫画やアニメが好きなようだ。
いや、好きだった・・・ようだ。

・口撃

相手の精神力を削るスキル。

理論上は相手を死に追いやることも可能。
比較的女性が持っている場合が多い。

・武蔵の言葉の中にお前に対する地雷

「無関係」という言葉に柿山は怒った。

ただし、キレて武蔵をけなしたのか、武蔵を陥れるつもりで挑発したのか、それともそれ以外に思惑があったのかは不明。

壁の中からコンニチワ

武蔵小杉が吹き飛んだ。

カウンター気味の右フックが、武蔵の拳よりも先に彼女の左頬に到達した。

結果、

武蔵小杉は勢い良く吹き飛び、廊下の壁にめり込んだ。

それはもう、見事な吹き飛び方で、どこぞのコントみたいに吹き飛んだ。

壁にめり込む彼女はちょっとした前衛芸術みたいだ。

それにしても柿山。

お前強かったんだな。
驚いた。

目にもとまらぬ速さで武蔵小杉を吹き飛ばすなんて。

すごいじゃないか。

今まで気がつかなかったよ。
そんなに強いなんて。

なあ、柿山。

どうしたんだ。

どうしてそんなに。

驚いた顔をしてるんだ。

・
・
・
・
・
・
・

やめよう。

現実から目をそむけるのは。

武蔵をぶん殴ったのは俺だ。

武蔵をふっ飛ばしたのも俺だ。

武蔵を壁にめり込ませたのも俺だ。

ああ、そうだよ。

俺もまた「化物」なんだよ。

俺が恐れて、関わりたくなくて、嫌いな。
「化物」なんだよ。

・
・

この力は前世の記憶と同じくらいの時期に出てきた。

ある日テンションあがって海に向かって走った際にまさか水上歩行、思いのほか力があることを自覚し、ならばレンガ割りでもして

みると、人気の無い廃屋でレンガにチョップをくれてみれば廃屋が割れる始末。最悪だったのは便秘気味だったのでトイレで思いつきり力んだら目からビームが出た。

もしかしたら俺は人間ではない何かなのかもしれないと、本気で心配した。

なぜこんな力が有るのかはわからない。

俺の持つ「前世の記憶」と何か関係があるのか、それとただ単純にそういう星の下に生まれたのか。あるいはもっと壮絶な理由が有るのか。

どれだけ考えても答えは出なかった。

ただ間違い無く言えるのは、俺はなんの訓練をしなくてもとんでもなく強くて。

その強さは化物クラスで。

それでもって俺はこの強さが怖かった。

怖かったんだ。

強い奴がコワイ。

戦闘狂がコワイ。

戦いを強いられるのがコワイ。

戦うことがコワイ。

強さというものに対して恐怖している。

強さが引き起こす悲劇に対して恐怖している。

そして何より・・・俺がその悲劇を引き起こすことに恐怖している。

俺が一番怖いのは。殴られることでも傷つけられることでも。ましてや殺される事でも無い。

俺が人を殺してしまうのが怖かった。

本気で戦ったとき。いや、本気でなかったとしても何かの力加減を間違えたとき。

俺は。

数秒後に相手の脳漿を飛び散らせているのかもしれない。

だから俺はできるだけ力とか戦いとか強さとか、そういったものに関わりたくなかった。

柿山は俺に対して、平凡を手にすることは無理だと言った。
たしかにそうだ。

どんなに墮落した生活をして、どんなに運動不足になってもこの無限の体力と、強すぎるパワーは衰えることはなかった。
どんなことをしても俺は平凡にはなれなかった。

だから俺はこの力を隠した。

平凡になれないのならば、せめて、平凡のフリをして生きてこうと。

まあ、無理だったわけだが。

目の前には壁にめり込んだ武蔵。

彼女が壁にめり込んだ瞬間、俺は凄惨な状況を覚悟したが。彼女の体はバラバラになることなく、白目を向いて気絶するにとどまっていた。

呼吸が止まることもなく、弱々しいながらも規則的な呼吸音から、命には別状が無いことがみてとれる。

よかった。一応吹き飛ばされても死なない程度に強かったようだ。

人を殺さずに済んだことで、俺の心にはすこしばかり軽くなったが。

すると、今度は別の不安が現れた。

ある意味では、人を殺してしまうことよりもこっちのほうが大きな不安かもしれない。

俺の後ろにいる存在だ。

人を傷つけないというだけならば。

必ずしも強さを隠さなくてもよい。

平凡を求め続ける必要もない。

戦いを挑まれた際、戦いに巻き込まれそうになった際。走って逃げればよい。

実際、水上を走れるくらいの速さで逃げれるんだ。

逃げるだけならばどんな化物からだって逃げられる。

生涯を逃げ続け、「アイツは強いかもしれないが、誰とも絶対に戦わないヘタレ」の謗りを受け続けて人生を謳歌すればいい。

そのほうがずっと楽だ。

少なくとも生涯強さを隠すよりは、この強さを使って争いから逃げ続けるほうが楽だ。

でもそれをしなかったのは。

周りの目があつたからだ。

周りの人間から、異常な存在だと見られることが……
いや、すまん嘘だ。

カワカミーンの化け物どもを受け入れる世界で、俺だけが受け入れられないとは思えない。

この世界で異常な強さは排除の対象ではない。

「前世の記憶」に比べたら、「異常な強さ」なんて隠す理由が無いのだ。

だから俺が怖かったのは周りの目なんかじゃない。
ただひとり。

他の誰に嫌われてもいい。
他の誰に恐れられてもいい。

でもただひとり、

柿山にだけは。

柿山にだけはこれを知られなくなかった。

知られれば拒絶されるような気がした。
どことなく、俺と同じ感性をもっていて、おれと同じ目線で話し

ができる柿山は。

俺と同じで、強さというものに嫌悪感をいだいているような気がした。

だから。他の誰でもない。

柿山にだけは知られなくなかった。

俺が武蔵を殴った瞬間、柿山の顔は驚いていた。

その顔の次の顔が、恐怖に染まったものになることに、俺は恐怖していた。

顔は見えない。

いや、見れない。

しかし無常にも、時間は進むし、状況は変わる。

俺が柿山を見なくても、柿山は動くし、言葉を発する。

彼女のはそのまま武蔵の方を指さして、口を開く。

俺はその口からせめて拒絶の言葉が出ないことを祈りながら、その表情を確認する。

・
・

「ほら、保健室に連れていかなくて良いのかい？」
そういう彼女の表情は、俺の予想に反して……

笑ってやがった。

それも作り笑いじゃあない。
本当の笑顔だ。

これには俺のほうで面食らった。
どこに笑う要素がある？

驚くなら判る、
恐怖するのでも判る、
あるいは混乱か、でなければ思考放棄なら理解できる。

しかし笑うのは予想外。

何がそんなにおかしいんだ。

「か……柿山？」
なんで笑うの？

「ん？どうしたね？」

いや、どうした・・・って。

「この状況に対してコメント無しなのか？」

「コメントしたろ？保健室に連れていかなくて良いのかい？って。」

・・・いやそういう事じゃなく。

「いやいや、この状況をみてなぜそんなに冷静だ？現代人のスルースキルはこんなに高くなかったろ？もつと驚いてしかるべきだろ？」

「驚くって何に？」

何につて・・・。

「武蔵が吹き飛んだこととか、俺が吹き飛ばしたこととか。普通ビビるだろ。長い付き合いの友人が、超人的なパワーで一人を吹き飛ばしてるんだぞ！？なんでそれに対して変に思わないんだ！？」

「知ってたんだよ。」

・・・

・・・

・・・

は？

「知ってたんだよ、君が強いことなんて。強くて、強すぎて、だからその力を使ったがらない、パワーと根性のバランスが取れてない最強の小者だってことは、もうとっくの昔から知ってたんだよ。」

なんですと？

親でさえも知らない、俺の秘密を、君は知っていたと？
知っていたと？

「知っていたと？」

「知ってたよ、どれだけ付き合いがあると思ってるんだ。君のことなら、性格からエロ本の隠し場所までしっかりわかっているとも」

マジで？エロ本の隠し場所まで？

「な・・な、何でそれを俺に言わなかった？っていうか、なぜエロ本の隠し場所を・・・。」

「隠すからには理由があったんだろ？ならば、わざわざそれを暴くのも変だろ。むしろだ、私としてはなぜそれを隠していたかが疑問だね。いや、たしかにヘタレの君のことだから、戦うのが嫌で隠していたんだろうが、私にくらいは言ってくれても良かったんじゃないか？私の口の堅さは君も知っているだろう？」

あっさりと言い切る柿山。

本当にあつさりだ。

今までお前にバレないようにしていた俺が、本当に馬鹿みたいじゃないか。

「お前がビビると思ってた。ビビって逃げ出すくらいの反応すると思っていた。」

俺がそう言うと、柿山はムツとした表情になった。

そして声のトーンが一つ下がった。

「なあ。私はそんなに信用がないか？それでも君とは数年の付き合いが有る。君のことは友人だと思ってる。君の友人であるところの私が、ちよいと君の力が強い程度で、君に背中向けて逃げ出すような、そんな最低の人間だと思っていたのか？私たちの友情つてのはそんな簡単に崩れるようなものか？そう思ってたのならば少々不愉快だぞ。

いいか。

私は君の友人だ。

もちろん今後お互いの関係が変わる可能性は有る。

でもね、これだけは忘れるな。

私たちの縁は絶対に切れることはない。一生ものの腐れ縁だ。」

それを聞いて、俺は涙が流れそうになるのを必死でこらえたね。

多分柿山が目の前に居なければ嗚咽混じりに泣いていたんだと思う。

俺は本当に良い友人を持った。

どんなに恐ろしい世界でも。

どんな異常な世界でも。

今の人生は前世なんか良いもずっと素晴らしい。

柿山という、生涯の友を得る事ができたんだから。

「悪い、次から隠し事はしない。」

「ああ、まあ君が何を隠そうが、私にはすべてバレバレだから良いんだがね。ちなみにエロ本を屋根裏に隠すのはやめたほうがいいと思うよ、隠し場所としては少々バレやすい場所だ。」

ほんと、マジでどうして知ってるの？

エスパー？

「でも、なんで俺が武蔵を吹き飛ばした時に驚いた顔をしてたんだ。」
「そうだ、一瞬だが、柿山は信じられないものを見たような表情をしていた。」

「君は私が殴られるのを見ているだけだと思ってたんだ。実際わかってたんだろ、私が彼女を意図的に挑発してたのは。」

ああ、わかってたよ。
でもさ、俺にもわからないけど、体が動いたんだよ。無意識に。
そうだよ。
うっかりだよ。
天然だよ。

「だから、君が今日まで隠していたその秘密を、あっさりバラしたことに驚いたんだ。」

なるほどな。
たしかに俺自身驚いたさ。
こんなうっかりで、今日まで隠してきたチートがバレるなんて。

「そら、そんなことよりこれを保健室に運ぼう。見たところ死にはしないだろうが、放っておくには少々酷な状況だ。それにだ、このままだともうすぐ教師連中がやってくるぞ、結構でかい音がしたのでね。この状況の理由を聞かれれば面倒だ。迅速に行動しよう。」

そう言っつて柿山は壁にめり込んだ前衛芸術を指さす。

「・・・おう。」

俺は壁から武蔵小杉をひっぺがし、方に担いで保健室の方に歩みを向けた。

ズルズルと武蔵を引きずりながら保健室に向かう、道中、柿山が言った。

「しかしあれだね、私の占いは見事的中したわけだね。」

「まあな。」

こういう状況になるのは柿山としても予想外だったのだろう、たしかに柿山の言うとおり、俺は女のせいでトラブルに巻き込まれている。

「まあ、Mrsカッキーの占いを蔑ろにしてはいけないということだ。」

「そうだな。」

たかだか占いなんてスイーツな・・・

・・・って思っていたが、たしかに少しは意識しなくてはなあ。

でもさあ、信じたくない占いつてのもあるだろう？

嫌なことが起きるよと言われて、ハイそうですかとその運命を受け入れられる奴は相当な聖人君子だと思っよ。

嫌なことは信じたくない。

これは人間の本能だと思う。

たとえばさ・・・今の状況みたいにな。

「今の状況。これもお前の占いの内か？」

「たしかにトラブルに巻き込まれるって言ったけどね。このレベルは予想外だ。・・・これに関しては、ご愁傷さまと言っておくよ。私では助けようがない。」

だろうな。

どんなに恐ろしい世界でも。

どんな異常な世界でも。

今の人生は前世なんか良いもずっと素晴らしい。

・・・なんてさつき思ったけれど。

あれやつぱり撤回する。

超怖いよこの世界。

俺の背後にある殺気。

直接見なくても判る。

この気は、俺の近づきたくない、危険人物ランキング堂々の第一位。

川神百代が立っている。
それも超好戦的な雰囲気です。

壁の中からコンニチワ（後書き）

用語解説

・目からビーム

目玉から怪光線を出すスキル。

これが出たとき、主人公は目を閉じてなかった幸運を噛み締めた。もし目を閉じてこれを出したら、主人公のマブタは無くなっていたはず。

主人公の家のトイレの扉には未だ二つの小さな穴が開いている。

・ヘタレ

主人公の代名詞。

大概の話における主人公が持っているスキル。

・エスパー

手足を使わず色んなことができるスキル。

主人公が憧れるスキルだが、

もし手に入れたら入れたで、悩んだ上に隠すのだろう。

・チート

一応この話のタグにチートと付けておきながら5話までチートを出さないとか。

伏線だからでは許されないレベル。

天井は二杯目が限度

一番尊敬できる人物がこの学園にいる。

名前は知らないが、

朝、よくランニングしながら挨拶をくれる赤い髪の女性だ。

今時タイヤを引きずりながら、さも当然のように過酷なトレーニングをしている。

自分は彼女ほどに尊敬に値する人間をほかに知らない。何せ彼女は努力家だ。

努力と簡単に言うが、それが如何に大変なものであるか。努力できるというのは実にこれ、一つの才能なんだと思う。人間、というか、すべての生物は本質的に努力が嫌いだ。

楽したい、堕落したい、遊んで暮らしたい、仕事したくない。誰もが心の片隅にそんな気持ちを抱いている。

そして何かしらの理由をつけて人は楽な方向に行く、だからこそ努力に憧れ努力を美德とする。

俺もそう思う。だから彼女の努力ははっきり言って俺には眩し過ぎる。

俺にはあんな努力はできない。

朝はギリギリまで寝たい。正直ランニングとかめんどくさい。動きたくないでござる。むしろ家から出たくないでござる。

そんなわけで俺は自分にできないことができる彼女が好きだ。憧れすら抱いている。

ただ、まあ。LOVEしている・・・というわけではない。
やっぱり尊敬は尊敬でそれ以上ではないんだろっな。

一方で一番尊敬できない人間もいる。

同属嫌悪に近いんだと思う。

自分は自身を含めて力のある人間が嫌いで、力の塊みたいなそいつのこともやはり好きになれないようだ。

まあ、彼女も俺の知らないところで其れなりの努力をしているのだろっし、そういう意味では俺なんかよりよっぽどマシなんだろうけど。

ただそいつは俺と違って、強さを隠そうともしないし、戦いを自粛しようともしない。傍若無人な暴れん坊で。

もしかしたら、俺は少し羨ましいのかもしれない。
あんなふうオープンにやりたい放題に力を使えることに。
ちよっとした嫉妬のようなものを感じているのかもしれない。

そんな傍若無人な化物。

そう、今俺の背後に立っている、川神百代その人です。

正直、あらゆる意味でお近づきになりたくない。

「とてつもない気を一瞬だが、感じたので来てみれば。さっきの気は君か？」

俺の背後から聞こえる明るい声。

声は明るくても、殺気がモツサリと入っている。

柿山にバレなければ、他の誰にでもこの強さがバレてもいいなんて思ったが、

やはりバレずに済むのならそれに越したことはない。

なにせ、この化物から逃げおおせる自信が無い。

先刻までにお俺は誰からも余裕で逃げられる的なことを考えていたけれど、

いざこの状況になってみて初めて分かる。

俺一人の力では逃げ切れない。

ただ、俺にとって幸運なのはこの場には俺以外の人間が居るということだ。

それも、俺の仲間とも言える存在。

知力82を誇る、Mrsカッキーさんだ。

すかさず俺は柿山に助けを求める。

「柿山、作戦D O Eを発動していいか？」

「普段だったら怒るかもしれないが、今回はまあ仕方がない、私には害がなさそうだしね。」

作戦D O Eですべて通じる、このコンビネーション。
助かる。

「じゃあ、はい、これ。」

そう言っ て俺は柿山に武蔵小杉をわたす。

「うおっと！」

武蔵小杉を渡された柿山は少し大げさによるめく。

そして俺と川神百代の間に入り、川神百代の視線を一瞬遮る。
ほんの一瞬だ。

しかし、それで十分。

次の瞬間。

そう。川神百代が次の一言を口にするよりも早く……。

「私と………って居ない!？」

俺はもうその場に居ない。

そう。

作戦D O Eとは、D誰かを。O 囿に。E エスケープ。の略だ。

この場合の囿は柿山だ。

普通なら囿にされれば嫌な気持ちになるだろうが、今回モモヨ一のターゲットは俺なので彼女が害を受けることはないだろう。だから柿山自身も承諾してくれた。

「先輩。彼に何か用ですか？」

「なにつて……そりゃあ……あれ？ 気配も感じない。どこまで行っただ？ この一瞬で私の知覚範囲外まで逃げるだ！？」

川神百代は俺の気配を探し始めた。

一寸やそつとで捕まることはないと思うが、川神百代の能力値では絶対に逃げ切れるとも言いきれない。

そこで囿の出番だ。

「先輩知ってますか？」

「………なんだ？」

さすが柿山だ、絶妙のタイミングで話しかける。

すでに川神百代は柿山の術中にハマってしまった。

柿山の声を無視できない。

相手を引きずり込む話し方が、柿山の得意技なのだ。

「死神は……」

・・・りんごしか食べない。」

柿山の意味不明な発言に、川神百代は混乱する。

「????」

「あれ？意味わかりません？」

ネタを知っていて、かつ頭のいいやつならば、その言葉を聞いた瞬間に柿山の思惑に気がつくのだろうが。

川神百代は理解出来ていないようだ。

「どういう意味だ？何を言っている？」

「何って？まだわからないんですか？」

「??」

「時間稼ぎですよ。彼が逃げきるまでの。」
「!!--」

そう、柿山は意味不明ながら意味がありそうなことを言って、川神百代を足止めしている。

短い時間だが、その短い時間はとても有効なのだ。

「彼はそろそろ隣町に着く頃でしょう、あっちに彼の下宿先がありますから。まあ、今からじゃあ追いつけないでしょうがね……って居ない。」

川神百代は目にも留まらぬスピードで窓から出て行った。きつと隣町に向かったのだろう。

川神百代の気配がすごいスピードで離れていくのがわかる。

廊下には柿山と、未だ目を覚まさない武蔵が残された。

それともう一人。

「もうそろそろいいだろう？姿を出したらどうだい？」

「やばかった、今世紀最大レベルにやばかった。」

そう、俺がいた。

まさかの化物も、俺が気配を殺して排気ダクトの裏に隠れているとは気がつくまい。

俺の隠匿術は、もはや世界最強レベルなのだ。

伊達に今日まで化物から隠れてきたわけじゃない。

「ほら、君が持ちたまえ。」

そう言つて柿山は俺の方に武蔵小杉を投げ渡す。

ちよつと扱いがぞんざいな気もするが、まあそこはどうでもいいだろう。

「ああ、しかし助かった。ありがとう。」

助けようがないとか言いながら、しっかり助けてくれる柿山。頼もしいぞ。

ちなみに俺の下宿先は隣町には無い。

「まあ、言霊部に所属している身だからね、口八丁はお手のものさ。」

そういえばこいつ、そんな怪しげな部活に入っていたなあ。

全く・・・何が楽しくてあんな変な部活・・・。

何やってるのか不明、部員が意味不明、行動が怪奇的、それでいて口八丁が上手くなるだと？

俺も入部しようかな？

・・・・・・・・・・・・・・・・

保健室に先生は居なかった。

武蔵小杉をベットに寝かせ。俺は今後について考える。

そう、それが一番の問題だ。

そうやって柿山は武蔵の額に油性インクで文字を書き始めた。

お約束ですね。

俺の切実な悩みに対して、柿山は少し悩んだあと、あっさりと一

言こう告げた。

「今まで通りでいいんじゃないかなあ？」

「は？」

今まで通り？

今まで通りに平凡風味の生活でも良いと？

なんで？

「武蔵小杉だが、多分これの性格からして、自分が負けたなんて、口が裂けても言わないだろう。」

「なるほど。たぶんそうだな。」

たしかに武蔵小杉的には勝敗よりもプライドを優先しそうだ。

「でも、川神百代はどうする？正直、あれから逃げきる自身が無いんだが。」

そう、あの化物。

俺は自分の力がどの程度なのか、正確に測っていないから、川神百代より強いかどうかは不明だが。

どうも見た感じ足の速さはほぼ同じくらい。逃げ続けるには限界がある。

俺という存在がマークされた今。

今まで通りの生活するのは難しいぞ？

「いや、逃げる必要はないだろう。川神に関しては……多分君のことがわからないと思う。」

「わからない？」

いや、たしかに川神百代はアホっぽいけれど、鶏じゃあ無いんだから。

三歩、歩いたらすべてを忘れるなんてことは無いと思う。

「多分だが・・・川神百代のタイプとしては、人の顔というよりは、どうやら「気」の違いで相手を判断しているところがある。実際、一瞬だけ強い気を感じたと言っていた。

そして彼女に対して君は終始後ろ向きだったから、顔は殆ど見ていなかった。つまり彼女は君の「気」しか覚えていないはずだ。」

「なるほど。」

「つまりだ、君お得意の「弱いふり」で気を押さえておけば。今後すれ違っても気づかれないさ。」

なるほど、俺の隠匿スキルであれば、たしかに気の強さを一般人から死人レベルまで自由自在だ。

これで武蔵小杉と川神百代の件は片付いた。

そうなるとあとは一つだ。

「壁はどうする？」

そう、武蔵小杉をめり込ませた壁には、それはそれは壮大な模様が出来上がっているわけで。

さすがにもう、誰かあの壁の惨状に気がついていいるだろう。

今頃あそこでは壁があんな事になった理由の調査が始まっている

んじやなかるうか。

「それこそ武蔵小杉が一人でやったことにすればいい。武蔵小杉としては負けたことを口外などしないだろうから、あれは武蔵小杉がムシヤクシヤしてやったことにすればいいのではないか？青春のりビドーが抑えきれずにやったことにすれば、教師には怒られるだろうが、彼女は敗北の諍りを受けないですむ。むしろ壁を簡単に壊せるだけのパワーを持っているという事になる。口裏合わせを打診すればきつとふたつ返事で承諾してくれるさ。」

．．．．．

．．．

．．．

すごい。

すべて解決してる。

隠蔽工作をしてないのに解決してる。

「柿山．．．お前天才！」

「そう褒めるな。」

俺は今まで通りの生活ができるんだね。
今まで通り、日陰をコソコソ生きるような、平凡で平穏な生活ができるんだね。

これで勝つる！

俺の人生はまだまだ安泰だ！

やったぜ柿山！明日はホームランだ！

シャラー！！

そんな音で俺は、
いや、俺達は現実に戻された。

なんのことはない。カーテンが開けられた音だ。

しかし問題なのは、俺達と武蔵小杉しか居ないはずの保健室でこの音がしたこと。

つまり。

俺達以外にココに人がいたというわけで。

そもそも保健室にはベッドが二つ有り、

その片方がカーテンに囲まれていたわけだから……

「いや……聞く気はなかったけど、すべて筒抜けなもんだから。」

そう、

カーテンの向こう側には先客がいたわけだ。

「あなたは……確か川神百代………さんの………」
腰巾着と言いそうになって、その言葉を必死で飲み込んだ。

「うん、まあ義弟みたいなもんかなあ？子分扱いもされてるけど。」
そう。

いつも川神百代先輩と一緒にいる。

二年の先輩がそこにいる。

天井は二杯目が限度（後書き）

用語解説

- ・ 知力 82

柿山のテスト平均点。

ちなみに主人公は知力 68

- ・ 作戦 D O E

誰かを罠にエスケープすること。

普段罠にされるのは、全く関係の無い第三者。次いで主人公。基本的には柿山がその場をさりげなく離れるのに使われる。

- ・ 死神は・・・りんごしか食べない。

時間稼ぎをするための常套句。

- ・ 排気ダクトの裏（もしくは中）

古今東西、隠れるときに使われる物。

何故か都合よく存在し、隠れられる率が非常に高い。本来無いはずのところにも何故か出現する。

ただし、まれにモンスターが隠れていることもある。

- ・ 隠匿術

隠行術ではない。

隠れて行動するのではなく、力やら気配やら存在感を隠すための術。

開祖は主人公。

しかし性格の異常さまでは隠せていない。

あとエロ本も隠せていない。

・ 額に肉
勝者に許された特権。

・ 明日はホームランだ！
多分主人公の思考回路は・・・
額に肉↓牛井一筋↓明日はホームラン。
・ ・ ・ となっていたんだと思う。

だからお前は何歳だったんだよ！

・ 川神百代の腰巾着
主人公の直江大和に対する認識。
名前は知らず、顔を知っている程度。

・ 二年の先輩がそこにいる。
前回と同じオチ？
いいえ、オシシ仮面のオマージュです。

朝と橋とラスボスと（前書き）

一応、書いては見たものの、

今回はあんまり納得していないので、

この部分の話はそのうち書きなおすかもしれません。

朝と橋とラスボスと

目の前には、川神百代の腰巾着さん。

もう、泣きながら懇願したね。

チクらないでくださいって。

もう、涙と鼻水でグシャグシャになりながら。

校庭に飛び出て大回転錐揉みフライング土下座までした。

正直、相手は引いてた。

隣にいた柿山までも引いていた。

ただ、この一連の行動が功を奏したのか、先輩は。

「べ・・・べつに、姉さんには言わないし、君らの作戦を阻害する気は無いよ。」

と言ってくれた。

いい人だ。

「俺も姉さんの対戦相手を探しているわけじゃあないし。というか姉さんに絡まれる気持ちも結構わかるつもりだし・・・。」

菩薩や、菩薩がある。

眩しいよ、あんた眩しすぎるよ。

おれは泣きながらお礼を言ったね。

涙でグシャグシャの顔で迫ったせいか、先輩はその後逃げるように帰ってしまった。

妙にあっさりと事が進んだけれど、現実なんてそんなもんだ。

拗れる時は拗れるけれど、上手く行くときはスンナリと上手く行く。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

こんどこそ3人になった保健室で、俺は溜息を出した。

よかった。

最悪「ケヒヒ、これは良い事を聞いたでヤンス、姉貴にソッコでチクるでヤンス。」とか言われる可能性も考えていただけに、先輩の大人な対応は大いに俺を安堵させてくれた。

ただ、俺の懇願中に一切言葉を発さなかった柿山が、先輩が部屋から居なくなっただけに不安になることを言いやがった。

「あの人は多分計算していたね、君に恩を売ることの利点をしっかり理解した上で、それを川神百代に隠すリスクと、どっちが得で

あるかを比較していた。」

はたして直江さんは本当にあの笑顔の裏でそんなことを考えていたんだろうか。

にわかには信じられないのだが柿山の人間観察力はかなりのものなので無下に否定は出来ない。

「俺に恩を売るほうが得だと考えたってことか？」

「君のことを川神百代に隠したことで別に損はないからね。彼はたしかに川神百代の舎弟では有るようだが、だからと言って川神百代に絶対服従という程でもない。そもそも川神百代の戦が見たくてたまらないというふうでもなければ、川神百代に戦っていて欲しいと思っっているようでもない。」

そう言うで一呼吸おいて。

「気をつけたほうがいい、彼はある意味では川神百代なんかより厄介だよ。彼はここぞという所で君に恩を売ったというカードを使うだろう。ああいう人間を敵に回すと厄介だよ。」

コワイことを言う柿山。

「もし、川神百代に俺の存在をバラすメリットが、俺の存在を隠すことのメリットを上回ったとしたら、俺は売られるか？」

だとしたら、直江さんを信用しないほうが良いのだろう。

「その心配はあまりしなくてもいい。一度約束した事をホイホイ撤回しては信用問題に関わる。ああ言った人間は信用を大切にするか

らね。まあ、知り合いになってしまったからにはつかず離れず程度に友好的に行くべきだよ。ただ信用はしても信頼はしないほうが良い。」

なるほど。

俗にいう後が怖いという奴だな。

だがな？柿山よ。

川神百代よりも怖いモノなんてこの世にあるのか？

俺はな、戦いに絡まないなら、この世の大概の事は受け入れるぞ。理不尽を受け入れること栃木県民のごとし。

平凡で有るのならば、それ以外はどうでもいいんだ。

「まあ、なんとかなるさ。」

「まあ、君が良いならいいんだがね。」

そんなふうにあっさりと結論を出すぞ。

俺達はそのまま、保健室に武蔵小杉を置いたまま家路についた。

部屋に到着するなり俺はベッドに倒れるように横になる。

今日はいろいろなことがありすぎて疲れた。

こんなのはもう沢山だ。

やはり俺にはトラブルは似合わない。

つまらなくても良いから平凡な生活の方が俺には向いている。

そんなことを考えながら。俺はすぐに眠ってしまった。

[illegible]

美しい朝だった。

平凡で平穩な美しい朝だ。

昨日は波乱万丈だったが、今日は平凡に一日が過ぎるのだろう。

そう信じよう。

いつもどおりの朝。

いつもと同じ朝食。

いつもと同じように準備。

そして通学。

実に平凡。

昨日のことなどまるで悪い夢だったようだ。

ああ、世界はこんなにも平穏だ。

ただ、そんな通学路にもいつもとほんの少しだけ違う。イレギュラーがあつた。

変態橋にさしかかる辺り。
そこに柿山がいた。

まあ、これはイレギュラーではなく偶然の範疇だな。

「よう、おはよう？ 今日も素晴らしく平凡な朝だな！」
「ん？ ああ、おはよう。君にしては妙に早いね。」

まあな。

昨日は良く眠ったし……………

・
・
・

そこで気配を感じた。

昨日柿山に名前を聞いた。
先輩改、直江大和さんと一緒に。

川神百代がこっちに向かってきていらっしやる。

やめろ、見るな。

眼を合わせてはいけない。

俺達はなんの関係もない一般人なんだ。

川神百代と直江さんは俺達に聞こえるくらいに大きな声で話しながらこっちにやって来る。

「聞け、弟。昨日凄い奴がいたんだ。」

・・・俺のことか？
俺のことなのか？

「へえ〜どんな奴だったの？」

さすがだ直江さん。

当事者たちを目の前にして完璧に知らないふりができている。

「一瞬だがすごい気を放っていたんだ。あれほどの闘気は久しぶりに感じたぞ。」

まで、動揺するな。

「へえ、そんな奴がいたんだ、それはそうと、今度キャンプがみんな旅行に行きたいって言ってたよ。まあ金がなくて無理そうだとも言ってたけど。」

うまい具合に話をそらそうとしている直江さん。
やっぱり彼は信用に値する。

柿山も川神百代の存在に気がついたのだろう。
何も言わず絶妙のコンビネーションで俺達は歩みを緩める。

あんなのを背後に登校などしたくないので、あの二人組を先に行かせるつもりなのだ。

慌てるな。

そう、普通にしてればいい。

おどおどするな、今の俺は完全なる凡人。

誰よりも平凡な。超人なんだから。

川神百代は気がついていない。

その証拠に直江さんと会話を続けている。

「まあ聞け、結局のところ直接顔を見ては居ないんだがな。」

もうすぐすれ違う。

あと、五歩、

四歩、

「そいつはなあ。」

川神百代は何か考えるように指を一本だけ立てている。

あと三歩、

二歩、

一歩。

すれ違う瞬間。

「お前だ．．．無視をするなよ。」

そして曲げられた、その指先はしっかりと俺の方を指さしている

わけで。

「なぜばれたし！！！！！」

多分その瞬間の俺の顔はものすごく滑稽だったろう。鼻水もちよっぴり出てたし。

なぜバレたんだ。

バレる要素は一つとしてなかったはずだ。

ひょっとして、川神百代には視覚や気、以外に人間を見分ける特殊能力を持っているのか？

「いや、その少女には見覚えがあるからな。」

「「あ。」」

柿山と俺の声がハモる。

そうですね。そのとおりですね。

たしかに俺の顔は見られていない。

気配も隠せます。

川神百代は俺には気がつかないわけだ。
俺にはね。

でも柿山は？

川神百代と面とむかってしつかりと話しまでしている。
顔も覚えられている。気も覚えられている。

そしてその見覚えのある女の子と一緒にいる男が一人。

それも、背格好はあの目見たターゲットと同じとくる。

柿山・・・・・・・・お前の考え、穴があったぞ？それもドデカイ大
穴だ。

いや、俺も気づいては居なかったんだが。

あ、直江さんが呆れた顔でこっち見てる。
そりゃ、呆れても仕方がない。

そして、作戦参謀の柿山の方を見ると。
「うーん、私としたことが、君のうっかりが伝染ったかな。まあ、こうなったら仕方がない。諦めたまえ。」

って、妙にあっさりだ！

「他人ごとみたいに言うなよ！！」
「いや、まあ他人ごとだからなあ。」

ちよつと親友うつうつ！

「ふふふ、昨日は逃げられたが、今日はそれもイカン。」

川神百代はヤルキ満々だ！

「柿山作戦DOEだ！」
「無理だ。百歩譲って成功したとしても、いずれ捕まる。」

ならば……。

「ちなみに作戦DITも作戦HFOも無理だろうな。諦めろ。」
「諦めたらそこで……」「無理だ。」

……マジか……。

「ファファファ。どうした、もう逃げ場はないぞ。」

「姉さん、なんだか口調が悪人だ。」

っていうか、ラスボスです。

「さあ、戦おう、今戦おう、すぐ戦おう、まもなく戦おう。」

もう、今にも攻撃してきそうな川神百代。

どうする。

どうする！？

「まあ、先輩。」

突然柿山が俺と川神百代の間に割り込んできた。

これには俺も、直江さんも、川神百代も驚いたね。

柿山！！

ああ、柿山！助けてくれるのか！

頼む、お前お得意の口八丁で！今すぐこの場を切り抜けてくれ！

「先輩。ココでやるのはやめましょう。学校もやめたほうがいい。先輩が本気になれる場所で、放課後に勝負をしましょう。そのほうがお互いに良いでしょう？」

柿山あああ！

解決してない！

それ問題の先送り！！

「ふむ、たしかにそうだが・・・しかし。」

「逃げませんよ。というか、もうすでに顔を覚えられてますから逃げられませんしね。私たちのクラスは1・Bです。不安なら迎えに来ていただいて結構です。」

「・・・そうだな。ではお楽しみは放課後にとっておくでしょう。」

そう言つと川神百代は直江さんの手を引っ張つて、フアフアフアとか言いながら、結構な速さで学園に向かっていつてしまった。きつと俺達の戦いの場の手配でもしにいくんだろう。

直江さん、ボージョボー人形みたいに振り回されながら連れて行かれた。

正直関節がいくつかダメになるんじゃないかと心配だけど。

それ以上に俺は、俺自身のこれからが心配だ。

さようなら俺の平凡ライフ。

さようなら俺の平穏人生。

そしてコンニチワ、修羅の世界よ。

そしてコノヤロウ、柿山。

「柿山、なぜあんな事を。」

確かに逃げるのは困難だっただろう。

でもだからって。

川神百代と試合の段取りを組むなんて酷いじゃないか。

「なに、なんの問題もない。」

ありまくりだろ！

俺この後、化物と戦うんだぞ！

「君は負ければいいんだよ。」

「はあ？」

負ければいい？

「簡単なことなんだ。川神百代の最初の一発で君は負ければいい、それも惨めに、酷たらしく、惨敗すれば良いんだ。そうすれば川神百代は君に対する興味を失うさ。」

なに、武蔵小杉を吹き飛ばしたのは火事場の馬鹿力だったとしても言えはい。そうなると凡人のラッキーヒットで吹き飛んだ武蔵小杉の立場が無くなるが・・・まあそれはどうでもいいだろう。」

「・・・な・・・なるほど。」

たしかにそうだ。

一発であっさり負ければ、川神百代は俺を弱いと判断する。

目からウロコだ。

なんでそんな簡単なことに気がつかなかった？

負ければ良いんだ。

そうすれば俺は弱いことになる。

弱い弱いただの凡人だ。

簡単なことじゃあないか。

「というか最初からそうすればよかったじゃあないか。」

そうだよ、それなら、あの時逃げずに川神百代と戦っておけばよかった。

直江さんに口止めを頼む必要すらなかった。

「いいや、今となってはそれしか道がなくなったがね。もし逃げ切れるなら逃げておいたほうがよかったんだよ。」

「なんで？」

「当初の逃げきる案ならば、壁を壊したのは武蔵小杉のせいにする予定だったろう。それが駄目になったわけだ？」

「・・・そうだなあ。」

まあ、偶然が重なって俺が武蔵小杉を吹き飛ばしてしまったという形になるだろうな。

「壁の修理費、私は出さないからな。」

なるほど、大概の理不尽は受け入れるが・・・

・・・財布の中身には限界がある。

朝と橋とラスボスと（後書き）

用語解説

- ・大回転錐揉みフライング土下座
主人公の最終奥義。
ジャンプした後、錐揉みしながらドリルのように地面に埋まり込み、上半身を土に埋める土下座。
話で聞く分には楽しそうだが、実際目の前でやられたら多分、引く。

- ・理不尽を受け入れること栃木県民のごとし。
日本一影の薄い県と言われつつも怒らず。
名物がアレに似ていると言われても苦笑い。
田舎と罵られても笑顔。
「さくら」とか、「いまいち」とか、結構な名前の土地を普通に受け入れられる心の広さ。

- ・超凡人
凡人を超えた凡人。
それ凡人なのか？

- ・ヤルキ
どんな字を当てるかは想像にお任せします。

- ・D T T
D土下座のT直後にTトンヅラかます。
主人公の得意技。
絡まれそうになった直後に土下座をし、

相手が驚いた瞬間に逃げる。

一連の動作を早く行うことで顔を見られないという利点がある。

・HFO

H被害者のFフリしてO陥れる。

柿山の得意技。

主に陥れられるのは主人公。

・ファファファ

ラスボスの笑い方。

・ボージョボー人形

手足がプラプラした人形。

灰色熊と語り合う（前書き）

おかしい

閑話を書こうとしていて、

本筋と関係の無い話を単発で書くつもりだったんですが。

何かつながってる。

灰色熊と語り合う

すごい速さで俺の方に飛んで来る拳。

避けられるか避けられないか、ギリギリのラインだ。
本能的に避けそうになる体を、俺は必死にとどめておく。

これを避けてはいけない。

その拳を体につけながら、俺は盛大に吹っ飛ぶ。

そして叫ぶ・・・

「
うわらば！・・・」

「……ってのはどうだろうか。」

「何が？」

「何がつて……」

「負けたときのセリフだ。」

時間はまだ朝。柿山と二人で登校中だ。

校舎にたどりつく少し前くらいで、俺は今日の放課後のシュミレーションを脳内でしている。

「間違え太くんのセリフはやておきなさい。ふざけていると思われるから。」

このセリフならば迫真の演技で出せるんだがなあ。

「じゃあ、い……い、いやだあああ！俺は、まだ死にたくないいい！！俺にはまだやりたいことが残っているんだあああ！！おれにはあ……まだあ……あ……あ……。」

「長すぎだろ、それに死んでるだろ、それとネタから離れる。」

文句が多いな柿山よ。

壮絶な最後を演出してみたかったんだよ。

「じゃあなんて言えば良いんだ？」

「普通にグペ！とか、ピヒヤ！とかブフ！とかで良いだろ？」

「うわらば！とあんまり変わらないような気もする。」

まあ、やられ方は放課後までに考えると、取り敢えずは教室に……………

「ここで会ったが百年目!!」

校舎の目前で、突然後ろからそんな声がした。

振り返ると武蔵小杉がいた。

そういえば昨日は保健室に置きっぱなしだったな。

まあどうでもいいことだが。

とにかく、その武蔵小杉が。

昨日以上に好戦的で、どこか怒りを含んだ視線をこっちに向けている。

「お前は武……………プフ。」

「おや、君はムサ……………プスー。」

そして……………なぜか……………頭にバンダナを巻いている。

全く似合っていない。

というか、体操服にバンダナは変にコスプレっぽくて滑稽だ。

「やあ、武蔵くん、プスー。イメチェンかな、プス。なかなか似合ってるよそのバンドナ。ツクク。」

「あれだろ、エレガンテ・バッジーナとかのあれだ、キャプって人のファンなんだろ？」

巻き方までソックリだし。

「ああ、なるほど、プ、君も結構ミィハーなところがあるんだねえ？プププ。」

柿山さすがに笑いすぎじゃね？

「だまりなさい！！」

あ、怒った。

まあ、ファッションを笑われたらそりゃあ怒るよね。

「まあまあ、そんなに怒らないで。今日はどうしたんだい？そのおニユーのバンドナを私たちに見せてくれるために来たのかい？」

にこやかにそう言う柿山。

昨日とはうって変わって実に友好的な口調だ。

「そんなわけないでしょ！！」

一方で昨日以上に好戦的な武蔵小杉。
思春期なんですね。わかります。

「そうなるよ．．ああ、昨日の件だね。保健室に運んだことならば礼はいらないよ。人として当然のことをしたまでだからね。廊下に無様に伸びている人間がいたら、助けるのが人の道というものだ。」

「ムキー！！！」

面白いくらいに翻弄される武蔵小杉。

コイツS組なので勉強はできるんだろうけど、基本は弄られっ子だな。

「この屈辱、決して許さないわ！今すぐ決闘よ！プレミアムにギッタンギッタンメッタンメッタンにしてやるんだから！！！」

今すぐは勘弁してほしい。

なにせ今日、俺は無様に川神百代に敗北する予定だ。

それはもう、見ている全員が呆れ返るほど。惨めったらしく。

ああ、コイツは戦うに値しないんだなって。誰もが心の底から思うほど惨めにだ。

そして俺の評価は弱者になる。
そうすればこっちのもんだ。

この国で弱者ほど強いものは存在しない。

弱者は弱者というだけで守られる。

保護される、

労られる。

そして。

弱者は傷つけられることはない。

なにせ弱者を攻撃するものはすべからず悪人だ。

この国は弱い者イジメをする者に実に容赦がない。

だから俺の評価が弱者にさえなれば、

もう、武蔵小杉は俺と決闘なんておこすことができない。

もし、そんなことをした日には。

武蔵小杉は、弱い者を無理やり決闘に参加させた拳句、
一方的にいたぶった極悪人に成り下がる。

対面を気にする質の武蔵小杉が、そんな選択をとるなんてありえない。

そう。

今日の午後まで。

俺が弱者のレッテルを貼られるまで戦いを先送りにすれば、それはもう俺の勝利なのである。

そして、俺にはその戦いを先送りにする秘策がある。

柿山の力を借りるまでもない。

「わかってるか？」

俺は柿山みたいに気取った言い方でそんなことを言ってみる。
というか、気分は柿山だ。

知力68もなかなかのものだということを証明してやろう。

「なにを!？」

イライラした口調で武蔵小杉が答える。

「君の目的は、武力でもって俺を倒すことだ。」

「ええそうよ!決まってるでしょ。」

ああ、決まってるさ。決まってるとも。

「一方だ。俺の勝利条件はなんだと思う?」

「勝利条件?何を言っているの?勝負なんだから勝つか負けるかで
しょう?」

まあ、普通の状態なら、そのとおりだよ。

普通の状態ならね。

「いや、違うね。俺は、君のバンダナを取ればいいんだ。それだけで
良いんだ。それでもう勝ちなんだよ。そうすれば君はもう、社会的に
負ける。」

「つつ!!。」

やっと気がついたのか？

そう。バンダナで隠している額。

その彼女の額には、今でかかと・

肉^{にく}

と書かれている。

「まあ、悪いこたあ言わないよ。出直してこい。万が一それが取れてみる、今日から君のあだ名は『ムサコツス』から『ヘノツツパリハイランデスヨ』に変わるぞ。」

そうだ、コイツはいま、絶対に戦えない。

それどころか、激しい運動すらご法度なのだ。

「それとも何か？今日から君は牛井大好き正義超人になりたいのか？別に良いよ？さあ、やろうか。受けて立つよ？ミート君の体の破片を取り返さなくちゃいけないんだもんな？」

「！！！！！！！！！！」

なんか人殺しの眼で俺を見る武蔵小杉。

でもまあなんだ。

動物園の檻の中の灰色熊を怖がる子供がおるか？
いなアアア~~~~いッ！

「覚えていなさい、この借りは絶対に返す。今度勝負する時、勝ったほうが負けた方を好きにしてい条件で戦ってもらわ。」

先刻に比べると極端に低いトーンで武蔵小杉はそういった。

これは怒りが一周してむしろ冷静になってるな。

正直怖い。

怖いけど・・・まあ次の勝負なんて無いしな。

「良いとも良いとも、君の好きな条件でやろうじゃないか。」

俺がそう言うと、殺意のオーラを纏いながら武蔵小杉は一人、校舎に入っていく。

まるでモーセみたいに周りの人間が彼女から離れてく。

そして彼女の姿が消えてから。

「大概に彼女を挑発していたね。大丈夫なのかい？」
と、柿山が言ってきた。

大丈夫か？

もちろんだ。

「どうせあの額じゃあ戦えないだろうしなあ。」

「いや、しかし額の文字は何時かは消えるよ。その時どうするんだい？」

どうするもこうするも。

「その時には俺の肩書きは弱者になっているさ。なにせ今日の放課後には公衆の面前で川神百代に惨めに負けるんだから。そうすれば武蔵小杉も喧嘩を吹っかけたりはできないよ。弱い者いじめはプライドが許さないだろうしな。」

完璧な計画である。

ところが、柿山はすごく暗い顔をした。

「なあ、言つべきか迷うんだが、取りあえず言っておく。」

なんだよ、いきなり。

その表情はやめろよ。不安になるだろ？

「今日、川神百代は本気で戦う気にいるね？」

「まあ、そうみたいだな。」

ものすごくハリキった表情してたし。

「それでもって川神百代はものすごい強いよな？」
「学園一だな。」

というか化物な。

「普通に考えて、本気の川神百代に勝てる人間がいると思うか？」
「まあ、たいていの奴は無理だろうな。俺が本気になっても五分五分か？」

まあ、本気にはならないけど。

「じゃあ、その川神百代に負けることは弱い証明と言えるのか？」

いや、むしろ、戦おうと思える時点でそこそこに強い……………

「あれ？」

「君が弱者の評価を受けるのはだ。川神百代に負けて、その後、武蔵小杉にも負けた時だよ。武蔵小杉はまだ人間の範疇だからね。……………理解してると思ってたんだが。」

「ということは？」

俺は武蔵小杉と戦わなきゃいけないって事？

「負ける程度で許してくれたら良いね？勝ったほうが負けた方を好きにしている条件だっけ？まあ、私には直接関係の無いことだからどうでもいいんだけどね？」

動物園の檻の中の灰色熊は怖くないけれど。

俺もその檻の中に入る訳で。

ど。

ど。

ど。

ど
う
し
や
う。

灰色熊と語り合う（後書き）

用語解説

・間違え太くん

真の天才も時には間違える。

この呼び方からして、柿山は主人公のように彼をリスペクトはしていないようだ。

・い・・・い、いやだあああ！俺は、まだ死にたくないいい！！俺にはまだやりたいことが残っているんだあああ！！おれにはあ・・・まだ・・・あ・・・あ・・・

たくさんの子供達の心にトラウマを残してくれたセリフ。
フェイトといえば、真っ先に思い浮かべるべきはこの人のことだろうか？

・エレガンテ・バッジーナ

正式にはエレガンテ・クアットロだけど、主人公は変な勘違いをしている。

ちなみに主人公はシリーズではターンAが好きだった。

・知力68

主人公のテストの平均点。

ちなみにその時の学年平均点は61点

・ヘノツツパリハイランデスヨ

とある正義超人。主人公は再放送世代・・・だよな？

・動物園の檻の中の灰色熊

怖がる子供もいると思うよ？
まあ、ドイツの子供は恐れないのだろう。

閑話・賜には昔の話を（前書き）

こんどこそ閑話。

閑話・賜には昔の話を

今思い出しても、俺と柿山の出会いは最悪だった。
少なくとも柿山にとっては。

そのころ俺は変な疎外感を感じていた。
今、思えば、それは前世の記憶が出始めたことで、今の人生との常識とのギャップを感じ始めていたんだと思う。

世の中を拒絶する・・・ってほどじゃなかったけど、なんだか自分が異質な者に思えて、人間関係の輪に入り込めないでいた。

入り込めないと言っても、別に一人ぼっちだとか、みんなに無視されていたとか、そういうわけじゃない。

同年代の奴らとは普通に話もすれば、一緒に遊ぶことも結構あった。

ただ、どことなく同年代の奴らとは壁があって、なんとなく一人で居ることが多かったくらいだ。

きっとその頃の俺は、はたから見て妙に大人ぶって見えただろう。
う。

子供にしては妙に難解な本を読んだり、

休日は川で釣りなんてしてたし、

時には一人で勝手に隣町に観光に出かけて、親にお土産買ってきたり。

なんの躊躇もなく酒やエロ本を買いそうになったこともある。

親としては、俺のことを妙に自立した息子くらいに思っていたんだろう。

俺自身、なんだか自分がオッサンっぽいと思っていた。

そんなある日だ。

学校帰りの商店街で突然の便意が俺を襲った。
もうそれは数年に一度のビクウェーブだった。

きつと前の日に食べたバッテラが原因だと思う。

この時自分が大人びていたのは幸運だった。
ふつつ、その年頃の子供というのは、何故かトイレというものに
変な忌避感を感じている。

学校のトイレなんかで大を催せば、それだけでイジメの対象になるほどだ。

だから、子供は道の真ん中で催した際、人の家や個人商店でトイレを借りるなんて発想は出てこない。

家までなんとか我慢する。その一択だ。

その結果、家で問題なく用を足すか、惨劇な結果に発展するのかの、ヘブン・オア・ヘルな結果が待ち受ける。

少なくとも前世の俺は子供の時そうだった。

もし俺が、普通の一般的な子供。少なくとも前世のままの子供だったとしたら。

おれもヘブン・オア・ヘルに挑戦していたことだろう。

しかし、前世の子供時代より大人な発想ができた俺は躊躇なく目の前の本屋で便所を借りるという発想が出せた。

ケツを押さえながら「べんじょかしてください。」なんて、普通の子どもは言いそうもないことを言いながら店に入ると。

本屋のオッサンは「ちゃんと返せよべらんめえ。」と怒ってるんだが、からかってんだかよくわからないセリフで俺を迎えてくれた。

適当に礼を言いながら、俺はそそくさと店の奥に入って。

廊下の奥にあったトイレらしきドアを目指し。

そのドアを開けたとき。

そこに便器にまたがった柿山がいた。

出会いは最悪だったわけだ。

その後は地獄絵図だ。

怒る柿山。

便意が我慢出来ない俺。

もう喜怒哀楽のすべてが入り交じったドラマが繰り広げられたね。

まあ、俺はウンコマンの謗りを受けずに済んだとだけ言っておこう。

そしてその数カ月後に柿山と同じクラスになった。

偶然の再開だったけど、それが結果で恋が芽生えるなんてことはなかったね。

俺達はお互い小学生だったし。

そもそも出会いが最悪だった。ドラマとかでありがちな「最悪な出会い」じゃあなく、真正正銘の「最悪」だ。

だから一年近く、俺と柿山の関係はヨロシイものじゃなかった。

あんな事があって、柿山は俺のことを嫌っていたし。

俺としても不可抗力をグググジと何時までも引きずる柿山が嫌いだった。

だいたいアレはトイレの鍵をしめていなかった柿山が悪い。

とにかく俺たちはお互いがみ合って。

合ったびに下らない言い争いをしていた。

でも。

今思えば俺は、その言い争いが嫌いじゃあなかった。

というのも、俺は言い争いなんてことをそれまでしていなかった。同年代の子供とは、そもそも対等な話すらしていない。なにせ、前世の記憶で大人記憶のある俺としては周りの子供達の発言は幼稚過ぎて対等に口喧嘩なんてできなかった。

大人は大人で、俺みたいな見た目子供に対して対等に話しかけるなんてことはしない。

だから、俺と面と向かって、本気で言い争いが出来る相手なんて柿山くらいしか居なかったんだ。

柿山は本屋を住まいにしているからか、それとも生まれつき会話の才能があるせいか。その頃から俺以上に口が達者だった。

俺達の口喧嘩は表向きは穏やかに、それでいて、毒のタップリ入ったものだった。

早い話が皮肉合戦だ。

それもコアなネタを交えた。

周りが聞いているぶんにはそれは全く口喧嘩には聞こえなかっただろう。

それどころか、実に仲よさげだったと思う。

周りの俺達の関係に対する評価は仲の良い友人だったわけだ。

俺達がどんなに互いを馬鹿する皮肉合戦をしていても、周りの奴らは相変わらず仲がいいなどの評価ばかりだ。

これには俺達のほうが逆に影響された。

つまり、

そのまま本当に仲良くなってしまったんだ。

お互い挨拶みたいに軽口を叩き合う関係になって。

いつの間にか友達と言えるようになってきて。

そしていつしか柿山は親友になっていた。

柿山が俺をからかったり、小馬鹿にしているのは昔の関係の名残だ。

周りに流されるように変わっていった関係だけど。

その関係は俺にとってはかなり大切だった。

なにせ俺は柿山と居るときは疎外感を感じなかった。

もし柿山が居なかったら俺は本当の意味で一人ぼっちになってただろう。

柿山と出会っていなかったら、いや、であっていてもあんなふう

に縁ができれば、俺はずっと一人で周りとの疎外感を感じていたんだろう。

そしてその疎外感はきつとそのまま大きくなって、俺は自分の殻に籠っていたような気がする。

内向的ながら、一応こうして集団の中に居られるのは、柿山のおかげなんだ。

まあ、柿山には自覚なんて無いだろうけど。

俺は柿山に救われた。

今だって救われ続けている。

「次の国語だが。多分君が集中的にさされると思う。」

「まじか。」

こうして今も俺に危険を知らせてくれる柿山。

「さされるとしたら範囲はこのへんだ。」

そう言ってノートを見せてくれる柿山。

ほんとに救われてる。

「しかしなんで分かるんだ？そんなこと。」

「なに、昨日国語の教師に、君があ国語教師のことを裏で『げろしゃぶ』って呼んでることを教えたんだ。不機嫌な顔してたから多分今日あたり、色々あると思うてね。」

自身が異常であるが故に平凡を求める男。

ただ、平凡を求めすぎて、むしろ平凡では無い。

前世は今と同じ年代を生きたと思っているが、思考や言動にとことろどころオッサンな部分がある。

前の世界の常識とこの世界の常識が違うので、どの程度までが常識なのか混乱している。

小者気質で、強者から逃げ、立場が弱い相手に強気になるところがある。が、後にそれを思い出しものすごく後悔する。

/ / / / / / / / / / / / / / / /

「言葉の裏側には大抵隠された意味が有るのだよ。」

柿山衣子 (かきやま いこ)

身長 160

血液型 AB

誕生日 1月22日

一人称 私

あだ名 カッキー(自称)

職業 川神学園1ーB 実家 言霊部

好きな食べ物 ゴーヤチャンプルー

好きな飲物 コヒー(濃い目)

趣味 コレクション整理

特技 気配を消す・口八丁

大切な物 コレクション及びその対象

苦手な物 意味不明な存在

尊敬する人 大抵の人間には何かしら尊敬すべきところがある

と考えている

主人公の親友。

妙にもつたいぶつた言い回しの言霊部員。

口八丁が上手く、主人公をからかうのが趣味。

クラスメイトが下の名前で呼ぶと微妙に嫌な顔をする。

閑話・賜には昔の話を（後書き）

用語解説

・ 妙に難解な本
変身・カラマゾフの兄弟・アラビアンナイト直訳版・イザベル・
キュルルン放課後タイム〜君の瞳に恋してる〜・等

・ 川で釣り
鮒釣り、釣りは鮒に始まり鮒に終わる。

・ 親にお土産
何か有名な指揮者のクラシックCD、地元限定版。

・ エロ本
巨乳もの・コンビニのレジの前にて店員の驚き顔で我にかえった。

・ バッテラ
駅弁フェアで買ったもの。
酢でシメてあるから賞味期限が多少過ぎてもOKだろうと思った。
駄目だった。

・ げろしゃぶ
普通でツツコミキャラっぽいという理由で主人公がつけた。
最初は「フーミン」が良いかと思ったようだが、なんか分り易すぎて嫌だったようだ。

閣下とネギと（前書き）

日付変わってる。

しかも急いで書いたから何か支離滅裂だし。

そしてオチが最低だ。

あと、次回のオチも多分最低になりそうだし・・・。

もしかしたら今回のオチは何時か変えるかもしれません。

閣下とネギと

昼休み、学校の使われてない教室に柿山とシケコム。

別に如何わしい行為をしようというのではない。

昼飯がてら今日の午後の作戦会議だ。

どうしたら自然に負けられるか、

どうしたら自然に情けなくなるか、

どうしたら自然に弱く見えるか、

そんなことを考えあっていた。

考えあつたというか、そのほとんどは柿山が考えて。

俺はその聡明な考えをご拝聴させて頂いただけなんだが。

取り敢えず川神百代に対する対策・・・と言うか、演技指導がある程度まとまったところで、

俺は柿山に切り出した。

「柿山。」

「何だ？」

「考えたんだ。川神百代に負けただけは弱者認定は受けられない。まさにその通りだ。しかしな、だからと言って必ず武蔵小杉とも戦う必要はない。一般的な強さの人間であれば、誰に負けたって良いんじゃないかと思うんだ。」

そう、俺が弱者の謗りを得る為に必要な対戦相手。
別に戦う相手は武蔵小杉じゃなくても良いのだ。

「しかし、だからと言って誰かれ構わず決闘を申し込むわけにはいかない。今まで人畜無害でおなじみの俺が突然脈絡もなく誰かに決闘を申し込んでおきながら無様に負けつて、なんだかワザとらしきるだろう。」

そう、俺には戦う理由がないんだ。
戦う理由がない人間が突然誰を戦いに誘って、その上で演技臭い負け方をする。

こりゃあ裏があると誰もが思う。
最悪、川神百代が俺の演技に気がついて再戦コースなんてものあり得る。

「だからもう君に残された道は武蔵小杉と戦うしかないんだが。」
柿山がそう言った。

たしかに武蔵小杉とは戦う理由はある。
武蔵小杉との決闘は俺が望んだものではなく、武蔵小杉から一方的に押し付けられたものだ。
彼女の決闘に無理矢理付き合わされて結果ボコボコと言うのなら、たしかに自然で説得力のある負け方だ。

だが、正直俺はアイツと戦いたくない。

アイツが怖い。

オーラがとか、今朝のやり取りで出された条件とか、そういう理

由じゃない。

俺はあいつを昨日殴り飛ばして。壁にめり込ませた。
その事実が怖いんだ。

トラウマという奴だ。

アイツを見ると、昨日のことを思い出して、俺が異常であることを思い知らされる。

だから……

「なあ、柿山。川神百代に俺が負けたら……俺に決闘を申し込んでくれ。」

「はあ？」

俺の言葉に顔を歪める柿山。

「俺と戦う理由を自由に捏ねくり出せる人間が一人いる。
お前だ。お前ならば俺と戦う理由も、俺を倒したあとの言い訳も、
なんでも自由自在だ。」

早い話が、柿山が演技でも何でもいいから俺にイチャモンをつけて、その上で俺をボコボコに殴ってくれば良いのだ。

「そんなに武蔵小杉と戦うのが嫌か？」

「嫌だ。」

間髪入れずに答えた。今更すぎるだろ。

俺がそう答えると、柿山は俺の眼を見ながら言ってきた。

「私の好きな言葉にこんな言葉がある。

・・・『昨日人を殺した。だから後は何人殺しても一緒だ。』」

柿山閣下？

突然何を言い出すんです？

「君がな、武蔵小杉を殴った後、

それから武蔵小杉の眼を見て会話するようになっていたんだ。

てつきり私は君が彼女を殴ったことで、もう戦闘に対する忌避感が薄れたんだとなんとなく思った。

だからもしかしたら君は心の何処かで彼女と戦っても良いかなと思ってるんじゃないかと感じていたんだが。」

・・・いやいやいやいや、それはないだろ。

「忌避感が消えないよ。

これはそんな陳腐な理由で消えるもんじゃない。

武蔵小杉というか、誰ともな。俺はアイツを殴って気がついた。俺は人を殴るのが嫌いだ。

あの右手の感触と、殴った後の罪悪感は最低だった。

俺は生まれながらにして、戦うように心が出来ていないんだよ。」

「ふむ・・・そうなる・・・。」

そう言つと柿山は少し考え込む仕草をした。

そして少しの時間なにか考えたかと思うと、おもむろに口を開いた。

「君は・・・川神百代・・・いや、武蔵小杉でもいい。」

・・・彼女たちのことが好きなのか？」

突然とんでもないことをいいだした。

本当に予想外すぎた。

一瞬何かの冗談のたぐいが、皮肉の類かと思って。

何度かその言葉を頭の中で反芻した。

しかしどう考えてもその言葉に他意なんてなかったし、

柿山の表情も至極真面目なものだった。

むしろ俺はこんな真面目な顔の柿山を見たことが無いくらいだ。

俺が川神百代や武蔵小杉が好きかだと？

「それはない。そういう気にはならない。」

お前なにか勘違いしてないか？ありえないだろ。」

あんな輩を？

まだそこら辺に生えているネギに恋していたほうが建設的と言うものだ。

「例えば彼女が絶対に君を傷つけないとしたら？」

柿山がありえない仮定を出してきた。

それでも。

「あれらは化物だ。

俺の好き嫌いは純粹に俺を傷つけるかどうかじゃあない。

もっと深いところで決まってるんだ。

あいつらが心の中に獣を飼っている限り、俺はあいつらを好きになる事はないよ。」

俺は柿山の眼を見る。これ以上なく、真面目な顔で。

「ふむ・・・そうか、ちょっとだけ安心した。

君を見てると、どこかで彼女らとの関わりを作りたがっているような気がしたからね。」

突然そんなことをのたまう柿山。

「今とんでもないこと言った？」

俺があいつらと関わりたい！？

ありえないだろ？

「いやな、なんだ、気を悪くするなよ。なんとなく思ったんだ。

なんとなく彼女らと関わっている時の君がな、その、ほんの少しな・・・。」

「ほんの少し・・・何だよ。」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・

・・・・・・・・・・楽しそうに見えたんだよ。」

ありえないだろ。

「まあ、君の考えは私にはどうでも良いんだがね。」

そう言って彼女は表情をいつもの能面ニヤニヤに戻した。

そういえばいつもこいつはこう言っつ。

私には関係無い。

どうでもいい。

君の勝手だ。

好きにすればいい。

そんなことを言いながら、いつも俺を手助けしてくれる柿山だが。

柿山はどんな気持ちで俺の手助けをしてくれるんだろう。

「いつも思っんだが、柿山はどんな気持ちで俺の面倒みてくれるんだ。」

「というか、お前の意見としてはどうなんだ？」

俺にどうしてほしいんだ？」

俺の疑問に、柿山は再度考え込む様子を見せた。

「どうなのかな、正直君が何をやってもいいと思ってるし、私は君がどう動いてもそれを尊重するし。」

好き勝手やって君が慌てるのを見てるのが楽しいからね。

私も自分がどんな気持ちで君の面倒を見てるのは自分でよくわからないが。

まあ、楽しいんだろうな。だから手伝うんだ。

だから君にどうしてほしいってのはさほど無いんだが……。

ただまあ、一人の観客としては、

そうだな。今回の件では……

君の本気が見たいかな？」

そう言うてはにかむように笑う柿山は、なんだか少し寂しそうだった。

「勘違いするな。決して本気で戦ってほしいと思ってるわけじゃあ無いんだ。」

ただ、ほら、友人として、何時か君の本気の力の把握がしたいと思っただくらいで、

その相手に川神百代がちょうどいいかなあと思っただくらいなんだ。

「

すこし驚いた。

柿山がこんなことを思っているとは予想外。

この言葉にしても俺が聞かなかったら絶対に言わなかっただろう。

コイツはある意味、俺に従順だった。

いつも俺のやることのアシストをしてくれて。

皮肉は言っただけ、止めるなんてしなかった。

だから俺は、柿山は俺と同じ考えをしてるんだろうと思っていた。
思ってしまった。

だから、柿山がこんな事を考えているなんて、意外だった。

でも少し嬉しかった。

柿山が自分の考えを俺に言ってくれたのが。

「それから……私と君の決闘は断固断るからな。」

すまん、その考えは押し殺して欲しかった。

「マジで？なんで？いまさら？このタイミングで？」
なんか、いい話の流れだったじゃん。

「タイミングは関係ないだろ？私だつて決闘なんて嫌なんだ。
それもそんな三文芝居なんて断固断る。」

確固たる意志を持った表情でそう語る柿山。
何を言ってもその考えは覆りそうもない。

なんとということだ。

俺はやっぱり武蔵小杉と戦わなくてはいけないのか？

この武蔵小杉戦闘フラグは折れないのか？

「しかしまあ、そんなに武蔵小杉と戦いたくないなら、方法が無いわけでもない。」

柿山は動揺する俺に蜘蛛の糸をたらしてくれた。
なんだよそんな方法を用意してるんじゃないか。
落として上げるあたり、俺のツボを心得てる。

「川神百代は確かに強い。普通の負け方ではどんなに惨めに負けても弱さの証明にはならないな・・・」

「ふむ。」

そうなんだ。それが問題なんだ。

そのせいで俺は武蔵小杉との再戦ルートに突入してるんだ。

「では普通以上に情けなく負ければ良いんだ。いや、情けないとか

じゃない。コイツと戦うのはそれ自体が恥だと思わせるような。そんな最低を演出すればいい。もう、誰も君と戦いたいと思わせないような負け方だ。」

「ふむ。」

理屈は分かる。

たしかにそれができるならば俺は今後戦わなくて済む。

午後の川神百代との試合で事は済む。

事は済むのだが・・・。

「具体的にどんな負け方だ？」

最低の演出と言われても、どんなことをすれば良いのかわからんぞ？

というか、それが思いつかなかったから武蔵小杉との決闘フラグだったのでは？

俺の問に、柿山はニヤニヤ顔をさらに強くした。

そして。

まるでメフィストフェレスみたいに俺の耳元でつぶやく。

最低の言葉をだ。

「君、負けた瞬間にウンコもらしたまえ。」

おまえ、出会ったときのことまだ根に持ってるだろ。

閣下とネギと（後書き）

用語解説

・昨日人を殺した。だから後は何人殺しても一緒だ。
どうやらこの話にのり切れて居ない奴らが居るようだ。
そういう奴はどうしたら良い？

柿山はこの曲がお気に入り、
ちなみに主人公のお気に入りは「ロマンス」

・ネギ

薬味としても、主役としても、使い道たくさん
の万能野菜。
主人公の好物。

だが、恋愛対象としては、今のところ見ていない。
でもネギに告白されたら結構考える。
それくらいには好き。

勝負とパンツの関係・上（前書き）

実はこれが一番最初に書いた話。

文章がまどろっこしいのも初めに書いた物だからです。

多少書き直しましたが、変な部分があるかもしれません。

勝負とパンツの関係・上

ある小者がいた。

川神百代と対戦し、その男は負けた瞬間。

無様に脱糞したのだ。

18も過ぎた、良い年をして、泣きながら脱糞。

次の瞬間からその男は学園で一番に情けない男に成り下がった。

それこそ、コイツと勝負なんて、しようとした奴のほうがオカシイと思わせるくらい。

・・・・・・・・

それはないだろ。さすがに人として。

たしかに俺は平穩になるだろうよ。

誰もが俺を腫れ物に触るよう扱ってくれるだろうよ。というか、もう話しかけられもしないだろうよ。

たしかに、俺には馬鹿にされる覚悟はあると思っていたが・
それはさすがに・・・。

もし、

俺の人生がアドベンチャーゲームやサウンドノベルや、あるいは恋愛ゲームなんかだとしたら。

今眼の前にこんな選択肢が出てる。

1・川神百代に負ける。その後、武蔵小杉（トラウマ）と戦い負ける。

2・川神百代に負ける。そして汚物伝説へ。

3・川神百代にむしろ勝つ。

1は平穏ルート、2は汚物扱いルート、3は修羅ルートに突入だ。

正直、2と3は無い。特に3。

2巡目の人生でも無い。

しかし、だからと言って1を選ぶのも嫌だ。

すぐにも選択をしなくてはいけないんだろうけど。

俺にはどの選択肢を選ぶこともできなかった。

アレも嫌コレも嫌だと選択をしないのでは埒が明かないのだから。嫌な選択というものは、何時までだって選びたくないものなんだ。

これがゲームならば何時間画面の前で悩んだっていいんだけど。

あいにくと、現実は無常にも時間が過ぎていくわけで。

俺は選択肢を選ぶことができないまま・・・

カワカミーンにいた。

カワカミーンのなんだか天下一の武闘会でも開かれるような場所にだ。

目の前には好戦的な視線をこっちに向ける化物。

本来ならこの視線に恐れ慄かなきゃいけないんだろうけど、俺は、思えばカワカミーンに入るのは初めてだな、なんて的はずれなことを考えていた。

今までずっとこの名前はカワカミーンだと思っていたけど、正式には「川神院」というらしい。

まあそんな名前なんてどうでもいい事だ。

たしかにココならばどんな戦い方をしても周りに被害が出ないだろう。

試合会場を囲むように、変な柔道着みたいなのを着込んだ人たちが並んでいる。

何でも結界とやらを作っているらしい。

俺は妖怪か！と突っ込みたかったが、目の前の川神百代は誰もが認める化物なわけだから、

彼らの行為は実に正しいのだろう。

そのケツカイズを越えてさらに外側には少数ながらギャラリーが。

川神百代の友人らしき数人が少し離れた位置でこちらの様子を観ている。

そして何故か俺の友人もいる。

柿山がいつもどおりのニヤニヤ笑いでそこに立っていた。

俺がこんなに悩んでいるのになぜお前はそうも笑っていられるのか、小一時間問い詰めたいが、

まあそれはいい。

そんなこと以上にお前に問い詰めたいことがある。

なんで隣に小雪先輩がいるの？

柿山の隣にはコレまた笑顔の小雪先輩がおりまして、
そして何故か小雪先輩は柿山の隣でこっちの方を見ながら、
「やっちゃえ、やっちゃえ！」
なんて言っている。

いや、先輩。

あなた俺が川神百代に勝てると思ってるんですか？
それとも、その言葉は川神百代に言っているんですか？

たしかに俺はこれから、川神百代にやられちゃう訳ですが。
それもメツタメツタにやられちゃうんですが。

そして、もしかしたらそのまま脱糞までしちゃうんですが……。

いや……。

さすがにそれはやめよう。

小雪先輩が来たことで決心が付いた。

小雪先輩の前で漏らすとかあり得ない。

弱い奴のレッテル程度なら周りにさしたる迷惑をかけないが、
脱糞野郎の謗りは俺だけじゃなく、俺の友人全員に被害がでる。

「ああ、あの脱糞野郎の友達なの？マジで？」って目で見られることになる。

柿山や先輩たちに迷惑をかけないためにも選択肢「そして伝説へ」は除外。

やっぱり選択肢1だな。

あるいはコレを決心させるために柿山が小雪先輩を連れてきたのかもしれない。

やはりあの「君、負けた瞬間にウンコもらしたまえ。」発言は冗談のたぐいか、でなければ本当に未だ出会ったことを根に持っていたための嫌がらせか。

とにかく、そんな選択肢を選べば柿山自信が「汚物男の友達」の謗りを受けるわけで、言いだしっぺでありながらも柿山はそれが嫌だったがゆえにそれを回避させたかった。

だから、俺がその選択肢を選ばないように、小雪先輩を連れてきたのかもしれない。

まあ、小雪先輩に俺の情けないさまを見せて楽しみたいだけ、という可能性も捨てきれないのだが。

そんな考察に没頭してしまいよく見ていなかったけれど、気がつけば会場のセッティングは終了していた。

試合場所の上には俺と川神百代、そして少し離れた場所に審判が

立っている。

そういえば何故か学園長が審判をしている。
理由は謎だ。

さも当然のようにそこにいた。

この人は朝礼で武闘派な発言をよくするので、ひょっとしたら格闘マニアの類なのかもしれない。

そして俺がそんなことを考えているうちに、その学園長から試合開始の聲がかけられて……。

お互いに動いていた。

二人の拳がぶつかって、その直後にでかい音と衝撃波が3重に出る。

ソニックブームが発生したのだ。

その光景に、
その場にいた大半の人間が驚いていた。

川神百代の一発目を耐えられる奴はそれ程に少ない。
達人と言われる人間でさえ、川神百代の一発で遠くに吹き飛ば
だ。

それを耐えたのだから、周りが驚くのも無理はない。

しかし、その場で一番驚いていた人間は他でもない。

俺自身だ。

しまったと思った。

負けるのならば今のタイミングだったんだ。

最初の様子見の拳に無様にやられるのが一番情けない負け方だ。

ところが俺は動いてしまっていた。

すべての選択肢を選びたくないが故の無意識的行動かもしれない。

それとも体の反射の類なのかもしれない。

身に危険が迫ったときに自動的に体を守る本能なのかもしれない。

小雪先輩に良いところを見せたかったのかもしれない。

俺お得意のうっかりかもしれない。

それとも。

それともそれら全部言い訳で、俺は自分の力を知りたかったのか
もしれない。

小心者の心の片隅にも、力いっぱい殴りたい戦闘狂的考えが
潜んでいたのかもしれない。

なにせ戦うのであれば川神百代はうつてつけど。

たぶん、俺が力いっぱい殴っても壊れることのない唯一の人間だ
ろう。

俺が恐れている、人を殺してしまう可能性の一番に少ない人間と
言える。

しかし、それは俺の平穏を潰してまでやりたいことではないはず

だ。

そんな下らない好奇心で俺の異常性をさらけ出すなんて・・・

しかし現実はどうだ。

彼女の一撃に反応し、自分も攻撃をしまっている。

それどころか、彼女の二激目にも反応しようとしている。

さらにはこうしている間にも、俺は頭の片隅で、

川神百代に勝つ算段を立てている。

早まるな。

まだ間に合う。

二発目の攻撃で無様に吹き飛べ。

そうすればみんな一発目は何かのマグレだったんだと認識してくれるさ。

そして、川神百代の次の拳に・・・

……やはり俺は反応してしまっていた。

再度衝撃波が発生し、俺は混乱する。
何をしてるんだ俺は。

そこで柿山の言葉がフラッシュバックした。

「君の本気が見たいかな？」

やめろ、考えるな。

気がつくな。

思っな。

ただ負ければいいじゃないか。
簡単なことだ。

そうすれば日常は保たれるんだ。

本能むき出しで戦うな。
許されるはずがないのだ。

楽しいなんて思っではいけない。
それは戦闘狂の考えだ。

勝ちたいなんて望むな。
それは日常を壊すことだ。

でも、

でも、

ああ、畜生。

楽しいよ。

楽しいんだよ。

力いっぱい戦えることが。

こうして本気が出せることが。

そして、勝ちを望むことが。

たまらなく楽しいんだよ。

くそう、どうする。

どうすればいい？

教えてくれよ、

だれか、教えてくれ、俺はどうすればいいんだ。

「やってしまえ！」

「やつちやえやつちやえ！」

それは幻聴だったのかもしれない。
いや、幻聴なのだろう。

なにせ今俺と川神百代の動きは音速を超えている。
声なんて聞こえるはずがない。

でもその声は、

ギャラリーのいる方からのその声は、

たしかに俺の耳に届いた。

そして俺は切れた。

怒ったという意味じゃない。何かが切れたんだ。
緊張というか、しがらみというか。
とにかくどうでも良くなったんだ。

一生に一度くらい本気の勝負がしなくなった。
目の前の化物を、本気で退治しなくなった。

畜生。

楽しいな化物。

勝負とパンツの関係・上（後書き）

用語解説

- ・学園長が審判

そろそろ学園長の苗字に気がつけ。

- ・汚物伝説

子孫代々伝えられる最低伝説。

- ・2巡目の人生

2巡目は少し冒険してこの変な選択肢を……。いや、やっぱり前回と同じで。

さすがに現実だとしたら、何巡目でも冒険しないと思う。

- ・ケツカイズ

結界を張る人たち。

時給はでない、ボランティア。

- ・ところが俺は動いてしまっていた。

主人公は何か葛藤しているが、別にふつうのコト。

強化ガラスが目の前にあり、安全だったとしても、

訓練無しに自分に向かってくる150?の豪速球を正面から見れる人間はまず居ない。

それと同じで自分に向かってくる攻撃には普通、反射的に防御してしまう。

なまじ反応できてしまったことが主人公の不幸。

そしてそれに理由を求めたのが運の尽き。

・「やってしまえ!」「やっちゃえやつちゃえ!」
幻聴。でも二人は多分そう思ってたよ。

・畜生。楽しいな化物。

主人公覚醒・・・と、いうか単に脳内麻薬が出てるだけ。
多分試合が終わると超絶後悔タイムに突入する。

勝負とパンツの関係・下（前書き）

一応この話のオチが下ネタ系なので、そついった物がダメな人は次の話から読み進めてください。

今のうちに謝っておきます。
すいません。

勝負とパンツの関係・下

川神百代を倒す。

それは今この瞬間まで考えても居なかったことだ。

考えたからと言って実現できるかどうかあやしい。

なにせ俺と川神百代の力は拮抗している。

たしかに俺はチートだが、相手も十分にチート。

しかも川神百代は心に獣を飼っている。

そしてその獣は今日まで爪を研ぐのを忘れていない。

一方俺の中にいる獣なんて・・・

(´・ω・´)こんなもんだ。

それが今本気になったところで・・・

(´・ω・´)この程度だ。

殺気も気迫も向こうのほうが上。

少しでも雰囲気飲まれたらおしまいだ。

しかし、勝機が無いわけじゃあない。

拳をあわせて判明した。

純粋な力で言ったら俺の方が少し強い。

パワー勝負であれば俺が勝つ可能性がある。

しかし、それは川神百代も理解したようだ。

川神百代は少しばかり距離を置いて、ヒットアンドアウェイの戦法をとり始めた。

衝撃波やら、死角からの攻撃を次々と繰り出してくる。

俺はそれを避けたり、防いだりしながら反撃をしていく。

スピードは互角。

ほとんど決定打の無いまま、お互い攻撃の応酬を繰り返す。

俺らの実力からしたら実に地味な戦いだ。

それでも、衝撃波がモリモリ発生してあたりは結構大変なんだが、でも大技を繰りだしたらこんなもんじゃあ済まない。

大技を出せば勝負はつくだろう。お互いの実力からして、タメの一撃を与えれば相手を潰せる。

しかし大技は繰り出さない。

いや繰り出せない。

少しでもタメを入れれば、その瞬間に相手の一撃が意識を刈り取るだろう。

だからお互い、スピード重視の小技を繰り出すしかない。
そして小技ではいつまでたっても相手を倒せない。

まるで千日手。永遠に終わらない勝負。

はたから見れば。

いや、普通の人間には見えないスピードなんだけど。もし見れたとしたら。

俺たちの勝負は互角に見えているのだろう。

しかしだ。

状況は圧倒的に俺に対して不利だ。
このままでは確実に俺は負ける。

俺には圧倒的に経験が無い。

そりゃ、今日まで戦うなんてことを一切してきていないんだから当たり前だ。

そして経験の無い俺の攻撃は非常に読みやすい。

たとえどんなに体力があっても、攻撃力があっても、スピードがあっても、攻撃が読みやすい。

結果、簡単に攻撃がよけられる。当たったとしても掠るのが精一杯。

普通の相手なら、掠った程度で十分倒せるのだけど、そこは相手も化け物だ。ちよいと傷が出来る程度だし、その傷も次の瞬間には消えている。

たしか「超回復」というものらしい。

兎に角、俺の攻撃はことごとく避けられる。

一方で相手は俺に攻撃し放題。

もちろん防御も回避もするのだが、数発に一発食らっていく。

たいしたダメージではないのだが、あいにくと俺には「超回復」のスキルは持っていない。

じわじわと、確実にダメージが蓄積されていく。

このままでは勝てない。

すべての攻防が超スピードのために、それは一瞬だったろう。

しかし、何回もの攻防がその間に行われ、俺は傷だらけになっていく。

すべてカスリ傷だが、それは確実におれの体力を奪う。

パワーがあるということはスタミナも俺のほうがあるのだろうが、コレでは川神百代のスタミナが尽きるよりもずっと前に俺が倒れる。

それは川神百代もわかっているのだろう。

川神百代が笑みを浮かべた。

それを見て俺は。

ブチキレた。

こいつ、余裕ぶっこいた。

この真剣勝負中に。勝利を確信しやがった。

俺らしくない怒りだ。

戦闘狂的な考えだ。

きっとアドレナリンのせいでハイになってたんだろう。

そして、脳内麻薬のドバドバ出てる脳みそで、俺は最悪の手段を考え付いてしまった。

そして、それを使ってでも勝ちたいと思ってしまった。

絶対に使いたくない技が一つある。

技と言つほどのものではないが、その強力さはかなりの物だろう。

正直、それを使えばこの状況を打破できる。

いや、たぶん勝利できる。

しかしだ。しかしこれは本当に使いたく無いのだ。
いわば禁術なのだ。

たしかに俺は平穩を捨ててコイツに勝つ選択をとった。もうすべてを捨てていいとすら思ってしまった。

しかし、

その選択をした今でも。この技を使うことには躊躇せざるを得ない。

躊躇どころじゃない。はっきりと使うのは嫌だ。

初めてこの技を使ったとき、いや出来てしまった時、絶対に二度と使つまい、使う時はすべてを失う覚悟をしなくてはいけないと心に硬く誓ったのだ。

畜生。

認めてやる。川神百代。
認めてやる。カワカミーン。

お前は俺を本気にしたよ。平穩を捨ててでも戦いたいと思わせた。そして勝ちたいと思わせた。

これを出さないと勝てないレベルまで、俺を楽しませて、それでいて追い詰めた。

受けてみる。俺の禁術にして、絶対に使いたくなかった技を。おそらく、実戦でこれを使うのは最初で最後だ！

「デユアー!!」

「!!」

かつて初めてコレを出したとき自分の指先に当たって、俺の全身は痺れ2時間ほど動けなくなった、それ程に強い。

ビームって痺れるものなのか？ってすごい疑問に思ったけれど、今はそんなことはどうでもいい。兎に角強力なのだ。

さすがの怪物も、これを食らえば唯ではすまない。

事実として、目の前にはコンガリと美味しそうな匂いを出す化物が倒れている。

指先が動いているので死んでは居ないようだ。だが、もう立てはしないだろう。

たとえ超回復をしても、ビームによる痺れは早々取れるものじゃないはずだ。

俺は審判もとい学園長の顔を見る。

学園長は状況を理解できていないのか、ぼんやりと川神百代の状況を見ていたが、ハッと気がついたように俺の勝利を宣言してくれた。

周りの人間たちは驚くと言うより、この事実を理解できていない様子だった。

ざわめきがあたりを支配する。

ただ一角。

柿山達だけは俺に笑顔を向けていた。

終わった。
全て終わった。

やっと俺はこの戦いから開放された。それも俺の勝利という形で。

しかし俺の心の中には、歓喜も安堵も無かった。

それどころか後悔をしていた。

それはもう、本当に後悔していた。

勝ってしまったこともそうだけど、それ以上に　なぜこの技を使
ってしまったのか。

そのことに後悔していた。

俺が恐れていたのはこの技の威力でも、見た目の滑稽さでもない。
この技の発動条件だ。

この技の発動は難しいものではない。
シンプル且つ、判りやすいものだ。

思い出していただきたい。

初めて、俺がコレを出した瞬間がどんな時だったか。

事実として、俺の家のトイレの扉にはビームによる穴が開いて

いる。

つまりだ。

俺には勝利の余韻なんて感じている余裕は無く。
勝ったとか負けたとかそんなことよりも。

この少しばかり重くなったパンツと、今の状況をどうやって打開するか大急ぎで考えていた。

勝負とパンツの関係・下（後書き）

用語解説

・千日手

ボードゲームで駒の配置と手番が全く同じ状況を繰り返す状態。本当に千日やることはまず無いし、千日やったとしても終わるわけではない。

・封印禁術「目からビーム」

「壁の中からコンニチワ」を参照。

・亜光速

光の速さに近い速さ。光速ではない。というのも、このビームは光ビームではない。多分、不思議エネルギーに指向性をもたせているんだと思われる。

・ビームによる痺れ

ビームって痺れるのか？という質問に対しては。不思議エネルギーだからとしか答えられない。

・コンガリと美味しそうな匂い

さすがに主人公も食べたいとは思わない。

・重くなったパンツ

前代未聞の最低オチ。本当にすいません。

誰かに託す力の証（前書き）

もうシモネタはやめるとか言いながらも、
後始末編は書かないわけに行かないわけで。
取り敢えず今回までは大目に見ていただきたい。

誰かに託す力の証

選択肢1を選ぶつもりが2と3を同時に採用するとか……。

とことん俺の行動は裏目に出る。

試合終了後すぐに俺はトイレに駆け込んだ。

速攻でそれで居てパンツに一切の振動をかけないように俺はトイレに走った。

周りの人間は川神百代の敗北に放心状態だったせいで、俺のあせりまくった行動に不信感を抱く人間は居なかったと思う。
というか、居ないでくれ。

試合前にトイレの場所を聞いておいたのは幸運だ。

途中だれとすれ違うこともなく。俺はスムーズにトイレに入ることができた。

トイレに駆け込んだ俺は、まず個室の鍵をしっかりとかける。

そして洗浄。

途中すごく悲しくて涙が流れた。

コレほど自然に涙が出たのはいつ以来だろう。

そしてパンツを脱いだ俺はトイレの脇にあった用具入れをあさり・

あつた。

ビニール袋だ。

トイレの用具入れにはかなりの確率でコイツが入っている。
消耗品を買い足した際にそれを入れていたものがそのまま入っていたり、ゴミ袋だったり、洗剤などが溢れるのを防ぐために入っていたり。

理由は様々だがまず入っている。

俺は用具入れからビニール袋を数枚取り出し、パンツを何重にもくるむ。

これで臭いは外にもれないだろう。

ここまでは良かった。

いや、色々と良くないけど、今のところ最悪の事態にはなっていない。

多分誰も俺の失態には気がついていない。

しかし

問題はこの後だ。
いかにしてこのブツを処理するかだ。

トイレに流す？

詰まる↓大騒ぎ↓ばれる。

焼く？

煙が出る↓大騒ぎ↓ばれる。

隠す？

いつか見つかる↓ばれる。

うーん。

あるいはここの脱衣所にさも当然のように置くか？

門下生の誰かのものだとなれば万々歳なのだが……。

タイミングが悪すぎるな。このタイミングだと疑われるのは俺だ。

超スピードを使って誰かの……

駄目だ、ココはカワカミーンだぞ、超スピードも誰かしらに見破られる。

後は……

……

「柿山……」

「！、どこに行っていた？姿が見えなかったが。」

「少しな、自分を見つめ直していた。本当はこんなことになるはず

「じゃあ無かったんだが。」

「いや、あるいはコレでよかったのかもしれない、君の力はいつまでも隠せるものじゃあない。」

「しかし、力を使うだけでは獣と変わらないさ。柿山、コレを受け取ってくれ。」

「コレは？」

「今日限り俺は力を封印する。その証としてコレを預かって欲しい。」

そう言つて俺は布でくるまれた何かを柿山に渡す。

「中身はなんだ？」

「それは言えない。決して開けないでほしい。いつか俺がまた力をふるうその時が来るかもしれない。」

その時まで。誰の眼にも触れないようにしてほしいんだ。頼めるのはお前しか居ない。」

「わかった。預かるう。」

みたいな感じのテンションで何とか押し切る……

・・・つて、アホか。

そんなことをすればコレを後生大事に隠す柿山が不憫すぎる。

それに万が一今後俺が再度力を振るう時がきたとして、

「とうとうアイツにあずかっていたコレを返す時が来たのか。果たして中身は……」

柿山がオープン↓大惨事

となるだろ。

馬鹿か俺は。

もっとシンプルに考えるんだ。

人は考えすぎてかえって悪手を採用しがちだ。

正道に勝る王道なし。

ここは、オーソドックスに行くべきだ。

ただでさえ俺の行動は裏目に出るんだ。

ココで変にトイレの窓から見える庭の竹やぶの横に埋めたり、超パワーを使って海に向かって遠投とか、なまじそんな凝った処理をした日には、

春先にタケノコの先端にはためくパンツ

とか、

石油タンカーにぶつかるパンツ……

とか、そんな変なオチになるに決まってるんだ。

そんな凝ったことをしなくていい。

俺は普通にコレを……

カバンに入れて持って帰れば良い。

俺は素早く、それでいて音を出さない程度の速さでトイレを後にして、そのまま更衣室に移動した。

幸い更衣室はトイレに隣接している。

誰にも見られることなく、俺は更衣室にたどり着き、ロッカーの中に入れてある通学カバンを取り出し、袋をカバンの一番したに押し込める。

ミッシェンコンプリート。

あとは何食わぬ顔ですごせば……………

「ココにいたのか。」
突然俺に向けられた声に、俺はギャア！と叫ぶのを必死でこらえた。

振り返るとそこには女が一人。

柿山！？

やばかった。

タッチの差だった。

もう少し彼女がくるタイミングがずれていたら。いや、想像するのはやめよう。

「ど・ど、どうした？」

こら！落ち着け、俺。何でもってるんだ！

柿山には見られていないはずだ。

何食わぬ顔を通すんだ。

「それは私のセリフだ。試合が終わったとたん消えたのでな、少し心配したぞ。」

「だ、大丈夫だ、なんの問題もないぞ？」

ほんと、なんの問題もないよ？

ほんとだよ？

「嘘を言っな。」

あっさりとそう言い捨てる柿山。

えええええ！？

嘘じゃないよ？

嘘じゃないよ！

嘘だとしても、それは嘘という名の願望だよ！

「ほんとに何も問題は無いよ。」

俺はできるだけ冷静に、普通にそう答えた。

アカデミー賞受賞者も真っ青な演技で。

「隠すなよ、君が何を隠そうが、私にはすべてバレバレだといったろっつ？」

柿山の放った一言。

それは死刑宣告にも等しかった。

その言葉で俺はすべてを諦めた。

やっぱりか。

お前。

お前気がついて・・・泣いていたんだろ？」

は？

「いや、泣いてなんて居な・・・涙の跡がついてるぞ。」
「・・・。」

いや、たしかに泣いたけど。たぶんお前の思っているような理由では泣いていない。

「勝ってしまったものはしょうがないさ。それで君がどうなろうと私は君についていく。今後戦いたくないなら私が口八丁でその回避を手伝うさ。」

なんだか的はずれなことを言う柿山。でもその的外れは今の俺にはとても嬉しいです。

「あ・・ありがとな、柿山。でももう大丈夫だ。たしかにもう二度と川神百代と戦いたくはないし、誰とも戦いたくはないけれど、でも何時までもウジウジしててもしょうがないしな。」

実際はウジウジではなく、おもいつきり焦ってただけだな。

「ああ、それくらいに思えるなら大丈夫だな。さあ戻ろう。小雪先輩も心配してるぞ？いや、チヨウチヨ追いかけていたから、心配してたか微妙だけど、たぶん心の何処かで心配してるさ。」

それ心配してないだろ？でも、お前が俺を必死に励まそうとしてるのは伝わってくるよ。

「柿山。」

「なんだ？」

「ホントにありがとな。」

俺がそう言うと、柿山は少しはにかんだように笑って、少しばかり顔を赤くした。

よ・・・

よかった。

「自分の強さに苦悩するナイーブな男」って感じになった。少なくとも「汚物男」の谤りは受けずに済みそうだ。

でもなんだろう、すごい罪悪感が。柿山に対してすごい罪悪感が・

[illegible]

未だ誰も試合場周辺から立ち去ることなく、川神百代に駆け寄るもの、遠くから見つめるもの、放心するもの、チヨウチヨを追いかける物、反応はさまざまだ。

もつと迅速に手当てをしてやれよと思うが、そもそも彼女の化け物振りからして、このような事態は想定外だったのだろう。

俺だって少し混乱している。

199

しかし何時までも彼女を石畳の上に置いておくのは良くない思
った。

タンカか何かで彼女を運ばなきゃまずいのではないと思
い、それを口に出そうとした瞬間。

百代が立った。

立ち上がった。

もう、それは、俺にとってどんなホラー映画よりも怖くて、何せ
絶対に数時間は目を覚まさないと思っていた奴が、突然立ち上がっ
てこっちを見てるんだ。

それも、好戦的な目で、俺をにらみつけてる。

俺でさえ2時間痺れたビームから、数分で回復してやがる。なん
て化物だ。

周りの奴らも驚いたようで、みんな百代のそばから一目散で飛び
のく。

無理も無い。

どう見ても彼女・・・・・・・・・・

殺気立っている。

それもそうだろう。

彼女は気絶してたんだ。

学園長の俺勝利宣言を聞いていない。

勝負で自分が負けたという自覚が無い。

つまり彼女にとってまだ試合は終わっていない。

倒すべき相手が目の前に居て、彼女は今からでも戦いを再開しようとしている。

まずい、このまま戦ったら絶対に勝てない。最悪殺される。

体力的にも、テンション的にも、俺に戦う気力は無い。

何より……………

俺にはもうパンツが無い。

この状況で「目からビーム」は死を意味する。

社会的に精神的に死んでしまう。完全に不可能だ。

そんな俺の焦りを感じたのか。

好戦的な視線を俺に向けながら、川神百代はにやりと笑った。

そして俺に向かって一言……

「るるすボサけム！」

良かった、超痺れてる。

誰かに託す力の証（後書き）

用語解説

・カワカミーン

主人公、もう川神院と呼ぶ気無し。

・春先にタケノコの先端にはためくパンツとか、当初考えていたオチ。

・嘘だとしても、それは嘘という名の願望だよ！
大概の嘘は願望から来る。

・アカデミー賞受賞者も真つ青な演技。
本人はそう思っているが、眼がキョロキョロしまくりでバレバレの演技。

・ホントにありがとな。
訳・ホントにありがとな、勘違いしてくれて。

・百代が立った。
「ワイワイ百代が立った」とか言つべきか迷った。結局言わなかった。

・ルルスボ・サケム！
ゲーム「ヒバゴンクエスト」の必殺呪文。
正式な呪文は、

両手を広げ「みんな、オラに少しだけ現金を分け与えてクレ！
ルルスボ・サケム！」

かつてこの呪文を唱え渋谷を爆発させた男がいたとかいないとか。
百代がこの呪文を唱えるつもりでコレを言ったのかは不明。

鋸山からの逃走（前書き）

前々回と前回までのあらすじ。

拮抗する二人の実力。

何時までも続くと思われた二人の戦いは、主人公の必殺のビームによつて幕を閉じた。

川神百代に勝利した主人公。しかし、その必殺技は主人公から大きなものを奪っていた。

苦悩に苛まれる主人公だが、ふとした柿山の勘違いに救われ、元気を取り戻す。

しかし、涙を拭いて立ち上がった主人公のもとに、突如として立ち上がる川神百代。

倒したと思った敵が突如立ち上がり恐怖に震える主人公。

そして川神百代の口から放たれる謎の言葉「るるすばさけむ」

それは主人公のビームによつて未だ痺れている百代の呂律の回らない心の叫びだった。

そんな百代の心を知つてか知らずか、巨大隕石は刻一刻と接近しつつあった

・・・エメラルド星に。

鋸山からの逃走

あやつり人形みたいにカクカクと動きながらもこちらに向かってくる川神百代は、妙に気持ち悪くて怖かった。

「試合はおわつておる！お前の負けじゃ百代！」
「モモヨ、動いてはイケナイ！」

学園長達の声が響くが化物は止まらない。

正直、そんな体じゃあさすがに今の俺でも余裕で勝てるだろう。しかし、彼女の体からにじみ出るどす黒い闘気は俺を怯ませるのに十分だった。

こんなにぎこちない動き、痺れは体に残り、多分すこし動くだけでも体に激痛が走っているんだろう。
それでも化物は動くのをやめない。

ゆっくりと、しかし確実に俺の方に向かってきている。
超好戦的な笑を浮かべがら。

正直、先刻まで戦っていた時よりずっと怖い。

コイツの姿を見て気がついた。やはりコイツらと俺は違う。
目の前の化物。コレが戦闘狂だ。
どんなに傷ついても、どんなに辛くても、どんなに苦しくても、戦うことをやめない。

「すまんかったのう。」

そう言ってお茶を差し出す学園長。改、武闘派学園長。

「・・・いえ。」

「イタダキマス。」

そう言ってお茶を受け取る俺と柿山。

俺達は如何にもな和室でこうして学園長と対峙している。

「正直、百代からおぬしとの決闘の話を聞いたときは耳を疑ったのじゃが・・・。ふむ、まさかこんなことになるのはのう。」

「ダガライツダロウ。」

「だから言っただろう、と言っているわ。」

そして学園長の隣には。未だ痺れが取れない川神百代がいた。

先程、学園長に吹き飛ばされたとは思えないほどにピンピンしている。

その異常な再生力は正直気持ち悪さすら感じる。

きつとビームに痺れ追加効果が無ければ倒すことすらできなかったんだろう。

その後、学園長から当事者達で少し話しあおうと言っ提案があった。

学園長による喧嘩の仲裁という事なのだろう。

なるほど教育者らしい行動だ。

ただ、校則に決闘を持ち込んだり、決闘の審判までやってしまう格闘マニアの学園長の仲裁なので、そこはかとなく不安でもある。

当事者達、と言っても部屋の周りから色々な気配があるので、かなりの人数が盗み聞きをしているようだ。

あるいはこのカワカミーンの大半の人間が耳を傾けているのかもしれない。

ちなみに小雪先輩は庭で未だチョウチョを追いかけているので欠席。

そして何故か俺が尊敬する憧れのお人、赤髪の君が室内にいらっしやる。

なんでも「お姉さまと心が通じ合っている私ならば、口下手なお姉さまの心の中を見事代弁してみせるわ！」と言って。同室していた。

というか、この人、川神百代の妹だったのか。なんでギャラリィの中にいるのかすごい疑問だったのだけどコレで説明した。

あまり似てない気もするが、得てして姉妹と言うのはそういうものなんだろう。姉が奔放だと妹が確りするというのもよく聞く話だし。

雰囲気からすると姉妹の仲はとても良いようだ。あるいはこういうふうに正反対の性格のほうが人間関係は上手く行くものなのかもしれない。

俺がそんなことを考えていると、川神百代が口を開いた。

「ボンナビミゴドナマゲダナバヒザジブリダ。」

何を言ってるの？復活の呪文？

「こんなに見事に負けたのは久しぶりだと言っているわ。」

赤髪の人がそう訳してくれたが、本当にそんなことを言ってるのかと川神百代の方を見ると、川神百代も首を縦に振って肯定した。

「アバババヴァ、ヴァーザどノバノビとバナ。」

「ワツハツハツまさかあそこまで強いとはな・・・と言っているわ。」

再度川神百代を見るとやはり肯定のジェスチャー。

俺には「アババババ、今どんな気持ち？」と聞こえたのだが。

なんで分かるのだろう。本当に心のそこから通じ合ってるのかも。

「ダバツギバマゲナビ」

「だが、次は負けないぞと言っているわ。」

「はあ・・・」

次はとか言われても、もう二度と戦いたくないのだが。

「ジガジコノビビレバイツドルンダ？」

「しかし、この痺れはいつ取れるのだ？ですって。」

「たぶん、あと1時間もしないうちに取れるんじゃないッスか？まあ、先輩ならもっと早く取れるような気がしますけど。」

というか、動けることすら異常なんだけど。

「ゾウガマアキナガニマツドジヨウ。」

「そうか、まあ気長に松戸城。」

「松戸城？」

松戸に城なんてあったか？マツモトキヨシが建てたのか？

「ジガジボンドウニジョウバビョイボノバツダ。」

「しかし今回の勝負は本当にメロンライスにガムライスだ。」

意味不明なことを言う川神百代。

いや、意味不明なのは川神百代じゃなくてその妹さんだ。

「それホントに言ってるんすか？」

何か、だんだん怪しくなってるない？

「ごぼばなびばなめにまげづどばなあ。」

「この私がお前らのハナミズを飲みつくしてくれるわ！」

・・・怖すぎるだろ！

って言うか、川神百代がおもいつきり首を横にふっているのだが？

「イッデナイ。」

「すこぺっそす。」

俺には「言っていない。」としか聞こえなかったぞ！

なんだよ「すこぺっそす。」って！

「ところで一ついいかのう？」

突然学園長が話に割り込んできた。

「な・・・なんですか？」

いきなり会話に乱入してきたので少し驚いたが、正直このまま痺れた川神百代と会話をして混乱するばかりだから、この乱入は正直嬉しかった。

「お主はなぜ百代と戦おうと思ったのかのう？」

「え・・・と。」

どう答えるべきか悩んだ。

ここで、柿山にそう言われたからとか答えたら怒られるだろうか。考えて見れば、友人に言われるがままに戦ったというのは、どうにも主体性がなさすぎる。

じゃあお前は柿山が死ねといったら死ぬんか！とか言われそうだ。

そんなことを考えながら、ちらりと柿山の方を見ると、

柿山は俺の混乱を感じたのか、俺の代わりに口を開いた。

「仕方が無しにといったところですね。彼がどんなに嫌がっても、川神先輩は勝負を吹っかけてくるでしょうから。何時までも逃げ続けるのは大変なので、いつそ一度戦ってしまったほうが良いだろうと、私が彼に進言した次第です。」

学園長は俺の顔をじっと見ていた。

おそらく柿山の言が事実であるか俺に確認を取りたいんだろう。
俺は肯定の頷きで答える。

「ほう？では百代が求めなければ戦わなかったのかの？」

「・・・そうっすね。たぶん戦わなかったと思います。」
何が楽しくて俺の方から川神百代に喧嘩を申し込むんだ？

「ふむ・・・。」

学園長はしばらく考えてから、再度口を開いた。

「ところでおぬし、百代に勝ったわけじゃが・・・川神百代に勝った
今、一体何を求める？」

何を求めるか。

その問に対して俺は、

「べ・・・。。。」

俺が口を開こうとした時に、膝に何か感触があった。

柿山が抓ったのだ。ふと柿山の方を見ると、彼女の目線が変な動きをしている。

その目線の動きで理解した。これは馬鹿正直に答えるべきではないことだ。

俺は……

「今日起きたこと、今日思ったこと、今日感じたこと、そして俺に對してのすべてを誰にも言わず、誰にも悟らせない事、そして二度とこんなことに成らないことを求めます。」

そう言っただけだ。

はっきり言ってこんな答えは期待されていなかったのだらう。

学園長の言っていた「川神百代に勝った今、一体何を求める？」
というのは、この界限で最強を倒した俺に、さらなる最強を目指す
気があるのかとか、このカワカミーンの看板を欲しているのかとか、
そういう意味合いの質問だらう。

しかし、俺はその質問を歪曲して理解した。というかワザとそう
いうことにした。

学園長の質問は聞きようによつては「何かしてほしい事は有るか
？」という意味合いに取れる。

だからそう取ってやった。

そして「今日のことは無かったことに、そしてもう俺に関わるな。
」と要求した。

「川神百代は未だ無敗、俺なんて存在とはまったく関わっていないか
った。そしてこれから俺には関わらない。実に簡単で分かりやすい
要求です。」

俺のその要求はその場の雰囲気を一瞬で最悪のものにした。

「本気で言つでるノガ？」

「それ本気で言つてゐるの？」

声を合わせるように言う川神姉妹。

その言葉には明確な怒気が含まれていた。

無理も無い。何せあれだけのことを無かったことにしろといっているのだ。さっきの戦いを侮辱しているに等しい。

知ったことが。

こちらと、戦いなんてものにさしたる興味を持たない人間だ。戦いなんぞいくらでも侮辱してやる。

「本気ですよ、たとえどんなに気に入らなくても、俺が勝者で先輩が敗者である限り、この要求は飲んでもらいます。」

そう、コレは勝者の特権なのだ。

試合前の取り決めではないので、結局のところなんの強制力も無い。

しかし、川神百代はこの要求を跳ね除けることができない。

コレを蔑ろにすれば、それは勝者を蔑ろにすること。それ即ち俺が勝ったという事実の侮辱で、さっきの戦いの侮辱だ。

戦いこそが人生である川神百代は、勝者の要求を跳ね除けるといふ発想ができない。

「さっきまでの死合いをなかった事にしようのかの？」
学園長からも怒気を含んだ質問が来た。

なるほど、この人も含め戦いを求める人間にはあまりにも失礼な要求なんだろう。

なにせ彼らに取っては戦いこそが人生で、戦いを無かったことにするということは、人生を否定されるものなんだろう。

俺には理解出来ないが、まあそういう考え方も有るのだろう。彼らには彼らの生き方があって、それは別に悪いことじゃあないし、精々己の志とやらに忠実に生きればいい。

それは否定しないし、馬鹿にもしない。

ただしだ。

そこに俺を巻き込むな。

「怒ってもらってかまいません、うらまれてもかまいません、軽蔑も侮蔑も好きにしてください。事実として、俺は軽蔑されるに妥当な人間です。でも、そんな人間でも、曲げられない信念という奴があります。その信念のために、俺はこの我俣を通していただきます。」

そう、せめて表面的には平凡に過ごしたいという俺の信念には、この川神百代との関わりは邪魔なんだ。

「たしかに殴り合えば楽しいでしょうよ。それは否定しません。しかし、楽しいから殴り合うのでは、それはもう獣であって人間でない。戦いの肯定は人間性の否定です。俺は一人の人間として生まれて、一人の人間として死んでいきたいので。」

もう、口は止まらない。

一度出た言葉は流れに乗ってドンドンと出て行き、次の言葉は止まることなく発生する。

「そもそも戦う？勝利？真剣勝負？はつきりと俺にとって価値のない物ですね。いや、俺にとつてというか、この世のなかにないほうが良いものです。闘争本能なんてものがあるから人は争い、不幸が生まれる。戦いの中で、人は己の中に闘争本能を甦らせる、それでは動物です、そんな状況に一時的とはいえ身を置いたのは、俺に取って恥でしか無いんですよ。人類は歴史を重ねているんです。」

まくし立てるように言い切った俺を、川神百代初め目の前の三人は殺すような視線で睨み。

柿山は少し驚いたような顔でみていた。

「どうしたんだよ驚いた顔して。」

さっき俺の膝を抓ったということは、こういうことを言えとの事だったんだろ？

「いや、試合が終わって本当に強気になったなとおもってな。」
そう答える柿山。

まあ、たしかに少し挑発的になった自覚はある。
後半のセリフは言わなくても良いことだった気もする。
百代に勝ったという事実もあるが、衝撃的な出来事を経験して強気になってるのかもしれない。

「しかし・・・まさか川神院に喧嘩を売るとは。」
「・・・え？」

柿山の言葉で気がついた。

バトルジャンキーと言う意味では川神百代だけじゃあない。
ここに居るほとんどの奴がそうなんだろう。

何せここは、戦いの殿堂「世界の力ワカミーン」なのだから。
誰もが戦いを求め、強さを求め、勝利を求める場所なのである。
俺はそんなところで戦うことの馬鹿らしさを説いてしまっている。
そしてそれは部屋の外に居る沢山の人々にまで聞かれてしまっている。

それは、いうなればある日のビックサイトで漫画とアニメが以下
に下らないかを演説するくらい、とんでも無いことで・・・。

「正直、周りからの殺気で私まで居心地が悪いんだが・・・。」
よく探してみると、かなりの殺気がこの部屋の周りから放たれて
いる。

さっきから妙に寒気がすると思ったが。

いつもよりズボンの通気性が良い事が原因じゃあないようだ。

コレはマズイ。

色々マズイ。

とにかくマズイ。

「じゃ、じゃあ俺はこの辺でおいとまさせて頂きます！」
そう言って立ち上がり、柿山の腕を掴んで部屋から出る。

止められるかと思っただが、どこからも静止の声は聞こえなかった。
あるいはそんな余裕が無いくらい、みんな怒り狂っているのかもしれない。

生きた心地がしないまま、俺と柿山は、逃げるようにカワカミーンを後にした。

逃げるようにというか、逃げてきた。

カワカミーンの敷地から出る瞬間まで殺気がバリバリ体に当たって正直、生きた心地がなかった。

敷地を出てからもしばらく歩き続け、カワカミーンが見えなくなるまで、全く心が休まらなかった。

いや、カワカミーンから離れても俺の心は全く休まらなくて、後悔でいっぱいだった。

どうしよう、カワカミーンに喧嘩売っちゃった。

「ヤバイことになったかも……。」
と、顔面蒼白の俺に対し、柿山はあまり深刻で無い風に答えた。

「いや、そんなに悪い結果とも言えないと思う。」

「そうか？」

考えうる限りでは、最悪の結果のような気がするが。

「たしかに川神院の君に対する心象は最悪だが、君が出した要求は多分破られないだろう。下手に負けても後に再戦を挑まれるリスクを考えたら、勝った上で要求を突きつけたのはむしろ正解かもしれない。」

「そ・・そうかな。」

そう言われるとそんな気がしないでもない。

「たぶんな。まあ、川神百代に勝ってしまったという噂程度はたつかも知れないが、あとで武蔵小杉に無残に負ければその噂も立ち消えるだろうし。」

そうか、そういえば武蔵小杉の件もあったな。

もうトラウマがどうのとか言ってられる状況では無くなったな。

今度こそちゃんと無残に負けないと。負ける練習もしないとだめだな。

「ある意味、結果オーライってことかな？」

「まあ、最高ではないが、悪くは無いといったところかな。ただ、一つ気になることはあるが。」

「なんだよ。気になることって。」

なんか、言葉に翻弄され、とにかく、疲れてきてるぞ、おまえに、俺は、いいか？

何でお前はいつも最後の最後で不安になることを言うんだ？

「小雪先輩はどこに行ったんだ？」

「あ。」

いきなり宣戦布告してそそくさとカワカミーンを去った俺が、数秒後に舞い戻って「すいません、小雪先輩忘れました。」と言う姿は、さぞマヌケだっただろう。

鋸山からの逃走（後書き）

用語解説。

・巨大隕石は刻一刻と接近しつつあった・・・
とある深夜ラジオの前回までのあらすじシリーズより。
次々と炎を吹き上げる火山、倒れるビル、泣き叫ぶ子供達。しかしそれは三万光年の彼方での出来事。地球ではエメラルド星を救うことはおろか、そんな事が起こっていることすら知らない。

・正反対の性格

主人公の妄想。主人公の中で一子は努力家で頑張り屋。百代は奔放でいい加減。即ちダメな姉とシッカリした妹という、妙に現実とずれた認識をしている。

・松戸城

かつては存在していたらしい。

詳細は不明であるが、たぶんマツモトキヨシが建てたのではない。

・メロンライスにガムライス

あなたはどちらがお好きですか？

・この私がお前のハナミズを飲みつくしてくれるわ！

洞窟にいるボスモンスターのセリフ。ちなみにそのモンスターは肩のうしろの2本のゴボウのまんなかにあるスネ毛の下のココ調の右が弱点。

あれ？肩ぐるまして後向きに乗り2本のゴボウを持った歌舞伎顔の男・・・だったかな？

・すこぺっそす。

中身がないという意味合いの言葉。

使用例・お前のエロゲー論はすこぺっそすだなあ。

・じゃあお前は柿山が死ねといったら死ぬんか！

「お前何しとんじゃ！」

「だって○○くんが言っただから・・・。」

「したらお前は○○が死ね言うたら死ぬんか！」

小さいときは納得してたけど、今考えたらこの理屈はオカシイ気がする。

・その目線の動きで理解した

主人公は柿山限定でアイコンタクトスキルを持つ。

ただし稀に変な間違いもする。

・戦いの中で、人は己の中に闘争本能を甦らせる。

月光蝶である！

・ある日のビックサイト

ある祭りのこと。

ロボピチャと演技指導

あの日から数日。俺は平凡を満喫していた。
つまりいつも通りということだ。

カワカミーン喧嘩を売ってしまった俺だったが、別に生活にはさしたる影響はなかった。

たしかに少しの変化はある。

道歩いていると不意に殺気が向けられたり、
川神百代から超好戦的視線が投げられたり、
なにやらヒソヒソと俺に関する囁きが聞こえたり。

しかし、直接俺に何かアクションが起こされることはなく、多少
居心地が悪いくらいだ。

影響と言えるほどじゃない。

つまり、俺の平凡な生活は今のところ変化していない。

そうなれば後の懸念事項はただ一つ。

「うばわー!!」

「それもだめだな。」

「グへへへ!!」

「わざとらしい。」

「まそつぷー！」

「やる気あんのか？」

「・・・よくぞ俺を、しかし俺を倒しても第二第三の俺が・・・」

「帰れ。」

今何をしているかというところ。
俺と柿山は負ける練習をしている。

「ひびゃー！」

「・・・まあそんなところか。」

やっと柿山のOKがでた。どれだけ鬼監督なんだコイツは。

夕方の河原、夕焼けに照らされながら俺達は武蔵小杉にどうやったらしげんに負けられるかを模索していた。

模索していたというよりは、柿山からの演技指導を受けていた。

川神百代と戦って気がついたのだが。
俺は負けるのが苦手らしい。

何か有るとつい体が動いてしまう質なようで、無抵抗に殴られるのが難しい。つい反射的に動いてしまうのだ。

武蔵小杉と再戦して、また、何かの間違えで勝ってしまった日には目も当てられない。

だからこうして、柿山と負ける猛特訓をしているのである。しかし、負けた際のセリフ一つでこんなに手間取るとは思わなかった。

「では次はやられた際の体の動きを練習しよう。」
そう言っ て柿山は変な置物みたいなものを取り出した。

「何だこれ？」

「玩具のピッチングマシンだ。」

なるほど。よくみるとボスケテとか信号弾を発射しそうな出で立ちの物だ。

「このボールに当たった瞬間に痛そうな演技をするんだ。」

「・・・この玩具のボールに？」

軽すぎない？

せめて本物のピッチングマシンのボールとかにしない？

それともあれか？

お前の見立てでは武蔵小杉のパンチはロボピチャレベルというとなのか？

だとしたらアイツはどうやって一年制覇をしてこれたんだ？

「なに、君にとってはこのボールの衝撃も、武蔵小杉の衝撃もさしたる差は無いさ。川神百代のパンチを耐えられる人間にとって、その差はせいぜい、マリヲとルウィージの性能差程度だ。」

それ、結構違うような気がする。

まあ、ほとんどダメージのない攻撃にやられる練習なので、これくらいの軽いボールくらいが丁度いいというのは、たしかにそのとおりかもしれない。

「まあ、やってみるとするか。」

「じゃあ撃つぞ・・・。」

そう言って柿山が玩具のスイッチを入れると、軽い音を立てながらピンポン玉が俺の方に飛んでくる。

俺はその玉に当たると同時に。

「ひ~~~~び~~~~や~~~~あ~~~~!!」

見事に吹き飛んだ!

我ながら完璧なタイミングで飛んだ。

ヤバイ、俺天才かも、こんな軽い衝撃でもダンプカーに跳ねられたレベルの吹き飛び方が出来ている。

コレには柿山も文句が付けられまいと、柿山の方を見ると・・・

「何でドップラー効果が発生するレベルで吹き飛ぶんだ!」

怒っていた。

「いや・・簡単なパンチで物凄く飛ぶあたりに弱さが・・。」
「怪しすぎるだろ、武蔵小杉はアレでも人間の範疇なんだ。化物レベルのパンチを想定するな。普通にやられる。」

なんて細かいんだコイツは。

いや、俺が下手すぎるのか？

正直、負けたフリと言うのがこんなに難しいと思わなかった。
相手の力量に合わせて、程よいセリフと吹き飛びかた。
それらを絶妙のタイミングで組み合わせる。

よく考えたら世の中には吹き飛んだりする専門職であるスタントマンなんてものがあるあたり、プロ級の技術というのが要求されるほどに難しいことなのかもしれない。
もうどれだけ匠の技なのだ。

その後も俺は柿山プロデュースのもとに、暗くなるまで練習を重ねたが、結局最後まで柿山の合格はもらえなかった。

正直、自分自身の演技力の無さに絶望した。
明日再度練習して、今度こそ完璧にしよう。

そう思った。

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

そして、次の日になって、

その考えが甘いことだと自戒した。

昨日練習が終わったなら、俺はとりあえず満足して、こう考えた。

明日ががんばろう、明日が本格修行だ・・・と！

が、

その考えがまるでダメ。

「明日からがんばろう」という発想からは、どんな芽も吹きはしない！

そのことにいい年齢をしてまだ気がつかなかった。

明日からがんばるんじゃない、今日だけががんばるんだっ！

今日をがんばった者、今日をがんばり始めた者にのみ。

明日は来るんだ！

そういう意味で俺はもう駄目！

終わったよ！

「何、遠くを見てるの！無視しないでこっちを見なさい！」

そう、俺の目の前には武蔵小杉が立っている。

「今日こそ本気で戦ってもらうわ！」

真っ更な額と共に。

「あ・・・明日にしない？」

明日なら完璧に演技できると思うんだ。

「何を言ってるの！この期に及んで逃げるなんて許さないわ！」

「いや・・・じつはほら、今日は4時からゲートボール大会あるから・・・」

「ありえない嘘かましてんじゃないわよ！」

なぜ嘘だとわかるんだよ！

くそう、こんな時に嘘つきスキルが有ればなあ。

そうこうしているうちに小杉が自分の制服のワッペンを叩きつけた。

これは決闘の流儀だ。

俺がこのワッペンの上に自分のワッペンを置けば決闘は成立。即座に決闘が始まる。

正直ワッペンを置きたくないんだが、武蔵小杉が納得しないだろう。

逃げるは無理そうだし、正直自分の演技に不安が残るが、受けられるまい。

そう思って、俺は自分のワッペンをそつとその上に置いた。

「ほつほつ。話は聞かせてもらったぞい。わしが了承する、存分にやりなさい。」

ゴ・学園長、いらしてたんですね！

・・・ていうか、このタイミングは早過ぎるだろ！
さては俺を監視していた？

これ、ストーリー被害で訴えたら勝てるんじゃないかなろうか。

[illegible]

こうして開かれた決闘。

第一グラウンドはお祭り騒ぎだ。

普段なら、俺も見る側。

といっても、俺は決闘には興味がなくて、興味が有るのは決闘の時に売られる料理部の弁当と、決闘時のトトカルチョなのだ。

まさか、俺がそのトトカルチヨの対象になる日が来るとは思わなかった。

「柿山・・・。」

俺がセコンドの柿山に話しかけると。

「ああ、ちゃんと弁当は買っておいたぞ。」
と、頼もしいお言葉。

有り難いけどそこはもつと励ましの言葉が欲しかったんだが。

「両者前へ！」

学園長の声が聞こえて俺と武蔵小杉はグラウンド中心に書かれた円の中に入る。

「勝負は素手！相手を戦闘不能もしくは戦意喪失させるか場外に出したほうが勝ち！」

「それでは無制限一本勝負・・・はじめ！！」

こうして俺達の決闘が始まった。

さて、どうする！

どれくらいのパワーでパンチが来る？

迎撃はするなよ！

絶対にするなよ？

体に力を入れて、避けないようにしないと。

その後程良く吹き飛ばんだよな。

殴り返さなように体を抑えつけるように力を入れる！

さあ、こい！

大丈夫、俺なら練習以上にうまく出来る！

コノヤロウ！

おもいっきり負けてやるぞ！

そんな俺の願いとは裏腹になかなか武蔵小杉は攻撃に來ない。
それどころか距離すらとっている。

早く来いや！

コレじゃあいつまでたつても負けられんだろ！

「武蔵小杉の動きが止まったぞ？」

「どうしたんだ？」

「怯えてるようにも見えるぞ？」

ギャラリーのざわめきが聞こえる。

たしかによく見ると、武蔵小杉の表情が少し怯えてるようにも見える。

何で？

なにか外的要因が有るのかと辺りを見渡すが別に変なところはない。

いや、

柿山が口を動かしている。

何々？

『漏れてる漏れてる・・・』

ば！

馬鹿な事言ってんじゃねえぞ！

何が漏れてると言うんだ！

公式記録では俺は何も漏らしていないぞ！！

誰にもバレ・・・

『殺気が漏れてる。』

へ？

殺気？

殺気！？

そう、俺はあまりに力を入れるあまり禍々しい気をすこしばかり漏らしていて。

しかもチートレベルの俺の気というのは、もうそれだけで衝撃波が発生するほどだ。

それでもって、武蔵小杉も武道家の端くれで相手の気を読むことには長けているわけだから・・・。

そりゃあ、怯えますわな。

というか隠匿術が出来なくなるって、演技が苦手にもほどがあるぞ俺。

あ、いや、待て。

まだ大丈夫。

たしかに武蔵小杉はひるんだけれど、俺の気はそんなにタップリ出てしまったわけじゃあないし、せいぜい目の前の武蔵小杉と、す

ぐ近くの学園長と柿山ぐらいしか気がついていない。

ギャラリーも武蔵小杉が怯んだ理由がわからなくてザワザワしてるくらいだ。

このあと武蔵小杉が立ち直って俺を殴ってくれば・・・

「武蔵小杉涙目だぞ？」

「突然怖くなったのか？」

「鼻水垂らしてるしwww」

ふと聞こえた。

そんなギャラリーの言葉。

その何気ない言葉。

俺もギャラリーだったら言っていたかもしれないような些細な言葉。

その言葉に。

俺はブチキレた。

川神百代と戦ったときよりトサカにきた。

「今、笑った奴出てこいや・・・。」

自分でもわかるくらい殺気が流れた。

ギャラリーが一瞬で黙り、あたりに緊張が走る。

俺はいま笑った奴のことを睨む。

「てめえは鼻水垂らさないんだろ？余裕なんだろ？武蔵小杉より強いんだろ？ほら、上がってこいよ。」

たしかに武蔵小杉の今の様子は情けないかもしれない。

しかし笑うのは良くないと思う。

それに、なんだ、アレだ。

他人ごとじゃあねんだよ。

いいじゃねえか！鼻水くらい。

世の中にはもっとすごい物垂らしちゃう人がいっぱいいるんだよ！

「鼻水垂らすのがそんなに面白いか？人間なんだよ。真剣勝負中なんだよ。動けば出るし、力みゃあ出るんだよ。それがそんなに楽しいか？」

人間出さない奴が居ると思ってるのか？

生理現象だろ！

それが少しばかり人前で出ただけで笑いやがって。
トイレ以外で出すのがそんなに可笑しいか？

「お前だよお前！ほら、知らんぷりしてんじゃねえよ、ほら、ほら。」

そう言っただけ俺はそいつの前に行って目を合わせる。

コノヤロウ。

コイツは敵に回したね。

俺を含めて、世界中の色々と垂らしてしまった人を敵に回したね。

「もう気絶してるよ。」

柿山の声で我に帰った。

俺の殺気に当てられたのか、目の前の男は泡を口から吐きながら
白目向いていた。

コイツも垂らしちゃった組に参入だ。

「お・・・おや？ど・・・どうしたんだい？突然。びよ・・・病気が
な？」

「もう誤魔化すのは無理だろ。アレだけ殺気出しておいて・・・」
何言ってるんだよ柿山、彼はほら、ええっと、持病の神経疾患だ

よ！

「そうだ！決闘！まだ勝敗は決まっていな……」

そうだ、武蔵小杉に無様に負ければ、
まだ汚名挽回のチャンスが……

「いやな、もう手遅れだから。」
何でお前はそうもすぐ諦めるんだ！

「まあまで、たしかに俺はすごい気迫かもしれないがそれでも実力はまだわからないわけで……」
「そうじゃなくて君の場外負けだから……。」

「おふ！」

そう言われて初めて気がついた。
俺はいつの間にか円の外に出て、ギャラリーの中に入り込んでいて……。

……戦わずして負けていた。

ロビピチャと演技指導（後書き）

用語解説

・ボスケテ

1・ボスタスケテの意

2・ボス決して走らず急いで歩いてきてそして早く僕らを助けての意

1の意味で使われることが多いが2の意味で受け取られる場合が多い。大きな違いは無いが2の意味で受け取られた場合は徒歩で来られるので緊急時は注意が必要である。

・マリヲとルウィージ

大した違いはない。兄は姫が恋人、アニメに漫画に別ゲームにと大人気。弟はしばしば存在すら忘れられ・・・あれ？結構な違いが。

・ドッブラー効果

詳しい話は面倒なので省略するが、よく救急車の音なんかが近づくときと遠ざかるときで違って聞こえるアレのこと。

・今日をがんばった者、今日をがんばり始めた者にのみ。明日は来るんだ！

みんな大好き班長さんのセリフ。地下帝国在住。

・4時からゲートボール大会

川神スーパージェートボーラーズと言う団体に所属している・・・という設定。

・ゴ・・・学園長

ゴリラファイターさんと言いつうになった。

・もつとすごい物垂らしちゃう人

殺気だよ。・・・垂らしちゃう物。

殺気だよ、殺気を垂れ流しちゃうという意味だよ。たぶんそついう事だよ。そついう事にしておいてくれよ。

・汚名挽回

読んで字のごとし

幕間・武蔵小杉と真の武人（前書き）

書き始めて武蔵小杉の口調がよくわからないという事実¹に直面。
口調が変ですが、スルーをしてくれたら有り難いです。

幕間・武蔵小杉と真の武人

決闘が終わって私は呆然としてた。

勝負が始まった途端、私に浴びせられた殺気。今まで小者だと思っていた男が、とんでも無い実力者だと判ってしまった。

そして、怯える私を尻目に彼はギャラリーに対して怒り、場外負け。

そして試合が終わり、周りが混乱しているうちに彼は何処かに消えてしまった。

あまりに予想外の事が起きすぎて理解が追いつかないわ。

目の前では泡を吹いた生徒がタン力で運ばれている。
あの男の殺気を正面から浴びせられた生徒だ。

そんな様子をボンヤリと見ていると、私の隣で学園長が一言。
「ふうむ、彼ほどの人間の殺気を浴びれば無理も無いのう。」

その言葉に私は違和感を感じたわ。

「彼ほど？学園長はアイツの実力を知ってるんですか？」
彼は学園長が目をつけるほどに実力者なの？

たしかにあの殺気はすごかったけど。

「そうじゃのう、わしが本気でも勝てんかもしれん程度に強いのう。」

私は驚愕したわ。

川神鉄心ほどの人間が勝てない。

川神院の院長が勝てないと言ってるのよ。

「なら、川神百代は、川神百代先輩ならどうですか？」

現時点で最強の川神百代。

彼女が負けるとは思えないけれど……

「さての？百代はもう彼とは戦えん事になつとるからのう。そもそも関わることも出来んことになつとる。」

「なっている？」

川神百代がアイツと戦えない？

「勝者の特権でそう決められての、その勝者が誰かは言えんがのう。」

馬鹿じゃなければすぐに理解できる言い回しだわ。

勝者の特権。

それ即ち川神百代が誰かに負けたと言う事。

そして、その内容から推測される人物。

もっ、あの男しか居ないじゃない。

「彼が川神百代先輩に勝ったんですか？」

「さあの、あの者は百代に関わっていないことになつとるからのお。まあ、コレは予想じゃ、あくまで予想じゃが、彼が百代と戦つとして百代が負けるかもしれんのう。数発殴り合った上にあの者の気の発射で百代が倒れるような気がするのう。」

そうなった場合はあの者は勝者の特権として百代に勝負の口止めと、その後、自分と関わることを禁止する気がするのう？」

それは明確な肯定。

すでに彼は川神百代に勝っている。

武道をやつてゐる物の目標の川神百代。

私の最終目標だったそこに、あの男はすでにたどり着いている。

それにしても全く隠す気がないわねこのジジイ。

私も馬鹿じゃない。

現時点の私の実力で川神百代には逆立ちしたつて勝てないのは解つてゐるわ。

そんな川神百代以上にプレミアムだと言つたならば、あの男に勝つなんて夢のまた夢。

そうなれば彼の行動の理由が解ってくる。

そう、

私から逃げていたのも、私との勝負を嫌がったのも、彼は負けるのが怖かったんじゃない。

私に気を使ったのね。

そもそも、私が勝てる可能性なんてゼロだったんだから。

一年制覇を最初の目標として、プレミアムな栄光を掴もうとして
いる私にとって敗北は、死ぬに等しい恥。

彼はそれを知っていたが故に、私の為に戦いを避けていた。

しかし、それでも最後は私の決闘を受けた。

何故か。

それは、彼もまた一人の武人だったからだわ。

彼にとってみれば、私の存在なんて。それこそ羽虫みたいなもの、
それでも彼は私の本気を感じ取って、私と本気で戦おうとした。

もし、彼が私なんかを眼中に入れない人間だったのなら、最後まで
でノリクソと決闘を避けたわ。子供のワガママを躲す大人み
たいにね。

でも彼はそうしなかった。それどころか決闘前に私を挑発し、私に全力を出させようとすらしたわ。

そして試合開始になって初めてわかるその実力差。

彼の発した殺気に私は恐怖を感じた。

攻めることも逃げることもできずに、その場で震えるしかできなくなってしまうた。

そしてそんな様子を笑うギャラリーに。

彼は本気で怒った。

本気にならなくても、軽い気持ちで何でもできる男が。本気の本気で怒こった。

勝負を笑った人間を怒鳴りつけ、私を笑った人間を叱りつけた。

勝負を侮辱する行為が許せなかったんだわ。

それこそ、自分が場外負けになっても気にしないほどに。

彼に取って、勝つとか負けるとか。

そんな小さなことはどうでも良かったのね。

彼に取って大切だったのは、勝負そのものだったんだから。

それに比べて私はなんて小さいのかしら。

一番になりたい、みんなに自慢したい、褒められたい。
霸道なんて、結局言い訳。
私自身がいいカッコしたかっただけ。

そのために勝ちを求めて、勝つことばかり気を取られて、勝負はその手段でしか無かった。

それこそ、戦いの侮辱だわ。

もう力とか強さとかじゃない。

武人として。

もう私は何もかも彼に負けていたんだ。
そもそも勝負になんてなっていなかった。同じ土俵にすら立てていない。

そう。

真の武道家の精神を彼は持っている。
私なんかより、ずっとずっとプレミアムだわ！

「ふむ、顔つきが変わったのう？」

学園長が私に向かって言ってきた。

「違って見えますか？」

「少し前のお主はどうも勝利に取り憑かれていたからのう。それが

悪いとは言わんが、少々行き過ぎていたようじゃったが。いまはまるで憑き物が落ちたようじゃ。」

そうね、その通りだわ。

「ええ、プレミアムに落ちました。」

というより、落とされたわ。

「彼は校舎裏の方に向かったようじゃのう。彼に会って言いたいことがあるんじゃない？」

そう言って校舎裏を指さす学園長。

この人も、きっとすべて理解しているのね。

「はい！行ってきます！」

そう言って私は走る。

彼に会わなくちゃ。

会って言わなくちゃ。

彼こそ、彼こそ私の進むべきプレミアムだわ！

幕間・武蔵小杉と真の武人（後書き）

用語解説

・全く隠す気がないわねこのジジイ
当事者じゃないからね。勝者の特権は敗者にしか適応されないの
で、それ以外の人は結構軽い気持ちでバラします。

・彼もまた一人の武人だった
それはない。

・真の武道家の精神
主人公は持つていないし、多分これからも持たない。
真に小者な精神なら持つてる。

・この人も、きつとすべて理解している
いいえ、学園長も大いに勘違いしてます。

・進むべきプレミアム
プレミアムに小者な道だが。その事実を武蔵小杉は知らない。

プレミアムオレンジ

武蔵小杉戦でまさかの場外負けをした俺は、逃げるようにその場を後にした。

逃げるコマンドは小者のスタンダードスキルなのだ。

全校生徒注目の試合会場から、どうやって逃げられたかというと別にスターファイヤーな大脱出をしたわけじゃあない。

俺の場外負けが決定してから試合会場は混迷を極めた。

教師連中が泡吹いて倒れた野郎を保健室へ運びこみ、武蔵小杉は呆然とし、川神百代の殺気が俺に突き刺さり、ギャラリーは騒ぎ、トトカルチヨ結果は物言いの嵐、怒号が飛び交い……

俺と柿山は取り敢えずその混乱に乗じて会場を抜けだしたわけだ。気配を消すことが得意な俺と、存在感がそもそも希薄な柿山は、いとも容易にグラウンドから逃げることもできた。

そしてそのまま人気の無い校舎裏の焼却所まで退却。

「しかし困ったことになった。」
柿山に対して言った言葉ではなく、コレは俺の心から漏れ出てしまった呟きだった。

先程の試合。

まあ、負けたことには変りないのだが、情けなく負けたわけじゃない。俺が弱いという印象を大衆に与えられたかという疑問だ。むしろ変に殺気を振りまいてしまったがゆえに「アイツは実は強いんじゃない？」とか思われてる可能性が結構高い。

ただ、

まだ解決方法が無いわけじゃない。

俺に対して強い疑惑が生まれたとしても、それはあくまで「疑惑」であって決定的な認識ではない。

人の噂も七十五日というし、俺が普段から情けなく振舞えばこの疑惑はいずれ立ち消えになるだろう。

あるいは武蔵小杉と再戦して、今度こそ情けなく負けるという方法もあるし、嫌がる柿山をなんとか説得して柿山にボロ負けするという方法もある。

長期計画でゆっくりと俺の認識を弱者に誘導していけばなんとかなりそうだ。

俺が困ったと思ってるのはその件じゃない。

目下の一つの問題に関することだ。

それは、

武蔵小杉の提案した。「決闘で負けたほうが勝った方の言う事をなんでも聞く。」という条件。

当初の計画では、

俺、情けなく負ける。

←

武蔵小杉、気が済む。

←

武蔵小杉曰く、条件？ああ、もうどうでもいいんじゃない？

←

解決。

という風になると思っていた。

ところが実際は俺が勝手に場外に出て終わり。

武蔵小杉は気が済むどころか、まともに死合いをしなかった俺に
対して怒りを深めた可能性すら有る。

「どうしよう。武蔵小杉にどんな命令をされるのか・・・」

コレはどうのしようもない、目の前に迫っている危機である。

今日から永遠に武蔵小杉から逃げおおせるわけにもいかないし。

「どうしようもこうしようも・・・武蔵小杉の言う事を何でも聞
くしかないかな？」

柿山も解決策を与えてはくれない。

「死ねとか言われたらどうしよう。」

そんな、シンプルかつ最悪のパターンすら考えられる。

正直、「死ねと言われたから死にました」なんて死因は嫌すぎる。

「多分言われないと思うけど、そんな時は逃げるしかないだろうな？今のうちに謝っておいたら良いんじゃないか？」

謝る？

なるほどたしかに柿山の言うとおりだ。

誠心誠意謝れば武蔵小杉の気も少しは晴れるかもしれない。

兎に角、何か命令される前に彼女の怒りを沈めなくては。

「額に肉って書いた状態で謝るのはどうかな？」

そうだよ。もとはといえば、俺達が彼女の額に肉なんて書いたのがそもそもの原因なわけだから、俺も額に肉と書けばおアイコじゃね？

「・・・あのなあ、君。普通に考えてみる、謝罪に來た人間が額に肉って書いてあつたら。」

柿山に言われて想像する。

例えば俺が何かされたとして、目の前に土下座する相手。

俺が「まあ、顔を上げて」といって上げたその顔には、

でかでかと肉と書かれている・・・。

「100%馬鹿にしてると捉える。」

フザケてるのかお前は！って思う。

「なら止めておくべきなんだ。」

なるほどコレは止めておいたほうが無難だな。
しかし他に彼女の怒りを沈める方法となると……

「子分になってもう逆らわないでヤンス！って言えば許してくれるかな？」

「その言い方はやっぱり馬鹿にしてると取られるぞ？」

伝統ある由緒正しき子分言葉だと思うが。

「ただ、子分になる案は悪くない。子分になることで武蔵小杉より格下であるというアピールができるし、武蔵小杉の気もある程度晴れるだろう。さらに今後、君の見に振りかかる荒事を武蔵小杉に押し付けることも可能だ。平凡かどうかは別として、ある程度静かな学園生活がおくれる可能性はあるね。」

柿山に言われて気がついたが、たしかにその通りだ。

今なんとなくて考えた、子分になるという行為は、結構有りかもしれない。

結構どころかかなりいい案だ。

武蔵小杉の子分と言うことは普通に考えたら武蔵小杉よりも弱いと言うことだ。だれも俺が馬鹿みたいに強いとは思わないだろう。

さらに俺に降りかかってくる火の粉は「オヤビンお願いします！」とかなんとか言って武蔵小杉に押し付ける。

武蔵小杉としても自尊心を大いに擲られるだろうし、悪い気はしないはずなので俺のことを許してくれるかもしれない。

ある程度のパシリは覚悟しなくてはいけないだろうが、安全な学園生活が得られるというのなら安い代償だ。

もちろん、武蔵小杉に子分になることを断られる可能性もあるが、試す価値は大いにある。

「つまり俺は、武蔵小杉に会ったら間髪入れずに足にすりついて、マイッタでヤンス！もう逆らわないでヤンス！子分にしてほしいでヤンス！一生オヤビンについて行くでヤンス」となれば良いわけだ。

「

「だからその言い方は・・・」

柿山が何か言おうとしたその時、俺達の後には気配を感じた。

「ここにいたわ！」

そう、他の誰もいない、武蔵小杉その人です。

正直もう少し考えが纏まってから現れてくれとも思っけれど、現れたからには仕方がない。

瞬間が勝負だ！

コイツの足にすり付いて俺を子分にしてくれと言ええいい。

「おれを………」

「プレミアムに私を子分にしなさい!!」

……
……ん？

俺の言おうとしたことを武蔵小杉に先に言われてしまった。

「柿山、俺の耳腐った。」

なんとも斬新なフレーズだ。耳が腐った。

「すまん、私の耳も腐ったかもしれん。武蔵小杉君、すまないがもう一度言ってもらっていいかな？」

「プレミアムに私を子分にしなさい!!」

何度聞いても同じ。

武蔵小杉が子分になりたそうな目でこちらを見ている。

「……柿山、俺にはこの子の言っている意味が理解出来ないんだが、ちょっと解りやすく解説してくれないか？」

「すまん……これは私も理解不能だ。」

もしかして、言い間違いたんじゃ？

「俺が君の子分になれってこと？」

「違うわ！私をプレミアムに貴方の子分にしないでと言ってるのよ！」

この言葉で、彼女の言い間違いの可能性も潰れてしまった。

「柿山？この子どうしちゃったの？」

「すまん・・・理解不能だ。」

ひょっとしてコレは俺たちを混乱させるための発言なのか？
地味な嫌がらせなのか？

「え？えーと、じゃ、じゃあ、プラッシー買ってこい！」

本気で子分になると言うならばこんな理不尽な命令・・・

「プレミアムに了解だわ！」

そう言って武蔵小杉は風の様に何処かに行ってしまった。

「・・・・・・。」

「・・・・・・。」

その場に残される俺と柿山。

「かきやま？」

「理解不能だ。」

柿山でさえ理解不能な事がおれに理解できるはずもない。

「どうしよっ柿山。」

「どうしよっって・・・どうするんだ？」

「おれ、武蔵小杉を子分にしたほうが良いのか？」

正直、前世、今世、両方において初めての状況に、俺はどうして良いのかわからない。

「良いも何も、君は武蔵小杉の言う事を聞かなきゃいけない立場だから、聞くしか無いんだろ？」

「しかし、武蔵小杉を子分にして、今までの生活は壊れないだろうか……」

子分が居るって、平凡の範疇なのか？

「まあ……間違い無く壊れるな。武蔵小杉はアレでも一年を殆どシメていたわけだから、そんな奴を子分にして目立たないはずがない。さっきの試合内容と合わせ技で君も危険人物の仲間入りだ。」

さ……

最悪の結果じゃないか！！

ま、

待てよ？

「ひょっとしてそれが狙いか！？」

俺に対する復讐としてはたしかに一番効果的だ。

俺を祭りあげて俺の生活を壊す。俺が一番に恐れて嫌がることだ。

だとすれば武蔵小杉は思った以上の策士だぞ。

俺の嫌がることをしつかりと認識し、最悪のタイミングで実行しようとしている。

「そうかなあ・・・しかしそれ意外に理由が・・・しかし・・・」

柿山は納得しきれていないようだが、この武蔵小杉策士説ならばこの状況の説明がつく。

いままで自尊心の強い単純バカだと思っていた武蔵小杉が、柿山レベルに狡猾な奴だったなんて！

なるほど、狡猾な奴はどこぞという時に下手に出る。

先程の子分にしてほしそうなリアルな表情も。俺の無茶なパシリに速攻で走っていったことも。俺の人生を潰すための伏線なのか！

たしかに額に肉と書いたのは悪かったが。そしてそれをからかったのも悪かった。

しかし。

しかしだ。

その仕返しとしてはあまりにも非道。

俺の人生そのものを潰そうとしている。

俺がこのままホイホイと武蔵小杉を子分にした日には、武蔵小杉は嬉々として俺の平凡を壊していくに違いない。
なんて恐ろしい奴だ武蔵小杉。

「・・・いや、やっぱり、武蔵小杉も、そこまで・・・考えてはいな

いはずだな。多分、彼女には君の人生を潰すという気は無いと・・・
・思う。」

柿山がそんな結論を出したがそんなハズはない。

「何とかしてアイツを説得・・・プレミアムに買ってきたわ!」

思っていたよりずっと早く武蔵小杉は戻ってきた。

そしてその手にはしっかりとプラッシーが握られている。しかも
瓶入り。

さらに反対側の手にはパシリの定番、焼きそばパンが。

言われる前に買ってくるこの、パシリ根性。

こいつ本気だ!

本気で俺を陥れようとしている。

「まで、落ち着け。そう興奮するな、武蔵小杉よ、子分の件は、ま
あ話しあおうじゃないか。兎に角一旦落ち着くんだ。・・・おちつ
け。」

「君こそ落ち着け。」

動揺する俺に柿山が冷静にツッコむ。

そうだな。俺も動揺している。兎に角冷静にならなくては。
なんとか話し合いでこの状況を打開するんだ。

そのためにも取り敢えず心を落ちつけろ。
まず、水分補給を・・・

「飲んだわね！飲んだからには了承と受け取るわ！！」

言われて初めて自分がブラッシーを飲んでしまっている事実気がついた。

しまった！

俺を動揺させて飲み物を飲ませるとは！

なんて狡猾な罠！！

プレミアムオレンジ（後書き）

用語解説

・川神百代の殺気

てめえ戦うの嫌だつて言つとつたやんけ！なに普通に決闘しとんねん！という怒りからくるもの。

・トトカルチヨ 結果は物言いの嵐

トトカルチヨには単純な勝ち負け以外に、決まり手や試合時間などを含んだ複雑な賭け方もあったため、「選手自ら場外」という特殊な状況に、かなりの人数が胴元に詰め寄った。

・スターファイヤー。

アメコミの主人公で、最近では妙に幼くなった上でティーンタイタンズに所属して・・・の人とは別。

某脱出マジシャンの掛け声。

・ヤンス！

主人公の「子分」に対する変なイメージ。

普通に考えたらありえないのだが、この世界では少数ながら実際にこんなことを言う子分が存在して。たまたまそれを見た主人公はコレが子分のスタンダードなんだと思い込んでしまっている。

・おれを……………

チヨコクツキーのこと。中華麺な訳。

・なんとも斬新なフリーズだ。耳が腐った。
もともと腐ってる。

・ブラッシー

某オレンジジュースのこと。ある意味有名だが、現時点で超マイナーなコレを頼む辺り、「チェリオ買ってこい」以上に難易度が高い。何気に主人公は外道。ただ話の舞台である2008〜2009年はペットボトル版が限定発売されていたので、コンビニ等で買えた・・・はず。わざわざ瓶入りブラッシーを買ってきた武蔵小杉はただならぬパシリの才能があるのかもしれない。

・焼きそばパン

パシリの伝統。ジュースだけでは口寂しいと思い、この定番アイテムもしっかり買ってくる辺り、素晴らしいパシリの能力である。たぶん社会に出たら出世まちがいなし。

・飲んだわね！

恐喝じみた物言い。一直線で目的のためにあらゆる手段をとろうとする武蔵小杉。子分になるためなら未来の親分の恐喝だって何のその。短絡的な性格は改まっていない。

・なんて狡猾な・・・

お前がパシらせておいて・・・。

ちなみにシツカリと振ってから飲んでいる。動揺してたからというよりは、染み付いている食いしん坊属性が原因。

4月24日 日常（前書き）

更新遅れました。

一応今回の話で折り返しの予定です・・・。

といってもこの先の話の長さは未定。

あっさり終わる可能性もあれば、だらだらと続く可能性も・・・。

4月24日 日常

俺は武蔵小杉が苦手だ。

好戦的で、独善的、傲慢で、散漫。

かつ、俺が彼女を殴ったという事実が俺に罪悪感を植えつけている。

しかし、嫌いなわけではない。

たしかに自信家だ。

色々と鼻につくことも言う。

しかし、それ相応に努力もしている。

精神集中の訓練と弓道をしたり。

毎日のように特訓をしていたり。

かと言って勉学を疎かにすることもない。

彼女はたしかに才能豊かだが、天才という程ではない。

彼女の今の實力は、その才能だけではなく努力によって身につけたものなのだ。

つまり彼女は結構な頑張り屋さんなんだ。

だから嫌いになることができない。

しかし、だからと言って・・・。

「プレミアムな朝だわ！親分！」

コレは無い。

「何で居るの？」

朝、学校に行こうと扉を開けたら武蔵小杉が目の前に。
ス・・・ストーカーなのか？

「子分たるもの、常に親分の後ろに付いて行くもの。オハヨウから
オヤスミまで、一日をサポートする武蔵小杉をどうかよろしく！」

そんなサポートは要らない。

某OSの電話サポート並に要らない。

「帰れ！」

「だが断るわ！」

何で断るの？

子分じゃないの？何普通に親分に逆らってるの？

「親分命令でどっか行け！」

「子分権限でプレミアムに付いていくわ！揺りかごから墓場まで！」
一生レベルになってるじゃないか。何処の労働党だ。お前は。

そんな、玄関前で繰り広げられるそんなやり取りに、聞き覚えの
ある声が乱入してきた。

「やれやれ、こんなことでは無いかと来てみれば、君たち遅刻する
ぞ。」

「うお！柿山。いつの間に！」

「！！プレミアムな私が気配に気づかなかった！？」

本当にコイツは突然現れるな。

「面倒事の嫌いな君としては不本意だろうが、むしろこんな住宅街で騒ぐほうが面倒だ、ココは素直に皆で登校すれば良い。」

呆れたようにそう云う柿山。

「あら、意外と話がわかるじゃない。」

柿山の意外な援護に武蔵小杉も上機嫌。

たしかに柿山の言うとおりだ。

俺は渋々そのまま武蔵小杉を連れて通学をする。

全速力で走って武蔵小杉を撒くこともできるが、そこまでする必要性は感じなかった。

武蔵小杉という子分を得ることで完全に潰れると思われた俺の生活だが。

実際には思ったほどの影響はなかった。

親分、親分と武蔵小杉はうるさいが、普通に考えて俺と武蔵小杉は同級生、その二人の関係が本当に親分子分であるなんて周りも流石に信じないわけで、俺達の関係は仲の良い友人として捉えられている。

「親分」は俺のあだ名と言っわけだ。

周りからは俺と武蔵小杉はあだ名で呼び合うフランクな関係と認識されつつある。

まあ、当然といえば当然だ。

1学年では最強の武蔵小杉の親分がこんな凡人なんて誰も信じな

い。

俺自身、もしかして武蔵小杉の子分宣言は、俺達と友達になりた
いがための方便なんじゃないかと思いついて始めている。

たしかに、少しは注目された。

なにせ武蔵小杉はそこそこに有名だ。

一年をほぼ制覇。さらに勉強、家柄、ルックスもそれぞれかなり
のレベル。

そんな人間と仲よさ気にしてればすこしばかり注目はされるが・
・。

少なくとも、今通過中のこの変態橋で騒いでいるバトルジャンキ
ーや人力車登校してる輩に比べれば、全くと言っていいほどに注目
されていないはずだ。

そう、まだ俺の平凡は大きくは崩れていないのである。

．．．少なくとも現時点ではだが。

「わーい。」

突然のそんな声と背中に伝わる柔らかな感触で俺は現実に戻され
た。

この素晴らしく魅力的ながら、俺を狂わせようとする危険な感触
は！！

「小雪先輩！」

「あ．．先輩、おはよう御座います．．．．先日はどうも。」

「む！貴方は2・SのUMA！榊原小雪先輩。」

三者三様の反応。

しかし先輩！いつもそのボディータックは色々な意味で困ります。

「よう。今日は集団で登校かい？」

「仲がよろしいんですね。」

そしてその後ろには冬馬先輩とハ・・・準先輩。

「この前すごかったんだよ！スバってなって、何か目からビーって光が出て。」

突然そんなことを言う小雪先輩。本当に脈絡の無いことを言うなあ。

「ねえ、もう一回ビーム出してよ。」

「それは私もみたいですなあ。」

「まあ、だせるんなら見てみたいのは確かだな。」

そんな要求をしてくる愛すべき先輩方に対して俺は・・・

「全力でお断りします！」

小雪先輩たとえ貴方の頼みでも、絶対にできないことは有るんです！

そして冬馬先輩、準先輩。すいませんが一生無理です。

先輩たちの見たいと言う反応とは対照的に、柿山は沈黙を貫いていた。

有難う、柿山。お前の気遣いはとても嬉しいよ。

それに比べて・・・

「親分、私も！プレミアムに私も見たい！。見たいわ！見たすぎるわ！」

武蔵よ。お前は本当にウザイなあ。

「断固断る！」

「いいじゃない少しくらい！減るものじゃないし、ビームの一つや二つプレミアムに発射よ！」

だから何でお前は子分のくせに親分に命令をしてくるんだよ！

「むしろ子分であるならばビームを見る権利くらい・・・」「ええい！瓶入りドクターペッパー買ってこい！！」

「プレミアムに了解だわ！！」

武蔵はそのまま風のように何処かに走っていった。

しかし何故かアイツはパシリ命令は普通に聞くんだよな。俺が言っという何だがドクターペッパー瓶入りとか、今時手に入るのか？

「僕も。」

「こらこら、お嬢ちゃんは今から学校でしょう。」

何故か武蔵に付いて行こうとする小雪先輩とそれを止める準先輩。

「しかし、彼女も健気ですねえ。一直線に買い物に行く。青春ですね、こう言うの。」

「そ・・・そうすか？」

そしてなにやら妙な感想を言う冬馬先輩。

しかし何だな、この人達は俺と武蔵小杉の關係に一切の疑問を感じないどころか、武蔵の突然のパシリ行動にも全く動揺していない。

今の俺と武蔵の関係は、今の人生において異常なものではないの
だろうか。

まあ、周りからそんなに奇異の目で見られていないのであれば、今の状況でもそんなに悪くないのかもしれない。

武蔵小杉という追加要素こそ増えたが、比較的平穏な通学風景だ。

[illegible]

•
•
•
•
•
•
•
•

•
•
•
•
•
•

「今より第一グラウンドで、決闘が行われます・・」

ホームルームが終わる頃。そんなアナウンスがあつた。朝っぱらからお盛んだな、この学園は。

「ほう、決闘か、今日二年に来る予定の転入生かな。」

「かもな、取り敢えず行くか。」

そうやって俺と柿山はグラウンドに向かう。

本来なら、決闘なんて見る気はない。

何が楽しくて殴り合いなんて見なきゃいけないんだ。

しかし、俺はこの学園で行われる決闘は殆ど欠かさず見に来ている。

その理由は二つほどあつて。一つは料理部の朝飯用の弁当が目当てだ。こつ言うイベント時しか販売されないからな。

そしてもう一つが・・・

『ティアイだ！ティアイが来たぞ！。』

『し！静かに、ティアイがしゃべるぞ？』

「柿山、さっきからティアイ、ティアイって周りが言ってるけれど、誰のことなんだ？」

そういえば最近決闘を見に来るたびに耳にしている気がする。

「さあな、おおかた賭けが得意な小者なんだろ？そんなことよりど
う思う。」

賭けが得意なのに小者って何か変じゃね？まあいいや。

「そうだなあ・・・」

そう言いながら俺はグラウンドの中心にいる二人を凝視する。

中心には見覚えのある赤髪の人、即ち「化物の妹」と初めて見る
金髪の二人がいる。

今回の決闘の対戦者二人組だ。

赤髪の人には色々と思うことがあるけれど、今はそんなことは無
視して、冷静に判断をする。

「・・・7対3で金髪有利。赤髪の人在必ず負けるとは言わない
が、まあ今回は金髪だな。しばらく勝負が拮抗して・・・どっちか
が大技決めて終わりかな。」

「ふむ、では賭けてくるとしよう。」

そう言って柿山は胴元の居る方に歩いて行った。

そう、コレがもう一つの目的。
トトカルチョだ。

相手の戦闘力を瞬時に知ることができる「小者レーダ」完備の俺には決闘の結果をかなりの確率で当てることができる。

このトトカルチョのおかげで俺の昼飯は賄われているのだ。

ザワ・・・ザワ・・・
ザワ・・・ザワ・・・ザワ。

『ティアイ予想がでたぞ！』

『金髪だ！金髪有利！』

『まだ間に合う、レートが変わる前に賭けるんだ！』

しかしさっきから周りがうるさい。

決闘のギャラリーは大抵騒がしいのだが、俺の周りだけ特に煩く感じるのは気のせいだろうか。しかも俺が予想を立てた瞬間に煩くなっているような気がする。

「買ってきたぞ。」

そう言いながら柿山が戻ってくる。

「ご苦労さん・・・お、始まった。」

そして結構な音を出しながら二人の戦いが始まった。

激しい音を立てながら武器をぶつけ合う二人。

なかなか見ごたえのある試合に、ギャラリーも興奮気味だ。

しかし・・・コレはまあ・・・

「・・・帰る。」

「見ていけないのか？君の予想に反してあの一子先輩の方が押しているぞ？」

そんなことを言う柿山。

「あのねえ、俺は結構あの赤髪の人・・・一子先輩？まあ、その一子先輩のこと尊敬してるんだよ？何が楽しくてその尊敬する人が負けるところを見なくちゃいけないんだよ。」

「やれやれ」と言った表情の柿山を残して俺はグラウンドから教室に戻る。

すまん。柿山。

嘘だ。

たしかに赤髪の人が負けるところを見たくないというのも理由なんだが、俺があの場合を離れた本当の理由は。

試合中の金髪のスカートの中身が見えまくったからだ。

素早い動きで常人には見えなかっただろう。

しかしチートな動体視力を持ってしまっている俺には見えてしまっただけ・・・

正直嬉しいご褒美だけど。大衆の真ん中で俺だけ少し前屈みというのも、ちょっと恥ずかしすぎる。

「「「「「ワアアアアア!!」」」」」

校舎に入る寸前で大きな歓声が聞こえた。
たぶん勝負が決まったんだろう。

『さすがテイアイだ!歪みねえな!』

『しかも勝負の途中で帰ったぞ・・・、もう勝ちを疑ってな
かった。』

『さすが学園一の賭博王だ。』

どこかから変な声が聞こえたが・・・ほんと、テイアイって誰の
ことだろう。

・・・
・・・
・・・

時間は流れ午後。

今日は平凡な一日だった。

まあ、決闘があつたり、その結果として食券を大量入手できたり、
おかげで昼飯がいつもより豪華になったりと。微妙に色んなことは
起きてはいるが、それはイレギュラーというほどのものではなく。
少なくともこの学園では平凡の範疇だ。

特に異常事態は起きることはなく、今もこうして午後の授業を肅
々と聞いている。

川神百代との試合以来、柿山の悪戯の頻度が減った。柿山なりに、俺に気を使ってくれてるのだろう。武蔵という非凡要素が追加されたことに対するフォローのつもりなのかもしれない。

おかげで、授業中に叫んだりすることもないし、変に注目されることもない。

一時は不良疑惑すら立ち始めていた俺だが、このまま行けば、ただの平凡な一生徒と認識は改められることだろう。

このまま最後まで静かに授業を・・・

ガラー！！

「おやぶん！買ってきたわ！」

「マジかよ！今かよ！」

突然B組の入り口から武蔵小杉が現れて瓶入りドクターペッパー持ってきた。

どこに売ってたんだ？

というか、時間考えようよ！

いま授業中！あと君はS組！

「君たち、邪魔なので外に・・・」

そして教師の命令により教室から追放される俺と武蔵。

結局いつも通りの一日だった。

4月24日 日常（後書き）

用語解説

・某OSの電話サポート
満足な回答を得られたためしなし。SE泣かせ。

・揺りかごから墓場まで
武蔵小杉は本気だ。
ちなみに「師匠」では無く「親分」なのは、彼女にはすでに師匠がいるし、主人公に対して武術を習いたいという気持ちは無いから生き様に尊敬を覚えたという理由で「弟子」では無く、「子分」になろうと思った。

・2-SのUMA！
小雪女史のこと。
彼女は良くも悪くも冬馬と準に依存し、その次点で主人公に懐いている。そして「なぜか」柿山にもそれなりに好意的である。それ以外の人間には本質的に懐かない為に一部の人間にUMA扱いされている。

・瓶入りドクターペッパー
チェリーコークに近い薬っぽい味わいの炭酸飲料。かなりメジャーながら全国展開はされていないので一部地域では手に入りにくい。関東では比較的容易に手に入る。
ただ、瓶入りは。2009年には・・・もう無いな。デットストックが一部駄菓子屋にあるかもしれないという程度。
ミスターピブと言わなかったのが主人公の慈悲。

・ミスターピブ

某社がドクターペッパーの対抗馬として出した飲み物。流行らずに消えた。

・金髪

主人公は名前を覚えるのが苦手なのか、身体的特徴やオリジナルな愛称で人を判別する。

・小者レーダ

戦闘力を一瞬で判断できるのは主人公のチート能力の一つ。小者であるかは関係ない。

・ティアイ

主人公と柿山コンビのこと。戦闘力を瞬時に見抜き決闘トトカルチヨを高確率で当てる主人公と、嘘と噂の本質を見破り、知力系の賭け事で負けなしの柿山。この最強賭博コンビのことを人は敬意と恐怖を交えて「ティアイ」と呼ぶ。

・少し前屈み

思春期の男子なんです。ふつうのコトです。

・柿山の悪戯も頻度が減った

主人公の涙を見て、何か思うところがあつたのかもしれない。あるいはそれ以外の思惑が有るのかもしれない。

・結局いつも通りの一日だった。

平凡を目指している主人公だが、その目指す平凡は「現世の平凡」なのか「前世の平凡」なのか。実は主人公自身理解していない。故に妙に支離滅裂である。

実は彼は「平凡」を言い訳に、苦手なものから逃げているだけ。

彼は何か起きるたびに自分に都合の良い「平凡」を採用する。

彼は小者だから、自分に対して都合のいい理由を付けて自分を納得させようとしている。それも異常な程に。

4月30日 闇夜の正義（前書き）

番外編に近い話です。

4月30日 闇夜の正義

昼休み。

午後のアンニユイな時間。

食後の倦怠感がからだを支配して、動くのが億劫になる。

そうになるとやることといったら一つ。

そう、くだらない会話だ。

と言つても、友人の少ない俺が会話する相手なんてそれこそ一人しか居なくて・・・

まあ、柿山なんだが。

「というわけで柿山よ、世は退屈じゃ、何か面白いことを申せ。」

「最近この学校のガラスが割られたらしいぞ。」

俺の突然のむちゃぶりに表情ひとつ変えることなく柿山はそう言った。

「チャレンジャーがいたもんだ。」

化物ぞろいのこの学園のガラスを割るとか。

バツゲームにしてもリスクすぎるだろ。

「この学校以外にも、界隈の各学校が被害にあっているらしくてな、我らが母校の小学校も既に割られたらしい。」

「ほう、まあよく聞く話ではあるが、そこまで大がかりなものも珍し

いな。」

「まあな、どんな時代にどんな場所にも馬鹿はいるということだ。」

柿山の言うとおりである。

前世も今世も、そういった人間の存在は共通している。

「まあ、俺らには関係の無い話ではあるな。」
そういったことは警察の管轄だしな。

「一応私達の学校が被害にあっているんだが。」
呆れたように言う柿山。

言いたいことは解らないでもない。
母校が被害にあっているというのなら少しでも怒りを感じてし
かるべきなんだろう。

しかし、俺にどうしろと言った？

たしかに俺のパワーを以てすれば犯人を取り押さえる事は出来る
かもしれない。

しかしどうやってその犯人を探す？
名探偵よろしく聞き込み調査でもするか？
ダウジングで犯人を割り出す？

腕っ節が強いという理由で犯人探しをするのであれば、世界中の
格闘家は正義の味方にならなきゃいけない。

どんなに力があるうと、俺はやはり凡人なのだ。

「プレミアムに私参上!!」

突然教室の扉が開けられ武蔵小杉が入ってきた。

「また五月蠅いのが・・・」

「彼女のテンションはどうにもついて行けないね。まあ、さほど悪い子ではないんだろうが。」

悪かろうと悪くなかろうと面倒くさい奴なのは間違いない。

俺としても友人が増えることが悪いとは思わないのだが・・・。
いかんせん武蔵は目立ちすぎるタイプなので、正直関わりたくないという気持ちも相応にして有る。

異常な友好関係は時に平穩を壊すのだ。

「親分！聞いた？ガラス割りの話！」

「やあ、ちょうどその話をしていたところだよ。はい。」
そう言って武蔵にお茶を差し出す柿山。

おもいつきり性格が合わないと思っていた武蔵と柿山だが、
意外なことにそんなに仲が悪くない。

武蔵小杉が妙にしおらしくなったことも原因だが、やはり立場が
変われば関係も変わっていくのだろう。

「ありがと。で、そのガラス割り魔だけれど何でも警備員も取り逃
がしてしまったらしいわ。かくなる上は私達で犯人を・・・」

だから何でお前はそう無駄に活動的なんだ。

「そう言うのは基本スルーしようぜ、そういったことを解決するためにこの世には警察が存在しているわけだし。中途半端に俺らがかき回せばかえってそういう人のジャマになるだろ？」

「連続ガラス割り犯を捕まえれば、プレミアムに名前が売れるわ。しかも2、3年の猛者を押さえて一年がそれを成し遂げる。之はプレミアムね。」

「まあ、たしかに話題性は有るだろうね。」

「そうよ！今こそ私達の名前をこの学園に轟かせる時だわ！」

「聞こうぜ俺の話。」
何この疎外感。

「とはいえ、警察やら学校やらが既に対策は打っているだろう。それを出しぬいて私たちが犯人を見つけるのは難しいぞ。」

そうだよ。

柿山今良いこと言った。

俺達には無理なの。俺達は探偵でも警察でも霊能者でも無いんだから。

「ふふふ！そこでプレミアムな推理が火を吹くわ！」

自信満々にそう語る武蔵。

吹いたら駄目だろ。どんな推理だよ。

「まずこの地図を見なさい！」

そう言っただけで彼女は川神の広域地図を取り出した。

「この地図の被害箇所を出してそれらを順番に線で結ぶと……。」

「ああ、あの推理漫画でありがちな。」

「マジであれを実行する奴を初めて見た。」

よく、推理漫画や推理ドラマでやる犯罪の発生箇所を線で結ぶ奴だ。大抵その発生場所の中心地に犯人が居るとい話なんだが。もう使い古されて子供だって驚かない推理だ。

「プレミアムに円になるわ。」

「ほう。」

「うわ、本当だ。」

武蔵の言うとおり地図には円が描かれていた。

普通、こう言うの犯人も気にして意図的に法則性のない対象を選ぶものじゃないか？

いや、ガラスを割るとか頭悪いこと考える奴だから、そこまで頭が回らないのか。

しかし、正円とは言わないまでも結構綺麗に円になるもんなんだな。

「そうなれば、この中心こそが……。」

「・・・君んちだな。」

「・・・え？」

「・・・ん。」

そう、その中心こそが、正しく俺の下宿先であるのだ。何で？

今俺達は川神学園の前にいる。

そう、犯人退治である。

普通だったら絶対にやらない。
やろうという発想すら出ない。

そもそも犯人なんか捕まえた日には目立ってしまっただろう。

しかし、このままでは疑われるのは俺だ。
冤罪で俺が犯人になってしまった日には、もう目立つとかそういうレベルじゃなく俺の人生はぶち壊れる。
それだけは阻止しなくては。

うまく犯人を捕まえられたら、その手柄は武蔵小杉にでも押し付けてしまえばいい。
兎に角犯人を捕まえて俺に冤罪が及ぶことを阻止しなくてはいい。
ない。

お供にはやる気満々武蔵と、なぜか付いてきた柿山。

「気配察知してみるが・・・あれ？既に学校に誰か居る。」
取り敢えず周りに怪しいやつが居ないかと気配探知を試みれば、
思いの外沢山の反応を感じる。
「宿直の教師かしら？」

「いや・・・複数いる、それに一部は気配を殺しているな・・・」

これは。」

この覚えのある気は！

「川神百代だ！あいつが校内に居る。」

「何ですって！」

「ふむ。」

なんということだ。

気配察知は得意ではないが之は間違いない川神百代の気だ。

川神百代。

彼女が。

彼女が犯人だったとは！！

「まさか戦えない欲求不満からこんなことに手を出すとは……。」

「プレミアムに人格を疑うわ……。」

「……その発想が出てくる君らすごいな。」

何故か呆れた様子の柿山。

「俺に罪をなすりつける為にこんなことを……くそうなんて小さい奴だ。」

たしかに俺はアイツに恨まれるようなことはしたが、このやり方はないんじゃないか？

「川神百代の名前も地に落ちたものね!!」
武蔵も予想外の川神百代の陰謀に立腹中だ。

「どうする、ココは見て見ぬふりをして、後日教師に教えるというのが俺の考えだが。」

「でも、証拠を掴まないといい逃れられて終わりだわ!」

なるほど、武蔵の言うとおりだ。相手も川神学園の生徒であるのだから、校舎に居たところで不自然ではない。

「・・・面白いので突っ込まないことにするよ。」

突っ込むってなんだよ。柿山、先刻からなんだか言動が意味不明だぞ。

「では迎え撃つか、たしかにコレを阻止しないと疑われるのは俺だ・
・しかし正直川神百代に再度勝つ自信が無い。というか戦えば大騒ぎになる、人が集まって来る可能性もある、その瞬間に俺に濡れ衣を着せられたらおしまいだ。」

「うぐぐ、なんて狡猾な奴らなのかしら!」

川神百代恐るべし。

「なんだろう、バカが一人増えるところも増長するものなのか・・。」

柿山先刻からうるさい。

さて、どうするべきか。

俺が思案をしていると、なにやら校舎の中が騒がしくなった。
「騒がしい?」

「何かあったのか？」

「待て待て、気配を・・・あれ？何かモメてる？いや、戦闘中か？」
耳を澄ませば武器が使われる音も聞こえる。

「仲間割れ？」

普通に考えたら武蔵の言うとおり仲間割れなんだろうが、そんな
雰囲気とも違うんだよなあ。

「そろそろ飽きてきたから言うが、川神百代らも犯人退治のために
学園に残っていたんじゃないか？」

柿山の衝撃発言。

「え？」

「は？」

そ・・・

その発想はなかった。

が、たしかに考えて見ればそちらのほうが自然だ。

川神百代のキャラクターからして、どちらかというと悪事に手を
染めるとかより、正義の味方ゴツコをしている方がそれっぽい。

「ほら、一人逃げてきた。」

柿山がそう言って校庭を指さす。

彼女の言うとおり、背の低い子供らしい奴が校舎から走って出て
きた。

後ろを気にしながら校門に向かって走っている。

なるほど、あの様子からして何かから逃げているようだ。
柿山の言つとおり、川神百代は正義の味方だと考えたほうが良さ
そうだ。

あ、犯人はどうやら校門の前に止めてある車に向かつてるようだ。

正直、放って置いたほうが良い。

下手に関わるのもめんどろだし、アイツに関われば川神百代とも
関わることになる、それはもっと面倒だ。

別にこの場で逃がしても、遠からず捕まるだろう。

校舎の中の気配からして、逃走犯以外の犯人は捕まったようだ。
そいつらが口を割ればすぐにアイツの所在地もバレるんだろう。

しかし、逃せば危険でもある。

逃走犯は見た感じ未成年のようだし、そうなれば免許なんて持つ
てようはずもない。

無免許の子どもが下手に焦った運転をする。それはかなり危険な
ことで、事故でも起こせされれば、アイツを含め犠牲者が出る可能
性もある。

だから俺は飛び出した。

俺は小者だ、凡人だ、厄介ことは大嫌いだ。
でもな、そんな俺でも男の子だ。

ほんの少し。

ほんの少しだけ正義の味方に憧れたっていいだろ？

深夜でひと目も無いんだ。

あるいは川神百代を犯人だと疑ってしまった罪悪感がそうさせたのかもしれない。深夜のテンションかも。

それとも俺は柿山からガラス割り魔の話を聞いた時からこうしたいと思っていたのかもしれない。

何も出来ない自分に言い訳をしていただけで、本当は犯人を捕まえたいと思っていたのかも。

まあ、どんな理由にしろ柄じゃあ無いのは間違いない。ことが終わったら速攻で逃げよう。

犯人が車に辿り着くより早く。

俺は車の前に立ちほだかり、ちゃぶ台を返すように車を裏返していた。

逃走経路を潰したわけだ。

犯人捕縛に対してこの行動の貢献度なんて皆無に等しい。

俺がこんな事しなくても犯人は最終的に捕まったんだから。

だから俺のやったことは、凡人にふさわしい囁かな貢献だ。

コレくらいのはしたって良いはずだ。

犯人は乗るべき車が突然ひっくり返ったことに驚いて、校庭の真ん中で立ち尽くしている。

もう少ししたら校舎から誰か出てきて奴を拘束するんだろう。

それまでには逃げないとな。

殆ど気はだしてないから俺だとは気付かれていないだろうが、

目で見られればアウトだ。

ただ、その前に。

校門脇には啞然とした表情でこっちを見る武蔵と、呆れた様子でこちらを見る柿山。

俺はそんな二人に向かって、かつこ良くサムズアップをする。

逃げる前にコレくらいのカッコつけは許されるだろ？

直後。

ブス！！！！

何故か矢が頭にぶつかった。

柄じゃないってツッコミにしては、強烈すぎやしないか。

4月30日 闇夜の正義（後書き）

用語解説

・意外なことにそんなに仲が悪くない
柿山は気がついてしまったのだ。戦闘関係以外では、武蔵小杉と主人公が同じような思考回路だということに。
そしたらなんか、武蔵小杉の事があんまり嫌いじゃなくなっていた。

というか、武蔵小杉はプライドが低ければ結構いい奴。

・君んちだな。
完全な偶然。

そもそも犯人は学校をターゲットにしているので川神の各学校を順番に回っているだけ。

たまたまそのコースが円に近く、主人公の家がその中心にあったというだけ。

・やってない・・・よな。
寝ているときの自分は客観的に見る事ができないので不安になる。

・彼女が犯人だったとは！
武蔵小杉と主人公は意外と良いコンビ。ただお互いが暴走しあつてとんでもない方に行きたがる。

被害妄想の誇大妄想をもつ主人公と、兎に角突っ走る武蔵。唯一のストッパーは柿山。

・正義の味方

主人公はガラス割り犯にそれなりに怒りを感じていたようだ。しかし、犯人を見つけないとできない彼は、自分の心に言い訳をしてその怒りを感じないようにしていた。

別に正義の怒りというわけではなく、母校のガラスを割られたという私怨から来る怒りだった。

・ブス！！！！

何処からとも無く矢が飛んできた。

どうやら車のタイヤを狙っていたようだ。

主人公は動体視力や防御力は最高だが、戦闘慣れしていないので殺気の無い遠距離からの攻撃はあっさりと食らう。

タイヤを貫通するレベルの矢なので、主人公でも痛い。

5月1日 緑の液体の汚染力

最近思っていることがある。

自身が暴力的になった。

川神百代との試合がその原因だろう。

あの時俺は戦うことを楽しんでしまった。

たしかに俺の中には元々戦いたいという欲求があった。

これは否定しない。

どんなに力を使うのが怖いとはいえ、力があるからには使いたい
と思ってしまう。

しかしそれは日常を壊してまで、発散したい欲求ではなかった。
人を傷つけるリスクを冒してまで、使うべき力ではないと思っ
ていた。

いや、今でも思っている。

ところが俺は少しずつ力を使い始めている。

最大の理由は現状にある。

俺は川神百代との試合をして、その後もすこしばかり力を小出し
にしていた。

しかし、日常は壊れていない。

たしかに川神百代に嫌われて武蔵小杉と言う友人が増えた。
でも、川神百代は俺に手出しができないし、友人が増えたことは
むしろ良いことだ。

力を使っても日常に変化が無いのではと、思い始めている。
もちろん理性では力を抑えろと行っているのだが、心の何処かで
「少しぐらい良いじゃないか」と思ってしまう。

コレがいけない。

少しくらい。

ちよつとだけ。

別に大丈夫。

そういった油断が命取りなのだ。

「少し」がエスカレートしていき、いずれ取り返しの付かない状
況になりかねない。

自覚が有るうちに直しておかないと。

「そんなわけで俺は今以上にお淑やかに生きる。静かなること乙女
のごとし！」

「・・・病院行くか？」

失礼なことを言う柿山。

コノヤロウ。プリンセスアキレス腱固めするぞ。

「いやな、思うに自分が最近俺暴力的になってきたような気がする

「からな、今後控えようということだ。」

「・・・まあ、昨夜も乗用車をひっくり返していたしな。」

「ああ、まさか矢のツツコミが来るとは。思えばアレは俺に考えを改めさせるための天からのメッセージだったのかもしれない。」

「一般人が即死するレベルのメッセージというのも凄いな。」

あの後、俺達はそそくさとあの場から逃げた。

俺も柿山も気配を消していたから気付かれなかったろうが、矢を射った奴がいた筈なので目視されたかもしれない。

まあ、顔までは見られていなかったと思う。

見られたとしても、武蔵に無理矢理連れまわされたとしても言い訳すれば良い。面倒くさいだけでそれ以上の実害はないだろう。

しかし思い返してもアレは余計な事だった。

俺があんな事しなければあの矢は車のタイヤ辺りに刺さっていただろう。俺は犯人捕縛の邪魔してしまったようなものだ。

柄でもない事はするなという教訓だな。

「というわけで、できるだけお淑やかに生活する。寝る前に歯も磨く、酒もタバコも薬もやらない、無駄に水も飲まない。午前0時以降は食事をしない。食べ過ぎない。」

「それだけ食べながら言われてもなあ・・・説得力が皆無だ。ココで流れが完全にストップしているぞ。堤防か？」

「そんなことはない、幾らかは流れているぞ？」

「甘味だけな・・・。」

そう、いま俺達は回転寿司をたべている。

寄り道にしては、あまり学生が選ぶチョイスではないけれど、俺は結構回転寿司を利用する。

食べただけ食べられるし、料理を待つことなく食べられるからだ。

「食事時でなくて良かったな。夕食時にコレだと暴動に発展するぞ。」

ありえない濃度の日本茶を啜りながら柿山がそういった。

俺たちが回転寿司を選んだの理由の一つにはそれもある。

ファーストフード店やファミリーレストランなどは今頃学生でこった返しているだろうが、回転寿司は食事に来る人間がほとんどなので、今のような学校帰りのオヤツ時はかなり空いている。

他人の耳を気にすること無く話ができるのだ。

「で・・・今年のゴールデンウィークはどうする？」

そう、今日はその予定を決めるために寄り道をしてるんだ。来る大型連休をどう過ごすか。

その作戦会議である。

「どうするったって、去年と同じじゃ嫌なのか？」

「・・・やだよ！お前プロデュースの旅は正直怖すぎる。」
正直トラウマだぞ。

「何を言うか、楽しかったじゃないか。」

「何が楽しくてUFOなんぞを見に行かなきゃいけないんだよ。」
しかも他県にまで。

「でも、見たんだから良かったじゃないか。」

「それがなおさら嫌なんだよ！」

オレンジ色の光が目の前に来たときは、地球とおさらばする覚悟をしたぞ。もう二度とあの山には近づかない。

「かと言って一昨年のようなのは、私が嫌だぞ。」

「78時間プラモ作り大会は楽しかったじゃないか。柿山も最後の方は笑ってただろ？」

物凄く楽しそうだったじゃないか。

「アレは寝不足の上に塗料の溶剤でラリったからだ。」

ああ、だからヨダレ垂らしてたのか。

「じゃあどうする？正直俺とお前の趣味が一致しないから、どうしたってどっちかが不満を感じるぞ？」

「ふむっ。」

正直、ゴールデンウィークにコイツと一緒にいる理由はない。

趣味が全く違うので、大抵どっちかに不満が出る。

お互い一人で好き勝手に動いたほうが楽しいかもしれない。

かもしれないのだが、何故かコイツとは毎年一緒にゴールデンウィークを過ごしている。

何か儀式化されている。

お互い友達がいなくせに休みを寂しく一人で過ごすのが嫌なん

だろう。

だから気に入らなかるうが二人でつるんでいるんだ。

「私が前々から行きたいと思っていた東京の寄生虫博物館はどうだろう？」

「断固断る！」

おま、今の一言でイカと鯖が食えなくなっただぞ！

「東京にするなら、秋葉原のジャンク品めぐり旅にしようぜ。」
「断る。」

何でだよ。あんなに楽しいのに。

そうなると他には・・・

「山籠りだわ！」

・
・
・

「プリンセス喉輪！」

「うご！」

「また地味な技を・・・」

武蔵！何処から湧きでた！

「けほ・・・ふふ、プレミアムに親分あるところに子分がある、まこと栄光の影に数知れぬ子分の姿があった。命をかけて歴史をつ

くつた影の子分たち。だが人よ名を問うなかれ・・・。」
武蔵小杉だろ？

「私らが言うのも何だが、何でまた回転寿司屋に？あまり女学生が学校帰りぬ立ち寄る場所ではないよ？」

柿山がお茶を武蔵に差し出しながら聞いた。

「ふふ、親分の姿が見えないから、コレは秘密特訓かしらと思って付けてきてみれば、まさかゴールデンウィークの打ち合わせとは。」

付けてきてたのかよ！

もう子分というより完全にストーカーだぞ！

「親分！今年のゴールデンウィークは山籠りよ！修行だわ。」

うぜえ。

まじうぜえ。

「お前は黙ってるよ。山籠りとか今時流行んねーよ。」

「そんなことはないわ、これからのトレンドよ。」

「ふむ、そんなモノだろうか。」

そんなワケねーだろ。例えそうだとしても、だから山籠りに行くかゝとはならねーよ。

「取り敢えずお前は口をとじろ。」

「皆で行きましょうよ！修行！きつとプレミアムに楽しいわ。」

こいつ、完全に俺を無視してやがる。

駄目だ、俺の力じゃあコイツを黙らせることはできない。

柿山！お前から何か言ってやれ。

「まあ、皆でキャンプというのも悪い話じゃあ無いな。」

柿山あ。

いつも俺を救ってくれたお前は何処に・・・。

アウェイか。

俺完全にアウェイか・・・。

「ふふ、神奈川とか静岡にプレミアムな山があるのよ・・・。」

「ふむ、チャネリングシーズンでもあることだし、人気のない山は魅力的だ。」

駄目だ。女二人で話が盛り上がってきたしまった。話してる内容は完全に女っぽくないけれど。

もう、こうなってしまうと男の入り込む余地はない。

いや、俺も別に山籠りがそんなに嫌だというわけじゃあない。

山籠りはアレだがキャンプだと考えるならば結構アリだと思う。

しかし、なんだか武蔵の提案に乗るのが癪なんだ。

俺の意見を完全無視して、自分の我を通すその姿勢が気に入らない。

コノヤロウ、何時かギャフンと言わせたいが・・・。

やっぱり無理だな。

やはり脆弱な俺には無理な話だ。僕にはとてもできない。
というか、大抵の奴は無理だ。

何というか、目の前の灰色髪は我が道をロードローラーで作ってしまうタイプだ。俺の言う事全く聞かないし。

コイツのテンションというか傍若無人ぶりに冷水をかけられそうな奴の想像がつかない。

誰でも良いからコイツを凹ませて……

「グベー!!」

突然そんな叫び声をあげながら武蔵が悶え始めた。

「どうした!？」

心配そうに武蔵を覗き込む柿山。

苦しみ悶える武蔵小杉。

舞い散る緑の液体。

湯呑みから溢れる同じ色の液体。

どうしたもこうしたも……

どう見ても、お前の差し出した超濃度緑茶が原因だろ。

5月1日 緑の液体の汚染力（後書き）

- ・プリンセスアキレス腱固

相手のアキレス腱部分を両腕でロックして絞めつける技

- ・無駄に水も飲まない。午前0時以降は食事をしない。
増殖とか変身とかしない為。

- ・堤防

主人公以降にはデザート系と卵しか流れない。

- ・UFOを見る

福島の前飯野町まで行った。アダムスキー型のUFOが目前まで来た。そしてUFOはどこかに飛んでいった。主人公、去年の恐怖体験。

その後ピラミッド温泉や原人村など微妙な観光地をまわって帰ってきた。柿山は微妙なスポットをめぐるのが好き。

- ・78時間プラモ作り大会

延々とMS-06Jをつくり続けた。もちろんMG。
よく柿山が付き合ってくれたものだ。

- ・寄生虫博物館

目黒にあるらしい。

- ・イカと鯖

アニーちゃんが寄生してることもある。

とはいえ。一度冷凍すれば基本問題ないので、回転寿司ならば危険は無いはず。気分の問題。

・秋葉原のジャンク品めぐり旅
ジャンクノートPCを大量に買って色々遊ぼうと思っている。擬似的にマルチモニタ化したい。マウス・キーボード共有ソフトを使うが、動画などの再生がネック。VLC等も動画は表示できない。一部ソフトで対応可能のようだがOSがバラバラなので難しい。よって、動画をストリーミング配信して、それを複数のPCで部分再生するという……。・・・・・（中略）。

そりゃあ、柿山も嫌がる。

・プリンセス喉輪
喉に手を押し当て、相手の動きを封じる技。見た目地味。手加減はしている。本気なら首がちぎれてる。

・親分あるところに子分が
忍者気分。

・チャネリング
皆で手をつないで「UFO・UFO来て下さい」とかやるアレ。

・僕にはとてもできない
武蔵小杉はすごいなあ、
武蔵小杉はゴイニングマイウェイだ、
僕にはとてもできない。

・超濃度緑茶
回転寿司のは濃度調節が自分でできるから・・。

5月4日 釣りや川上から流れる物

人気のない山奥。

俺は気配を消す。

まるでココに誰もいないように。

まるで俺という存在がこの世から消えるように。

如何に強かろうが、

如何に技に秀でていようが、

如何に策略家だろうが、

戦いさえしなければ怖くない。

戦わない、コレ最強の兵法である。

すなわち戦わない技、つまり、隠れるという技は最強の技である。
そして隠匿術の基本は自然と一体になることだ。

周りの気配と同化して、自分の気配を消す。

自然界の音に紛れて、自分の音を消す。

それでいて集中力は止めてしまわない。

山の中を流れる川縁に俺は座ったまま集中する。

「親分一体何を・・・？」

近くに居た武蔵が話しかけてきたが、動揺すること無く、自然と一体化したまま答える。

「見て分からののか？」

一目瞭然だと思うが？

「釣り？」

「そうだ。」

自然と一体化し気配を消して魚を怯えさせない。

釣りキチ三等兵と呼ばれた俺のスーパースキルである。

「修行しに来たんじゃなかったの！？」

ちっ！

うるせーな武蔵、魚が逃げるだろ。

「まあ、落ち着け、コレも修行なのだ。」

下手に言い争っても騒がしくなるばかりだから、ココは嘘でも何でもそれらしい理由を付けて武蔵をクールダウンさせよう。

短い付き合いながら、最近コイツの扱い方が分かってきた。

「修行？釣りが？」

「そうだ、釣りというのは自然と人間の戦いでもある。野生の魚というのは気配に敏感だから、気配を消す訓練だ。他にも魚を釣り上げるタイミングで集中力も養われる。」

・・・ような気がする。

「なるほど！」

「精神修行にも良い、心が落ちつく。焦るほどに魚は逃げるからな。」

我ながら適当な事を言っているが、なかなかの説得力である。

「さすが親分、私の思いも寄らない修行方法だわ。」

「その証拠にかつての武将にも釣り愛好家は多かった。アレはただ楽しむだけではなく、己の精神力を鍛えていたのだ。」

「親分は私の知らないことをプレミアムに知ってるのね!」

「ふ、何か解らないことがあれば何でも聞けば良い。」
ただし答えは嘘情報だがな!

「所で親分、聞いても良いかしら?」

「なんだね武蔵小杉。」

さっそく嘘博士こと、この俺に質問か?

「何で私たちドイツ軍に包囲されてるのかしら。」

うむ。

それは俺にもわからない。

いや、なんか近づいてきてるよなーとは思ってたんだ。
思ってたけど・・・まさかドイツ軍とは。

俺の想像の斜め上過ぎる。

「・・・サバゲーよね？」

「サバゲーにしてはそれぞれの戦闘力が高すぎるな。」
小者レーダーがビンビン反応してる。

一般人を超越した超マニアサバゲーマーの可能性も否定できないが。モデルガンにしては銃に重厚感がありすぎるんだよなあ。

「私達何か悪いことしたかしら？」

「釣り禁止とは書かれていなかったよな。」

「親分・・・ど・ど・ど・ど・どうしよう!」

「動揺するな。」

動揺したとしても、それを表に出すな。

良いか？表向きだけでも余裕の表情で居るんだ。

動揺なんてな、

俺のほうがお前よりしてるんだよ!!

お前が慌てると俺まで慌てるだろうが!!

「よし、武蔵、お前でかい声を上げろ、一瞬でいい。」

「親分？何かこの状況を打破する秘策が!!??」

「無論だ。」

ピンチを回避し続けて今日まで生きてきたんだぞ！

この状況だつて打開して見せる。

自信満々の俺の表情を見て、武蔵も真面目な目付きになった。
俺が何をするのかは理解していないようだが、それがこの状況を
打破すると確信したのだろう。

「じゃあいくわよ………プレミアムウウウウウ!!!!」

彼女の大声に、俺達を包囲していた奴らが、
一瞬彼女の方を見る。

ほんとうに一瞬。

周りを包囲している奴らもさすがプロフェッショナル。
それは刹那程度の時間で、すぐさま視線を元に戻すが・・。

その刹那程度の時間さえあれば十分だ。

「「「「!!!!!!」」」」
「居ない!!」

そう、それだけの時間があれば、俺は十分に姿を消すことが出来る。

すまん、武蔵小杉。

作戦D O Eを発動させてもらた。

お前を囿にな!!!!!!

「そ・・・そうか！さては親分はプレミアムに見えない死角からの状況を打開するつもりね？」

ふふ・・・武蔵小杉。

そのツモリは全くない！

なんか良く解らない状況だが・・・自分で解決してくれ！

なに、たぶん大丈夫だ。

ココは日本、流石にドイツ軍が無差別に人を殺すなんてことは無いと思う。

た・・・ぶん。

「おや・・・ぶん？」

武蔵小杉、君の犠牲は決して無駄には・・・って。

「ぬわ！！！」

「親分？」

俺は向かって来た攻撃を必死に避けた。

嘘だろ？気配を完璧に殺した状態で木の枝の死角に隠れていたんだぞ？

川神百代さえ騙せた隠匿術が見破られた！？

「気配は完全に消せていたはず！！！」

「不自然に樹の枝がたわんでいました。私から隠れることは不可能と理解しなさい。」

俺に攻撃してきた真つ赤な髪的女軍人がそう言った。

そうだ、相手は軍人。

武人とはまた違うベクトルの人間だ。

俺の隠匿術は気配や実力を隠す事は得意でも、それ以外、視覚的な物をかくすのは不得意。

一方、相手は軍人、言わば気配を消す人間を目視で探すプロ。普通の人間や格闘家から隠れるには十分な隠匿術だが、プロには通用しないようだ。

これは・・・相性が悪い。

「なにやら気配が無い人間がいたので興味をもちました。」

美人の軍人さんなので、興味を持たれるのは嬉しいことなのだが、なぜだろう。

全く嬉しくない。

「話を聞けば修行をしているとか、私も武術には心得があります。良ければ手合わせをしなさい。」

手合わせ・・・とは言うが、そんなノンケな雰囲気でもないな。武蔵も怯えている。

女軍人からは殺気がビンビン来てるし、銃を持った複数人に囲まれている。

正直俺だって無茶苦茶怖い。

表向きは武術と一緒にしようと言っているが……。

こちらの戦力を探りたいのか？

それとも手合わせとは名ばかりで、素手ゴロで殺しに来る可能性もある。

突然の発砲は流石に問題行動だが、武術の手合わせで俺らが死んだとすればそれは事故だしな。

俺らを殺そうとしているなんてのは、考えすぎのような気もするが……。

そもそもこの状況からしてすでに異常だ。

何がおきても不思議ではない。

そうなれば最悪のケースも想像しておかなくてはいけない。

「隠れるのは無理か……なら！」

「ほう、やる気になりましたか？」

俺は気配を出し、体に力を込める。

ココは本気を出さないと駄目だな。

小者リーダーが変な反応をしている。

目の前の人間はかなりの実力者だ。

しかもプロの軍人。

今まで見てきたどんな戦闘狂とも違う動きをするだろう。

油断はしない。

全力で行く！

俺は右手に力を込めて、それを全力で・・・。

真下に放つ。

「忍法木の葉チラシ!!」

下に向ける衝撃波で腐葉土を飛び散らせ煙幕を作る！

俺の予想外の行動に全員の動きが一瞬止まった。

そしてその隙に！

逃げる！

武蔵小杉の襟首を引っつかんでそのまま走り抜ける。

「ぐえ！」

カエルが潰れたみたいな声を出す武蔵小杉。

隠れるのが無理なら逃げる！

これぞ兵法の基本である。

マツハで逃げればさすがの軍人も追いかけれまい。

ユーロファイターでも持つてくるなら話は別だが・・・。

武蔵がブラックアウトしかかってるけれど。

確か普通の人間も40Gぐらいなら耐えられる筈だよな・・・。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「で・・・迷ったと。」

「そうだ。」

柿山の質問に答える俺。

「もう一度、聞くぞ？川で釣りをしていたら、突然軍隊に襲われた。マツハの速さで逃げたが、その後道に迷い、山に仕掛けられた警報装置が作動してそのまま追っ手から逃げつつココに戻ってきたと。」

「そうだ。」

目的地もなくマツハで走れば、当然迷うわな。

俺は何方に行けば良いのかわからなくなってしまった。

しかもだ山にはいくつかの罾が仕掛けられていた。

無警戒に進むのはやめた方が良いと判断してゆっくりと下山して
いたら、引つかかってないはずなのに、「フシンシャハツケン
ケイビタイセイレベル4！」なんて突然の警報がなるし！

「あのな、魚が釣れなかったのが恥ずかしいのはわかるが、その言
い訳はあんまり過ぎないか？」

「嘘じゃねーよ！ほら！証拠！」

そう言っただ俺は焦げた武蔵を指さす。未だ気絶から回復していな
い。

「嘘のリアリティーの為に子分をボコボコにするとは、まさに外道
！」

「本当なんだって！」

「では聞くが、なぜこんな山奥に軍隊が？そしてなぜ狙われるんだ
？」

俺が聞きてえよ。俺ドイツ軍の恨みを買ったことしたか？

ソーセージを馬鹿にしたり、ジャガイモを差別したりはしていな
いぞ。

「まあ、元々さしたる期待はしていないさ。」

柿山がため息混じりに言う。

非常に腹がたつが、魚を釣ってこれていないのは事実。

晩飯は俺が釣ってくるからメシだけ炊いておけば良いなんて大口叩いてしまったから何も言い返せない。

くそう、あの軍人共。あいつらのせいで俺は嘘つき扱いだ。

「面目ない。」

魚を取れなかった事実には俺は取り敢えず、謝る。

「まあ、こんなことだろうと思ってこちらの方はつつがなく用意しておいた。予め買っておいた食材と、山でとれた食材をな。」

柿山は微笑を浮かべながらそう言うてくれた。

先刻までの呆れた態度は完全に消えていた。

というか、コイツ、最初から怒っていなかったな。予め食材を買っている時点で俺に期待していない。

怒ったフリで俺をからかっていたんだろうな。

俺が悪かったのも事実だ、コレくらいのからかいは甘んじて受けよう。

「それだよ。」

そう言うって柿山は焚き火の片隅を指さす。

さすが柿山だ。準備万端じゃないか。

そこには山菜、キノコ、木の実、野菜、肉類が彩りよく並べられ、そして何故か

ずぶ濡れになったマチヨと何処かで会った先輩が居た。

コレ・・・食うのか？

5月4日 釣りと川上から流れる物（後書き）

用語解説

・己の精神力を鍛えていたのだ
嘘である。本気にしないように。

・サバゲー

サバイバルゲームのこと。偽銃を使ったゴッコ遊び。

・作戦D O E

すでにおなじみ。他人を囿に自分だけ助かる技。

・お前を囿にな！！！！！！
まさに外道。

・戦力を探りたい

概ね正解。戦力というか素性を知りたいようだ、その上でどの程度の戦力で、どの程度に驚異なのか取り敢えず知りたかったらしい。

・忍法木の葉チラシ

主人公108の逃げ技の一つ。

・ユーロファイター

戦闘機

・ブラックアウト

強いGがかかった際、脳に血液が供給できなくなり、完全に視野を失う症状

・ 確か普通の人間も40Gぐらいなら耐えられる筈だよな・・・。
対Gスーツ装備で、一時的になら耐えられるらしいが・・・普通
無理。訓練してても8G程度。

・ 焦げた武蔵
空気との摩擦で焦げた。

・ 濡れになったマチヨと何処かで会った先輩
ガクトと大和の覗きコンビ。

幕間・軍師とメタルキングと・・・（前書き）

今回は才チ無し、伏線のみ。さらに字数も少なめです。
まあ・・・幕間です。

幕間・軍師とメタルキングと・・・

俺とガクトは、五月の川の中に放りこまれた。
理由はまあ・・・秘密だ。

そして何故か川沿いにキャンプをしていた見覚えのある少女に助けられ、食材と共に焚き火にあたっていると、これまた見覚えのある男がやってきた。

そう、かつて保健室で出会い。姉を倒した「化物」だ。

「柿山よ、さすがの俺もカニバリズムは無理が有るぞ、俺はな、プラスチックとガラスと人間は食べない主義なんだ。まあ無理にクエと言われたらやぶさかではないんだがな。」

なにやら怖いこと言ってる彼。

「たいへんだあ大和、俺達食われようとしてるぞ。」

「だ、大丈夫だ。たぶん。」

分かりやすく怯えるガクトを宥めつつ、俺は二人の様子を観察する。

「いやいや、この人達は食材じゃない。私が河童を探していたら、上空から落ちてきたんだ。アブダクションに違いない。」

「いや、姉さんに叩き込まれたんだよ。」

何故か宇宙誘拐の被害者にされそうだったので俺は咄嗟に否定した。

「記憶を操作されてるな、アブダクションの被害者の例に一致している。」

この女の子は何で俺達が宇宙人にさらわれていることにしたいんだろう。

「柿山、少しくお口を閉めておこうね。先輩、川に投げ込まれたんスカ。災難っすね。・・・あ、どうぞ。」

そう言っただけで魔法瓶から紙コップにお湯を注ぎ、俺たちに勧めてくれた。

「ああ、有難う。」

「お・・・おう。」

自然な笑みでそれを受け取る俺と、若干怯えた様子でそれを受け取るガクト。

無理もない。

彼は強い。

俺の知る限り最強である、姉さん・・・川神百代を倒した数少ない人間だ。

もちろん勝負は時の運や、コンディションによって結果が変わるので、一度姉さんを倒したから絶対に川神百代よりも強いとは言い切れないが、少なくとも姉さんと同程度の強さと見て良いだろう。

指先ひとつで俺達なんて簡単に殺せる。

それだけだったなら別にいいんだ。

俺達より強いヤツなんてそれこそ沢山いるし、そんな奴らを気に

してたらキリがない。

問題なのは。彼と俺らファミリー、というか姉さんが物凄く仲が悪いと言うことだ。

物凄く戦いを求める姉さんとは対照的に、目の前の彼は戦いを極端に嫌がる。

戦い好きの姉さんもワン子もその姿勢が許せないらしく、分かりやすく彼に対して殺気を向ける。

一触即発ながら、物理的な戦闘に発展しないのは、彼が姉さんに対して要求した「関わらない条例」が勝者の特権として生きているからだ。

姉さんのは彼のことを「メタルキング」と揶揄していた。
戦いたいのには戦えない。なかなかうまい表現だ。

ただメタルキングと違うのは、攻撃力もラスボスレベルと言う事。特にあのビーム。威力もさることながら、その追加効果の痺れが厄介らしい。

姉さん曰く、対人戦に限定するならカワカミ波に相当する威力とのこと。それをタメ無しの一瞬で出せる。姉さんのお墨付きの化物だ。

でもその反面で、俺の知っている彼の姿は、回転しながら地面に埋まる土下座をしたり、鼻水と涙を流しながら駆け寄ってくる姿だった。

正直、強さを知った今でも、彼が本当に強いのか何処かで疑問を感じてしまう。

俺としては彼の實力云々より、その實力を感じさせない演技力のほうが恐ろしい。

實力者、そしてその實力を隠し通そうとする策士。

コレは非常に恐ろしい存在、正しく「化物」。

だからこそ、敵には回したくない。

姉さんは彼のことを気に入らないようだが、彼を敵に回せば姉さん以下を括り殺せるんだ。

むしろ、姉さんとの仲が悪いぶんを俺がフォローしておくべきだろう。

幸い、姉さんと彼の仲は良くはないが、俺個人との仲は今のところ悪くない。

ファミリーを守る軍師としては、彼と上手く友好関係を維持して、彼を敵には回さないようにしておかなくては。

「いや、なんだか服がだいぶ汚れていたけれど、修行か何かかな？」俺はフレンドリーにそう話しかける。

一人気絶したように寝ている子も居る。
壮絶な修行をしていたのだろう。

「いやちよつとドイツ軍に絡まれまして・・・結果こんなふうになっ
てしまいました。」

「またそんなホラを吹く・・・」

彼が原因を言い、隣の少女がそれを否定した。

「ホラじゃ・・・いや、たしかにそうだよな。こんな山にドイツ軍な

「んて。いる訳ないですよ、やだな、俺どうかしてたのかな・・・」

「いいえ・・・」

知人です。

「それクリスの・・・モガ。」

俺はあっさりと加害者をバラそうとするガクトの口をふさいだ。

加害者が俺らの関係者だとバレたら友好関係どころじゃなくなる。間違っても俺らのファミリーの親御さん一団だとはバレないようにしなくては。

「よ・・・よく解らないけれど災難だったね。」

「そうなんすよ、なんか最近トラブルに巻き込まれるんすよ。」
そう言つて、疲れたようなため息を吐く彼。

演技なのか？本気なのか？

「まあ。俺にも原因はあるんですけどね？」

「原因？なんだそれ？」

ガクトが普通に彼に質問していた。

順応力凄いなおい、先刻まで怯えてたよなお前。

「先輩にはもう俺の力がバレてるから言いますけど他言無用でお願いしますよ。少し前にガラス割りが流行ったじゃないですか。」

「おう！・・・俺達が・・・モギ。」

余計なことを言うなガクト。

「ああ、そう言えばの時ガラス割り犯の退治していたのは先輩たちでしたね。」

・・・何ぞ知ってる？

「実はあの時犯人の逃走経路を断とうと校門前の車を動けなくしたの俺なんです。」

「あの車ひっくり返してたの君！？」

暗がりでは何者かは解らなかったけど、たしかに彼ならばアレくらいのこと容易だろう。

なるほど彼だったのか、てつきりルー先生あたりがこっそり手伝ってくれたんだろうと思っていたんだが。

「ええ、直後何処からとも無くやってきた矢にぶつかりまして、まさか矢によるツッコミが来るとは・・・。」

うん。その矢は京が射ったやつだ。

しかも俺が指示した奴だ。

「その矢って確か・・・グハ！」

俺は何か言いかけたガクトの脇腹に水平チョップを叩き込む。

「ありや天からの警告だったんですね。余計なことすんなって事だと思っんです。俺が余計なことするから余計な目に合うんですよ。」

できるだけなにもしないでおとなしく生きていれば、平和に生きられると思うんです。」

「まあ、じっとしてれば何も問題が起きないのは道理だね。」

「やはり平凡が一番だな。」

「ああ、それがいい、君はうつかりだからなあ、下手に顔をつつこめば面倒なことになるに決まっているんだ。」

会話はそのまま少女と彼のやり取りにシフトしていく。

目の前で繰り広げられるやり取り。

いかにも仲の良い友人同士の会話だ。

だけど、そのやり取りに。

違和感を感じた。

すごく不安を感じるやり取り。

確か何処かで・・

そこで気がついた。

彼は策士なんかじゃあない。本心からそれを言っている。戦いを嫌がっている。

いや、本心というよりは…………

「俺らもそろそろ帰るよ。体も冷えたし、温泉にでも浸かることにする。」

そう言っ て俺は立ち上がる。

「え？帰るんですか？飯食ってきませんか？」

「ああ、もうすぐ煮えますよ。ごった煮。」

そう言っ て俺を引きとめようとする二人。

「おい大和、飯食ってこうぜ・・・。」

ガクトまでもココに残っ て飯を食いたそうだ。

「いや、そろそろ帰らないと姉さんあたりが探しに来るかもしれない。そしたら迷惑かかるだろう？」

俺はそう言っ てその場を離れようとする。

「・・・来てんすか？」

不安そうな彼。

やはり姉さんとの相性は良くないようだが、それは嫌悪感と言うよりは苦手意識に近いものが見て取れる。

彼自身は姉さんに対して敵対心は持っ ていないようだ。

「まあ安心しなよ、姉さんには秘密にしておくし、ココには近づかないようにするからさ。な、ガクト。」

「お・・・おう。そうだな。」

「いや、すいません、先輩にはお世話になりっぱなしで。」

そう言っ て彼は頭を下げた。

その表情には嘘がなく、心の底から感謝してくれている。

彼については心配しなくても良いだろう。

きつと、彼とは敵対することはない。

少なくとも彼自身の意思では敵対しないはずだ。

そう、彼は。

今やつと理解した。

彼個人は「化物」でもなんでもない。

いやたしかに力は強いが、彼の意思でそれを使うことはないだろう。

でも俺は怖かった。

俺の軍師としてのカンが逃げろと言っている。

怖いのは彼じゃない。

兎に角すぐにでもその場を離れたかった。

俺が怖かったのは、彼の隣にいる。あの女の子。

名前は確か・・・柿山。

彼女がたまらなく怖かった。

幕間・軍師とメタルキングと・・・（後書き）

用語解説

・カニバリズム
人間を食べちゃうこと。比喻表現ではなく、本当に食べちゃうこと。

・河童
有名な妖怪。柿山はカップパ夜行性説を唱えているので、夜探していた。

・アブダクション
宇宙人に誘拐されること。大抵返してくれるが、変な実験をされた上に、場合によっては記憶を消されることも多い。

・メタルキング
守備力と素早さは隠しボス以上。倒しにくいし、すぐ逃げるが、倒せれば経験値が30010手に入る。

・カワカミ波
川神百代のなんかすごい技

・加害者。
いいえ、真の加害者は主人公です。ドイツ軍は切掛に過ぎません。

・ごった煮
あれらの材料を・・・ただ煮るとは。

5月4日 こった煮と秘密（前書き）

ぼちぼち最終話に向けて話を進めていきたいと思っています。
とはいえどんな感じにしていくなのかは未定ですが。
一応ハッピーエンド系にしたいとは思っています。

5月4日 ごった煮と秘密

パチパチと焚き火の音だけがあたりに響く。

真っ暗な闇の中、焚き火の光が俺達を照らす。

なるほど、キャンプも悪くはないな。

今日で終わると思うとなおさらだ。

川神百代が近くにきている。

直江先輩は近づけないと言っていたが、万が一ということもある。

アノ人は頭は良さそうだが、腕力はからつきしだ。

川神百代が何かの切掛けで俺の存在を知れば、あの人では抑えきれないだろう。

川神百代は俺に関われないことになっているが、いつものような殺気を浴びせられればこのキャンプが台無しになることは間違いない。

ここはキャンプを早めに切り上げて、観光でもしながら帰るのが最善だろう。

しかし…

「先輩：焦ってなかったか？」

大和先輩がどことなく焦っていたような気がする。

「よくわかるね。彼は確実に焦っていたよ」

少し得意そうに柿山が言った。

「何で？って言うか何でお前がそれをわかるの？」

「先輩は私の軽い苛立ちに気がついたんだろ、だからソソクサと帰ったのさ」

そう言っただけでケタケタ笑う柿山。

苛立ち？

「なに、お前ムカツイてたの？先輩に？」

「少しだけね」

さも当然といった様子で柿山はそう答えた。

なるほど。

直江先輩は頭のいい人らしい、特に人間関係を構築するのが上手くて、友達が沢山いる人らしい。

そんな人であれば他人のイラだちを、いち早く察知して距離をとるのも納得だ。実に紳士的行動と言える。

しかし、理解出来ないのは柿山だ。
イラつく理由が見当たらない。

「何で？別に失礼なところは無かったと思うけど、直江先輩もマツチヨな人も。」

俺がそう言っていると柿山は人差し指を立てて言ってきた。

「私の唯一嫌いなことは何か知っているだろ？」

「予定が崩れること？」

おれが待ち合わせとかに遅れるとよく怒るし。

「いや、それも嫌いだがそれじゃない。」

「意味不明な物？」

オカルト好きの癖に理解出来ないものが苦手だよな。

「違う、それも嫌いだけど、それじゃない。」

「ドツピオって呼ばれること？」

なんとなく似てるんだよな。そう呼ぶとマジで切れるけど。

「違う！！そう呼んだのは君だけだ！」

「探られたり、プライベートに踏み込まれたりすること？」

「それだ！」

唯一じゃねえだろ。

「私は人を観察することは好きだが、されるのは大嫌いなんだ！」

「・・・なんてワガママな」

言ってること無茶苦茶だつて自覚してるか？

「大和先輩はね、私たちを探っていたんだよ。」
探っていた？

別に探るような質問はされていないと思うが、それとも会話なしでも俺達の性格を見抜くようなスキルを持っているのだろうか。

しかし...

「...でもそれ普通じゃないか？俺達は先輩と特別仲が良いわけじゃないし、あつちも多少は警戒するのは当然じゃないか？」

むしろ、友好の印としてそういったことを受け入れることも大切なのでは？

「普通の人間の警戒程度であれば私も黙認したけどね。彼はかなり深く探ろうとしてたからね。乙女の秘密を探るのは大罪なのだよ」

乙女ってお前...

乙女って（笑）

「なんだよ、探られて嫌な秘密でもあるのかよ」

「あるよ。もちろんだろ？」

即答しやがったこいつ。

秘密主義にもほどある。

考えて見れば彼女の普段の生活は秘密ばかりだな。

「そう言えばおれもお前について知らないこと多いな。」

「そりゃあ当然だろ？」

当然だろうか。

まあ、女性だから当然と言われてしまえばそれまでだ。一応こんな奴でも女ではあるんだからな。

女の私生活ほど謎に包まれているものは無いのはこの世の真理の一つだ。

しかしそれでも。

「付き合い長いのにな」

幼少からの付き合いならもう少しコイツのプライベートを知っていておかしくないはずなんだよな。

「まあ、長いな」

「お前、一度も俺を部屋に呼んだこと無いよな」

「女性が男を部屋に上げるなんてことはそうそうあることではないよ？それに私が君の部屋に行ったことはあるだろ？」

たしかにそうだが…。

でもちよっと他人行儀じゃないか？

「思えば長いこと一緒につるんでるけど、本当にお互い知らないことが多いな。」

「友人関係なんてそんなモノさ。家族や恋人じゃあ無いんだ。何でもかんでもオープンとは行かないよ。」

まあ、その通りだ。

いくら親友といえど、踏み込むべきじゃないところは多い。

「まあ良いか、今の関係にさしたる不満もないし、この関係のままずつつるんでいくのかもな」

年食って、ジジイになってもババアの柿山とこうして下らない話をしているような気がする。

「さあね。人は変わるし、そうなれば関係も変わるさ」

お前、せつかく俺が良いこと言ってるのに、現実的なこと言うなよ。

「お前いつもそういう所シビアだよな。そこは素直にずっと友達だよ的なことを言うところじゃないのか？」

「安っぽい友情理論は好きじゃないしね。それにだ、関係が変わるとは言ったけど必ずしも悪くなるわけじゃないさ。武蔵なんかいい例だろ？」

そう言っただけで彼女はテントの脇で眠っている武蔵を指差す。

「そうだな、なんだかんだ言っただけで武蔵と友達になっちゃったな」

「最初は本当に腹がたつ奴だと思ったよ、絶対に好きになれないと思った。」

「まあ、俺もそうだな。苦手なタイプだったし」

第一声が「プレミアムに私と勝負しなさい！」だったもんな。

「いつそ殺してやろうかとすら……」

「オイオイ、穏やかじゃない」

まあ、マジギレしてたもんなお前。

「しかし、話をしてみるとそんなに嫌なやつじゃなくてね」

「まあ、滑稽だよなこいつ」

三枚目キャラだな。

「まあ、こうして友人になっているな」

そうなんだよ、なんだかんだでな。

「人間関係って不思議だよな。ウザったいけど何処か憎めないんだよな。結局、いい友達になっちゃったな」

「その友達をボロボロにするって君……最低だぞ。」

…それを言いたいがために会話を誘導してたなこいつ。

だいたいコイツがボロボロなのはドイツ軍のせいで、俺のせいで
は……

あれ？

違う！

こいつの服がボロボロなの俺のせいだ！

ドイツ軍から逃げるために俺がマツハで逃げたのが原因だ！

ドイツ軍はただの切掛だ。

ヤバイ！

武蔵さすがに怒るかな？

服代とか請求されたらどうしよう。

ただでさえ先月は壁の修復費用で財布の中が大変なことなのに。

そうだ！何か言い訳を…

「ほら、武蔵君、起きなさい。そろそろ夕食にするよ。」

そう言つて柿山は武蔵の両頬をペチペチと叩いた。

ちよつとまで、まだ言い訳が……

「うゝん……は！私は一体何を？服がボロボロ？」

起きやがった。仕方ない、ココは…

「いやな、武蔵。突然お前がセレーネーに自分を捧げるとか言い出して、焚き火に飛び込んだから、全力で止めたんだ。おかげで俺の服もボロボロだー！」

俺は咄嗟に考えた嘘をつく。

「私変態じゃない！？ありえないわよそんなこと」
流石に無理があつたのか、武蔵は全く信じない。

「じゃあどうしてそんなにボロボロなんだ？」

柿山が、不思議そうに武蔵に聞く。

やっぱり柿山は、ドイツ軍のことを信じてないな。
だが今はそれを逆手に取らせてもらおう。

「それはドイツ軍に…」

「はあ？ドイツ軍？日本国内で？山奥に？ド・イ・ツ・軍？」

ドイツ軍と言おうとした武蔵に対して俺は大げさに言う。

そんなことありえる筈がないだろ？って口調で。

何馬鹿なこと言ってるの？って口調で。

「…あれ？」

武蔵自身、変に思ったようだ。

そう、たしかにこの国でドイツ軍に囲まれるなんて意味不明すぎるんだ。

普通信じない。

「武蔵君。常識で考えてみたまえ、こんな観光地ハズレの山奥にドイツ軍が居るわけ無いだろ？たしかにフィラデルフィア計画などのように戦艦が瞬間移動すると言った都市伝説は存在しそ……」
「まあ、きつと錯乱してたんだよ、あれだ、修行のしすぎで脳内麻薬が出過ぎたんだろ？たぶん」

さらに柿山と俺で畳み掛けるように、否定。

何とか有耶無耶に…

「そうかしら…」

やった！誤魔化しきった！

「ほら、飯食おうぜ。」

そう言いながら俺はお椀にごった煮を盛る。

このまま、飯食って、話題を変えてしまおう。

「うむ、私が腕によりをかけて作った山の幸のごった煮だ。」

「あら美味しそうじゃない。」

そう言っ て俺達は夕食を食べ始めた。

色々な素材をただ切っ て煮ただけの単純な料理。

しかし、それぞれの素材が相乗効果を産み、味をとて複雑にして美味な物に仕立て上げている。

シンプルにして純粹。粗野にして複雑。

料理の原点だな。

「うめえ。」

「あら美味しい。なかなかプレミアムね。」

俺と武蔵の感想を聞いて柿山も満足気だ。

「出汁に隠し味があっ てね。それも山で調達してきたものだ。」

「カエル？」

ここらへんならウシガエルも結構いそっ だし。

「ちょ！」

「ははは、そんなわけないだろ。君は本当に下手物食いだな。」

「…親分、結構アグレッシブな冗談を言っ のね」

何故かビビる武蔵と笑顔で否定する柿山。

違っのか？なんとなくそんな気がしたんだけどなあ。

豚や鳥も入っているけど堂々と入っているからな、隠し味と言うからには

見た目ではよく解らない物なんだろうし。

「うーん、わからんな。」

俺は正直に降参した。

食べるの大好きな俺が降参した事が、嬉しかったんだろ。柿山の表情は先程よりさらに明るいものになっていた。

「正解は。蛇だ。」

そう言いながら柿山は蛇の脳天と革を見せてくれた。

蛇か。

小骨は多いが、汁物の出汁には良いのかな。

癖は無いが肉の旨味は結構あるしな。

俺がそんな事を考えていると。

突然武蔵が地面につづくまった。

どうした武蔵。

お祈りか？

5月4日 ごった煮と秘密（後書き）

用語解説

・ドッピオ

とおるるるるるるるる…の人

なんとなく似てると思うって主人公がそう呼んだことがある。

本気で怒られた。三日学校を休むレベルの口撃を食らった。

ドッピオと言っても原作版、デフォルメ版、SD版、腐女子版、女体化版、と色んなドッピオがいるが、どれに似てると思ったかは不明。

まあ、どれにしたって似てると言われて嬉しいかは微妙。

・服代とか請求

主人公は基本ケチ。

だが使うときはドカンと使う。食事、電子機器、本、等には幾らでもお金をかける。

・セレーネー

月の女神のこと。

月の女神と言えばルナを思い浮かべがちだが、ギリシャ神話ではセレーネーである。原作のセリフに出てくるガイアがギリシャ神話の大地神なのでそれ対抗してこちらにした。

・フィラデルフィア計画

戦艦かなんかが瞬間移動した的な都市伝説。

・カエル

今でも一部の飲食店で普通に食べられる。日本以外の国でも比較

的よく食べられる食材。主人公の好物。

・ウシガエル

別名食用ガエル。肉質も柔らかいながら弾力があり美味、カエルの中では比較的大型で、食べ応えがあるのも特徴の一つ。ただ、肉が淡泊すぎて出汁に向いているかは不明。主人公の好物。

・蛇

臭みが強くマズイという話をよく聞くが、別にそんなことは無い。鶏肉に近く淡泊な味わい、ただ骨が多く食べにくい。あと、捌いていると、首を切っても体が動いていたり、腹からカエルがコンニチワしてきたりと心臓に悪い。主人公の好物。

・ごった煮

中身は

椎茸、キクラゲ、ハツタケ、ベニハツタケ、フキ、ウドの葉、クサソテツ、カラシナ、菜の花、ネギ、ノビル、キャベツ、蛇、豚コマ、鳥、調味料。あと草。

主人公の好物。

5月4日 こった煮と秘密・裏（前書き）

裏と書かれています

早い話が柿山サイドの話です。

幕間と同じ感覚だと思っていたらヨロシイかと…

5月4日 ごった煮と秘密・裏

邪魔者が消え、テントの周りを静寂が包む。

森のザワメキと川の音、そひて焚き火の音だけが辺りを包む。

「先輩…焦ってなかったか？」

そんなことをいう彼に、私はさも当然のように答える。

「よくわかるね。彼は確実に焦っていたよ」

「何で？って言うか何でお前がそれをわかるの？」

「私の軽い苛立ちに気がついたんだろ」

そう言っって私は笑った。

「なに、お前ムカツいてたの？先輩に？」

「少しだけね」

実際はそんなに腹を立てたわけではないのだが、お帰り頂きたかったのは確かだ。

「何で？別に失礼なところは無かったと思うけど、直江先輩もマツチヨな人も。」

彼はそう言うが、失礼云々の問題ではないのだよ。

「私の唯一嫌いなことは何か知っているだろ？」

「予定が崩れること？」

見当違いの回答をする彼。

ある意味で正しいのだが、今求めている答えはそれじゃない。

「いや、それも嫌いだがそれじゃない。」

「意味不明な物？」

「違う、それも嫌いだけど、それじゃない。」

「ドツピオって呼ばれること？」

「違う！！そう呼んだのは君だけだ！」

私は女だぞ？

理解してるのか？女性に向かってドツピオって、せめてもう少しマシな例えがあるだろ。流石に傷つくぞ。

「探られたり、プライベートに踏み込まれたりすること？」

「それだ！」

その回答に辿り着くのにどれだけ時間がかかるんだ君は。
もう少し会話の流れを理解しろ。

「私は人を観察することは好きだが、されるのは大嫌いだ！」

「・・・なんてワガママな」

ワガママなものか、大抵の人間はそういう気持ちを持っているものだ。

他人を知りたいと思いつつ、他人に心を覗かれないと思うのだよ。

「大和先輩はね、私たちを探っていたんだよ。」

探られていい気持ちができる人間は居ないだろ？

「でもそれ普通じゃないか？俺達先輩と特別仲が良いわけじゃないし、あっちも多少は警戒するのは当然じゃないか？」

「普通の人間の警戒程度であれば私も黙認したけど。彼はかなり深く探ろうとしてたからね。乙女の秘密を探るのは大罪なのだよ」

「なんだよ、探られて嫌な秘密でもあるのかよ」
「あるよ。もちろんだろ？」

そう、乙女の秘密。
私たちの関係の本質だ。

おそらく直江先輩はそれに気がついたのだろう。
私とこの男の関係の全てを知ったわけではないと思うが、その異常性くらいは感じ取ったに違いない。

私達の会話。

内容は普通だが、言い方、タイミング、声のトーン。
それが催眠術に近い物だということに。

これらのテクニクは既に私の身に染み付き無意識に出てしまう。

直江氏はそれに気がついたのだろう。

先輩はとにかくコネクションを広げ、力とするタイプの人間だ。
人付き合いが多いということはそれだけで色々な経験をつむこと

になる。

人心掌握術の一つとして、催眠術や洗脳を勉強していても何ら不思議はない。

あるいはどこかで経験したことがあるのかもしれない。

であれば、私達の会話の異常性に気がつく。

催眠術を当たり前に友人にかけようとする女なんてどう考えたってオカシイからね。

まあ、私達の関係の秘密の一部がバレてしまったのは、あまり良いことではないが。別に放っておいても構わないだろう。

多分直江先輩はきつと傍観に徹する。

なにせ先輩は聖者でも善物でも、ましてや偽善者でもない。

私たちの今の関係を悪いものと判断し、それを改善しようと思うような人間ではない。

なにより彼はこの異常な関係を恐れるだろう。

彼のように頭のいい人間というのは大抵のことを予想する。予想できてしまう。

だから予想外の物、予想できない存在。つまり、意味不明の存在を恐れる傾向がある。

異常はそれだけで恐怖の対象だ。

その証拠に先輩は私たちの異常な関係を感じ取るやいなや、恐怖を感じて逃げてしまった。

そして彼の選択は実に正しい。

何人たりとも私たちの関係に深入りしたり、口を出すべきではないのだ。

それは私を敵にまわすことだし、
それすなわち、今眼の前に居る私の可愛い「化物」を敵にまわすことだ。

「思えば長いこと一緒につるんでるけど、お互い知らないことが多いな。」

彼がそう言った。

知らないことか。

そうとも、君は知らなくて良いことだからね。

「友人関係なんてそんなモノさ。家族や恋人じゃあ無いんだ。何でもかんでもオープンとは行かないよ。」

そうだ、彼には秘密を知られてはいけない。

少なくとも現時点では。

私の考えを全てさらけ出すのは、私の悲願を叶える瞬間なんだから。

「まあ良いか、今の関係にさしたる不満もないし、この関係のままずっとつるんでいくのかもな」

彼はそんなことを言うが、それでは困るのだ。

たしかに今は良い。
今はこの関係で良い。

だがね、それを続ける気は無いのだよ。

「さあね。人は変わるし、そうなれば関係も変わるさ」

そう、関係は変わるのだよ。

「お前いつもそういう所シビアだよな。そこは素直にずっと友達だよ的なことを言うところじゃないのか？」

「安っぽい友情理論は好きじゃないしね。それにだ、関係が変わるとは言ったけど必ずしも悪くなるわけじゃないさ。武蔵なんかがいい例だろ？」

そう、関係が良い方に変わる可能性はある。

ただね、

この場合に「良い」は主観なのだよ。

私に取っての「良い」が君に取っての「良い」とは限らない。

「そうだな、なんだかんだ言って武蔵と友達になっちゃったな」
「最初は本当に腹がたつ奴だと思ったよ、絶対に好きになれないと思った。」

「まあ、俺もそうだな。苦手なタイプだったし」

「いつそ殺してやろうかとすら…」

「オイオイ、穏やかじゃない」

呆れたように彼は言うが、

別にコレは、冗談ではないのだよ。

彼女の存在は必要でありながら邪魔だったのだ。

「しかし、話をしてみるとそんなに嫌なやつじゃなくてね」

「まあ、滑稽だよなこいつ」

そう滑稽で、利用価値のある存在だと言う事に気がついた。
だからこの状況も許容しているのだ。

「まあ、こうして友人になっているな」

そう、彼女は友人になっている。

きっとこれからももっと良い友人になるのだろう。

いや、そうならもらわないと困るのだよ。

「人間関係って不思議だよな。ウザったいけど何処か憎めないんだ
よな。結局、いい友達になっちゃったな」

「その友達をボロボロにするって君・・・最低だぞ・・・」

さて、このまま話が進めばボロが出かねない。
早々に話題を変えて食事にしよう。

私は会話を武蔵に持って行って、武蔵小杉を起こす。

「ほら、武蔵君、起きなさい。そろそろ夕食にするよ」

目を覚ました武蔵は相変わらず滑稽なことを口走っていたが、まあ気にしていたらキリがない。

適当に受け流して食事を始めよう。

「うむ、私が腕によりをかけて作った山の幸のごった煮だ。」

「あら美味しそうじゃない。」

勿論だ、苦労して作ったんだから。

特にあの草は探すのに手間がかかった。

「うめえ。」

「あら美味しい。なかなかプレミアムね。」

私の作ったごった煮は二人の口に合ったようで、二人は碗の中の汁を貪り食う。

苦労して食材を集めたかいたというものだ。

「出汁に隠し味があつてね。それも山で調達してきたものだ。」

「カエル？」

「ちよ！」

彼が即答した。

が、残念ハズレだ。

「ははは、そんなわけないだろ。君は本当に下手物食いだな。」

「…親分、結構アグレッシブな冗談を言うのね」

たしかにカエルは味は悪くないが、出汁として考えると今ひとつだ。

「うーん、わからんな。」

そう言って降参する彼に、

私は彼に蛇の頭と皮を見せて言う。

「正解は。蛇だ。」

切り落としてから、そんなに時間が経過していないせいか、蛇の頭は未だ動いている。

ウネウネと動く蛇の首元を見て…

そこで反応の差が出た。

酷いものを食べたという反応を見せる武蔵。

なるほどと納得した表情の彼。

さて、本当に平凡なのは何方か。

勿論武蔵だ。

一般的な現代人なら武蔵のような反応が普通なのだ。
しかし、彼は武蔵とは同じ反応をしない。

平凡を愛する彼がだ。

彼は順調にズレてきている。

彼の求める平凡は、すでにこの世界の常識とは違うものになってしまっているのだ。

ふふ。

私の蒔いた種は、順調に育っている。

5月4日 ごった煮と秘密・裏（後書き）

用語解説

・催眠術

催眠術という表記はしたが、催眠術はあくまで催眠状態（眠っているような状態）の対象者に暗示を行うこと。

今回のように普段の会話で、思考、感覚、行動を操作・誘導するのはあくまで「ただの暗示」である。

ちなみに暗示にかけられた者は基本的に自分の意志でそうなったと考え、それが他者による誘導によるものであることに気が付かない場合が殆ど。

・異常性くらいは感じ取った

大和が逃げた理由はたしかにある異常性を感じたから。

しかし、はたして柿山の言うとおり、異常だからという理由だけで逃げるだろうか？

彼は異常な人間に囲まれている。それで居ながら逃げたいと思うということとは？

・あの草

もけ…

は！ゴホン！ゲフン！…草。それ以上でも以下でもない。

メホホ・ブルササンGの材料とだけ言っておこう。

・ウネウネと動く蛇の首元

ありえないと思われるが、実際に蛇の首は切ってからもしばらくの間動き続ける。マムシなどの毒蛇などを捌くときは特に注意する

必要がある。

ちなみに体のほうもアグレッシブに動き、鮮度が良いと、ブツ切りにしても各パーツが動き続ける。

それ程に蛇は生命力が強く、水だけで1年近く生き続ける例もあるほど。コレも冗談のようだがハブ酒に漬け込まれたハブに噛まれるという例も実際に発生しているらしい。

・酷いものを食べたという反応を見せる武蔵

武蔵も山籠りをするくらいなので、蛇を食べるくらいなら耐えられてかもしれないが、いきなり目の前で動く蛇の頭を見せられれば普通はそういう反応をするだろう。

・彼の求める平凡は、すでにこの世界の常識とは違うものになってしまっている

そう、柿山が原因。

決して主人公の性格を今ひとつ考えきれていない筆者が、

何か最近主人公の性格がめちゃくちゃになっちゃった、どうしよう…。

タイトルに「小者」って書いてあるのに、小者と言うより精神異常者みたいになってきてる…。

そうだ！なんか理由をでっち上げて、その伏線だったんだって事にしてしまおう。

と思ったわけではない。

5月5日 青い空とバス停（前書き）

いつもこんな駄文に付き合っていたいただきありがとうございます。
今回は難産で微妙な出来。

ストーリー上さして重要な話でもないですが…。

5月5日 青い空とバス停

ああ、

空はこんなに青いのに

風はこんなに暖かいのに

太陽はとっても明るいの

「プレミアムな朝のもと♪ プレミアムみどりー」

どうしてコイツはこんなにウザイの？

「なあ、柿山」

俺は眠気の取れない脳みそを無理やり覚醒させながら、同じく眠
そうな柿山に尋ねた。

「ん？」

「何だって武蔵は朝からあんなにテンション高いんだ？」

ラジオ体操の替え歌なんぞ歌いおって。

しかも二番。

おかげで目が醒めてしまった。

「朝型なんだろ？早く起きてランニングもしていたようだし」

「…この広い土に♪伸ばせよ♪それプ・レ・ミ・ア・ム♪」

あ、終わった。

「おはよう二人とも！気持ちのいい朝だわ」
そう言いながらうざったいスマイルを俺達に向ける武蔵。

「ああオハヨウ」

「ハイハイ、気持ちのいい朝ですね」
お前に起こされて無ければな。

しかし本当に元気だなあ。

昨日の夜は吐きそうにしてたのに。

まあ、あの後すぐに寝てたしなあ、睡眠時間が多かったから元気なのか？

「柿山、今何時？」

「5時半」

早いなあ。

「柿山、俺ら昨日何時に寝た？」

「さあ、よく覚えていないが…日付変わってたと思う」

昨日の夜、武蔵が眠った後。

夜空の星を見ながら柿山と語り合ってたからなあ。

結局眠ったのはかなり遅い時間だった。

ちなみに断っておくが、決してロマンチックな語らいをしていたわけではない。

夜空の星を見ながら、

柿山は終始エメラルド星人の話をしていた。

俺はダークマターの話をしていた。

そこから話が盛り上がってしまい。

で、最終的には宇宙は平面だと言い張る柿山と、超球面だと言い張る俺との朝まで生討論に発展した。

馬鹿らしくも楽しい夜だった。

まあ、そんな楽しいキャンプも今日で終わりだ。
ゴールデンウィークの楽しい思い出になったな。

女の子二人とキャンプ。

しかも二人とも容姿は良い部類。

仲も悪くない。

邪魔する人間味無し、うるさい大人も居ない。

ふむ。

改めて考えると、すごいリア充な状況じゃないか。

思春期の男子学生ならば、妄想とかに出てくるシエチュエーションだ。

でもこのキャンプやったことは。

釣りして、

ドイツ軍から逃げて、

飯食って、

宇宙の不思議について言い争って、
寝る。

あれ？

俺ひよつとしてとても素晴らしいチャンスをドブに捨ててない？
これだけの状況でストロベリーの展開は何も無し？

いや、よく考えたら、このキャンプに限らず俺の人生においてス
トロベリーの展開が一切無い！？

思い返してみよう。

俺は一ヶ月で俺はたくさんの女性と出会っている。

元々付き合いのあった、柿山、

同じく付き合いのあった、小雪先輩、

突然喧嘩売ってきた、武蔵小杉

同じく俺に喧嘩を吹っかけてきた、川神百代

そしてその妹である、赤髪の人

そして昨日出会った、もっと赤い髪の軍人

川神百代以降は仲が良い訳ではないのだが。

コレだけ女性と知り合っているくせに、誰とも恋愛関係を結べていない。

それどころか俺は女性と手をつないだことすら無いし。

あ、でも小雪先輩に抱きつかれたことはあるか…。

しかし、小雪先輩とは恋愛関係に発展しそうな気配がない…。

あの人が何を考えてるのか不明すぎる。

柿山と恋愛つてのもなんだかなあ。

付き合いが長すぎて女って言うよりは、何か相棒ってかんじだしな。

武蔵に関しては…ごめんなさい。お友達で。

いや、嫌いではないんだが。今の武蔵の性格だとちょっと恋愛対象ではないし。

急にしおらしくなったりすればあるいは…。いやムリかな…。

川神百代は…爆発しろ。

妹さんは生きろ、頑張れ。でも、俺と関わりのない範囲でだな。

恋人にしたいタイプではない。

女軍人は…もう会うこともないだろう。

うん。女性の知り合いは増えているが、俺が恋人を作れる気配が無い。

このままだとヤバイぞ俺。

将来、孤独死する危険性が高い。

しかし、まあ、俺が恋愛関係に縁が無いのには理由があるんだ。

一番の原因は俺の性格というか、孤独感だな。

俺はどうもこの世界の人間と違う。

まあ前世の記憶があるあたり、この世界でイレギュラーなんだ。

いくなれば俺は異種族なんだ。

猫が犬に恋しないように、

龍が虎に恋しないように、

ミルクがコーヒーに恋しないように。

俺は現世の人間に恋できない。

もし、俺が恋をしたら。

それは俺がこの現世に完全に馴染んだ時なんだと思う。

この世界の人間の一人としての自覚ができて初めて、この世界で生きる人間に恋できるんだと思う。

だからあれだよ？

決して勇気がなかったわけでもモテないわけでもないんだよ？

自分から女性にアタックしないだけなんだからね？

ホントだよ？

「朝飯にするか。」

下らないことを考えるのはヤメて飯にすつぺ。

このまま考え続けると鬱になる気がするし。

「では私が・・・」「ランニングがてら街のコンビニで買ってきたわ
！！」

柿山が朝飯の準備をしようと立ち上がると、武蔵がコブナイレブ
ンと書かれたコンビニ袋を取り出した。

「いや、せつかくのキャンプなんだから、自分たちで作らない？」
食事を皆で作るのもキャンプの醍醐味じゃね？

「買ってきたわ！」

頑なにコンビニ袋を差し出し続ける武蔵。

何故か必死の形相だ。

「まあ、せつかく買ってきてくれたのをムダにするのも何だし、皆
でそれを食べようじゃないか」

まあ、柿山もそう言っんなら別に良いけど。

そして。

俺達は簡易テーブルにコンビニ袋の中身を並べる。

「なんだよこれ…プレミアムカレーとプレミアム焼きそば弁当、プ
レミアム汁？プレミアムチップス？」

何でもかんでもプレミアム。

こうなってくると、プレミアムの文字がむしろ安っぽさを強調してないか？

「プレミアムよ」

何故か武蔵は満足気だ。コイツの感覚は未だに理解不能だ。

しかし、

まったく。朝からコンビニ弁当の焼きそばとカレーかよ。
キャンプでこんな飯。

大自然に囲まれてコンビニ飯。川のせせらぎを聞きながらのコンビニ飯。青い空の下でコンビニ飯。

「結構美味しいな」

馬鹿にできないぞコンビニ飯。

「君は食べられれば何でも美味しいと言うじゃないか」

「でもやっぱり外で食べるとお弁当もプレミアムに美味しいわね」

うむ。

武蔵くんが良いことを言いました。

「思ったよりも楽しいなキャンプ」

こんなコンビニの弁当類でも、何時もより美味しいと感じるのはやっぱり俺はこのキャンプを楽しんでると言うことなんだろう。

結局俺は、コイツラとこうして一緒にいるのが好きなんだな。

願わくば、この楽しい状態のまま人生を謳歌していきたいものだ。

勿論、平凡の範疇でな。

[illegible]

午前中。

俺達は帰りのバスを待つ。

少し早い気もする。

武蔵なんかもう一日くらい修行する気でいたらしく、帰るのを嫌がった。

しかし川神百代とドイツ軍が居るような山に、もう一泊する勇氣は俺には無い。

キャンプが楽しかったのは認めるが、だからと言って再泊の選択はナンセンスだ。

しかし、急遽予定が変わったのに、バスの時刻を調べ無かったのは俺のミスだな。

バスの本数が思ったより少ない。

思ったよりも待たなくてはいけないようだ。

暇を持て余す……

「ふむ、面白い人相をしておりますな。」

突然そんなことを言われたので振り返ると、露店に爺さんがいた。

「いかがですか？よろしければ私目が貴方の運命を占いますが？」

「ふむ。」

占いか。

正直、占い自体はさして好きなわけでもないし、占い師になにか相談するほど人生ん切羽詰まっても居ないのだが。

露天の占い師というのも最近では珍しいし。

こういったところで占ってもらうのも良い経験かもしれない。

そしてなにより暇だし。

「ではお願いします。」

俺がそう言うところ……

「あれ？親分占いするの？じゃあ私も！」

突然乱入してくる武蔵と。

「占いなんするのか？いい年して夢見がちだな君は。」

俺を馬鹿にする柿山。

ええ？

ちよつとMrs・カッキー？

この前才モックソ俺に占いしてただろ。

「まあ、仕方ない。ついでだ、皆占ってもらえますか？」

「ほほ、では一人つつ順番に……」

そして俺を無視して、勝手に段取り始めるし。
この傍若夫人め！

「ではそこのお嬢さんから…」

そう言っただけで爺さんは武蔵にいくつか質問しながらタロットカードをめくっていく。

露店でタロットってのも珍しい。

「おや、貴方は恐ろしい災難に巻き込まれます」

「災難？」

「しかし、それを助けてくれる存在もまわりに居ます。そして、その災難さえ乗り越えてしまえば貴方様の未来は輝かしいですな」
「とうぜん。プレミアムな未来が私を待っているわ」

何故か自信満々に胸を張る武蔵。

いつも思っただ、お前のその自信は何処から発生するんだろう。

「では次はそちらの貴方」

そして俺を指さす爺さん。

武蔵の時と同様に簡単な受け答えをした後に爺さんがタロットをめくる。

「ほ…」

「なに？なんで固まるの？」

大げさに驚のヤメて。不安になるでしょ？
演出、演出なんだよね？

「試練を得ますじゃ、そして、その試練は普通の人間にはとても超えられないような・・・。」

「マジで？何とかありません？」

試練とか、困るわー。

「選択を間違えないことです。その試練は貴方に選択を与えます、その選択が正しければ貴方は何よりも素晴らしい物を得られます。しかし間違えれば・・・」

「間違えれば？」

「何よりも素晴らしい物を失います」

「マジか・・・」

俺の失う素晴らしい物？

PCか？秘蔵本か？果実酒か？

…平凡か！？

ヤバイよ、平凡を失うとか。

考えるだけでストレスでマツハだよ。

「ではそろそろ、私も占つてはくれないか？」

俺が打ちひしがれているのを無視して、柿山が占い師の前に立つ。少しは慰めてくれたりとか無いの？武蔵も何か来るべきプレミアムが云々と独り言始めちゃったし…。

柿山に対しても俺達同様のやり取りをして、爺さんはまたタロットをめくっていく。

そして最後の一枚をめくって。

「え……ええ。それでは……………ひっ」

途端に爺さんは固まってしまった。

しかしコノ爺さん。俺の時といい、さっきからよく固まる。

まあ、年齢が年齢だ。初期ファミミみたいなもんなだろう。

「どうかしました？」

柿山、何でお前はそんなに楽しそうなんだよ。

爺さんの様子からして、何かとんでもない結果っぽいよ？
爆発しちゃうかもしれないよ？

「……私に言えることは何もございません、貴方の未来は貴方が
ご存知のとおりです。たとえ私が何を言ったとしても、貴方は自分
の道を進むでしょう」

爺さんまさかの業務放棄。

言うことがないって占い師としてどうなの？

「ふふ、それだけわかれば十分ですよ」

しかし何故か柿山は満足そうだった。

笑顔まで見せている。

柿山が不敵に笑った時、ちょうどバスが到着した。

でも俺はバスに乗ろうと思いいながらも、そこから動けなかった。

ニヤニヤと笑う柿山の表情は本当に嬉しそうで。

その表情はとても綺麗で、

ちよつとだけ。

ほんのちよつとだけ。

俺は見惚れてしまった。

不覚だ。

柿山なんかに見惚れるなんて。

ただ、なぜだろう。

やっぱりこれもほんのちよつとだけなんだが…

その笑顔に…恐怖も感じてしまった。

あの笑顔はまるで…

まるで…

「ではお代を…」

その言葉で我に帰った。

気がつけば柿山も武蔵もバスに乗り込んでいる。
残っているのは俺と、俺に向かって手を伸ばす爺。

え？

三人分俺が払うの？

5月5日 青い空とバス停（後書き）

用語解説

・ ああ、空はこんなに青いのに
早い話が眠いってこと。

・ ラジオ体操第二
妙にマイナー。

・ エメラルド星人
エメラルド星に住んでる人々、残念ながら主人公が川神百代と決闘した直後くらいに滅んでしまった。

・ ダークマター
暗黒物質。宇宙の殆どはコレと暗黒エネルギーで出来てるらしい。

・ 宇宙の形
諸説ある。ちなみに筆者はそもそも宇宙に形なんて無いと思う。

・ 朝まで生討論
絶対に答えが出ないことを、ダラダラと言い争う不毛な討論。

・ ストロベリーの展開
いつかあるさ。番外編とかで。

・ 異種族

異種族間の恋愛は無いだろうか？個人的にはそんなことは無いと思う。ラバのように違う種で交配例はあるし、人工的なモノ以外で

も、ニホンジカとアカシカ、ニホンザルとタイワンザル、陸イグアナと海イグアナ、が交配した例がある。時に愛は種族を超え、新たな存在を生み出す。コーヒーとミルクが愛しいカフェオレが出来たように。

・ホントだよ？

たぶん言い訳。自分がイレギュラーだと言う考えが、他人との交流を妨げているのは事実。だが、モテナイ理由は純粹に主人公がヘタレだから。ただ、彼がヘタレな理由は…

・コブンイレブン

コンビニチエーン。オリジナル商品であるコブンプレミアムシリーズが最近では売れ行き好調。一昔前にCMソング「コブン、オヤツブン、アニキブーン」で一世を風靡した。まさに今の武蔵の為にあるようなコンビニ。

・プレミアムカレー

通常のレトルトよりも10%具材が増量している。

・プレミアム焼きそば弁当

ただの焼きそば弁当に目玉焼きとウインナーが追加されている。

・プレミアム汁

なにやらプレミアムに物が入っている汁。

・プレミアムチップス

プレミアムカード付き。しかもカード300枚に1枚の割合でプレミアムなプレミアムカードが入っている。もはや何が何だか。

・傍若婦人

傍若な婦人。そもそもMrs・カッキーのミセスは既婚者に対する敬称。つまり婦人。誰の婦人なのかは不明だが…

・PCか？秘蔵本か？果実酒か？

PC・自作PC。カリカリのチューニングをした狗U×基。仮想PCでいくつかのOSで遊べる。

秘蔵本・「ドミニアンへの招待」初版本。少し前にカードゲームにハマってた。

果実酒・子供の頃に漬けた果実酒。20を超えた時に飲もうと今日まで漬けている。

・ストレスでマツハ

寿命が縮むという意味

・初期ファミ

バクリやすい。ボタンが四角いゴム。

5月5日 青い空とバス停・裏（前書き）

最近ネタバレというか…

今後のストーリーのオチを予想された上に、当てられる事が多くて

すごく悔しいわけです。

と言うわけで、今回は予想出来ないようにするための、
伏線を作るための話です。

感想が荒れる気もありますが…まあ、伏線パートですので。

5月5日 青い空とバス停・裏

不規則に車体が揺れる。

そのたびに私の体も揺れる。

太陽は明るく、車内から見える景色を明るく照らす。

せっかく美しい景色なのに、私の連れは二人とも夢の中だ。

少し寂しい気もするが、あまり気にはならない。

なにせ今、私は実に気分が良い。

それなりにキャンプを楽しんだ帰り。窓から見える美しい景色。
そしてなにより先刻の占いだ。

正直、占いなんぞ一度足りとも信じたことは無かったが、あの占
い師の言う事を聞く限り、なかなか信用に値するようだ。

曰く、自分の道を進むべし。

実に分かりやすく、シンプルで甘美。

私のすべきこと。

とある人間を潰すことだ。

勿論、直接潰したりはしない。
間接的に。潰す。

もしかしたら死んでしまいかも。

そして、

そいつが潰れる瞬間を想像すると。

私は楽しくてしょうがない。

我ながら歪んだ精神であると自覚している。
しかし、コレばかりはどうしようも無い。

生まれ持った衝動だ。

私という存在を構成する大きな要素なのだ。

思えば、この衝動が初めて出たのは幼少の頃だった。

そう、

私の隣で香気に寝ている、この男に会った時。

その瞬間からだ。

最初は本当に腹がたつ奴だと思った、絶対に好きになれないと思った。

いつそ殺してやろうかとすら思った。

この男との出会いは小学生の頃。最低の出会い方をした。

その後学校のクラスが同じになり、毎日会うようになったが関係は少しも良くなかった。

それどころか長時間顔を合わせることでますます嫌いになっていった。

動きも、言葉遣いも、考え方も、何もかも好きにはなれなかった。もはや嫌いなどという言葉では言い表せないほどの存在になっていた。

なにせこの男ときたら

動きも、

言葉遣いも、

考え方も、

何もかも。

私に似ていたんだ。

たしかに表面的には似てない。

しかし、目上の人間に慇懃に対応する姿、世の中から一歩引いた立場で物事を考える様子、笑いのツボ、コミュニケーションの取り方、皮肉の言い方。

まるで自分を見ているようだった。

同属嫌悪か自己嫌悪かは不明だ。

とにかく、自分の影法師が目の前に居ることが、嫌で嫌で仕方がなかった。

そしてその不快感は日に日に大きくなって。最終的には殺したいとすら思った。

この殺したいというのは比喻表現ではない。

明確な殺意を心に感じていた。

理不尽なのは理解している。

彼には別に誰かに殺されるような人間ではない。

たしかに私のトイレを見たという事実はあるが、だからと言って殺されるのは行き過ぎだ。

だから、この殺意は理不尽である。私の方が悪い。

しかし私が悪かろうが、非道德的だろうが、思ってしまったものはどうしようも無い。

彼を不幸にして、潰したくて殺してしまいたいという欲求は私の中で大きくなって消えることはなかった。

しかし、いくら殺したいからといって、実際に殺してしまうようなことはしない。人を殺してしまえば、私の人生も潰れることくらい幼くも理解していた。

この世界は暴力的ではあるが、人殺しを許容などはしてくれない。

だから直接的に殺すのではなく。

間接的に彼を潰そうと思った。

その考えはとても背德的で甘美だった。

まるで捕まえた虫の関節をちぎっていくような。非道德的な楽しさがあった。

すぐさま、そのための計画を立てて、それを実行した。

子どもらしい、非常に曖昧で陳腐な計画だが、それでいて残酷で非情な計画だった。

なんのことはない。

彼の友人になったのだ。

彼は孤独だ。

たしかに、対人関係は悪くない。誰ともそれなりの関係を築いている。

しかし、それは全て上辺だけものだ。

彼のことを理解し、彼と対等に話を出来る人間が居なかった。よって、彼には心からの友人という存在は皆無と言えた。

しかし、ある日そこに彼と対等になれる存在がでてくる。

私だ。

否応無しに私たちの関係は非情に密接なものになった。

なにしろ彼に対して私以上の理解者は居ない。
自然と彼は私とつるむようになる

そして私はそれと無く、私以外の人間との交流を断ち。
彼を今以上に孤独にして孤独にして。私に依存させて。

唯一のよりどころであるところの私が、最後の最後に離れてしま
えば。

彼は完全に一人になる。

孤独は人を殺す。

孤独である人間はそれだけで死んでいるに等しい。
誰からも認識されないのは、存在しないと同義だからだ。

そついう計画だった。

計画は実に順調に進んだ。
私達の絆は日に日に強くなり。彼は面白いように私と親密になっ
た。

面白いように……というより、事実として面白かった。

私はドンドンと彼の信頼を得た。

もう、彼は私の言う事に疑いを持たないほどに。

次に、私は彼と他の人間との交流を断ちはじめた。

彼と他人の交流を断つといっても、直接的に彼とその周りの人間
の関係を壊した訳ではない。

彼が交流を嫌がるように仕向けたのだ。

つまり。

私は、彼の素質を潰したのだ。

彼には素質があった。

誰からも好かれる素質だ。

彼は頭が良く、力も強い。沢山の人間に囲まれる人気物の素質が
十分にあった。

そう、今の川神百代のように。

だからその芽を早々に潰した。

日常の素晴らしさをそれと無く伝え、暴力が如何に日常を壊すか
という話を日頃からした。

そしてこの世界の人間が如何に暴力的かを彼に語った。

語り続けた。

どんなに頭が良かろうと、幼少から聞かされた言葉はその人格に大きな影響をあたえる。

早い話が一種の洗脳だ。

結果、彼は暴力を恐れ、内向的な性格になる。

危険を恐れ、内向的で、それでいて私を信用している彼は、まず私を頼り、私に依存し、私の言葉を信じる。

私の言葉に疑問を感じることも無く、私のアドヴァイスに従う。

私の言う事を何でも聞くようになる。

危険極まりない川神学園でさえ。私が川神学園に入学したいと言い、君も入学しないと誘えば、嫌な顔をしながらも結局はその通りに入学した。

それ程に彼は私に依存している。

そして、これから、その傾向はさらに顕著になるはずだ。

川神学園という、アクの強い人間の集まる世界ならば彼は今以上に周りに対して壁を作り私に依存する。

もう彼は私から離れられなくなっている。

それで良い。

そのままわたしの掌で踊ってくれればいい。

彼は私が創り上げた小者。
私の創り上げた愚者。

ガタンと大きな音がした。

「ブルスコ！」

大きな振動がシート越しに体に響く。
彼が起きた。

「起きたか」

「あ……おお。なんかハシゴで屋根に登ったら、お前にハシゴをどかされて、降りられなくて泣きそうになる夢をみたぞ」

まだ寝ぼけているのか、彼は低い口調で変なことを言い出した。

「……なんだ、その夢は。私はハシゴをどかしたりはしないぞ。むしろハシゴをこつそりゴンドラにすり替えた上で丁重に君を迎えてやるさ」

「それ、なんて結婚式？」

そんな調子で、私と彼は友人らしくたわいもない会話を続ける。

今は良い。

泡沫の友情ごっこを楽しもうじゃないか。

そう、この関係は永遠ではない。
いずれ…いや、近い将来にはこの関係は

終わるんだからね。

5月5日 青い空とバス停・裏（後書き）

用語解説

・歪んだ精神

破壊衝動。しかし直接的ではなく、間接的に。それも、ジワジワと。物凄く歪んだ趣向。

本人も自覚しているが、治す気はナッシング。

・川上学園に入学したいと言い

「進学どうすんの？」

「川上学園」

「マジか！あのドメスティックバイオレンス学園！？」

「ドメスティック（家族的）ではないと思うが、まあその学園だね」

「お前！本当に行くのか！…死ぬぞ！」

「死なないし、それになんだかんだでいい学校だよ？」

「何処が！暴力的な奴らが多いんだろ？」

「そりゃ一部だけだ。どんな学校でもはみ出し者は居るさ」

「勉強大変だろ？」

「一部はな、入学の苦勞の割からすると進学率も良いよ？」

「学費は…」

「普通」

「立地も…」

「商店街や飲食店も近く、駅からもそんなに離れていない」

「でも…」

「そして学食が安くて旨い」

「……………」

「一緒に受験しないか？」

「……まあ、受験くらいなら」

というやり取りがあつた。

洗脳関係あるのか？

・彼の素質

それなりに頭がいい、力が強い、ネタを理解する。

人気者の素質は十分にある。柿山は主人公がそうなるのを極端に嫌がった。

・信頼を得た

実際に主人公は誰よりも柿山の言葉を信じている。

・掌で踊ってくれればいい

主人公、見事に踊っている。ケチャレベル。

・ケチャ

なんかすごい踊り。

・私の創り上げた愚者

今の主人公の性格には、柿山による影響があるのは事実。

・ブルスコ

振動を与えられた時に発する言葉。類語にモルスアがある。

・ゴンドラ

昔は結婚式で新郎新婦がゴンドラで登場と言うのが結構メジャーだった。最近は見ない。

・泡沫の友情ごっこ

柿山は主人公との友人関係をそろそろ終らせようと思っている。
そのタイミングはまだ未定。

5月6日 優雅な食事と話（前書き）

閑話というわけでもないのですが
冬馬との絡みの話です。

今後、文字通り絡むかは神のみぞ知る所です。

5月6日 優雅な食事と話

キャンプが早めに終わってしまったせいでゴールデンウィークが一日暇になってしまい、別に家でダラダラしていても構わないのだが、せっかくの大型連休を家で無駄に潰すのももったいない。というわけで、柿山に遊びに行こうぜと言ったのだが…

「ふはは、すなまいね。私は予定があるのだよ」

なんぞと言われてしまった。

「予定？」

「小雪先輩と楽しい楽しいガールズトークだ」

「先輩と…お前で？」

「ああ」

どんなトークだ？

想像がつかないすぎる。

性格がおもいきり違うこの二人だ。話が噛み合うとは思えない。

そう言えばそもそもその疑問なんだが、柿山と小雪先輩は何で仲が良いんだろう。

共通点なんて一切無いように見えるんだが。

そもそも小雪先輩が懐くってすごいことだぞ。

俺と小雪先輩が仲が良いのは、運命の悪戯だ。
冬馬先輩と準先輩が小雪先輩と仲が良いのは家庭の事情を含んだ必然だ。

そして、それ以外の人間と小雪先輩が仲良くなった事例は現在まで確認されていない。

その唯一の例外が柿山だ。

一体どんな経緯で仲良くなり、どんな付き合い方をしているんだろう。

そもそもガールズトークってどんな話だ？

気になる。

「と言うわけで悪いのだが、私たちは女の子の会話に花を咲かせる、コレばかりは男子禁制だ。君は男友達とでも遊んでいたまえ」

と、そんなことを言いながら、柿山は何処かに消えてしまった。

しかし男友達と言われても、俺に男の友達なんて…

.....

「というわけでユキに予定が出来たわけで、俺達も暇になったわけだ」

「ええ、しかもユキから、貴方が寂しがってるでしょうから一緒に遊んで来なさいと言われてしまいました」

この人達しか居ないわけで…

「男ばつかであそびにいこうぜ」

「ふふ、友情を深め合うのも良いものですよ」

とまあ、そんな経緯で俺は冬馬先輩と準先輩と遊ぶことになった。遊ぶことには異存は無いのだが、問題は何処で遊ぶかということである。

正直、この三人、全く趣味が合いそうに無いので何処に行っていやら、皆目見当がつかなかった。

しかし、そんな俺の心配は杞憂で準先輩が行き先を事前に考えてくれていた。

「実は若が前々から行ってみたいというところがあつてな。」

「ええ、実は今まで行ったことがなかったんですよ」

「へえ、何処なんすか？」

冬馬先輩が行かなそうなところか。少し興味があるな。

「飲食店なんだが」

「ほうほう」

コレは興味深くなってきた。

飲食店。

しかもこの二人が態々俺を誘って仰々しく行くようなところ。

コレは高級店の予感がする。

なにせこの二人。

医者の子である。

お金持ちである。

ブルジョアである。

良いものを常日頃から食っているのである。

そんな二人が行きたいと言うからには、相当なランクの店が期待される。

「俺は付き合いで何度か行ったことはあるんだけどな、若はまだ無いそうだから、いい機会だと思ってな」

「私も常々行きたいと思いつつも都合が合わなかったんですよ」

冬馬先輩ほどのブルジョワジーですら行ったことがなく、同じくブルジョワジーの準先輩も付き合いでなければ行かないところ。こ…之は相当に敷居の高い店だぞ。

「ふ…服装はこれでいいんすかね？」

今の俺の服装。ボロボロのジーンズとヨレたシャツ。汚いスニーカー。

名店に相応しい格好とは思えない。

背広とか持っていないけど、せめて制服に着替えなおしたほうが良いだろうか？

「そうですね、準、私もあそこに相応しい服装というのを私も知らないんですが」

「いや、別に私服でいいんじゃないか？俺も行くときはいつも制服だからあんまり服装を意識してなかったけど。特に服に規定はなかったと思うぞ？」

よかった、服装については結構フランクな店なのか、それとも全席個室なのか、とにかく服装は気にしないでいいらしい。

最悪の場合、ダブルのスーツとチヨビ髭を用意しなきゃいけないかと思つて焦つたぜ。

そうなる、後の心配事は…

「準先輩、その店、なんかルールとか無いッスかね。おれ、そういうところのマナーとかよくわかりませんよ？」

フィンガーボールの水とか、余裕で飲む自信とがありますよ？

「そういえば、私もよく知りませんが、独自のルールとかあるんですか？」

俺と冬馬先輩の不安に、準先輩は揺るぎない笑顔で答えた。

「まあ、結構特殊っちゃ特殊だけど、まあ、行けばわかると思うぞ？その都度俺が教えるし。習うより慣れろだ」

なにやらややこしいルールがたくさんあるようだ。

正直、不安だが、準先輩についていけばわかるのだろう。

俺はドキドキしながらその後ろについて行き。

そして到着した。

冬馬先輩のあこがれの店、

マグドナルド・ハンバーガーに。

あ然とする俺と、どこか楽しそうな冬馬先輩に向かって、準先輩が一言。

「まずなレジに並ぶんだ」

知つとるわ！

俺の緊張返せ！！

呆れ返る俺とは対照的に、冬馬先輩は終始楽しげだった。

セルフサービスのペーパータオルを興味深く観察したり、

マスコットのロナードの等身大人形のケツを撫でたり、

何故かゴミ箱の隣に有る洗面台で手を洗ったり、

いい年してハピネスセットを注文したり、

店員さんにフランクに「笑顔」を注文したり、

そして、その笑顔に微笑がえしをした上で、相手の笑顔を褒めたり。

こんな感じに無邪気さを持ちつつも、自然に気障な事をできるあたりがこの人のモテの秘訣なんだろうな。

俺が同じように店員に「笑顔」を注文したところで、出てくるのは苦笑いか愛想笑いだというのに。

先輩はいとも容易く店員さんの心からの笑顔をゲットしてやがる。妬ましいやら、羨ましいやら、弟子入りしたいやら。

とにかくそんな流れで、それぞれ好きなメニューを、カウンターで注文する。

冬馬先輩はハピネスセット、

準先輩はクォーターパウンダーセット、

俺はマッグポークとジャカジャカチキンとビックマッグ、あとポテト、

を、それぞれ5個。

店員さんに、

「お持ち帰りですよね？」

と言われたので、

「いえ？ここで食べますけど？」

と答えると、何故か引きつった笑顔を見せられた。

さて、全員の注文も終わり、俺達は席についたわけだが、なんだか、ジロジロ見られている気がする。

まあ無理もない。

いい年をして冬馬先輩はハピネスセットを買っているし、

準先輩は一心不乱にキッズコーナーを凝視している。しかも「いいなあ、子供は、ああ いいな」とか小さい声でなんか怖いこと言ってるし。

こんな変な集団、どうしたって注目される。

まあ、人目を気にしてはいけない。この人達が変なのは今に始まったことじゃない。

「おや…お仕置きシールですね」

ハピネスセットのおまけを見ながら冬馬先輩は大はしゃぎだ。

いや、先輩はのどかな人だから、はしゃぐと言っても騒いだりはしないんだけど。それでもこの人の普段のテンションからすると、今日はすごくはしゃいでいる部類だ。

初めてのマッグが相当楽しいのだろう。

「しかし、先輩マッグ初めてだったんですか？デートとかで来たことも無し？」

先輩自身はたしかにマッグこなさそうだけど、誰かと一緒に来たりはありそうなものだけだ。

「デスバーガーになら入ったことは有るんですが、こちらには誘われたことはありませんでした」

なるほど。

たしかにデスバーガーに比べるとマッグは粗野なイメージがあるからな。

周りの人間も冬馬先輩みたいなブルジョワを誘うには抵抗があったのかもしれない。

でも、デスバーガーにしても、大まかなシステムはマッグと相違無い気もするんだが。

「その時はどうしたんですか？注文とかやり方わかりました？」

「その時は女の子たちが全部やってくれましたので」

スイマセン先輩、今俺、尊敬する先輩に対して少しばかり殺意を抱いてしまいました。

「たち」ってどういう事じゃ。複数か。女の子複数なのか。

そうだ、女の子といえば…。

「今頃小雪先輩たちなにしてるんでしょうね？」

ふと思いついたことを口から零した。

「さあ、でも楽しそうに準備をしていましたから、きっと楽しんでるのだと思いますよ？」

「そうっすか？」

楽しい…のか？

柿山との会話だぞ？

正直、いつも一緒に居る俺でさえ、脳みそがオーバーヒートしかる時があるのに。

それを楽しみにできるあたり、やはり小雪先輩は計り知れない。

「ユキと言えば、彼女から聞いたんですが。川神百代さんを倒したんでそうですね？」

実に自然に。

まるで当然のようにそんな事を言われたものだから、俺はもう、どう答えていいやら。

「ああ、俺も聞いた。ビーってなってドーンで倒したって」

寸前まで幼女をウォッチングしていた準先輩まで会話に混ざってきた。

「それ…信じたんですか？」

というか、ビーってなってドーンで意味が通じたの？

「ユキは私達に嘘はつきませんから」

「ホラは吹くけどな」

まあ、たしかに、小雪先輩って嘘ついている所見たことないな。

冗談レベルの珍言妄言は多いけど。

「まあ…先輩たちは嘘いってもしようがないから言いますが、勝っちゃいましたよ、不本意ながら」

「そんなに強いとは驚きですね」

「ほんと、一見そうは見えないのになあ」

先輩たちは軽い調子で答える。

俺の言葉に一切の疑問を感じていない。

普通だったら川神百代に勝ちましたなんて、信じるはずがない。それ程に川神百代という存在はこの界限では「絶対」なのだ。

しかし、そんな「絶対」を打ち壊したことをあつさり信じるということは、それだけ、俺や小雪先輩のことを信じてくれているんだろう。

「秘密ですよ？秘密ですからね、誰かに言ったらマジで切れますからね、それはもう、大人気ないくらい、泣きながら転げまわりつつ、周りが引くくらい怒りますよ。」

勿論、釘をさすことを忘れない。

彼らに俺に対する害意はないだろうけど、ひよんな事で口から漏れる可能性はある。

注意は促しておくに越したことはないだろう。

「なぜ秘密にするんです？」

「正直、言えば人気者になれるぞ？」

なぜって…そりゃ。

「そりゃあ、嫌だからです。正直こんな力があつたって何も楽しくありません、むしろですよ？この力をアピールしたら何か良いことでもあるんですか？」

俺がそう言うと二人は声を揃えて…。

「モテるよ」

「モテますよ」

「……………モテ
てなくてもいいです。」

「いまだいぶ答えるまで間があつたな」

「葛藤してたんですね」

そこはスルーしてくださいよ。思春期なんだから。むしろ、それでも否定した俺を褒めていただきたい。

「先輩、たしかに、この力を常日頃から全面に今の川神百代みたいにモテるかもしれませんけれど。でもね。おれは彼女を見るたびに俺は思っんです。」

「思っつて？」

「何をです？」

「なんて一人ぼっちなんだろうって。彼女は強いです。強いからかっこいい。だからファンも多い。でもね、彼女の今の人気は言い換えれば強さによるものです。」

すなわち、彼女の周りにいる人間は彼女なんて見てないんですよ。その強さという存在を見てるに過ぎないんです。誰も彼女の本質を見ようとしない。彼女を見ると、まずその強さしか見ない。だれも「川神百代」を見ていないんです。皆が見ているのも、仲良くしてるのも、好きなのも「強い女の子」なんですよ。」

そう。

一部の例外はいるが、ソレ以外の誰もが川神百代のことを「強くてかっこいい化物」としてしか見ない。川神百代という人間そのものを見てはくれない。

「たしかに俺が彼女を倒したとなれば多少俺の人気も上がるでしょうけど、それは俺の強さに対する人気です。俺自身の人気じゃあな

い。上辺だけ観るような輩に囲まれて、嬉しいはずが無いじゃないですか。そりゃあ、おれだって男の子ですよ、女性に言い寄られてアワヨクバ、アバンチュールしたいと思うこともあります。それは否定しません、でもね、そりゃ俺の事を見ていない女性を、「強さ」って餌でつってヤツてるだけで、そこに愛情がなけりゃマスターと変わらんですよ。フーゾクに行つたほうがよっぽど早いです」

もちろん、例えばの話だからな。

フーゾクには行かないよ。

本当に行かないんだからな！

「でも、モテるモテないを抜きにしても、川神百代の様になりたいとは思わないんですか？ 楽しげで、天真爛漫な様子をみて、羨ましいとか思いませんか？ 眩しいとは思いませんか？」

なんか冬馬先輩、やけに川神百代にこだわるなあ。

まあ、それだけ、あの化物の影響力がすごいというのもあるが。

もしかしたら、先輩。川神百代が羨ましいのかな。

冬馬先輩、頭はいけど、腕力はからつきだからな。人は自分のもたないものに対して嫉妬を覚える生き物だし。

「そりゃあ、羨ましいとは思いますが。少しは。でもあの立場になりたいとは思いません。現状に満足してますから」

「満足ですか？」

満足です。

コレ大切ですよ？

現状に満足しない人間は、永遠に満足を覚えないもんなんですよ。

「たとえば、こうして男友達で遊んで、飯食って、話して……。コレってふつうのコトですけどもう十分楽しいじゃないッスか」

というか、アレだけ初マッグでハシヤいでおきながら、楽しく無いとしたら、ちょっと精神的にアレですよ？先輩。

「……」

「こういう、楽しい日々が送れて俺は満足ですよ。……これで他人のことを羨ましがってたらキリがないっす。それとも先輩は今楽しくないッスか？」

「いえ…楽しいですね」

「なら良いじゃないですか。」

俺がそう言うと、冬馬先輩は俯き気味に少し考えはじめた。

少し不思議だった。

何でそんなに悩む必要があるんだろう。

別に特殊なことはいっていないはずだが。

どうしてなのか、回答を求めようと、準先輩の方を見ると、コレまた真面目腐った表情で考え込んでいる。

俺、そんなに変なこと言っただろうか。

だんだんと不安になってきて、俺が何か悪いこと言ったのではと

思い始めた頃。

冬馬先輩は顔を上げた。

その表情に、俺は驚いた。

その表情は、笑顔だった。

いつも浮かべている微笑とは違って、何処か安心したような笑顔。なんだか、出会ってから初めて本当の先輩の笑顔を見た気がした。

ソレがなんだか嬉しかった。

嬉しいんだけど。

だけど。

何というか、

その笑顔ヤメてくれませんかね。

いや、別に冬馬先輩が笑顔で嫌ってわけじゃないんですよ？

何故か。

何故かその笑顔を向けられると。

俺のケツが逃げると騒ぐんですが？

5月6日 優雅な食事と話（後書き）

用語解説

・ダブルのスイツとチョビ髭

主人公の完全に間違った金持ちイメージ、最終的にお札を燃やして「どうだ明るくなったろう」とか言い出す。

・フィンガーボールの水

あんな物飲むのはフィクションの世界だけだと思う人よ。それは間違いと言う物だ。

シンブルにボールに水が入っているだけならば間違えないのだが、実際のフィンガーボール、ハーブやレモンが浮いていたり、お茶や薬膳で匂いをつけてたり。

もう、飲み物と間違えさせるためにだしているとしたか思えないような出で立ちでテーブルの上に置かれるのである。

しかもタイミングも、前菜の後のメイン寸前の喉が渇く頃合いとかに出されたりして……。きっとあれはブルジョワ共が庶民を笑うために仕掛けたトラップだ。

・5個

主人公の食費がすごいことになっているが、どのようにして賄っているかというと、学園で得た食券及びその転売による利益である。主人公はすでに食券賭博で838861枚の食券を手に入れている、しかも元値は4円で。そのとんでもギャンブラーぶりこそが主人公がティアイと呼ばれる所

以。他にもカジノロワイヤル、ラッキーマン、ドラクエ4とか呼ば

れている。

・ドラクエ4

なぜドラクエ4という渾名かというと、とあるカジノ裏技が由来。

・お仕置きシール

2009年5月のハピネスセットのおまけ。「タイムドカンシール」

マツグの店舗を舞台に、キャラクターが描かれたホログラム加工のシール。「ポツチリとな」 「おしおきでゴンス」といったおなじみのセリフが書かれた名セリフシ

ール。人気キャラクターが描かれたシールの3タイプあり、各10枚で、計30種類。ハピネスセット、1セットにつき、3枚のシールが付いてくる。

・こんな変な集団、どうしたって注目される。

もうちよつとよく周りの視線の先を見てみようね。

みんなの視線テーブルの上に行っていないかな？

積まれたバーガーとリアル山盛りポテトに視線が釘付けじゃないかな？

・マスター

さすがの主人公も直接的な表現は流石に憚られると思った。周りに子供もいるし。だからマスターという言い方になったのだが。

感想で「どういう意味？」とか聞かなように。聞かれたとしても答えかねる。

・冬馬先輩の笑顔

冬馬先輩は常に笑顔。

でも、心から笑っていることは殆ど無い。

今回、心からの笑顔を主人公に見せたのは。別にフラグというわけじゃ…無いよな？

幕間・冬馬と平凡な幸せ（前書き）

特にこの話には直接関係のない話ですが、
原作リュウゼツランルートが潰れましたよ、という閑話です。

あのルートになると三人がどうしても不幸な方向に行くので、事前
にフラグが折れましたよという報告的な話です。

幕間・冬馬と平凡な幸せ

目の前でマズイ、マズイと言いながら大量のハンバーガーを頼張る彼。

本当だったら今日、彼にとあるお願いをするつもりでした。

具体的なお願いではありません。
なにせ、何をするかの具体的な計画が出来ているわけではないんですから。

ただ、するべきことは決まっていました。

この街を潰す。

理由は特にありません。

強いて言うならば嫌いだからでしょうか。

まあ、暇つぶしの娯楽とのようなものです。

とはいえ簡単なことではありません。

念密な準備を必要とします。

特に必要なのは駒。

そのなかでも取り分け力のある人材が必要です。

なにせ、この街には川神百代を初め、力のある人間が多すぎます。そういった人間たちごと、この街を蹂躪するには、それと同等の暴力が必要でしょう。

勿論、現状でも十分と思われるだけの暴力は手に入れています。が、保険は多いに越したことはありません。

私が、力のある人間を探しているとき。

ユキから、彼の実力を聞かされました。

普通ならば、冗談だと思います。

いつも登下校で話しをする彼。地味で、特に目立つたところのない彼。良識的で、影の薄い彼。

そんな彼が、川神百代を倒したなんて言われて、信じるものがこの界限に居るでしょうか？

しかし、私は、ユキからソレを聞かされたときに。

私は疑うでも無く。
納得をしました。

なぜなら彼は、ユキを助けた人だからです。

彼という存在を知るまで、私はユキを助けたのは自分だと思っていました。

彼女と共に暮らし、彼女の心を救い出したのは自分たちだけだと思っていました。

しかし、彼と出会ってそれが間違えだと気が付きました。

ユキの口から語られた彼のしたことに比べれば、私達のしたことなんてえらく関節的な物でした。

彼女を直接助けたしたのは、誰でも無い、彼一人だけなんです。そう、彼こそがユキのヒーローなんです。

そんな彼が、普通の人間であるはずがありません。

川神百代を倒せるほどの人間であっても何ら不思議は無いのです。

・
・

いや、それは私の願望だったのでしょう。

ユキを助けられた人間を、
自分が出来なかった、そして自分がやりたかったことを成し遂げた彼が、普通の存在であってほしくなかったのです。

彼は特別だ。特別なパワーを持ってるんだ。
だから、ユキを助け出せた。だからユキが懐く。そう思い込みたかったんです。

そうでも思わないと、彼のことを嫌いになりそうだったから。
なぜって。

私は、嫉妬していたんです。

ユキを助け出せた彼に。
ユキに好かれていた彼に。
ユキと楽しそうに話している彼に。
ユキに抱きつかれている彼に。

私に取って、ユキだけが支えでした。

ユキと居て、本当に助けられたのは私自身だったのです。
ユキだけが私を受け入れてくれました。

この街を潰そうとするほどに汚れきった私の心。そしてそんな汚れている自分が嫌いで嫌いでたまらない私。
そんな心の中の黒い部分も、私の嫌なところも、そしてソレを受

け入れられない自分も。全て受け入れてくれるのはユキしか居なかったのです。

ユキ以外では、準もソレ以外の仲間も私自身も、コノ私に流れる不愉快な感情を受け入れることは出来ないのです。

準はたしかに、私の親友です。

私の黒い部分を理解した上で、それでも付き合ってくれています。

しかし、彼はこの私の心のなかにドロドロと溜まっているソレを受け入れているわけではありません。

消せるのならば消したいと、しかし消せないから妥協しているに過ぎないのです。

かと言って、コノ黒い感情に惹かれて集まった仲間は、その黒い感情だけを見ます。そうになると、今度は私自信のことを見てくれない。

コノ不愉快な感情を、そしてその心が嫌いで、嫌いでたまらない私を。全てひっくるめて受け入れられるのは。世界でただ一人。ユキだけだったのです。

ユキという存在は、私に取って一番に大切な物なのです。

面白いもので。

大切になればなるほどに、

私はユキに対して劣情を抱かなくなりました。

コノ劣情もまた、私の黒い部分の一つなのです。

大切な人間に対して抱くべきではない。忌むべき感情なのです。

ですから、私が性的欲求を覚えるのは、どうでもいい。ソレこそ、次の瞬間に死んでしまっても良いような人間。好きでも嫌いでもない存在に対してだけでした。

まあ、コノ劣情を切掛にして、仲良くなった人間もいるわけですから、例外がないわけではないですが。

兎に角、そんな私に取って特別な存在であるユキに、親しげにされている彼に嫉妬を覚えていました。

しかし、彼を嫌いになることは出来ませんでした。彼を嫌いになったら、きっとユキはソレを敏感に感じ取って悲しむと思ったからです。

だから、彼は特別だと思い込むことで、コノ嫉妬心を逸らし続けることしか出来ませんでした。

・
・
・

しかし、彼が特別であることが、私の思い込みではなく、事実であるとわかった今。

私の憂いは無くなったわけです。

彼もまた、私の同士になってくれると思いました。

私の中に黒い血が流れて居るように。

彼の中には途轍もない力が渦巻いています。

彼が、川神百代を嫌っているという話も聞きました。

親近感を感じたんです。

彼は私と同じだ。

現実を否定したくて、川神百代らに嫉妬をする。
黒い黒い化物だと。

そう思っていました。

今日この瞬間まで。

・
・
・

彼に現状にある不満を壊そうと。

君の嫌いな川神百代を潰そうと、そういう話をしようと思いました。

しかしその話をするより前に、彼はそもそも現状に不満が無いと言う事を言い出しました。

しかも彼は。

あの川神百代をかわいそうと言いました。

あの誰よりも好き勝手に生きている川神百代を、かわいそうだと
言っただのです。

自分たちのほうが、彼女たちよりも恵まれていると。

彼女たちよりも楽しいと。

本気で言っていたのです。

「こういう、楽しい日々が送れて俺は満足ですよ。……これで他人
のことを羨ましがってたらキリがないっす。それとも先輩は今楽し
くないッスか？」

その言葉で私は気がついてしまいました。

彼は現状を楽しんでいる。

そして、

そして私もまた、彼と居る日常を、楽しく感じていたのです。

「いえ…楽しいですね」

「なら良いじゃないですか。」

そう言っただけ彼の笑顔。

それは、何処にも暗い影はなくて。
心のそこからそう言っていました。

そして。

そして、その笑顔で理解しました。

私は、川神百代や、その仲間たちのようになりたかったんだと。自分がこんなにも不幸なのに、なぜ彼女たちはあんなにも楽しそうなんだと、駄々をこねる子供のごとく嫉妬していたんだと。

そして、彼女たちが楽しそうな様を見るたびに、それと比較して自分の不幸を嘆いてばかりいました。

だから消してやりたいと思ったんです。

彼女たちのグループも。

彼女たちを許容するコノ街も。

彼女たちが存在するこの世界を。

目の前にある幸せから目を背けて。

そう私が欲しくて欲しくてたまらなかった、楽しい日々は、すでに手に入っている。こうして、平凡な日常を過ごす事に楽しみを覚えていく。

川神百代のグループに嫉妬を覚える理由は何一つとして存在していなかったんです。

ソレに気がついた瞬間。

まるで、憑き物が落ちたように気分が軽くなる自分がいました。

彼の言葉で。

私は自分が幸せであるという事実に気がついた。

誰に対しても、嫉妬を覚える必要が無いことに気がついた。

自分自身に嫌いな部分があっても、幸せになれると知ってしまった。

なるほど。

彼はたしかにヒーローです。

自分の力にも、自分の環境にも振り回されず、自分の信念を貫く。そして、人を救い出す力を持っている。

腕力というわけではなく。

誰にもない、その特殊な魅力でもって。

おそらく。ユキも彼に対してコレと同じ感情を持っていたのですよ。

今なら、ユキが彼に抱きつく気持ちが悪くわかります。

「先輩？なんか、俺の顔についてます？って言うか、先刻から視線が完全に俺に来てるんすが」

「気にしないでください」

「いや、さすがにそんなにガン見されると飯が食いにくいというか……いや食べますけど」

「気にしないでください」

私の視線に、オドオドと怯える様子の彼。

如何にも平凡そうで、それでいて力持ちで、優しくて、そして魅力的です。

ああ、なんでしょう。

彼を見ていると、私の中にこみ上げる感情は。

ユキに対して感じる気持ちに似ていますが、それとも違う感情。

ソレは。

尊敬のようで、恋のようで、
憧れのようで、

ああそつだ。

コレを世間では

變つてゐるのですね。

幕間・冬馬と平凡な幸せ（後書き）

用語解説

・マズイ

なんかパンが紙みたい、肉がゴムみたい。でも食う。
主人公、実はエンディーズ派。チリソースが大好き。しかし、残念ながらこの数年後にエンディーズは日本撤退をする。

・計画

今はまだコマを集めている段階。計画も具体的に決まっているわけではない。主人公の戦闘力を知り、コマとして使おうと思っていた。

・黒い部分

というか、黒い部分が無い人間なんて居ない。冬馬は妙に潔癖で、自分にそんな感情があるのに耐えられなかったのではなからうか。それでもって、悪い感情があるから自分は悪い人間なんだ、だから悪いことするぞ！となっていたのではなからうか。極端な性格である。

・ユキはソレを敏感に感じ取って悲しむ

主人公に手を出さなかったのもコレが理由…ではない。
純粹に平凡すぎる主人公の顔が好みじゃなかったから。

・子供のごとく嫉妬

自分に対して余裕が無い時は、楽しげにしている人間を見ると、俺がこんなに辛いのに楽しそうに笑いやがって「死ね！」って思う。コレって結構普通のこと、切羽詰っているとき、人は他者を思い

やる気持ちが欠如する。冬馬は自分が不幸だと思っのに忙しくて、他者に対して嫉妬を覚えたのではなからうか。

・憑き物が落ちた

冬馬は頭のいい人間だが、こういった人間ほど他者の忠告を聞かない傾向がある。他者が、お前は幸せなんだぞと言ったところで信じてない。だから自分自身でその事実が気がつく必要がある。だから主人公の誰に対して言うでもない幸せ論が心に響いた。あるいは彼は気付きたかったのかもしれない。

人間には本能があり、精神的に参るとその状況を打破しようと何かしらのアクションを起こす。主人公の何気ない一言から、むりくりに自分を救う理由を見つけた可能性が高い。

・愛とよぶ

先輩こそが真のヤンデレ説

冬馬は主人公に愛を感じている。

ただし、ソレは肉欲を超えたアガペー的な愛。

だから、主人公に危険はない…のか？

5月8日 馬とモナカと

視線を感じるといふことがある。

少しオカルトチックな話で、特に具体的なプロセスが判明しているわけではないのだが。

昔から視線を感じる能力と言うのは人間に備わっているとされていて、結構真面目に研究している学者先生が居たりする。

俺は人間離れた力を持っているわけだが、それは純粋な力だけではなくて、こう言った第六感的な能力も強化されているらしい。殺気や気配や視線を察知する力も存分に上がっている。

しかも人並み外れて高い察知能力は、自分に向けられた視線に殺気が込められているか否かまで読み取れる。

何を言いたいかと言うと。
今、視線を感じてるのだ。

いや、視線なら結構前から感じている。

具体的には、川神百代との決闘後、殺気混じりの視線がチクチクと俺に突き刺さっているんだが。昨日あたりからそれらとは別の変な視線を感じる。殺気の無い視線だ。それも、直接俺に向けられていると言っ感じでもない。

それで、不思議に思っていたんだけど、先程その理由が解った。

この視線を感じるの、朝柿山と話していたとき、昼に柿山と飯を食べたとき、そして、今。放課後柿山と話をしているこの瞬間。

この視線は柿山と居るとき限定で感じる。

つまり、この視線の主は、俺ではなく柿山に向けられていて、柿山と一緒にいるときに俺はその視線を感じ取ってしまっているんだ。

そうなる、俺には直接関係の無いことになるのだが、柿山を監視するなんて物好きの存在に少しばかり好奇心を感じた。

俺を監視するなら理解できる。

非常に不本意ではあるが、俺は川神院に嫌われているし、川神百代を倒したという事実を持っている。もちろん秘密で有るのだが、そついった秘密は噂という形でどうしたって漏れ出す。

しかし、柿山に関してはどうだろう。

誰かを倒したわけでもない。

何か凄いことを成し遂げたわけでもない。

たしかに変わり者だとは思うが、それでも異常というほどではないし。誰かしらに注目されるような人間ではない。

それどころか、影の薄さに関してはクラスでは一番ではないだろうか。こいつは不思議と昔から存在感が希薄だ。

そんな人間を何が楽しくて見続けるのだろうか？

そんな事をするのならば、まだ楽器屋さんのトランペットを延々と見ていたほうが有意義と言う物だ。

「柿山……」

「何だ？」

「最近視線を感じないか？」

「……言われてみれば……感じるような気もするな」

言われてみれば……か。

まあ、たしかに柿山には視線感知スキルなんぞ無いから、見られているという自覚が無いのと当然だとは思うが。

「視線を感じる心当たりはないか？何かに取り憑かれたとか」

「ハ！いい年をしてお化けかね。もう少し現実的は話は出来ないのか」

思いつきり馬鹿にされた。

「プレアデス星人に監視されているとか？」

「ふむ、たしかに宇宙人が人間を観察するという説は考えられることだな。姿が見えないのも頷ける。しかし視線を感じてしまうということは直接の監視ということだろうか。彼らの科学技術ならば高性能のカメラを使うことも可能はずだが。まあ、たしかに裸眼か否かではその見え方が違うのも事実だし。いや、そもそも地球的発想で考える事自体が間違えで………」

柿山。

お前の基準がよく解らん。

お化けはありえないけどUFOはありえるのか？

しかし、柿山の口ぶりからすると本当に誰かに監視されるような心当たりは無いらしい。

コレが殺気だったりすれば発生源もわかるのだが。
敵意がない上に、俺に向けられていない視線ともなると、発生源が誰なのか俺にも解らない。

だいたい、視線を感じるとは言っが、俺たちを監視している奴なんて、どこを見たって…

…

…

…

…あれ？

居た。

ロッカーの影からすごい形相でこっちを見ている人が居る。

アノ人だ。絶対アノ人だ。メガッサこっちを見てる。

なぜ今この瞬間まであれに気がつかなかったんだろう。
あんな鬼の形相で睨まれれば、気がつくはずなのに。
というか、あの人、あれで隠れているつもりなのか？
ものすごい目立ってる。

「柿山？お前最近誰かの恨みを買っようなことした？」
「いいや？」

まだ、ロッカーの影の存在に気がついていない柿山は、普通の調子で答える。

そうか？

そんなはずないだろ？絶対なんかしてかしてるだろ？
なんか、ものすごい形相だぞ？
親の敵みたいな表情で見られてるぞ？

「柿山の知り合いにさあ、刀を小脇に抱えたロングヘアーの一年生
って居る？」

「なんだそれ？あ、ナゾナゾか？刀を小脇に抱えたロングヘアーの
一年？なかなか難解だな」

ナゾナゾじゃねーよ。

何が楽しくてこの年になってお前にナゾナゾを出題しなきゃなん
ねーんだよ！！

こっち見てる人の容姿だよ！
たしかに訳わかんないけれど、事実としてその人がこっちを見て
るんだよ！

ロングヘアーの一年生が、刀を持ってお前のことを睨んでるんだ
よ！

袋を被せてあるけれど、あの手に持つてるのは完全に刀だ。

柿山！おまえ一体あの人に何をした！？

「わかった！…答えは神永信一社長か？」

チゲーよ、っていうか誰だよ神永信一って。

「いや、ナゾナゾじゃなくてだな、そういう人物に心当たりは無いのか？」

「ない！」

言い切りやがった。

とはいえ、たしかにアノ人がこっちを見る視線には殺気は含まれていない。

恨みのこもった視線というよりは何かを言いたそうにしているようにも見える。

そもそもあの表情で睨むくらいなら、出てきて何か言ってくれたほうが良いと思うのだが…。

なぜ出てこないんだ？

出てこれない理由がある？

何かジャマになるような存在でもあるのか？

…

俺か？

俺がいるから柿山に近づけ無い？

それにやきもきしてあんな表情になってる？

可能性としてはあり得るな。

となれば、俺は取り合えずフェードアウトすべきなんだろう。
あの怖い表情の人の目的がなんなのかは不明だが、俺がこの場に
いては状況が進展しない。

「柿山…俺ちよっと、校庭の隅っこで、20世紀のジャンプオール
スターの中で誰が一番強いかの脳内会議してくる」

「は？」

「兎に角、さらばだ柿山。後は君の健闘を祈る！」

そう言っただけ俺は敬礼をした後、そのまま廊下の角走り抜けた。柿
山は俺の突発的行動に呆然としている。

勿論、脳内会議云々は嘘だ。

いくら俺が内向的だからと言って、校庭の隅でそんなことをする
ほどに精神が病んでいるわけではない。

校庭に行くふりをしながらも、柿山たちの視界に入らない位置か
ら様子を観察する。

一応状況がどうなるのか見た上で、やばくなりそうだったらアシ
ストすることにしよう。

殺気が無いので大丈夫とは思っただけ、あの怖い顔でこっちを見る人
の表情は只事ではない。

俺の予想どおり、俺の存在が怖い人の行動を阻害していたようで、
俺がいなくなつた瞬間から、あの俺らを睨んでいた怖い人が動き出
した。

柿山は、未だ俺の突然の行動に理解が出来ないのか、呆け気味だ。

その柿山の後ろに、怖い人はドンドンと近づいてきている。

怖い！

下手なホラー映画よりずっと怖い！

あ、柿山後ろに気がついた。

「……………」

「……………」

「スマンが、いま、現金のたぐいは持っていない、悪いが他を当たってくれ」

だよな！普通そう思うよな。

あの表情は完全にカツアゲだもん。俺も視線に殺気が有ればそうだと判断したよ。

「へ？え？え？は？」

しかし、当の怖い人は困惑気味だ。

やはり目的はカツアゲじゃあ無かったようだ。

「ちちち違います。私は1-Cの黛由紀江でして、でして、かかか、カツアゲじゃないです」

「HEY。いきなりそんな発想するなんて、かなりのドリーミーだぜ」

「？」

いま変な声した？

あの場所には柿山とあの怖い人しか居ないはずなのに。
なにやら微妙に違う口調の言葉が飛び出たぞ？

「こら、松風。突然言葉を発すると相手の方が驚いてしまいますよ？」

そう言いながら怖い人は右手に有る何かに話しかける。死角になつてよく見えないが、MATUKAZE？

松風とは、かつての大日本帝国海軍の神風型4番艦の名前だった筈だ。

アメリカ軍の巡洋艦2隻及び駆逐艦4隻を撃沈するという快挙を成し遂げた、恐るべき駆逐艦なのだが…

さすがにその「松風」では無いだろう。
学園に入れないし。

同じ理由で特別急行列車「スーパーまつかぜ」や、ちよかぜ級巡視艇の「まつかぜ」でもないだろう。

なにやら手の中に収まる小さい物のようだし。
小さい「松風」となると…

やばいぞ、柿山。相手は和菓子とお話してる！

右手に収まるサイズの松風といえば、あれだ。
和菓子「松風」

昔から愛される伝統ある和菓子で、バリエーションも豊富。

「味噌松風」や「薄焼き松風」、さらには「利久松風」など、どれも美味しい。

美味しいけれど。

その和菓子とお話するのはちょっと…いや、かなり変な人だ！

「何だ？それは？腹話…」

「ちちち、違います。松風は九十九神です！」

柿山が何か言おうとするのを遮るように怖い人は九十九神と言いつ出した。

TUKUMOGAMI？

そんな食べ物聞いたことが無いぞ？

「ふむ、九十九神といえば民間信仰における観念で、長い年月を経て古くなったり、長く生きた依り代に、命が宿ったモノの総称だったな。一説には九十九年経ったモノに命が入るともいわれるし、また一説には百年経ったモノに命がやどるので、付喪となるのを恐れ九十九年でモノを捨てる風習があったとも言われている。精霊信仰やアミニズムの一種と言えるな。」

柿山、解説的台詞ありがとう。でもなぜ突然説明的台詞を？

おまえひょっとして、俺が近くに居るって気がついてる？

しかし、なるほど九十九神か、和菓子に魂が…

「ほら！松風、ご挨拶を。」

そう言いながら、怖い人は右手の中を差し出した。

掌には一体の…

「HEY！オイラが松風だぜー」
馬ッコモナカ？

「木彫りのストラップなんです！」
ああ、なんだ、木彫りの馬か。

しゃべる和菓子とかちよつと夢があつて良いかなと思つたのに。
木彫りに松風とか名前付けるなやややこしい。

「ふむう。松風くんか。なかなか良い名前ではないか。私は柿山衣子と言うんだ、よろしく。正直私としても今までの生活の中でストラップがしゃべるなんて事を見聞きしたことはないのだが、うむ、これはなかなかどうしてキャワイイではないか。」

柿山は特に驚いた様子もなく、その付喪神を褒めている。

「！大変です松風、普通に受け入れられましたよ！」
「まさかのキャワイイ発言に正直おいらも驚きを隠せないぜ！」
「ははは、うむ、うむ、愉快的コンビだねえ。」

笑顔で会話する柿山と、その反応に喜ぶ一人と一匹。

一見和やかな会話だ。

しかし、柿山の事をよく知っている俺にはこの状況の裏側がよくわかる。

柿山ちよつとテンパツてるな。

相手は柿山の苦手そうなタイプだ。

柿山は非常に頭がいい、論理的に物事を考えて、予想や予測を立てまくった上で行動する。
大抵のことは想定内であつて、何があつても動じないように見える。

しかし、ごくごくまれに、彼女の理解の出来ないことが目の前で起きたり、意味不明なものが現れたりする。

そんな時、彼女はテンパる。

柿山がオカルトを好きなのも、未知のものが怖いがゆえに、それを少しでも理解して怖くなようとしようという側面がある。

まあ、彼女の気持ちはよくわかる。

相手はおどおどしているが、刀を持ち、それでもって付喪神を連れ歩いている。

ナゾナゾにだつてこんな意味不明な人物は拳げられないだろう。

そんな人間が目の前にいれば、そりゃあ混乱するのも当たり前というものだ。

柿山のすごいところは、テンパッていても普通に対応が出来るところだ。

社交スキルが高いとも言える。

しかしなあ。

この状況では柿山の対人スキルの高さがかえって仇になっている。

会った瞬間に嫌悪感を顔に出していれば、相手も早々に立ち去っただろうに。

中途半端に状況をカバーする習性が、意味不明との接触を継続させている。

「まゆっち、これは完全にチャンスだぜ、10年に一度の大チャンスだ。このままのムードで友達ゲットだぜ。」

「そそそそ、そうですね、これは完全にチャンスです!!」

「おやおや、まさか、聞こえるようにいうとは。うむ、実に愉快で結構。」

あ、柿山、普段以上に陽気な声を出し始めた。

これは焦っているときの特徴だ。

しかし相手の怖い人は友達がどうのと言っている。

柿山と友だちになりたかったのだろうか？

「そうだ・・・わ、わ、私とメルトモに!!」

「いきなり友達ではなくて、メルトモってあたりが謙虚だぜまゆっち！」

「ははは、メルトモか」

おお、このままではメルトモになってしまっぞ。
どうする柿ヤマツチ。

仕方ない、アシストしてやろう。

さすがにこの状況を黙ってみているだけというのも悪いからな。
俺はポケットからあるモノを出して行動を起こす。

♪♪♪♪

「！」

柿山の携帯が鳴る。

なんのことはない。俺がメールを送ったんだ。

ちなみに本文には『ワンピースとNARUTOは20世紀ジャン
プオールスターに入れるべきか、それとも21世紀として扱うべき
か』という俺の心の叫びが書かれている。

このままだと柿山、携帯持っていないとか言い出しそうだったから
ね。

ちゃんと携帯の在処を覚えておかないと。

うむ。今日あったばかりの少女の友達作りをアシストする俺。
最高にイイヤツだ。

「ああ、それが携帯ですか？ かつこいい形をしていますね！ 実は私は
携帯電話を買ったばかりで、新機種なんです！」

「いや、携帯を買ったときのまゆっち本当に希望が溢れてたぜ。
まあ、その後登録出来る友達がいらない事実に絶望を感じるんだけど
な。でもこれでそんな悲しい日々は過去のことだぜまゆっち。」

「・・・・・・・・」

あ、柿山、メールの発信元確認してる。

俺がメールしたのがバレた…。

しまった。

柿山ものすごく怒って…ない。

あれ？

どう見ても怒ってない。

あのメールの発信源が俺だと知れば、烈火の如く怒ると思ったんだが、全く怒っていないどころか、少し表情が和らいでる。

なぜ？

「赤外線通信の仕方は判るかい？」

何か意を決したような表情で柿山が言った。

どうやら諦めて赤外線通信をすることにしたらしい。

「ええ！それはもう、血の特訓をしましたから！」

「鏡に向かって赤外線通信をするまゆっちは本当にシユールだったぜー。」

「ああ、あの苦労も今日この瞬間に報われるのですね。」

そんなことを言いながら彼女は赤外線通信の準備をする。

今頃柿山の携帯電話からは、適当な情報が送られているのだろう。

思いの外すんなりと事は終わり、怖い人は笑顔で教室に戻っていた。

良く解らんが。

まあ良かった。

俺がアシストした理由。

別に、今日はじめて見た、あの怖い人のためにこんなことをしたわけじゃあない。

俺なりに、柿山を心配してのことなんだ。

俺が言うのも何だが、柿山はもう少し友人を作るべきだと思う。アイツにとつての友達は、俺と、小雪先輩と、あと武蔵小杉くらいしか居ない。

準先輩や冬馬先輩とは仲が悪いわけじゃあないけれど、友達というほどの関係でもないし。

そういう意味では俺以上に友達がいない。

せっかく相手から友達になろうと言って来てくれるんだ。このチャンスを不意にするべきではないだろう。

「おい、メール返信まだかよ」

そう言いながら俺は柿山の前に姿を表す。

「なぜ君は態々メールなんぞをするんだ」

なぜって・・・。

お前のためにだよ。

「ちなみに君からもらったメールだが、心の底からどうでもいい」

「おま！だいじなことだぞ！あの二つが入るかどうかでパワーバランスが大きく変わるんだから！一番強い候補としては・・・」

「一番強いのはラッキーマンで決まりだろ」

「…あ」

ああ、そう言えばそんな反則キャラがいたなあ。

「でもまあよ、それならラッキーマンに判定勝ち出来た勝利マンは

…」

「だからその話題は心底どうでもいい」

どうでもいいとか言っな！

俺は前世においてこの議題で4時間ほどファミレスで論議したことが有るんだぞ！

「ところで、いつもなら下らない内容にも返信すぐくれるのに今日に限って来ないのは…何かやってた？」

「いや。何も無い」

さも当然のように柿山は言った。

先程の光景を実際に目にしていなければ、信じてしまっただろうほどに平然と。

なぜ秘密にする？

純粹に恥ずかしいから？

それとも何か問題があるから？

俺に先程までのやり取りを知られたくない？

あの人と関係ができたことを俺に知られたくないのか？

それとも…もっと他に、大きな理由があるのか？

とても気になった…

気になったえれど。

なんだか怖くて、聞くことが出来なかった。

結局そのまま柿山とはたいした話もせず別れて、トボトボと家に帰った。

一人で帰る間、ずっと妙な違和感が俺の中で渦巻いていた。

アイツが俺に秘密を作っている事実が、大きな大きなモヤモヤになっっていた。

そして

そのモヤモヤはなかなか消えなくて。

家に帰ってから何か引つかかっていた。

しかし、その夜。

とあるメールによって、柿山が俺にあのやり取りを秘密にしていた理由がわかる。

俺が望む望まないに関わらず、必然的に知ってしまった。

アイツが俺にあのやり取りを秘密にしたのも。

あの俺のメールを見たときに表情を和らげた理由も。

あの時、柿山は赤外線通信であの怖い人と電話番号を交換していた。

赤外線通信。

一部のパソコンなどにもついているが、かなり前の段階から携帯電話にも付いている通信機能だ。

リモコンで代表されるように、赤外線は比較的短距離の間を繋ぐ通信方法だ。

すなわちそれを使って電話通信のような遠距離での情報伝達などは出来ない。

では何をするかというところ。

短距離間における情報交換。

つまり、向かい合って携帯電話の中の情報を交換するのである。これを使っうことで、お互いに番号を言い合ったりメモを使っの電話番号の伝達が不要になった。

もちろん、電話番号だけではない。

メールアドレス、名前、住所、第三者の情報等、兎に角携帯電話に入っている情報なら、携帯電話同士を向かい合わせることでほとんど伝達できるのだ。

そう。自分の電話番号以外の情報も交換できるのだ。

言い換えればだ。

赤外線を向かい合わせたからといって、必ずしもお互いの電話番号が通信されたとは言い切れないわけで。

俺の携帯に送られてきたメールには

／／／／／／／／／／／／／／／／
件名 薫です

／／／／／／／／／／／／／／／／
本文

こんばんは、柿山さん、今日はありがとうございます。

話せて嬉しかったです、これからよろしくお願い致します。

ところで柿山さんは好きな食べ物がありますか？私は蕎麦が好きです。生まれや父の影響もあるのかもしれないですね。

特にざるかけそばが一番好きです。何事も素材の味そのままがいいと思います。

そう言えば今日、柿山さんとお話をする前に男性の方が居ましたね。柿山さんのお友達でしょうか、こんどぜひ紹介してください。

追伸・松風からも一言あるそうです。

ヨウウ。松風だゾ。コレからもウチのまゆっちを、まゆっちをどうぞよろしく。

との事です。それでは、さようなら。

／／／／／／／／／／／／／／／／

なんぞと書かれていたわけで…

柿山…コレを俺にどう処理しろと。

5月8日 馬とモナカと（後書き）

用語解説

・楽器屋さんのトランペット

ショーウィンドウに飾られるトランペットを見続ける少年。

彼の家は貧しく、憧れのトランペットをとてでもないが買うことはできなかった。

そんな少年の姿を見て、一人の紳士が少年に自分の持っていたコルネットを渡す。

使い古されたコルネットは、少年の欲しかったトランペットよりも使い込まれて汚れていたが、それでも少年はとても嬉しかった。

何度も何度もお礼を言いながら、少年は去っていく紳士の後ろ姿を目に焼き付けるのであった。

何を隠そうその時の紳士こそ、世界的に有名なジャズのコルネット奏者、キング・オリヴァーその人であった。

そして彼からコルネットをもらった少年、彼はその後、世界最高のジャズミュージシャンと言われるまでになる。

そう、後のサッチモである。

・神永信一

新日鉄の社長。

刀↓製鉄

ロングヘアー↓髪が長い↓かみなが

一年↓新一年生↓しんいち

という連想でこの人だと思ったらしい。

・和菓子「松風」

固めのパンケーキみたいな和菓子。全国的に有名な和菓子だが、勿論まゆっちの故郷、加賀でも有名。かつての加賀藩主も食べたとか。

主人公の好物

・馬ツコ最中

モナカ。チャグチャグ馬コの馬を模しており、どこことなく木彫りの馬に似ている。味は普通のモナカ。

主人公の好物

・しゃべる和菓子。

「やめろ！食べないでくれ！何だ何でだ！お菓子なら他にもあるだろ！なぜ俺を！やめてくれ！こんな不条理！あつていいはずが…ヤメて、たの……ウギョス！」

夢があるのか？

実在したら主人公の好物だっただろう。

・怖い人

まゆっちのこと。見た目は可愛い少女だが、緊張でものすごい形相のため、主人公の印象は怖い人。

・友達に

まゆっちが柿山に狙いを定めた理由は、とあるマチヨメンに、そういえば1-Bのある子に川から助けられた時に彼女はカツパを探していたらしい。UFOに興味があるような話もしていたので、十九神にも興味あるかも…という意味のことを、まゆっちに言ってしまったのが原因。

・ラッキーマン

ラッキーで全て解決させる最強ヒーロー

・ジャンプ最強

諸説あるが、筆者は江田島平八か間抜作だと思う。

・なぜ秘密にする？

この後の話に続く壮大な伏線かと思ったら、ただオチにつなげただけでゴザルの巻。

5月9日 不眠と友人（前書き）

ユニークアクセス150000超え

最近気がついたけれど、コレって凄いことらしい。

たくさんの方が、この話を読んでいるということらしい。

…何というか、

こんなゴミ虫のような私の駄文を読んでいただいて、本当にありがとうございます。

5月9日 不眠と友人

あのクソボケ、俺に面倒事を押し付けやがった。

赤外線通信で俺の携帯情報を相手に送りやがった。

わざわざ俺の登録名を自分の名前に変えて赤外線で送るという一時間までかけて。

結局、黛女史に対して返事を書くかどうか小一時間悩んだ末、返事は書かないことにした。

なぜなら、俺が彼女からのメールに反応するのはおかしいからだ。俺は彼女と柿山のやり取りを覗いているからこの状況を理解できているが、

あの時間は校庭の隅でジャンプ最強を考えていた事になっている。

ここでこのメールに対して返信したのならば、それはあの状況へのぞき見していたことを自白するようなものだ。

一応俺は黛女史の事を知らない人間であるということになっている。

おそらく、柿山としても俺がコレのメールに対して反応しないことを望んでいる。

たぶんだが、柿山の思惑はこうだろう。

まず、俺のところに黛女史からメールが来る。

俺はそれを迷惑メールとして扱うが、頻繁に来るので不審に思う。

そして、文章の内容から、相手が同じ学校に存在する生徒である事を知る。

俺は直接本人に会いに行く。

そして、何故か自分に間違ってメールが届いていることを黛女史に告げる。

そして黛女史は気がつくわけだ。

メールアドレスの交換はなされていなかったことに。

メールアドレスを間違えて送るなんてことはあり得ない、いや、それ自体はありえるけれど、名前を書き換えたりし

ている時点でワザとやっているのは明白だ。

それ即ちどういう事か。

メールアドレスを交換しなかったということである。

なるほど、非常に遠まわしな拒絶だ。

周りくどく、間接的で、残酷極まりない拒絶である。

彼女は二度と柿山に近づくことはないだろう。

俺自身も本来ならば、訳がわからないままにことが終わる。

なにせ、俺は柿山と薫女史のやり取りを知らないことになって
いるのだから。

しかし、

俺は実際のところ俺は黛女史の事を見ている。

あの必死の形相も、慌てた様子も柿山と赤外線通信をした時の笑顔も、すべて見てしまっている。

そんな人間に言えるか？

柿山は最初からアンタと友達になる気なんてさらさらなかったんだって、そう気づかせる言葉を言えるか？

こんなことになるを知っていれば、あのやり取りを覗き見なんてするべきじゃなかったんだ。

何も知らないまま、このメールを迷惑メールだとして扱えればどんなに幸せか。

[illegible]

.....

朝の目覚めは最悪だった。

昨日の晩、あの後さらにフォローのメールが来た。

曰く、初めてのメールで舞い上がっていた。

曰く、昨日の夜やっていたUFO特集は面白かった。

曰く、初めての友人ができて嬉しい。

俺はUFO特集に興味は無いから、彼女がメールで書いたUFOに関する賛辞は一切心に響かなかった。

けれど、

彼女がどれだけ柿山に対して真剣かは伝わってきた。

如何に友人という存在を切望しているのかを俺に知らしめた。

「親分目の下にクマが…」

「寝不足か？」

フラフラと登校する俺に対して武蔵と柿山がそう言った。

柿山。

お前はなぜそうも平然としていられるんだ？

いや、解っているんだ。

平然としているのが正しい。

お前は俺に不審を抱かせない様に何も知らない様子でなければいけない。

でもさ、

でも、よくお前はそうも平然と出来るな。

「昨日なかなか寝れなかったからな」

黛女史のメールに悩んでいたとは言えないので、適当にそんなことを言う。

「夜更かし？不健康だわ、プレミアムな人生にはプレミアムな睡眠が不可欠よ」

「そう言ってやるな武蔵君、男にはムラムラして眠れない夜もあるのだよ」

ムラムラはしてねーよ。

柿山、お前本当に色々と酷いな！

言うに事欠いてソレは無いだろ！

しかし、たしかに寝不足は不健康である。

このままでは身がもたないし。

決めた！

嫌なことはサッサと終わらせよう！

今日にでも黛女史に事を告げる。

コレで終わりだ。

むしろ、この状況はあの時、俺が柿山に友人が出来ればとアシストをした結果だ。

いくなれば俺にも責任の一旦はある。

後味が悪いのは確かだが、柿山が友人になりたくないものを無理矢理くつつけるのもおかしい話だ。

俺は柿山に友人を作るアシストこそすれ、それを強制しているわけではない。

たしかに柿山には友人が必要だが、友人は無理につくるものじゃない。

本人が俺を巻き込んでまで嫌だというのはその協力ぐらいしてやろうじゃないか。

畜生。

見てろよ。

世界を半分やるって言われたときの勇者並にの断りをしてきてやるぜ！

まあ実際には、ただ知らぬ存ぜぬを通すだけなんだが。

[illegible]

とまあ、そんなワケでやってきました1-C

となりのクラスだと言うのに
異世界のように感じるのは、俺が他のクラスのやからとは関わってこなかったからだろうか。

しかし、何だ。

こうやって廊下からクラスの中の様子を伺っているわけだが、
当の黛女史だが。

悲しいくらい浮いている。
ソレはもう、

「スーパーヒゲおじさん兄弟」のブロック並に浮いている

誰も彼女に話しかけないどころか、目も合わせない。
クラスの中で、彼女の居る部分だけ別世界だ。

そして、それなのに、黛女史はひとりの世界に没頭しているわけでも、

なにか作業をしているわけでもない。

ただ、寡黙にその状況を受け入れている。

その右手に。携帯電話を握り締めながら。

「ちよいとそこの人」

俺はそこら辺にいたC組の生徒らしき人間を呼び止める。

「は？」

「黛さんって教室にいる？悪いけど呼んで欲しいんだけど」

「は？え？いいよ」

何気ない行動だけど、実は俺に取ってはこれだけで大冒険だ。
他のクラスの異性を呼び出すなんて行為、結構目立つ行為だ。

普段だったら御免被るのだが、逃げてばかりでは状況が進展しないので仕方がない。

「な…何か御用でしょうか？」

突然の呼び出しに戸惑った調子の黛女史がやってきた。

こうして目の前にすると柿山の気持ちがよくわかる。

目の前の女性は異常だ。

この女と友人関係を結ぶべきじゃあない。

異常な交友関係は異常な生活を生む。

異常人間の友人は同じく異常な存在だと認識される。

刀持って歩いている奴なんてどう考えてもおかしいし、
そんな奴の隣にさも当然のように誰か突っ立てたら、そいつもや
っぱり変なやつだと思うだろ？

だからだめなんだ。コイツと縁を作ったら。

俺が柿山の立場だったとしても、柿山と似たような行動をとった
かもしれない。

だから。

「悪いんだけどさ、何故か君からのメールが俺の携帯電話に昨日の
夜から来てるんだよね」

「え？」

きっぱりと言った。

「……………」
「……………」

ソレは数秒だったけれど、数時間に感じた。

この短い秒数で彼女は柿山の考えを理解したのだろう。
その評定は、みるみる強ばって、そして青くなっていった。

俺の役目は終わりだ。

後はとつとこの場を離れればいい。

迅速に、そして自然にだ。

できるだけ、彼女と関わる時間は少ないほうがいい。

彼女は所詮他人だ。

それにコレは彼女と柿山の問題だ。
俺には関係ない。

関係ない。

関係ないけれど。

でも俺は。

分かるんだ。
コイツの気持ちが。

彼女に友人ができない理由。

彼女は強いんだ。

強さをかくして、それでも強い俺だから分かる。

コイツは俺と同じか、それに近い程度に強い。

だから他人との壁があるんだ。

その強さが、その刀が、彼女から他人を遠ざけている。

でも彼女は力を使いたいなんて微塵も思っていない。

友達をたくさん作って、明るく楽しく生きる。
そんな普通の生活に憧れて。

普通になりたくて。

でも、どんなに普通になりたくてもなれずに。

もがいて。もがいて。

それでも報われない。

そつだ。

コイツは。

コイツは俺なんだ。

「それで、今メールで携帯に情報送つといた。改めて俺のプロフィールな。」

他人には秘密だぞ。

それとな、柿山の連絡先を入れておいた。

アイツは恥ずかしがりやだから、最初はのりくらりとするけれど。構わずアタックすれば、きっと良い友人になつてく

れるさ。」

気がついたらそんな事を言っていた。

そして右手が勝手に携帯電話を操作していた。

「へ？」

彼女は呆けたように返事をする。

「アイツは理屈屋だから長い文章のメールでも気にしないさ、俺は簡潔な文章のが好きだけだな、あ、そうそう、武蔵って奴がいてさ、そいつがまた滑稽な奴なんだ。今度紹介するよ。」

「松風？私、今夢を見てるんでしょうか？」

「いいや、まゆっち。確かにコレはまゆっちの求めていたドリーム

だけど。しつかりと現実だぜ」

そう言って彼女は木彫りの馬と話した。

「ああ、ええつと、貴方が松風氏ですね。いやあ、なるほど。こうやってみると39・2ノットも目じゃないフォルムだ」

「やたぜまゆつち！おいら褒められた！」

「よくわかりませんが褒められました！」

「ほれ、そんなことより登録しな」

俺がそう言っくと彼女はイソイソと携帯電話をいじくり出す。

我ながら馬鹿な事をした。

友情ごつことか、すごく縁遠いタイプの人間のくせに、友だちになりましようとか言っちゃてるわけだ。

でも不思議と後悔はなかった。

思えば、今まで俺から友人を求めたことは無かった。

俺にフランクに接してくれる小雪先輩。

ロリコンであるところ以外は常識人で頼りになる準先輩

なんだか、急に俺を見る目が怪しくなった冬馬先輩

俺の子分とか言いながら、俺を振り回す武蔵

そして俺がガキの頃から一緒にいる柿山。

誰もが俺の意思以外の所で出来た友人だ。

俺が友人になりたいと思っつて友人になつたのは彼女が始めてだ。

「登録：コレで力行は改めて3人目です」

「へえ、柿山以外にもすでに番号があつたのか。」

「なんだ、すでに友達がいたのか。いや、兄弟とかの可能性も有るか。」

「ええ！川神さんです！」

「へ？川神？」

「その返答は予想外だった。
というか予想外過ぎた。」

「ええ？川神百代さんです！あと一子さんも」

「川神百代さんって…」

「あの川神百代さんだよ。」

「一つ付かぬ事をお聞きしてもヨロシイでしょうか、
「はい！なんでしよう？」」

「川神百代さんとはどういったご関係で？」

「お友達です！」

「笑顔でそう答える黛女史。」

友人関係って・

・・・クーリングオフは適用されないだろうか？

5月9日 不眠と友人（後書き）

用語解説

・「スーパーヒゲおじさん兄弟」のブロック
なぜ浮いているんだろう。不思議。

・松風氏
ちなみに主人公は松風を、本物の九十九神だと思っている。だから敬語。

・39・2ノット
松風（駆逐艦）の最大速度。そもそも、そんなマイナーな松風が出てくるのに、なぜ名馬松風の発想が出てこないのだろう。

・名馬松風
前田慶次が乗ってたとされる馬の名前。某漫画では慶次と結構なドラマを繰り広げているが、実際は慶事が叔父さんからパクった馬らしい。

・クーリングオフ
一定期間、説明不要、無条件で申込みの撤回または契約を解除できる法制度。
ただしコレは商取引が対象。友人関係に適用された例はあまり聞かない。

幕間・まゆつちと偉人（前書き）

次回からシリアスパート突入につき今回はその前の箸休めの話です
正直どうでもいい話なので、読み飛ばしても構いません。

幕間・まゆつちと偉人

「登録ストップ！」

突然の言葉に私は戸惑いました。

「はい？」

「WHAT？」

「川神百代はヤバイ、兎に角ヤバイ！川神百代に俺の存在がバレたらマジヤバイよ。どれくらいヤバイかって言うとマジヤバイ」

突然慌てた様子の彼。

今さっきまで、とても元気に私に携帯情報を教えてくれていたのに、突然焦りだしました。

どうやらモモ先輩を恐れているようです。

単にモモ先輩を怖がるのならわかります、たしかにあの人は一部の人達に怖がられていますから。

しかし彼のいう「俺の存在が」という辺りで、彼はモモ先輩をステレオタイプに恐れているのではなく、何か確執のようなものがあるように感じました。

私の疑問の表情を読み取ったのか、彼は私にその答えを教えてくださいました。

「まあ、話せば長くなるから要約するが、俺は川神百代に恨まれている」

本当に要約されすぎて、なぜそのような状態なのかは一切不明ですが、彼がモモ先輩に恨まれていることだけは良くわかりました。

「そうなんですか？」

「兄ちゃんも凄いやつに目を付けられてるじゃねえかー」

少し驚きました。

モモ先輩はたしかに傍若無人な方ですが、誰か特定の人に恨みを持つような人間には思えなかったのです。

「俺が黛女史の友人だということがバレたら、ソレを利用してどんな手段を取られるか分ったもんじゃない」

「そ…そんなに仲が悪いんですか？」

目の前の方とは、今さっき話し始めたばかりですが、とても悪い人には思えませんでした。

そして、モモ先輩も決して悪い人ではありません。

この二人が仲が悪いというのが今ひとつ現実味を感じませんでした。

「別にお互い憎み合ってるわけじゃない。ただ俺はあの人が苦手であの人はそんな俺の態度が気に入らないんだ」

よくわかりませんが、相性が悪いということなのかもしれません。しかし、モモ先輩と仲が悪いとなると、彼が私と友人になるという話も難しくなってきました。

「（ピンチです松風、このままではできそうだった友達が！）」

「（やばいよまゆっち、コレはぬか喜び大作戦の可能性が有るよ！）」

「仕方がない、ココはひとつ…」

彼は非情に暗い口調で言葉を発しはじめました。

「（大変です松風、この話は無かったことに的展開です!）」

「（OH、神は死んだ。終了だぜ）」

「…俺が友人になったことはどうか、秘密にしておいてほしい」

・・・?

「（松風? コレって首の皮一枚で助かってます?）」

「（再開!）」

てつきり、お前とは友達になれないと言われるかと思っていただけに、彼の秘密にしておいて発言には胸を撫で下ろしました。

「秘密ですか?」

「要は、俺が黛女史の友人だということが川神百代にバレなければ良いんだ。ということ俺が友人になったことは川神百代及びそのご友人には内密に、いや、友人が出来た事自体を秘密にというより、その友人が俺だということを秘密にしてほしいわけだ」

「なるほど」

私としても友人同士が仲良く出来ないのは悲しいですが、しかし、だからと言って一方の友人しか選ばないというのも嫌です。

彼の言うとおり、モモ先輩の前では彼の存在はかくしておいたほうがいいでしょう。

「でも桃先輩以外にも秘密にするんですか？」

ひよっとして川神ファミリー全員と仲が悪いんでしょうか？

「いや、大和先輩とかあのマツチヨの人とか、川神百代の周りの人とまで仲が悪いわけでは無いよ？特に大和先輩とか、かなりお世話になってるし。でもさ、こう、秘密ってのは結構第三者からバレることが多いからね。一応秘密にしておいたほうがいいと思うんだ」

「はあ…」

どうやら、彼はモモ先輩とだけ仲が良くないようです。

「しかし、そうなると問題は名前だな」

「名前ですか？」

名前が問題？

そんな異常な名前には思えませんでしたけど？

「例えば、何かの拍子に携帯の登録を見られたり、携帯の通話で俺の名前を呼ばれれば、川神百代に俺のことがバレるのは必死」

「た・・・たしかに」

言われてみればそのとおりです。例えば携帯電話で話したりすれば、相手の名前を呼ぶことも有るわけで。

モモ先輩の前で電話したが最後、ついucci彼の名前を呼んでしまい、存在が知られてしまうなんてことも十分に考えられることです。

コレはたしかに大きな問題です。

「こうしよう！俺の名前を変えてくれ」

「は？」

意味不明なことを言われてしまいました。

あいにくと私は彼の親でも市役所の戸籍係でも無いので、名前を変える権限は持ち合わせていないのですが。

「偽名を使う」

「G I M E I ?」

「偽名ですか？」

「そうだ！早い話、俺という存在が川神百代にバレなければいい、携帯の名前や、俺に対する呼び方を変えておけば、携帯のメールを見られたり、通話を聞かれたとひても問題はない。」

なるほど。

妙案です。

たしかにコレなら、モモ先輩の目の前で彼に電話しても、モモ先輩は彼の事に気が付きません。

「ところで柿山さんの名前もやっぱり変えるんですか？」

「…ああ、そうか、柿山も名前バレしてるしな、あいつの存在から俺のことがバレる可能性も有るのか。よし、柿山の呼び名も変えてくれ」

よくぞ気づいてくれたといった様子で彼は親指を立てました。

良かった、ナイスアシストです、私。

「ではあだ名か何かで登録すればいいですか？」

「コレは早くもフランクな呼び合いが実現するぜ」

あつて即日、あだ名で呼び合う関係に発展ですか？
これは、なかなか素晴らしい展開です！

「いや、俺のあだ名は…一応『親分』とか呼ばれているが、それはすでに川神百代に知られてると思う。ここは一つ、名前からは俺だと想像できない名前がいい」

そうですか…。

「でもどんな名前にするんです？」

「…そうだなあ、ありきたりな名前だとかえってこっちが混乱するな、例えば鈴木って呼ばれるようにした場合、慣れるまで自分が呼ばれてるとは思えないわけだしな。今後、鈴木さんという友人ができた際にも混乱するし」

「そうですね」

「ここは一つ絶対にあり得ない名前とかのほうがいいんじゃないかな」

「なるほど」

「例えば、寿限無寿限無五劫…」

「待ってください！日が暮れます」

「夏休みが終わっちゃうYO！」

なぜそんな面倒なチョイスをするんですか？

「ならコンボイ蝶々とかドスコイ花子とかはどうだろう」

「私がその名前を呼ぶんですか？」

「エキセントリック少女レディーに磨きが掛ってしまっんだぜ」

松風の言つとおりです。

『お早うございますドスコイさん、ええ！そうなんです、コンボイさんとの件で話が…』

なんて携帯電話で話していたら、皆から今以上に怖がられる気がします。

「じゃあ歴史上の人物とか」

「それなら覚え易いですね、あだ名としてもあまり不自然ではありません。」

間違えることもありませんし、親しみやすいです。ちょっとおかしくて、周りもあだ名だと解釈してくれそうです。

「じゃあ俺は…」

[illegible]

そんなワケでお友達が増えました。

たしかに、彼の正体は秘密ですが、この喜びまでは秘密に出来ないわけで。

私は次の休み時間にはウキウキと別の友人、つまり川神ファミリの皆さんがいる2・Fの教室に報告にきてしまいました。

「やりました、友だちが増えました！」

「まあオラとまゆっちにかかれば、友達とかソッコーなわけよ」

「本当か？ 凄いな」

「携帯を買ってからすぐじゃないか、すごいなまゆっち」

ガクトさんと大和さんが素直に凄いと言ってくれました。

「昨日の今日なんて本当に早いわね」

「うん、普通の人でもそんなに早く友達とか作れないよ」

「まゆっちはイヤツだからな。ソレがわかるやつが近くにいたんだろっ」

一子さんやモロさんやクリスさんも祝福してくれました。

「へっへー、オラとまゆっちのゴールデンコンビにかかれば、怖いものは何も無いんだぜー」

「ええ！ 実はせっかくなので、すぐにでもメールを送ろうと思うのですが、こう言ったときはどんなメールを送ったらいいんでしょう」

「普通に今度、遊びに行こうとかで良いんじゃない？」

「でも友達ってどんどころに遊びに行けばいいんでしょう」
「そうなんです、そこが問題なんです。」

友達と遊びにいくなんて今まで無かったので、何処に行けばわかりません。

「別にどこでも良いんだよ、ゲーセンでも映画でも、カラオケとか喫茶店とか、上級編では一緒に旅行とか」

さすが大和さん、こういう時に頼りになります。

「早速メールです！」

「イスラエルにとっととスピンだぜ！」

カラオケに喫茶店に旅行ですね！

「所でなんて名前？どんな奴？男？女？」

そう聞いてくるガクトさん。

そう言えばまだどんな人が言っませんでしたね。

詳細は秘密ですが…二人で決めた偽名の方は教えても良いと思います。

「男性の方で、松尾芭蕉さんです！とても気さくて優しい人でした。」

「は？」

「へ？」

「なんと！」

「ふ〜ん」

「へ〜」

大和さんモロさんクリスマスさんガクトさん一子さんがそれぞれ反応します。

「松尾芭蕉って？あの松尾芭蕉？」

「いや、どうなのそれ？松尾芭蕉？」

「松尾芭蕉と言えば俳諧連歌の名人で俳聖ともいわれる方ではないか、凄い友人ができたな」

「ん？なあワン子、マツオバショーって有名人なのか？」

「さあ、言われてみればどこかで聞いたことあるわね？」

全員バラバラの反応。

大和さんとモロさんは困惑、クリスマスさんは関心、ガクトさん一子さんは特に反応無しでした。

「あと、松尾芭蕉さんの紹介で千利休と言う方のアドレスもゲットしました」

「千利休！？」

「千利休ってあの千利休？」

「茶聖ではないか、つくづく凄い友人だな！」

「なあワンコ？センノリキューって何だ？漬物か？」

「漬物じゃないわよ、漬物だったら私知ってるもの、クイズ番組か何かの名前じゃない？」

「よし！メール送信つと」

「え？松尾芭蕉にメールしたの？」

驚いた様子の大和先輩。

「はい！今度歌をうたいに行きましょうって」

「松尾芭蕉にそれ送ったの？」

同じく驚いた様子のモロさん。

「ええ。あと、千利休さんも誘って一緒にお茶を飲みに行きましょうって」

「千利休に？」

「はい！さらにはいつか旅行に行きましょうって」

「松尾芭蕉と？諸国漫遊！？奥の細道？」

別に諸国ではないですけど、まあ色々と見れたら楽しいと思います。

いつか皆で、

川神百代さんと彼が和解すれば、そんな日もそう遠くないような気がします。

風間ファミリーの皆と、松尾芭蕉さんと千利休さんで歌を歌ったり、お茶を飲んだりできたらいいなと思います。

幕間・まゆつちと偉人（後書き）

用語解説

・どれくらいヤバイかって言うとマジヤバイ
相当ヤバイ

・ぬか喜び大作戦
相手をぬか喜びさせ失意のどん底に落とす作戦。

・寿限無
正式名は寿限無寿限無五劫の擦り切れ海砂利水魚の水行末 雲来末 風来末食う寝る処に住む処やぶら小路の藪柑子パイポパイポパイポのシューリンガンシューリンガンのグーリンダイグーリンダイのポンポコピーのポンポコナーの長久命の長助

・コンボイ蝶々とかドスコイ花子
エクセル女史の和名

・エキセントリック少女レディー
エキセントリック少年ボウイと言う歌があつてだな。レーズンが好きな少年ボウイが謎の小袋片手に冒険する歌なのだ。

・イスラエルにとつととスピン
壊さんばかりの勢いでキーを押しているという意味。

・松尾芭蕉
ご存知俳句を詠む人。口癖は松尾芭シヨンボリ。代表作は「忍者かと思つたら違つてた」

・千利休

ご存知お茶をいれる人。口癖は利休がホィ。

5月9日 青い巨人と壊れる関係（前書き）

更新遅くなりました

そして遅くなりすぎて、書き方忘れました。

ヤバイ、文章の流れが…

5月9日 青い巨人と壊れる関係

早まったことをしたと思う。

黛女史の異常性は理解している。

平凡でない人間との付き合いは、俺の平凡すら脅かす。
彼女と友人になることは俺の平穩に取って良いことではないだろう。

しかしだ。

頭ではこの友人関係を危惧しながらも、心の底ではこの状況を歓迎している自分がいる。

彼女のことは嫌いになれない。

嫌いどころではない、俺は黛女史の事が好きなのだ。

性格も、行動も何処か俺に近いものを感じる。

共通意識というか、仲間意識というか…

いや、言い訳は止めて本音を言っただらばだ。

ぶっちゃけ好みのタイプだ。
刀を持ってるのはアレだが、控えめな性格と、オットリした雰囲気
がまさにストライク。

いや、べつに、恋しちゃってるわけではないんだ。

俺は好みのタイプには誰かれ構わず恋してしまうような節操なし
というわけではない。ソレが理由で友人になつたわけでもない。
そもそも、俺は当分の間、恋人を作らない誓を立てている。

ただ、考えてみてほしい。

例えば好みのタイプの店員さんのいる店になんとか通つてしま
つたり、
好きな容姿のタレントの出ているテレビ番組はつつい見しま
つたり、
友達のねーちゃんが妙に色っぽいという理由だけで、その友達の
家に入り浸つたり。
そんな経験が男ならば有るはずだ。

どれも、その相手と恋人になりたいと思つてゐるわけではないの
だが、それでも行動してしまうのが男という悲しい生き物なわけで
好みの容姿の人間と、そうでない人間。ドチラと友人になりたい
かと聞かれれば断然前者だ。

そんなワケで、俺としては、黛女史のような人と友人になれたことは、結構うれしい。

頭じゃマズイと理解しているが、つい頬が緩んでしまうのは男の悲しいサガなのだ。

「何をニヤニヤとしているんだ？」

柿山が俺の顔を覗き込んだ。

黛女史の幻影を突き破るようにして俺を覗き込む顔。

なんというかまあ……見慣れた顔だ。

良くも悪くも、俺と柿山の間には新鮮さが無い。

思えば、コイツとはとことん趣味が合わないのに、よくコイツと長いこと友達で居られるものだ。

好きな本、好きな絵、好きなテレビ、好きな食べ物。どれも違う。

それでも考え方の根本というか、価値観というか。そういう所に共感はある時もある。

例えば今俺と柿山がいる場所。

今日も今日とて、柿山と一緒にいるのは人気のない屋上近くの廊下の端だ。

基本的に放課後に此处に来るような輩は殆ど居ない。

俺達か、せいぜい武蔵が俺達を探しに来るくらいだろうか。あと、極稀に小雪先輩がフラフラと徘徊していることもあるか、ああ、冬馬先輩が逢引してたこともあったな……………。

……兎に角、正直たいていの生徒は寄り付かない。

いつも俺と柿山はそんな人気のないところに居る。

コレには特に大きな理由はない。

たしかに俺と柿山がする話の大半が他人に聞かれたくないような内容だからという理由も有ることは有るのだが、俺達がいつも人目を避ける用にひっそりとしたところを好むのは、純粹に性格的な理由だ。

柿山にしろ俺にしろ喧騒というか、騒がしいのが苦手なだけなのだ。

思うに、他人の目の届かないところにいつも消える事が、俺の不良説に真実味を与えてしまっている要因の一つかもしれない。

さらには。かつて俺が武蔵に絡まれたのも、昨日柿山が黛女史にアタックされたのも、人氣が無い所だったからこそとも言えるだろう。白昼堂々、人ごみのなかで、喧嘩売ったり、友達募集なんて普通はしないのだから。

であれば、人ごみの中で過ごすようにすればトラブルの頻度は減ることになるのだろうが、この人目のつかないところでヒッソリと過ごす性質はもはや前世からの呪いのようなものなのだ。

今更、明るい太陽の下で元氣よく生活するようにはなれない。

内向的な性格も、他人が苦手な部分も、もはや俺という存在を構成する大切な要素になってしまっている。

これは柿山にしても同じようで、俺は柿山が集団の中で楽しそうに騒いでいる光景を見たことがない。

「…なんでもねえよ」

俺がそう答えると、柿山は首をかしげながら、先程からしている会話を再開した。

「それで、話の続きだが、ゲータレードは何色が一番美味しいと思う？」

「赤だろ？」

「私は水色だと思うんだが」

「おま…水色は無いだろ。ドラッグ人の皮膚の色だぞ」

青系統は食欲を減退させる色だぞ？

「所で関係ないが、ゲータレードのマークってパワーレンジャーのマークに似ているな」

「ホントに関係ないな！たしかに似てるけど、ソレを言ったらマリカーのサンダーも同じになるだろ」

そもそもゲタレードにしろ、パワーレンジャーにしろ、日本でわかる奴どれくらい居るんだよ。

俺が知ってたから良かったものの、俺以外の大抵の人間はポカんとするぞ？

つまりはこういう所なんだな。

ゲータレードの好みは完全に合わないけれど、そもそもゲータレードの話が出来る時点で俺と柿山は似ていると言える。

「そうそう…所で話はさらに変わるんだが…」

柿山がさらに何か言いかけて…

次の瞬間寒気がした。

「黨と友人になったそうじゃないか」

いつもと変わらない柿山の様子。

普段どおりのニヤニヤ笑い。

いつもどおりの口調。

いつもどおりの仕草。

でもその雰囲気は確実にいつもとは違っていた。

先刻までのゲータレードの話をしていた時よりも確実に違っている。

具体的に何処がどう違うと言われても答えようがない。

強いていうのならば気配が違う。

「なんだ、知っていたのか」

できるだけ平静を装っていたが、俺の内心はビビりまくりだ。

口の中がみるみる乾くのがわかる。

「言っただろ？君はわかりやすい、大体の隠しゴトは無意味だと」

「別に隠していたわけじゃあないさ」

異様な雰囲気だった。

いつも不思議に思うのはコイツの醸し出す雰囲気の重さだ。

川神百代の殺気をピンポイントで浴びても、涼しい顔で耐えられる俺が、コイツの醸し出す雰囲気には未だに慣れることがない。

「なぜ？…なぜ友人になった？こう言っただけだが、彼女は君にと

って友人にすべきでないタイプの人間だ」

「理由はないだろ？友人ってのは作るもんじゃなくて出来ちまうもんだ」

お前だってその一人だろ？

「まあ、友人を作るなどとは言わないさ、何事もそういうもんさ。友人ができることは悪いことではないからね。だがあの女はイケナイ。悪いことは言わない。やめておきたまえ」

なんだよ、嫌に突つかかるじゃあないか。いや、心配してくれてるのか？彼女の存在が俺の平凡を脅かしかねないと。

だとしたら有り難いが、それとコレとは話が別なんだ。

「判ってんだよ、そんなことは。たしかに平凡って奴は遠のくかもしれない。でもなんだか、なんだか友達にならないとイケナイ気がしたんだ」

「いけない？」

「俺はお前が居なかったら多分潰れてた」

「……」

「どんなに孤独な奴でも、どんなに自分かってな奴でも、人間ってのは一人じゃ生きられないんだと思う。でさ、あの子は一人なわけだよ。一人で、一人で、付喪神を友達にしちゃうくらい一人なんだ」

「……」

「あれはさあ、お前に会えなかった場合の俺なんだ、多分。」

だから、彼女と友だちになりたいと思った。

「ソレだ」

？

それだ？

「ソレが問題なんだよ」

は？何が問題？

すまん柿山、お前の言っている意味がわからん。

「彼女は君に似ている。性格とか、好みとかではなく、『状況』という共通点だけが、その共通点がいけない」

「え？いけないって？何で？」

共通点があるのは良いことでは？

「いや、ソレじゃあ行けないんだ。そうすると私の目的が達成できなくなる」

「目的って…」

何それ、柿山。

それとお前、先刻から目の焦点が合っていないぞ？

「まあ、仕方がないか。遅かれ早かれすべきことだったんだから

…今、やってしまおう」

「やるって…何を？」

先刻から意味不明なことを言う柿山。

視線の動きや、雰囲気と相まって、気持ち悪いことこの上なしだぞ？

「潰すんだよ」

一言。

柿山の口から出た。

たった一言の言葉が、とても重く感じた。

別に暗い調子ではない。

それ所か実に日常的な言い方だった。

しかし、柿山の口から出た「潰す」という言葉には、いいしれない現実味と、確実性が感じられた。

「潰す？何を？何を潰すんだ？」

やめるよ、そんな表情でそんな事言うの。怖いし気持ち悪いだろ？
いつものニヤニヤ笑いはどうしたよ。
そんな笑い方。

ソレじゃ。

ソレじゃあまるで。

「わかってるんだろ？」

そして、柿山のその言葉は。

ある種。俺に対しての死刑宣告だった。

解っているんだろ？

ああ、そうだ。

俺は解っている。

彼女の考えも、彼女の行動の意味も、彼女の潰したい相手も。

「ああ…俺をだろ？」

理解はしていた。

俺も馬鹿じゃあない。

柿山がなぜ俺に近づき、なぜ俺とつるんでいるか理解していた。

柿山が本当は俺のことを嫌いなことも。

俺を潰したいと思っていたことも。

そのために俺に近づいてきたことも。

何らかの形で俺を潰すであろうことも。

俺は知っている。

なぜならば。

かつて俺も同じことを考えたからだ。

良くも悪くも、俺と柿山は根っこで似ている。
だから俺が考えたことは当然柿山も考える。

そういう穿った見方をすればだ。

柿山の行動は実に露骨だった。

たしかに柿山の行動はあの年にしては巧妙だったが、ある程度大人な思考が出来る俺に取ってはわかりやすいことこの上ない。

具体的に俺に対して何をするかまでは分からなかったが、何か俺に対して良からぬことをしようとしていたのはまる分かりだった。

しかし、しかしそれでも俺は柿山とつるんだ。

そうするしか無かった。

たとえ俺を潰すためだろうと、どんな理由だろうと。

俺と対等に話が出来たのはコイツだけだったんだ。

柿山の存在だけが俺を孤独から開放した。

柿山の存在だけが俺に取っての救いだった。

コイツが居なかったら。遅かれ早かれ俺は潰れていた。

だから、せめて、柿山が俺を見限るその瞬間まで。その茶番を一緒に演じようと思っていたんだ。

どうせ潰れるならば、自滅するよりは柿山の手で潰れたいと思ったんだ。

そしてソレが…今、この瞬間・・・。

「君を潰す？なんで？」

「は？」

え？…なにそのリアクション。
何で「心底不思議」って表情するの？

「あ…ああ！ああ、そうか。そういうことか、凄いな。君は本当に私の想像の斜め上を行くな。なるほど。その正解は想定外だ。だがアレだ、たしかに正解だが…そりゃ大昔の正解だよ。」

ゲラゲラと柿山は笑う。

俺は混乱した。

間違えたのか？俺の杞憂か？勘違いか？被害妄想なのか？

いや、昔の正解と言うからには、俺の考えは間違えと言うわけでは無いのだろう。

無いはずだ？だって、最近になってたしかに柿山からは殺気が漏れ出るのを感じていた。

定期的に、俺に対して殺意を覚えていたはずだ。

だから、俺は柿山が俺を潰したがっている事に確かな確信を持っていた…

…ハズなんだが。

「そもそも君を潰して私に何の特があるんだい？」

なんのって……

「スカツとする？」

「何だそりゃ」

…いや、何だそりゃと言われてしまえば、何も言い返せないんだが。

「え？じゃあなんだ？潰すって？何を？」
俺じゃなくって？

じゃあ何を潰すんだよ。プチプチ？それともニキビ？

「ああ、私が潰すのはね…アレだよ」

そう言って柿山は顎をしゃくる。

その視線の先は俺の後方に伸びていて。

俺が振り返るとちょうど

そこに武蔵小杉が立っていた。

5月9日 青い巨人と壊れる関係（後書き）

用語解説

- ・正直たいてい

「正直大帝」月刊ファームで好評連載中の漫画。

- ・ドラッグ人

青い皮膚、赤い目玉の巨人。ファンタスティック・プラネットに出てくる。

- ・ファンタスティック・プラネット

アニメ、描写が凄い。子どもがトラウマになる。

- ・ゲタレード

ゲタレード、Gatoradeのこと。

世界的に有名なスポーツドリンクだが、日本ではマイナー。

日本版は透明か乳白色だが、海外版はソレはもう、漫画に出てくる毒のような色をしている。

主人公は一度武蔵にゲタレードの赤（日本未発日）を買ってくるように命令し、武蔵は本当に買ってきたことがある。輸入食材専門店を数件ハシゴしたようだ。

- ・パワーレンジャー

戦隊特撮物を海外向けにリメイクした物。GOGOパワーレンジャー、日本ではマニア以外名前すら知らない。…と思いきや、日本でも放送してたらしく、一部の人は知っている。

- ・マリカーのサンダー

最下位のプレイヤーに出やすい。自分以外全てのプレイヤーを小さくしてしまう驚異のカミナリアイテム。

ちなみにゲータレードもパワーレンジャーも雷マークがトレードマーク。

5月6日 優雅な食事と話・裏（前書き）

少し時間がさかのぼって柿山の話です。
かなり短めですが。

なぜ柿山が榊原小雪と仲が良いかの話です。

5月6日 優雅な食事と話・裏

「やつぽ」

笑顔で手を振る先輩に対して私は同じく手を振る。

「ああ、先輩、どうぞ、旅行土産です」

そう言って私は桑のクッキーとマカデミアナッツチョコを差し出した。

「わーい」

そう言っやいなや、彼女は包装用紙をビリビリと破り、中身を食べ始める。

「うまうま」

もらったものをその場で開けて、目の前で食べ始める行為。社会教義的に見ると失礼な行動だが、彼女がやるとなんとなくサマになるから不思議だ。

この自由奔放にして、エキセントリックな女性。

榊原小雪先輩。

彼女との付き合いは比較的浅い。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
彼女の存在を知ったのは学園に入ってからすぐのことだった。

さも自然に、さも当然のように彼のそばにいた。

彼女と戯れる彼の姿は、迷惑そうでありながら何処か嬉しそうで、そして楽しそうだった。

彼女の存在は私を脅かした。

なにせ彼女は彼の孤独を癒しかねないのだから。

彼女のエキセントリックさは驚異だった。

なにせ彼女は彼の異常性を恐れない。

彼は孤独にならなくてはいけない。

ソレも心からの孤独だ。

物理的に孤独にすることは簡単だ。

彼を束縛すれば良い。

両手両足を何とか切断して、監禁すれば良い。

動けなくなれば、彼は私に依存せざるを得ない。

しかし、。

しかしそれではダメなんだ。

ソレは仕方なく私に依存して言うことになる。

つまり妥協だ。

彼は私に妥協して異存にしていることになる。
コレはイケナイ。

彼自ら、彼の意味で、彼の望みとして彼は私に依存しなくては
いけない。

ソレでこそ対等な関係と言うものだ。

しかし榊原小雪がソレをおびやかしている。

その事実には私は焦り、そして、その焦りは。

私に途轍もない事実を突きつける。

認めたくないが。

どうしようもない事実だ。

私は彼のことが嫌いだった。

殺したいほど嫌いだった。

認めたくなかったんだよ。

君は不愉快で無礼で慇懃で私そっくりで、

そして、

そして、そんな彼を、

求めていることを認めたくなかったんだ。

それを否定したくて、彼を否定したくて、
とにかく彼を潰したいんだとそう思い込もうとしていた。

ああ、認めよう。

最初は彼を潰すために彼に近づいたさ。

しかしね、それは言い訳なんだよ。

彼に近づくのは彼を潰すためだ。

彼を依存させるのは、彼を苦しめるためだ。

そう言い訳して、彼に近づいた。

本当は理由なんてどうでも良かったのさ。

近づきたかったんだよ純粹に。

君と居たかった。

君に見てもらいたかった。

君に依存して欲しかった。

君には私以外を見てほしくなかった。

私以外を考えてほしくなかった。

私以外の人間と関わることを一切やめて欲しかった。

私だけに依存すればいい。

つまりは嫉妬していたんだ。
私は榊原小雪に嫉妬なんだ。

そして嫉妬することで気がついた。

私が彼を求めている事実には。

それなのに、それなのに。

嗚呼。

彼は孤独ではなかった。

榊原小雪の存在が、私にとっては驚異だった。

さて、そうならばすべきことは簡単だ。

彼女を排除するのだ。

何かしらの方法で、彼に近づけなくすれば良い。

さてそうならば、まずは榊原小雪の調査だと思った。

敵を知り己を知れば何とやらと、昔の人も言っている。

彼女の話は彼から聞いていた。

曰く道で倒れている少女がいたので救急車を呼んだとか何とか。

その話を聞いたときは何かの冗談だと思って、的当に聞き流していたのだが、なるほど、彼女がその倒れていた少女とやらだったのだろう。

なるほど、彼女が彼に助けられたのは理解した。

しかし不思議なのは、その彼女が未だ彼の隣にいられる理由だ。

すでに彼は歪な性格であった。

言動や行動に、色々なギャップがある。

ソレは社会生活を営む上では然程の問題にはならないのだが、一緒に過ごす上では致命的なギャップである。

普通の人間であれば、彼と一緒にいるとそのギャップを不愉快に感じるはずなのだ。

少なくとも、榊原小雪程に彼につきまといれば、その異常性を感じているはずなのだ。

たとえ助けられたという恩義が合ったとしても、ああも笑顔で彼の隣にいられるはずがないのである。

コレは、少し、彼女と話して彼女の真意を探る必要が有る。

何故に彼と共に居られ、彼のことをどう思っているのか確認する必要がある。

なんぞと思っていたのだが。
切掛は向こうからやって来た。

即ち、榊原小雪の方から私に接触してきたのだ。
おそらく、彼の唯一の友人であった私に興味を持ったのだろう。

誰もいない廊下で、二人っきりの時だ。
突然の接触に私が戸惑っていると、彼女はおもむろに私のうなじの匂いを嗅ぎだした。

その時の私は、ソレはもう滑稽なほどに慌てた。
焦りを外に出さないようにするので精一杯だった。

そして私の匂いを嗅いだ彼女はこう宣った。

「くんくんくん。おんなじ匂いがする」
「匂い？」

「私とおんなじだ！」

「同じ？」

同じと言いながら私と彼女には全く共通点がない、せいぜい同じ女であるというところぐらいだろう。

それで居ながら同じと言われる。

そうなれば考えられる共通点は…。

あまり考えたくない可能性が一つある。

だがそれ以外に彼女が同じという理由が思いつかない。

私の心は気味の悪いビートを刻み、私を不安にさせる。

しかし、彼女の口から出たのは、さらに私の予想を超える言葉だった。

「私と同じで壊れてる」

満面の笑顔で語る榊原小雪。

その言葉に。

私は思わず大笑いをしていた。

そうだ。

そうなんだ。

壊れている。

目の前のこの女も、私も等しく壊れているのだ。

そして、その事実を理解しながら、
目の前の女はソレを受け入れている。

そしてだ、同じく壊れている私までも、彼女は笑顔で受け入れている。

それどころか、まるで、仲間が出来たとでも言いたげな笑顔に向けてさえ居るのだ。

そう、

彼女は言わば仲間なのだ。

この世界で、異端な存在であり。
そして彼の異常を受け入れられる存在なのだ。
なるほど。

だからか。

だから彼女は彼の隣にいられる。

ソレを理解したときに。

私は彼女に対する焦りが無くなっていることに気がついた。

彼女は受け入れる人間なのだ。

良くも悪くも、全てを受け入れる人間だ。

誰よりも優しくて、誰よりも残酷な存在だ。

そう。

彼女は私達の間で驚異たり得ないのだ。

なぜなら、彼女は、

これからの私と彼の関係さえも受け入れるのだから。

.....

「先輩、そろそろコマを進めようと思います」

「えゝもう？」

口の周りにベツタリとチョコレートをつけながら彼女は言った。

「ええ、今の関係もそろそろ不愉快ですから」

「僕は楽しいのにな」

「楽しいのは否定しませんけどね、それだけじゃあダメだと思うんですよ」

「ふん」

「彼はどうしますかね？慌てるでしょうか、嫌がるでしょうか？」

「さあ」

彼女の答えは肯定でも否定でもなかったが、それが嬉しい。
無責任に肯定されるよりよっぽどマシだ。

さて、小雪先輩。

貴方は見ていてください。

何事にも、ギャラリーは必要です。

5月6日 優雅な食事と話・裏（後書き）

用語解説

・桑のクッキー

柿山手作り、舌がパラダイス銀河な柿山だが、甘味については普通の味覚である。

普通に美味しいクッキーに仕上がっている。

・マカデミアナッツチョコ

おみやげの定番。

・両手両足を何とか切断して、監禁

ヤンデレの定番。

いくなれば王道コース。

ヤンデレにおける、交差点の角でパンを加えたまま転校生にぶつかるくらいベタな行為。

・一緒に過ごす上では致命的なギャップ

話が合わない人間とは一緒に居てイライラすることが多い。このように常識の違う人間と付き合うのは実にたいへんなことなのである。主人公は常識がズれているので、親密になるほどに相手を困惑させる事になる。主人公に親密な友人が少ないのはコレが理由の一つ。

・匂い

ちなみに実際にはマシエリーの匂いである。

・君に

文中、途中表記が「彼」から「君」に変わる時がある。
想像しすぎて、主人公に語りかけちゃってるから。
決して表記間違えではない。

ほんとだよ？

5月8日 馬とモナカと・裏（前書き）

今回と次回の裏ストーリーは、

柿山がどれくらいイッちゃってるかをアピールするための話で、
短い上に特に起承転結はありません。

ヤンデレが苦手、イッちゃってる考え方は嫌い、…と言う方は、読
み飛ばしをお願いします。

5月8日 馬とモナカと・裏

「柿山：俺ちよつと、校庭の隅っこで、20世紀のジャンプオールスターの中で誰が一番強いかの脳内会議してくる」

「は？」

突然意味不明なことを言う彼に対して、私は滑稽な声を上げてしまった。

「兎に角、さらばだ柿山。後は君の健闘を祈る！」

そう言つて彼は敬礼をした後、そのまま消えてしまった。

取り残された私は呆然とするばかりだ。

たしかに彼は内向的だが、校庭の隅でそんなことをするほどに精神が病んでいただろうか？

たしかに性格は歪んでいるが、そこまで異常だったか？

そう言えば最近ストレスが溜まっているようにも見えたし。

そろそろ…

そこまで考えたとき、ふと気配を感じて振り向いた。

「……」
「……」

なんだ、カツアゲか。

「スマンが、いま、現金のたぐいは持っていない、悪いが他を当たってくれ」

「へ？え？え？は？」

しかし私の予想に反し、彼女の目的はカツアゲではない様で、戸惑った声をあげだした。

「ちちちち違います。私は1-Cの黛由紀江でして、でして、かか、カツアゲじゃないです」

「HEY。いきなりそんな発想するなんて、かなりのドリーミーだぜ」

「？」

いま変な声がした。

「こら、松風。突然言葉を発すると相手の方が驚いてしまいますよ？」

そう言いながら彼女は右手に有る木彫りの人形と話し始める。

「何だ？それは？腹話……」

「ちちち、違います。松風は九十九神です！」

九十九神？

「ふむ、九十九神といえは民間信仰における観念で、長い年月を経て古くなったり、長く生きた依り代に、命が宿ったモノの総称だったな。一説には九十九年経ったモノに命が入るともいわれるし、また一説には百年経ったモノに命がやどるので、付喪となるのを恐れ九十九年でモノを捨てる風習があったとも言われている。精霊信仰やアミニズムの一種と言えるな。」

しかし、どう見ても腹話術にしか見えないのだが。
この女性は分裂症か何かなのか？

「ほら！松風、ご挨拶を。」
「HEY！オイラが松風だぜー」

「木彫りのストラップなんです！」
満面の笑みでそうストラップを紹介する彼女が、
正直私は怖かった。

異常だ。

ソレも悪い方向で。

「ふむう。松風くんか。なかなか良い名前ではないか。私は柿山衣子と言った、よろしく。正直私としても今までの生活の中でストラップがしゃべるなんて事を見聞きしたことはないのだが、うむ、これはなかなかどうしてキャワイイではないか。」

いつもよりも明るい調子、私が焦っている時に出がちな態度だ。
自分でも自覚できるほどに彼女に対して苦手意識を持ってしまっ

ている。

「！大変です松風、普通に受け入れられましたよ！」

「まさかのキャワイ発言に正直おいらも驚きを隠せないぜ！」

実際には受け入れていない。

出来ることならば彼女を消してしまいたいと思ってすらいる。

ああそうだ、いつそ消してしまえばどんなに楽か。

しかしそれはできない。

なぜなら。

なぜならば。

その廊下の角に彼がいるからだ。

ジャンプオールスターについて考えるんじゃないのか？

何でこつちを観察してるんだ？

馬鹿なのか？

アホなのか？

全く。

彼の目の前であまり悪印象を与える行動は控えなくてはいけない。

気分的には目の前の女を殴り飛ばしてそのまま走って逃げたい気分だが、

さすがにソレは出来ない。

「ははは、うむ、うむ、愉快的コンビだねえ。」

笑顔で会話する私と、その反応に喜ぶ一人と一匹。
和やかな会話を演じる。

勿論演技だ。

出来ることならばこの女とにこやかに会話なんぞしたくもない。

ハッキリとこの女のことは好きになれそうもない。

その容姿も、

動きも、

顔つきも、

言動も、

推測される性格にいたるまで。

完全に 彼 の好みじゃあないか。

いや、それだけならば良い。

彼は、自分の好みだという理由で人を好きになることはない。

しかし、問題なことに。

この女は孤独だ。

之がイケナイ。

別に彼女の孤独さにはさしたる興味はない、正直このまま永遠に彼女が孤独だろうがなんだろうが私には関係の無いことだ。

しかし、彼は違う。

彼は、この女に共感してしまうだろう。
彼はそういう人間だ。

なにせ私がそういう人間に仕立て上げた。
自分に似ているものに共感を感じる。そういう性格が出来上がっている。

そうすることで私に依存させようとしたんだ。

そんなところで、私以外に、彼に似ている存在が現れたとしたら。
彼の興味は分割されてしまうじゃあないか。

ああ、糞。

この女。

この女と縁を作ってはイケナイ。

この女と私の間に関係が出来ることは、
彼女と彼を繋げると言うことだ。

この女と彼とに関係を作っではいけない。

「まゆっち、これは完全にチャンスだぜ、10年に一度の大チャンスだ。このままのムードで友達ゲットだぜ。」

「そそそそ、そうですね、これは完全にチャンスです!!」

「おやおや、まさか、聞こえるようにいうとは。うむ、実に愉快で結構。」

ああ、実に結構だよ！糞！

くそう、彼がこの状況を見てさえいなければ、こんな女。

そもそも、彼は何で見ているんだ！

なぜ出てこない？

「そうだ・・・わ、わ、私とメルトモに！！」

「いきなり友達ではなくて、メルトモってあたりが謙虚だぜまゆ
っち！」

「ははは、メルともか」

黙れ。

動くな私の口。

この女と縁を作るな。

取り敢えず、携帯電話は家においてきたとでも言っこの場を…

く
く
く
く
く

「！」

次の瞬間私の携帯が鳴った。

「ああ、それが携帯ですか？ かつこいい形をしていますね！ 実は私は携帯電話を買ったばかりで、新機種なんです！」

「いや、携帯を買ったときのまゆっち本当に希望が溢れてたぜ。まあ、その後登録出来る友達がいらない事実に絶望を感じるんだけどな。でもこれでそんな悲しい日々は過去のことだぜまゆっち。」

女のくだらない言葉を聞き流しながら、メールの主を確認すると。

そこにはシツカリと彼の名前が書かれていた。

中には

『ワンピースとNARUTOは20世紀ジャンプオールスターに入れるべきか、それとも21世紀として扱うべきか』

と、書かれていた。

知ったことか！

なぜ今コレをメールで送ってくる。

そもそもだ、彼はこのメールの異常さを自覚しているのか？

確信犯か？

確信犯なのか？

それとも得意のうっかりか？

何の目的でこのタイミングでメールを送ってくる？

この女のメル友発言が原因か？

彼は、私と彼女の間に縁ができることを望んでいる？

なぜ？

彼の交流関係は網羅している。

彼は彼女の存在を知らないはずだ。

この場で初めて彼女の存在を知った。

彼女の性格も孤独感も、今彼がいるあの位置から悟るほどの観察眼も持ち合わせていないはずだ。

であれば、なぜ私と彼女をつかづけるような行動を起こす？

興味か？

彼女に対して興味を持ったのか？

おいおいおいおい、
ちよつと待てよ。

てめえ、マジ、フザケンナよ。

もつと興味を向けるべき対象がいるだろ、
目の前に居るだろ。

私とか私とか私とか私とか私とか私とか私とか、
あと、私に私だ！それと私も！

こんな時にメールなんぞ……

ん！
メールか。

少し思いついてしまった。

ハッキリ行つて成功するかどうかはわからないが、やってみるだけの価値は有るだろう。

「赤外線通信の仕方は判るかい？」

そう言つて私は携帯電話を目の前の女に向ける。

「ええ！それはもう、血の特訓をしましたから！」

「鏡に向かつて赤外線通信をするまゆっちは本当にシユールだったぜー。」

「ああ、あの苦勞も今日この瞬間に報われるんですね。」

そう言いながら彼女も私に携帯を向けた。

私は彼女に赤外線で彼の電話番号を送信する。

勿論、彼の名前を私の名前に変更する細工も忘れない。

糞女は携帯を片手に心ここにあらずといった様子で教室へと戻つていった。

そのごすぐに、

「おい、メール返信まだかよ」

彼が、廊下から、さも今やって来ましたといったといったでやって来た。

白々しいことこの上ないな。

「なぜ君は態々メールなんぞをするんだ」

君のことだから下らない理由だとは思うよ。
だが、乙女の純情は少なからず傷ついたのも事実だよ。

「ちなみに君からもらったメールだが、心の底からどうでもいい」
「おま！だいじなことだぞ！あの二つが入るかどうかでパワーバランスが大きく変わるんだから！一番強い候補としては……」

馬鹿だな。

本当に馬鹿だな。

愛しいほどに馬鹿だなあ。

「一番強いのはラッキーマンで決まりだろ」

「……あ」

「でもまあよ、それならラッキーマンに判定勝ち出来た勝利マンは……」

「だからその話題は心底どうでもいい」

そのへん言葉を止めたほうが良い。
すこしばかり面倒なネタだ。

特に此処のように誰が来るかわからないような場所では言つべきではない。

頭がおかしいと思われるしね。

「ところで、いつもなら下らない内容にも返信すぐくれるのに今日に限って来ないのは…何かやってた？」

おや。

踏み込んできたな。

気になるのか？
でも残念。

教えてあげない。

「いや。何も無い」

まあ、ココは惚けておくとしよう。

どうせすぐに分かることだからね。

5月8日 馬とモナカと・裏（後書き）

用語解説

- ・自分に似ているものに共感を感じる
柿山が主人公の性格を誘導する際に一番力を入れた部分。

・
　　♪　♪　♪　♪　♪
ちなみに着メロは閣下。電話はリッパー。メールは蠟人形のイントロ。

- ・てめえ、マジ、フザケンナよ。
この口調。

決して柿山がマジギレしたと言っわけではない。
主人公の口調を真似ているだけ。

- ・私とか私とか
つまり選択肢は柿山のみ

- ・メールの異常さ
たしかに主人公のメールの内容は異常だが、
柿山が言っている異常はソレ以外の部分である。

- ・愛しいほどに馬鹿だなあ
痘痕も靨状態。

主人公がどんな奇行に走っても、ソレを慈しむ目で見れる。

- ・どうせすぐに分かる
具体的には6時間後

5月9日 不眠と友人・裏（前書き）

前回同様ヤンデレ話、苦手な人はスルーお願いします。

一回書いている途中に楽しくなって、コレはとでもじゃないがアップできないという話が出来上がってしまいました、よって、大幅に書きなおしてのアップです。それでもまだ結構オカシイ感じがが。

5月9日 不眠と友人・裏

朝の通学路。

いつも通りの通学風景だが、彼はいつもとすこしばかり調子が違っていた。

「昨日なかなか寝れなかったからな」

そう語る彼の目の下には不健康そうな隈が出来ていた。

おそらく、あの後あの女からメールが来たのだろう。

彼のことだ、相当に悩んだに違いない。

「夜更かし？不健康だわ、プレミアムな人生にはプレミアムな睡眠が不可欠よ」

「そう言ってやるな武蔵君、男にはムラムラして眠れない夜もあるのだよ」

私がそう言っていると、彼は少し怒った様相を見せた。

彼は少しからかうと、面白いくらい反応する。

ソレがどうにも可愛くて、つい、からかってしまう。
私の悪い癖だ。

ああ、そんな目で見るなよ。

絶頂してしまうだろ？

				.
.	.	.	.	.
.	.	.	.	.
.	.	.	.	.
.	.	.	.	.
.	.	.	.	.
.	.	.	.	.
.	.	.	.	.
	.	.	.	.
	.	.	.	.
	.	.	.	.
	.	.	.	.
		.	.	.
			.	.
			.	.
			.	.
			.	.
			.	.

最初の休み時間

予想通りに教室には彼の姿は無かった。

あの女のところに行ったのだろう。

ちり。

彼はどんな行動を取るだろうか。

とぼけるなり何なりして、あの女を拒絶するなら良い。

それで事は終わりだ。

どんなに二人の相性が良かろうと、一度でも拒絶してしまえば彼は二度とあの女に関わらない。

たとえ今後彼とあの女が関わるような事が起きたとしても、きつと彼はこう思うはずだ。

「自分から関係を絶つておいて今更仲良くは出来ない」

そういう人間なんだ彼は。

そうなれば問題ない。

アノ女は私と彼に近づくことはなくなり、今までの私と彼の楽しい生活は続行できる。

しかし失敗した場合は？

考えたくないことではあるが。

彼が、あの女と何らかの交流をしてしまう可能性もあるのだ。

そうなった場合。

そうだな。

行動を少し早めるべきか。

一応保険として放課後、武蔵を私達のいる場所に来るように誘導しておこう。

もし、彼が彼女を受け入れるならば、
私は彼に全てを否定させなくてはいけない。

彼は孤独でなくてはいけない。

でなければ彼は私を見たりしないだろう。

なにせ彼は凄い人間だ。

誰もが彼を好きになってしまう。

彼の理解者は私だけで十分なんだ。

私の理解者も彼一人なんだから。

この世界には私と彼が番として存在して、
ソレ以外の人間はその観測者に過ぎない。

それなのに彼と来たら、やたらと他人と関わるのだから。
他の人間なんぞ放っておけばいいのに。

彼は心が甘い。

自分が違うと言うことを理解しながら、この世界に順応しようと

.....

おや、彼が帰ってきた。

「何処に行ってたんだ？」

私が無気ない様子でそう尋ねると、

「ヤボ用」

と彼は返答した。

ふむ。

表情、言い方、仕草。

彼を見れば彼の考えも、行動もすぐに判ってしまう。

コレはあのクソ女を受け入れたようだね。

ああ、全く。

そんなことだから私が苦勞するのだ。

なぜあんな女を受け入れる。

惚れたのか？

恋したのか？

愛したのか？

下らない。

そんな感情に心動かされるべきではないのだ。

愛だの恋だの。

そもそも、そんな一文字の漢字で表現出来る気持ちに何の価値が有るというのだ。

生涯の愛だなんて、しょっちゅう出てくる言葉だが、果たして其の内のいくつが本当に死ぬまでの間に持続されると言うんだ？
死ぬほど愛しているなどと言いながら、果たしてどれだけの人間が本当に愛の為に死ねたんだ？

ただの一過性の病気のような感情じゃあないか。

必要なものはもっと別のものだろう？

依存、崇拜、信仰、共感、愛憎、投影
そもそもだ、感情を言葉なんぞで表そうということ事態が愚行だ。

ああ、この私の中にドロドロと溜まる感情に比べれば、
愛なんては実に陳腐な気持ちじゃあないか。

そんなものに惑わされてはいけない。

そもそも、あの女にしてもどれだけ君のことを理解していると言
うんだ？

君と出会って殆ど時間が経っていないじゃあないか。
君を知る時間なんて殆ど無かったじゃあないか。

アノ女は本当に君を求めたのか？
ただ自分の孤独を癒せる相手であれば誰でも良かったのではない
か？

君自身を本当に理解した上で、君を受け入れたのか？

違うだろ？

アノ女は。

君の性格も理解していない。

君の異常性も理解していない。

君のスバラシサも理解シテイナイ。

ああ、アノ女。

忌々しい。

いつそジゴワットでも飲ませてやりたい。

君はもっと強い感情に身を委ねるべきなんだ。

私の中にあるコノ感情を、

その感情だけを君はただ、受け入れるべきなんだ。

私からのアドバイスがなければ、物事を決定できないようになるべ

きだ。

責任を負うために、私を必要とすべきだ。

私の賛同を失うことを恐れ、反対意見を述べることができなくなるべきだ。

自ら物事を開始することができなくなるべきだ。

私の保護を得るために、不愉快なことまでを行ってしまうようになるべきだ。

自らを保護することができないという肥大化した恐怖により、精神不安を覚えるべきだ。

私に保護してもらえなくなるという非現実的な恐怖に囚われるべきだ。

そうすれば、晴れて私がそれらの恐怖を癒そうじゃあないか。

君に取って唯一絶対な存在になろうじゃないか。

そうすれば。

そうすれば、二人とも幸せになれるだろ？

さて、武蔵小杉を誘導しなくては。

今日の放課後に行動開始。

計画と激情にしたがつて行動するでしょう。

仕方なしの行動とはいえ、

私は非情に楽しみでもある。

ああ、もうすこし。

もう少しで君との関係を完璧なものになる。

数年も我慢したんだ。

少しくらいは好き勝手やっても許されるだろう？

いや、

許しなんて乞う必要もないか。

誰が許そうが、許すまいが関係ないさ。

この世界の倫理なんぞ知った事ではない。

ただ、
私たちが幸せになりさえすればいいんだから。

5月9日 不眠と友人・裏（後書き）

用語解説

・ 絶頂してしまうだろ？
へ…ヘンタイだ。

・ 誰もが彼を好きになってしまふ。
それは無いと思う。

・ 番
ツガイと読む。

二つのものが組み合わせたって一組になった物。
ちなみに動詞「番う」になると…エロイ意味になるので注意。

・ 観測者

全ては観測をすることで決定する。

観測すると観測値に対応する状態に変化する、
あるいは観測によって多世界の干渉性が喪失する。

兎に角、その事実を確認する存在がいて、初めてソレは事実となる。

なぜこんな発想が柿山の中で起きているのかについては、
後々に説明予定。

・ 彼を見れば彼の考えも、行動もすぐに判ってしまう。
柿山はエスパーに等しいほどに主人公の考えが読める。
ただ、問題なのは、主人公は自分の考えどおりに動かないし。
そもそも、主人公は行き当たりばったりで考えなんてあってない

ようなものだということ。

・投影

グラデーション・エア。術者の創造理念が真作を再現する特殊な魔術。魔力によってオリジナルの鏡像を物質化する…のとは別。

この場合の投影は、心理学的な投影。

具体的には、自我が主体のある部分を分裂させて、その部分を他人に投げかける行為。

・ドロドロと溜まる感情

もう、愛とかそう言うんじゃなくて、なんかスゲー感情。

ソレは憎しみと同時に好意であって、崇拜であると同時に侮蔑で、否定と同時に共感で、

兎に角凄い感情。

・ジゴワット

架空の単位

某タイムスリップ映画の、デロリアンが1回のタイムスリップに必要な電力量についての台詞が由来。

「ジゴワットを飲ませる」はどう考えても文法的にオカシイが、多分柿山はジゴワットとジクワットを勘違いしているようだ。

・ジクワット

ビピリジニウム系に分類される非選択形除草剤

毒性が強く、コレを使った殺人事件も過去発生している。

ジャガイモ農家におなじみのレグロックスなどに含まれている。

・私からのアドバイスがなければ、

柿山は主人公に、柿山限定の依存性人格障害になって欲しいようだ。

ちなみにこのセリフは依存性人格障害の診断基準をもじったもの。ただし柿山自身は依存性人格障害と言うよりは境界性人格障害に近い。

・境界性人格障害

誰かに依存するという意味合いでは依存性人格障害と同様。不安定な自己・他者のイメージ、感情・思考の制御の障害、衝動的な自己破壊行為など、すこしばかり依存性人格障害より行動的。一部の人には「つよきす」の「よぴー」みたいなと言ったほうがわかりやすいだろうか。別に柿山とよっぴーが似ていると言う訳ではないが、行動原理はかなり近いのは事実。

・よっぴー

筆者が個人的に大好きなキャラクター。

エロゲ版とPS2版でストーリーが違らしい。

ちなみに、ヤンデレに慣れていない人でも安心して見れる初心者向きのヤンデレ。

5月9日 青い巨人と壊れる関係・裏（前書き）

もう、すごく短いです。

何で柿山は武蔵を受け入れたの？の話です。

というか、それだけの話です。

柿山視点は取り敢えずコレで終わりです、次回からは通常の話に戻ります。

5月9日 青い巨人と壊れる関係・裏

私には友人は居ない。

彼？

たしかに現在彼との関係はそれに近いが、彼はあくまで友人ではなく私の連れ合いだ。

コレは天地開闢から決められた事実なので変えられない。

小雪先輩？

小雪先輩は友人に近いが、やはり微妙に違う。
強いていうのであれば、彼女は観察者だ。

私と彼が一緒になったとして、その事実を理解する存在が居て、初めてソレは事実となる。

観察者が居ること物事は決定されるのだ。

武蔵小杉？

それこそありえない。

私があれば対して友情なんぞを感じるはずがあるのか？

武蔵小杉の存在を知ったのはこの学園に入学してからすぐのことだった。

彼女はとにかく目立っていたから、存在はすぐに私の目にも入ってきた。

ただ、彼女に対して興味は一切、感じはしなかった。

どこにでも居る凡夫にたいして、思いを馳せるほどに私は暇ではないからだ。

彼女の存在が目障りに感じ始めたのは、彼女が一年制覇とやらを殆ど達成しつつある時だった。

とにかく誰かれ構わず、一年生で強いと聞けば喧嘩を売る。

自分こそが一番強いと騒ぐ、実に低俗なお山の大将は、見ている分には滑稽で面白いのだが、だんだんと目障りに感じ始めた。

いつそのこと、この学園からご退場願おうと思ったときに、ちょっとしたアイディアを思いついた。

実行も簡単だった。

それと無く歪曲した彼に関する噂を、S組に流すだけ。

それだけで武蔵小杉は、実に単純に彼に対して決闘を申し込もうとした。

彼は困ったことだろう。

なにせ自分の力を知られたくないんだ。

何とかその状況を打開しようと、思考を巡らせるだろう。
だがたぶん解決策は浮かばない。

そこに颯爽と私登場だ。

武蔵小杉を彼にけしかけ、颯爽とその状況に私が現れる。
そして彼の前で彼女を挑発し殴られる。

ただそれだけの事だった。

それだけで彼は私への依存を強める。

なぜなら。彼は責任を感じてしまうからだ。

「自分のせいで柿山が傷ついた、自分が早々に決闘を受け入れて
入れば柿山は傷つかなかった」

無論、彼には責任なんて存在はしない。

武蔵を挑発したのは私だし、殴られることも一種の自業自得だ。

しかし彼はそう思はない。

頭でそう思うことができて、心のなかに大きな罪悪感が根付く
だろう。

それを理解していたからこそ私は甘んじて武蔵野攻撃を受けよう
思っていた。

思っていたのだが。

そうはならなかった。

きがつけば、彼の右手が武蔵を殴り飛ばし。彼は私を庇うように
して、私の前に立っていた。

この瞬間、私の頬が緩んでしまうのをどうして止められよう。

私の思惑は外れてしまった。ああ、外れてしまった。

しかし、目の前の彼はどうか？

さながら私を守るナイトじゃあないか。

ああ、なんと凜々しいことか。

私の体の中を激情が走り、私の意識は一瞬だが恍惚の世界へと旅
へ出てしまった。

その後つらたえる彼の様子のなんと可愛らしいことか。

まあ、そんなわけで彼の行動自体は嬉しかったのだが、ただそれ
のせいで面倒な事になった。

川神百代に絡まれ、武蔵にも付きまとわれる。

紆余曲折を得て川神百代を排除することはできたが、

どういふわけか武蔵小杉が付き纏うことになってしまった。

之には辟易とした。

何が楽しくて、私たちの関係の間に異物を滑りこませなくてはいいけないんだ。

之がまだ、小雪先輩のような理解者であつたならば我慢もできようが、武蔵小杉ときたら、状況の理解さえ出来ない凡夫の極みである。

そんな人間が私の周りをうろつろと回っている。

しかし、武蔵小杉という人間には利用価値があつた。

なにせ彼女は単純だ。

実に単純だ。

非情に扱いやすく、騙しやすい。

だから。

切掛に、彼女を使うことにした。

彼女という存在は、ある種この世界の象徴だ。

努力家で、勤勉、それでいて傲慢で、暴力的。
それなのにか弱い。

少なくとも彼に比べればずっと弱い。

彼女を見る度に彼は思い知る。

自分が異質であるということを。

努力して、努力しても強くなれない彼女に対して、自分が何の努力もなしにその力を凌駕している事を、目の前に押し付けられ続けて、彼は悩まないはずがないんだ。

自分が異質だという理解をさせる。

なにせ彼と来たら今一つ理解がよわい。

自分が異常であるという自覚が薄いんだ。

まだ自分は平凡に生きられるなんて言う幻想に取り憑かれている。ソレを砕いてあげないと。

叶わない希望を持ち続けることほどに残酷なことはない。そろそろ現実を知るべき時期だ。

そのためには武蔵小杉という存在は丁度良かった。

まあ、彼女も私達の役に立てるんだ。さぞ本望だろう。

しかし本当に扱いやすいな彼女は。

今日の放課後に彼と屋上近くの廊下に行くことをそれと無く伝えたら、分かりやすく反応していた。

アレは偶然を装って絶対くる。

多分時間からするともう少ししたくらいだろう。

しかし、何だって彼女はこうも彼に付きまとうんだろ。

ああも彼に付きまといえるのも、中々に出来ることじゃあない。

ひょっとしたら彼女、彼に惚れているのかもな。

まあ、武蔵小杉の感情などどうでもいいことだ。

彼女がどんなことを思ったところで私達に影響をおよぼすことなんて無いんだから。

・
・
・

「それで、話の続きだが、ゲータレードは何色が一番美味しいと思う?」

「赤だろ?」

「私は水色だと思うんだが」

「おま…水色は無いだろ。ドラッグ人の皮膚の色だぞ」

またマイナーなネタを。

「所で関係ないが、ゲータレードのマークってパワーレンジャーのマークに似ているな」

「ホントに関係ないな! たしかに似てるけど、ソレを言ったらマリカーのサンダーも同じになるだろ」

やっぱり付いてきたか、このネタにも。

普通だったら理解出来ないか、
理解できても聞き返すんだけどな。

つくづく彼は自分の発言の迂闊さを理解していない。

やはり彼こそが私の番なのだ。

この会話一つとってもそうなんだ。

こんな会話が出来るのは世界で私達しか居ない。

他の誰であつても、どんな人間であつても出来るはずがないんだ。

ほんとう。

なぜその事実には彼は気がつかないんだろう。
不思議でならない。

まあいい。

それに気がつくのももうすぐだ。

具体的に言うならばこの後武蔵がやってきたら……。

そこで気配を感じた。

武蔵小杉がちょうど来たようだ。
廊下の端からこちらを伺っているな。

出てくるタイミングをはかっているのかな。

役者は揃った。

では、そろそろ事に及ぼうか。

「そうそう…所で話はさらに変わるんだが…」

そうやって私は、彼との関係を変えるその一歩を踏み出した。

5月9日 青い巨人と壊れる関係・裏（後書き）

用語解説

- ・ 事実を理解する存在が居て、初めてソレは事実となる
柿山は観察者効果や不確定性原理を歪曲したうえで信じているようだ。

詳しくは後に詳しく解説予定。

- ・ 凡夫

実際は周りがチートなだけ。

武蔵はアレでも結構強い。

全牌把握できても周りがチートだと凡夫とかダメギとか呼ばれる世の無常。

- ・ 彼の右手が武蔵を殴り飛ばし

柿山が驚いたのも笑ったのも、予想が外れたり、ソレが嬉しかったりしたから。

- ・ 凜々しい

柿山の脳内補正。 実際は無茶苦茶焦って、滑稽な姿。

- ・ 武蔵小杉

実はこの話の当初のヒロイン候補だったりする。
いつの間にかこんなかわいそうな扱いに。

- ・ 彼に惚れているのかもな。
どうだろう。微妙。

武蔵の好みはドチラかというと知的なタイプだとおもわれる。

主人公は成績は普通だが頭の回転が変な方向にまわっている。
でも、性格が変わるイベントもあったし。
ひよっとしたら…。

・会話が出来るのは世界で私達しか居ない
マイナーかつ異常。
というか主人公が異常性に気づいていないこと事態が最大の異常。

5月9日 ツガイ（前書き）

取り敢えず、この話かで伏線はだいたい消化。
何か、数話で終わらせるはずが、えらく長い話になってしまっている。

5月9日 ツガイ

柿山の視線の先では武蔵がこちらを伺っていた。

こっそり伺っているつもりなんだろう。

廊下の角に体を隠し、顔だけひょっこりとだしながらこつちを見ている。

全く隠れていないが。

なんだろう。

昨日の黛女史といい武蔵といい、この世界の人達の隠れるのが下手すぎるとおもう。アレでバレていないつもりなのか？馬鹿なのか？

570

まあいい。

今問題なのは武蔵小杉が馬鹿であるかではなくて、柿山の発言だ。

「武蔵を潰す」

何で？

俺は、黛女史と友人となった。

柿山としては、ソレが気に入らないらしい。

だからアクションを起こすようだ。

俺が思うにそのアクションは、俺に対して不利益なものである。なぜなら柿山が俺のことを憎んでいると思っていたからである。

しかし、その予想は柿山曰く、ハズレではないがかなり間違いに近いということ。

では柿山の起こすアクションは俺に対しての不利益なものでないのか？

では何か？

柿山は言った。

武蔵をつぶすと。

なんのこっちゃねん。

意味がわからん。俺が馬鹿だからか？

たしかに国語の成績は然程高くは無いが、しかし、この理屈は意味不明すぎる。

整理しよう。

K a k i y a m a d o e s n o t l i k e t h a t I
w a s f r i e n d s w i t h M s M a y u z u m i .
柿山は俺と黛女史が友だちになったことが気に入らない。

S o s h e c r u s h M u s a s h i

だから武蔵を潰す。

・・・???

だめだ、整理したところで、英語の教科書っぽく論理化したところで意味不明なのは変わらない。

「なんで？」

どうしても俺一人では正解を導きだす事ができそうもないので、柿山に正解を聞くことにした。

一応廊下の角にいる武蔵には聞こえない程度の声のボリュームを心がけた上でだ。

「クハハは、そりゃあ必要だからに決まってるじゃあないか」

?????

だめだ、埒があかないな。

質問の仕方を変えよう。

ここは、疑問を一つづつ解明していかないとだめだ。

まず、此処をハッキリとしよう。

「お前俺のことを嫌いじゃなかったのか？」

確認の意味も含めて再度柿山に問いかける。

「ソレは大きな勘違いだな。不本意極まりない」

俺のセリフにかぶせ気味に柿山は答えたが、そこが今ひとつ納得行かない。

「だってアレだぞ？おまえ、俺のことを落としいれるために俺に近

づいた感あつたる?」

そうなのだ。

たしかに当初、柿山は俺に対する敵意を隠しながら俺に近づいていた。

「クフ、本当に鋭いくせに、その反面でひどく鈍い。

正解だよ、ああ、たしかに正解だ。

君の言うとおりだよ。ソレが間違いではなかったのは私が保証する。

だがね。その正解は遙か昔の正解だ。

いふなれば、夏休みの絵日記に三年前の出来事を書いて提出するようなものだ。

ソレに気がついた事には素直に賞賛を与えるけれど、今現在の回答としてはハズレだなあ」

なんじゃそりゃ。

「つまり、お前はたしかに俺に対する嫌がらせをしようと友だちになつたけれど、今では気が変わってそのツモリは無くなつたってこと?」

「気が変わったんじゃあないさ、気がついたんだよ。私は君を排除したいのではなく、独り占めしたいんだと。君という存在を独占して私だけのものにしたいのだとね」

・・・ええつと。

それはつまり。

ええつと。

うん。

つまり。

「…なにこれ愛の告白？」

「愛の告白というすとすこしばかり語弊があるが、限りなくそれに近いものだと言えるかな。」

・
・
・

・

・
・
・

姉さん事件です！

生まれて初めて女の子に告白されました！

相手はドッピオ似の女の子です！

いや、まあそれはソレとして。

「で？なんでソレだと武蔵を潰す話になるんだ？」

「何のことはない、じゃまだからだ。私と、君と、その間に邪魔者がいるのは良くないだろ？」

良くないだろって…ああた。

「ともだちだろ？」

「友達？アレが？他人だよ。君とは違う人種だ。友人になりようがない」

??

「いやいやいや、たしかに性格はオカシイし、アイツは戦闘民族だが、だからと言って友人になれないというわけじゃあないだろ？」

結構いい奴だぞ？馬鹿だけど。

意外と楽しい奴だぞ？馬鹿だけど。

「ああ、そうだな、語弊があるか。違うよ、武蔵小杉が友人にならないという意味じゃあない。この世界の誰だって無理な話なんだ。そもそもだ、この世の中の全てが君とは違う人種なんだ。狼が羊と暮らせないように、君はこの世界で私達意外の存在とは身を寄せ合えないんだよ」

柿山って…こんなに電波だったっけ？

「人種が違うって…、たしかに俺はチートパワーを持ってるかもしれないが、しかし、俺と同等か俺以上に強い人間だって…」

「違う違う。たしかに強さもそうだが、それ以上に違う部分があるだろう」

「何を…」

何を言っているんだ」

違うところ。

そんなモノ。

ある。

たしかにあるが。

ソレをコイツが知っているわけが…

「クハハ、言っているだろう？」

君の隠し事はすべてわかると、

今まで気がついていないと思っていたのか？」

俺が今まで柿山に、いや柿山を含め誰にも言っていないこと。
俺の前世の記憶。

「何で知っているんだって顔だね。いや、わかるよ、わからいでか。
コレが私以外の人間では解らない可能性もあるが、私だけは理解で
きてしまうんだ」

誰にも言っていない、俺の最大の秘密。

絶対に他人には知られたくない秘密。

漏れ出るのが嫌で、日記にだって書かなかった筈なのに。

コノ目の前の女はたしかにその事実を知っている様子だ。

何故。

ナゼ。

なぜ。

どんなに付き合いが長くても、わかり得ないはずだ。

おれの家族でさえ気がつかなかったことなのに。

どしてソレを・・・。

「やはり。気づいていなかったか。クフフ、ココに生きる人間では
まずでない発言をお互いにしていたのに。」

何だ、何を言っている？

「あれだけの会話をしておきながら、まさかただなんとなく気が合うくらいにしか感じなかったなんて。これはもう少し積極的に行くべきだったかな。クハ、私としても反省だ。」

どういう事だ。

いや、

違う、

うすうす気づいていた。

気づいていたけれど、気づかないことにしていた。

それに気がつけば、今の平穏が壊れる気がした。

だから。

だからあえて無視していたんだ。

自分自身さえも騙すように。

それに気がつかないように自分を誘導していた。

「色々ネタも交えたのに、反応しておいて気がつかないなんて本当に君は天然だなあ。クフフ。昨日だってあんなメールをしておいて、私を試していたんじゃないかったのか？」

昨日のメール。

ジャンプ最強に関するメールだ。

そうだ。「ジャンプ」「ラッキーマン」「ファンタスティックプ
ラネット」「パワーレンジャー」どれもこれも。

前世の記憶の中にしかない。

現世ではどれも似たようなものはあれど、呼び方が少しずつ違う。

それなのに。

それなのに目の前の女は、それらを理解し、あまつさえ普通にそれらの名前を言い放っていた。

つまりだ。

つまりだ。

コイツは。

この眼の前の女は。

「せっかくの同郷の人間に、君は少しばかり冷たいと思うよう。」

俺と同じ異世界人だ。

「気がつけよ、私たちは異常な存在なんだ。

武蔵や黨とは違う、暴力的で異常で、そんな存在がこの世界の人間と友達ごっこか？

無理だろ？なにせ私たちは違うんだ、別物なんだ。

私達がほんとうの意味で心を許せるのは、同じ存在で有る私と君だけなんだよ？

気がつけ、それを理解しろ」

ああそうだ。

たしかにその通り、俺とコイツはこの世界からすればイレギュラ
ーだ。

「この世界が、この世界に蔓延るクズ共が、君を惑わすというのならば、

私は君を守らなくてはいけない。

君と私の二人だけが本来あるべき完成された世界であるんだから
いや、私達二人以外が不要とは言わない。

私達というものを引き立てるには比較対象と観測者が必要不可欠
だ。

つまりだ、この世界は祝福をするために存在している。

ソレが調子にのって私達と同じ存在になろうとしていやがる。

まったくもって身の程知らずだ。アレらに目を向けるべきではな
いんだ。

所が君と来たら。そこらの人間に

やさしい。

優しすぎるのだ」

「・・・」

「武蔵くん居るんだろ！出てきたらどうだい！」

柿山が廊下の角に隠れる武蔵に大声で言う。

武蔵はバレたかと言った表情をしながらヒョコヒョコとこつちに
やって来る。

来るな。

来るべきじゃない。

此処はヤバイ。

この柿山は。

兎に角ヤバイ。

そう叫びたかった。

叫びたかったけれど。

俺の口はまるで動かなかった。
理由はわかってる。

怖いんだ。

恐怖が俺の体を硬直させている。
動くことも目を逸らすことも声をあげることも出来ない。

ただ、目の前に居る「柿山ノヨウナナニカ」に恐怖している。

コイツは誰だ？

柿山？

俺は知らないぞ？

こんな支離滅裂なことを言う柿山を。
こんな奇っ怪な笑い方をする柿山を。
こんな目をする柿山を。

こんなに恐ろしい柿山を。

「ねえねえ、何の話？何の話？」

武蔵小杉が完全に空気を無視して聞いてくる。
お前、マジで空気読めないな。

「なに、たいしたことじゃあ無いさ。いや、たいしたことではあるんだが、まあ君の協力が欲しくてね」

そうにこやかに武蔵に語りかける柿山。

まるで、いつも通りの世間話を語るような調子だ。

しかし、気配が違う。

殺気とも違う。威圧感のような気配。

今まさに柿山は武蔵を潰そうとしている。

「や……めろ」

搾り出すように繰り出す俺の声。

これが精一杯だった。

まるで金縛りにあったように俺の体は依然動かない。

柿山がどうやって武蔵を潰すのかは解らない。

武蔵はコレでも一年の殆どを制覇出来るほどに強い人間だ。
そう簡単に潰せるとは思えない。

でも、ヤバイんだ。

良く解らんがヤバイ。

目の前の柿山ならば、問題なく武蔵を潰せるような気がしてならないんだ。

「え？ひよつとして告白タイム？」

正解だけど！

正解だけど不正解です！

「ははは、間違いじゃあない。じゃあ無いけど微妙に違うな。でもまあ、そうだな。兎に角武蔵くん。君の助けがほしいかな。なに、簡単なことさ、ただ、彼が私の告白を受け入れる切掛になって欲しいんだ。なにせ彼は自覚していないんだ」

武蔵、逃げる。

気づけ、柿山の雰囲気が異常だということに。

この状況の空気の重さに！

俺の必死の願いも虚しく、武蔵はこう宣った。

「修羅場？ねえ修羅場？」

マジでお前心の底から空気読め！！

「クハハハ、そうだね、修羅場さ。ああ修羅場だ。なにせ彼には自覚が無いんだ。」

彼と私はね。同族なんだ。

この世界に存在するただ一對、唯一のツガイなんだ。
であるが故に、この世界には私と彼だけが対等な存在でいられるのだよ。

ソレ以外の人間は全て異種族だ。

象がアリを気にしないように。

コモドオオトカゲがクマムシの存在を意識しないように。

私達にとって、私達以外の人間なんぞ、さして必要では無いのだよ。

それなのにだ。

君はアリやクマムシを気にし過ぎる。

蟲愛づる姫君じゃあないんだ。君が見るべきは同等の存在で、それ、即ち。

私だ。

なのに彼と来たら優しすぎる。

象が蟻を気にしないように、

私達も蟻を気にするべきじゃあ無いんだよ。

蟻を気にしては歩けないだろ？

蟻は踏み潰すものだ」

そう言い終わると。

柿山から。

恐ろしいほどに殺気が放たれた。

川神百代なんて目じゃない。

俺が今までに浴びたいかなる殺気よりも濃密で禍々しい殺気だ。

その殺気を浴びて武蔵も気がついたようだ。

この状況があまりにも異常だということに。

武蔵は恐怖に固まった。

こうなつてはもう逃げることも出来ない。

濃密な殺気と言つのはそれだけで一つの技何だ。

相手の心に恐怖を植えつけて動けなくする。

俺も武蔵も、まるで心臓を握られたみたいに動けなくなってしま
う。

クソ！

このまま行けば武蔵は潰される。

目の前の柿山からは、確実に武蔵を潰すという決意が見て取れる。
というか、冗談でこんな殺気は出せやしない。

なんとか、

何とか防がないと。

武蔵のためにも、俺のためにも、そして柿山自身のためにもこん
な馬鹿な事はすべきじゃないんだ。

動け俺の体。

何とか武蔵を連れて逃げるんだ。

こんな殺気に惑わされるな。

俺の焦りとは裏腹に、柿山は実に余裕の様子だった。

先刻に比べても全く変わらない調子でしゃべり続けている。

「間違っているのは自覚しているさ、常識からも乖離している。しかしね、この際常識なんてものは無視してしまおう。問題なのはだ。

君がどうしたら私を見てくれるかということだ。

つまり。君を手に入れることができるか。

君自身の手で自分の周りの邪魔な存在を排除すればいい。

再度自覚するんだ。

自分が如何に異常か。

この世界において如何にイレギュラーなのか。

そんな君を受け入れられるのはこの世でただ一人。

私だけだと気がつくべきなんだ」

柿山はとどまること無くしゃべり続ける。

余裕なんだ。

自分の殺気に自信があるのか、俺も武蔵も逃げられないと思っているんだろう。

俺達を目の前にしゃべり続ける。

しかし、この猶予は俺に取ってありがたいものだった。

もう少し、

もう少しで動ける。

この殺気に慣れ、行動できるようになる。

そうすれば武蔵を連れてこの場を逃げる事が出来る。

「あ、そうそう。この世界の人間と関係なんぞ持ったがらない私が、なぜ言霊部なんてものに所属しているか知ってるかい？」

突然柿山がそんなことを言った。

言霊部に入った理由？

悪いがそんなことはどうでも良い。

あと少し、

後刹那だ。

あとほんの…

「さあ武蔵小杉を潰せ」

柿山の口から放たれた言葉。
何を言ってるんだと思った。

しかし、俺の体は殆ど反射的に動いていて、

そして、

そして俺の右手は、

武蔵小杉を殴り飛ばしていた。

5月9日 ツガイ（後書き）

用語解説

・姉さん事件です
なんとなく出たセリフ、
主人公はプラトンに勤務しているわけでも、スクールランブルしているわけでもない。そもそも姉は居ない。

・こんなに電波だったっけ？
うん

・ジャンプ
元ネタでは「ジャソプ」。サンデーも「サソデー」。「TOLLOVE」も「トラブルン」のように全て微妙に違う。
実は主人公のジャンプ最強メールは伏線だったりする。
感想とかで「原作ではジャソプですよ」みたいな感じで、指摘されないかと凄く不安だった。

・コモドオオトカゲ
カゲ亜目の現生種では世界最大種。毒を持ち、悪食で大型の哺乳類も食べる。人間さえもその対象となることがある。

・クマムシ
すごく強い生物。
通常は体重の85%をしめる水分を0・05%まで減らし、極度の乾燥状態にも耐える。

151の高温から、ほぼ絶対零度（0・0075ケルビン）の極低温まで耐える。

真空から75,000気圧の高圧まで耐える。

高線量の紫外線、X線等の放射線に耐える。

宇宙空間に10日間さらされても死ななかつたりする。

ちなみに大きさは50マイクロメートルから2ミリメートルくらい

・言霊

彼女のいう言霊は、催眠術のような物。言葉本来のパワーと言うよりは、言葉のトーンやタイミングを使って相手を動かすもの。

・さあ武蔵小杉を潰せ

柿山としては武蔵を潰すということがこの世界と主人公を決別させる儀式である。自分の暴力性を自覚させ、この世界の人間に対して自分が異質であると言う事を思い知らせたかった。友人と言える存在を殴り飛ばすことで、主人公の未練のようなこの世界に対する執着を断ち切れると考えたのだ。

5月9日 夕日に照らされて（前書き）

更新遅れました

海外ドラマが面白くて、レンタルしまくってたらつつい。

5月9日 夕日に照らされて

俺と柿山の関係は出会ってから当分の期間悪いものだった。

同属嫌悪だったんだろう。

いや今思えば、ある種の同気相求だったのかも。

何処かしら大人びていて、世間からすこしばかり浮いている。

まるで自分自身を見ているようだった。

当時はソレがとてつもなく不愉快で。

出来ることならば柿山が目の前から居なくなってくれば良いと、何度か思ったりした。

思ってたところの話じゃあない。

実際に計画すら立てた。ソレくらいに不愉快だった。

しかし、その俺の残酷かつ、幼稚な計画は実行されることはなかった。

俺がソレを実行するより前に。

柿山から俺の方に近づいてきたのだ。

俺を潰すために。

勿論、柿山としてはさりげない様子だったのだろう。

事実としてさりげなかった。

子供では絶対見抜けないくらい、
いや、大人であっても見抜けないほどに自然だった。

前世の記憶があつた俺でも、危うく騙されるほどにだ。

しかし俺は身構えた。柿山の思惑をなんとなく察する事が出来た。
なにせ、柿山を陥れることを、俺も思っていたんだ。

他人を陥れるとき、一番有効なのは友好的な立場として相手に近づくこと。そして信頼を得ることだ。

だから柿山の信頼を得て、その上で陥れてやろうって思ったんだ。

でだ、

じっさい、ソレを目の前で実行した柿山を見て、

なんだかすごく滑稽だったんだ。

似てる似てると思つたが、やろうとすることまでおなじなのかって、呆れるのを通り越して、なんだか面白かった。

まあ、俺に対して何らかの不利益を起こそうというならば、俺もソレを黙って受け入れるほどに馬鹿じゃあない。

俺はこう思つた。

逆に『柿山』を陥れる大きなチャンスとなるかもしれない。

それでまあ、柿山と仲良くし始めた。

柿山が俺を陥れる前に、先手を取ってアイツを陥れようと思ったんだ。

柿山がなにやら俺を誘導しているのは知っていた。知っていた上で、その誘導に乗ったんだ。

誘導に乗ったふりをして、柿山と仲の良いふりをして。

で、本当に仲良くなったんだ。まあ、この場合、俺が一方的に柿山に対して好感を持った。

必死過ぎる柿山がなんだか滑稽で。それでいて愛らしかったんだ。

だって柿山は俺を陥れる為に人生まで賭けてやがった。本当なら柿山はもっと幸せになれる人間だ。

頭が良くて、社交的な行動もできる、容姿も悪い部類ではない。もっと平凡に、それこそ、人並みの学生生活がおくれたはずだったんだ。

なのに、柿山は俺の為に青春を費やした。

かつて、俺という存在のために、そこまでのことをした人間は居ない。

たとえソレがマイナスの理由だったとしても、俺という存在に対して、そこまで真剣になってくれた人間は、前世も今世も柿山以外

にはありえなかった。

柿山は人生を賭けて俺を見ていた。俺のために動いていた。

それで。

アイツが人生を賭けるなら、俺だって人生を賭けてそれに付きあおうと思ったんだ。

まあそんなワケもあって、柿山の告白はマジで予想外だったわけだが。

少し話が脱線した。

でだ、まあ何が言いたいかというと。

俺は柿山の誘導に今までワザと乗っていた。

柿山の言霊にも、催眠術モドキもワザと掛かった振りをしていた。

つまり。

柿山の言霊なんぞ、今まで一度たりとも俺に効いたことは無いんだ。

「パッピンス！」っと、愉快的な奇声を発しながら武蔵が壁にめり込んだ。

なんだかデジャヴを感じる。

兎に角、俺は武蔵を殴った。

柿山の言葉に反応したわけじゃあない。

柿山の催眠術にも、言霊にも操られてはいない。

反射的に、やってしまった行動ではあったが、俺は、自分の、自分自身の意思で武蔵を殴った。

なぜならそうしなくてはいけなかったから。

そうしなければ。

俺が武蔵を殴って無ければ。

武蔵は柿山に殺されていた。

今さっきまで武蔵の頭のあった場所。

そこをたしかに気弾が通過するのを感じた。

間違いなく発生源は柿山。

もし俺が武蔵を殴り飛ばさなければ、柿山が武蔵を吹き飛ばすつもりだったんだろう。

思い返してみればたしかにおかしな所は多々あった。

俺でさえ柿山の気配を感じることが出来ないことが多々あった。

俺が無意識に発した殺気を何度か感じ取っていた。

俺の隣で川神百代の殺気を一緒に浴びていたのに、顔色ひとつ変えなかった。

つまり目の前の俺の同郷の女は。

俺と同じように。

とんでもなく強いということだ。

「お前、強かったんだな」

「なに、実践で試したわけではないから、私自身どの程度の実力なのかは不明だがね、たしかに君の言うとおりだとも。此処もまた、君とおそろいだ」

そう言って笑う柿山からは、狂気と殺気が入り交じったものが発せられてた。

武蔵が生きることが許せないんだろう。

何とか武蔵を助けなければ、このままだと柿山に殺される。

「その殺気も生まれつき、俺同様に無茶苦茶強いとか？」
できるだけ平静を装ってそう話しかける。

少しでも、柿山の気を反らせる苦肉の策だ。

「さあ、どうだろう、私も試したことはない」

だろうな、俺が気がつかなかったくらいだ。

恐らくは今まで一回だってこの力を使ったことが無いんだろう。

力開放の、その記念すべき第一回が「武蔵ぶっ殺しまSHOW」
ってのは、ちょっといただけないが。

「まあ、私の話はこれくらいにして……どいてくれ、そいつ殺せない。」

「断る！」

ソレを聞いたらもう、ハイそうですかと、武蔵を殺させるわけにはいかないだろ。

「ふむ、困ったな。…まあ構わないか、無理やり押し殺そう、ああ、大丈夫。君は殺さないよ？」

「させる思ってるのか？」

俺もまた、チートだぞ？

「できないと？」

確信はない、無いけれど。多分できる。

正直、この眼の前の濃密な殺気。

確証はないが、なんとなく本能で分かる。

柿山はきつと、俺よりも強い。

ハッキリ言って勝てる気がしない。

せいぜい時間稼ぎが精一杯だろう。

「ここはなかったコトにして、見逃すって案を提案するんだが」

「私の脳内議会によって否決したよ」

「この場を逃がしてくれる人が居たら俺は何だって言うこと聞いちゃうかもな」

俺は一抹の望みをその言葉に賭ける。

「おやあ、ソレは魅力的な提案だ。非常に魅力的だ、すごく魅力的だ。うん。でも残念だ。いや、本当に残念だが、ソレは聞き入れられない。私としても断腸の思いだよ。でも武蔵をのさばらせておくのはダメなんだ。君にとってもプラスに成らない。コレは仕方が無いことなんだよ」

そう言つて柿山は俺の発言を無常にも却下した。

やはりそうなるか。

仕方がない。

多分このまま戦つたら俺は柿山に負けると思う。

なにせ、

スペックはおそらく柿山の方が上。

脳みそも、柿山のほうが上。

戦闘経験は若干俺のほうががあるが、微々たる差だ。皆無に等しい。

全面的に俺のほうが柿山に対して劣っている。

しかし。ただひとつ。

たった一つだけ俺が柿山より優れている部分が有る。

「俺とお前は確かに似てるよ。記憶云々もそうだけど、性格歪んでるところも、気配を消すのが上手い所も、物凄く強いところも・・・」

そしてさらにはもう一つ。

「・・・それと、集中すると周りが見えなくなる所もな！」

このウツカリさんめ！！

「？」

「先輩！足止め頼みます！」

俺は柿山の後ろに向かってそう叫んだ。

「何だって言うこと聞いちゃう、とたしかに聞いたぞ！今度勝負してもらおうからな！」

そう、そこにいたのは誰でもない、
学園最強の化物。

即ち川神百代だ。

この学園でおもいつきり殺気を出して川神百代が出てこない訳が無いだろ？

俺の「この場を逃がしてくれる人が居たら俺は何だって言うこと
聞いちゃうかもな」の言葉は、柿山じゃあない、川神百代に対して
言った言葉だ。

自分自身の濃密な殺気が仇になったな、お前のとんでも無い殺気
が、川神百代が接近する気配を隠したんだ。
お前の背中の方に見える川神百代の存在が、俺には天使に見えた
さ。

川神百代としてはコノ言質で俺と再試合をするつもりなんだろう。
この際、再試合だろうがなんだろうがやってやる。

人命には変えられん。

柿山と川神百代が睨み合っている隙に俺は武蔵を壁からひっぺが
してそのままその場から走って逃げる。

俺が柿山に対して唯一優れている部分。

逃げ足の速さ。逃げることへの執念。

これだけはこの世界の誰よりも優れている自信がある。

柿山は俺を止めようと動くが、その動きは川神百代によって止め
られる。

「先輩。邪魔ですよ」

「そりゃあ、邪魔をしてるからな。まったく、あの男だけでなくお前もこんな殺気が出せるとは。世の中実に狭い」

「くそ、糞、クソ。貴方の存在はじゃまだから、彼に近づけないように苦心したのに、またこうしてしゃしゃり出てくる、ああ、クソ。」

その場に濃密な殺気が渦巻く。

その殺気を背中にヒシヒシと感じながら、俺は武蔵を背負ってそのまま走りだす。

出来れば前みたいにマツハで逃げたいが、武蔵の様態が結構アレなので衝撃を与えるとヤバイ。よって人並みの速さで逃げる。

川神百代はハッキリ言っただけ俺より強い。前回俺が勝てたのも、運が良かったからにすぎない。

たしかに身体能力という意味では然程の差はないが、川神百代は経験と技がある。柿山は身体能力では川神百代を超えているかもしれないが、実戦経験は全くないはずだ。

俺ようにの隠し玉が無い限りは川神百代に負ける可能性が高い。

そうであれば良い。

取り敢えず暴走した柿山を抑えられれば。

あとで柿山にスペシャル説教の後に武蔵に謝らせてことは終了だ。

しかし、万が一。

万が一川神百代が負けてしまったら。

負けないまでも、川神百代を柿山が振り切る可能性もある。

その時のために、武蔵を安全な場所に逃さなくてはいけない。

逃走場所はすでに決めてある。

というか、一箇所しかありえない。

そして、その場所に俺達をかくまってくれる人物。

コレは一種の賭けだ。

その人がまだ校舎に居る保証はない、そして校舎にいたとして協力してくれるかも解らない。

だがこの状況を打開できる人物しか思い浮かばない。

「こんちつす!!」

俺は2 - Fの教室の扉をおもいつきり開ける。

「「！！！」」

突然の来訪者に教室にいた先輩方が一斉に俺のことを見る。

その顔ぶれの中に…

居た！赤い髪！

川神一子！

川神百代の妹にして、カワカミーンの戦闘狂が一柱。

「彼女を川神院に入れて欲しいんです！」

俺は彼女に向かって叫ぶようにそう言う。

「でも入門には厳しい審…」

俺の気迫に押されたような調子で彼女はそう言った。

「違う違う違う！入れてって、保護してってことだ！」

「保護？」

ええい、説明が面倒くさいな！

「柿山が暴走して！今、大変なことに、化けも…百代先輩と戦ってるんですけど、とにかく、アイツの狙いは武蔵で、武蔵をなんとか安全なところに安置しない

と！もう幻魔大戦がすぐそこまで迫ってきているんです！」

俺の説明に赤髪さんは首を捻るばかりで、全く理解を示さない。

たしかに我ながら支離滅裂な説明だけど、緊急事態だつてことぐ
らいは察しろ！

「解つた！ 解つたから落ち着け。ワン子、とにかく学園長かルー先
生に連絡して彼女を川神院に。」

俺が焦っていると大和先輩が割り込んできて、取り敢えず話を進
めた。

さすが先輩だ、こういう時に頼りになる。

「よくわからないけど！ 大和が言うんならそうするわ！」
そう言つて、彼女は武蔵を背負うと走り去っていた。

コレで取り敢えず安心だ。

カワカミーンにさえ入つてしまえば柿山はもう武蔵に手出しはで
きない。

なにせ戦闘狂がワラワラと居るんだ。

たしかに一人一人の戦闘力で見れば柿山は最強かもしれないが、
カワカミーンには沢山の門下生が居る。

その数量の前に個人の實力ではどう仕様も無い。

この町でカワカミーン以上に安全な場所は存在しないのだ。

「それで姉さんがどうしたつて？」

安堵のため息をつく俺に、大和先輩がそう聞いてきた。

「とりあえず、柿山が暴走。突然武蔵を殺そうとする。おれ混乱。
とりあえず武蔵を庇う、そこに川神先輩登場。柿山と川神先輩のバ

トル勃発。俺、その間に武蔵を連れて逃走…ということですよ」

「柿山？つて…あのいつも一緒に居る女の子だよね」

「ええ、アイツは俺以上に強いということが今日未明に判明致しました」

「え？あの子、今姉さんと…」なるほどコノ凄い気はそれが原因か！」

なんか金髪の人が話に割り込んできた。

「凄い気？」

大和先輩が金髪の人に聞き返す。お知り合いですか？

「ああ、今川神百代の気配と他の気配がぶつかるのを感じる、ドチラも禍々しい気なので、分かりにくいが」

ああ、先刻まで逃げるのに夢中だから気がつかないが、あの場所から結構離れたここまで気配が飛んでくる。

おそらく現在進行形でバトルは続いているんだろう。

「マズイっすね、このままじゃ校舎が持たないっすよ、巻き込まれる人間も出てくるかも」

誰かが巻き添えになってしまいかねない。

「よし、構内に残っている人間を避難させよう、取り敢えず…」

大和先輩がそう言いかけたとき、

ドゴン!!!!!!!!!!!!!!

「「「「!!!!!!」」」」

大きな音がして、学園全体が揺れた。

「何の音!」

「気配が…消えた?」

金髪さんがそう言った。

「消えた?」

大和先輩が金髪さんに聞き返す。

「柿山と先輩の気配が消えました」

「おそらく勝負がついたんだな」

そうだ。

今の音。

おそらく、フィニッシュブローをおもいつき叩きつけた音だ。

音がなると同時に先刻までぶつかっていた禍々しい気配は嘘みたいに消えた。

不思議なのは勝者側の気配までも消えている事だ。

あるいは相討ちか、辛勝で勝者側にも気が残っていないんだろう。

ドチラにしても…

「見に行きましょう、どっちが勝ったにしてもお互いに無事では無いはずです」

「そうだね、取り敢えず見に行こうか」

「ああ」

そう言っただけで俺達は教室から出て、先刻まで俺が居た場所へと向かうことにした。

正直、バツくれたくらいに気分が進まなかったけれど、確認しないことには状況が進展しないし。

俺はバクバク唸る心臓を必死で落ち着かせながら、廊下を進んだ。

廊下は燦々たる状況だった。

粉塵が舞い散り、校舎の所々にヒビが入っていた。

そして、川神百代と柿山が戦闘していたであろう場所は特にひどかった。

粉塵やヒビの量も他の場所より桁違いに多かった。

窓ガラスも例外なく割れていたし、天井は今にも落ちそうだった。

しかし、そんな惨状は気にならなかった。

そんなモノより、目を引くものがそこにあつた。

壁に出来たデッカイ穴からみえる、綺麗な夕日。

いや、目を引いたのはその夕日自体じゃない。

その夕日に照らされた一人の人間。

仰向けに倒れた川神百代だった。

5月9日 夕日に照らされて（後書き）

用語解説

・同気相求

似たもの同士は自然とつるむよ、という意味の四文字熟語。転じて、最近では同属嫌悪の対義語のような意味合いで使われることもある。

・パッピンス

韓国料理、要はかき氷なのだが日本のソレよりバリエーションが豊富で小豆やフルーツ、ゼリーやシリアルなど、トッピングは様々。武蔵はこのお菓子を意識して叫んだのかは不明。主人公の好物。

・脳内議会

柿山脳内議会、脳内100人の柿山による審議・議決を経て物事を決定する会議。余興で主人公に関するクイズ大会や主人公フィギアのつかみ取り大会なども開催される。

・断腸の思い

はらわたがちぎれるほどの耐え難い悲しみ。語源は故事で、切腹とは関係ない。

・逃げ足の速さ

純粹な速さではなく、その状況にあった最適な方法でもって逃げる事が出来る、いうなれば逃走率の高さ。

・幻魔大戦

そこまでオカルティックな大戦では無いのだが、前世の記憶とか

有る辺りではある種オカルティックと言えなくもない。

今もカルト的な人気を誇る大戦だが、終戦した例があまり無い。

・ドゴン

ドゴンはマリ共和国バンディアガラ山のニジェール川流域に面した断崖に居住する民族。

だが、この場合のドゴンは単なる擬音。

5月9日 忽然と消えた物

川神百代の様子は尋常ではなかった。

俺の必殺のビームを受けた時でさえ立ち上がった化物。
俺の知る限りこの世界で最強の女。

その化物が白目向いて倒れていた。

いったいどうやったらあの化物をそんなふうに来るのか不思議でならなかった。

しかし、それを知るすべはその場に存在しなかった。

それをやり遂げた当の柿山が、その場に居なかったんだ。

まるで煙のように消えていた。

気配も無い。

すかさず柿山の携帯電話に電話をかけたけれど、電源を切っているらしく全くつながらない。

俺達はそりゃあ混乱した。

どうしていいか解らず、右往左往するばかり。

倒れた川神百代と、消えた柿山という状況で、まともな判断ができなくなっていた。

ただ一人、大和先輩を除いて。

そんな状況でも大和先輩は冷静だった。

取り敢えず、川神百代の治療が最優先ということで、俺に彼女をカワカミーンに運ぶよう指示を飛ばし、同時に携帯電話でカワカミーンに状況連絡、さらには門下生数人を柿山搜索に当てて欲しいと通達。

その後も電話をかけまくって各知り合いに、柿山を見つけた際は連絡をよこすように指示をしていた。

その手際たるや、見事の一言に尽きる。

兎に角、俺達は川神百代を担いでカワカミーンに急いだ。

大和先輩曰く、あそこは医療施設としての役割も有るんだとか。

皆混乱する中、大和先輩だけが的確な指示を出していた。

[illegible]

ふむ

「困ったことになったネー」

カワカミーンに到着後、他のメンバーは川神百代に付き添ったが、俺だけは別行動だった。

具体的には学園長と体育教師兼此処の師範代でもあるルー先生に

こうなった状況を詳しく説明していた。

「所で川神先輩の容態はどうなんです？」

「気の流れが滅茶苦茶ダヨ、一体ドウシタラこんなにナルノ力不思議だったネ」

「死ぬ一歩手前じゃったわい」

川神学園の体育の先生と学園長がそんなことを言っただけだから。俺は兎角ビビってしまった。

「大丈夫なんですか!？」

「大丈夫ダヨ。いま、川神院門下生一同が全力で気を送り込んでいるヨ。命に問題は無いネ」

「正直此処に運びこむのがもう少し遅かったらやばかったがの」

良かった。

迅速に此処に運びこんで本当に良かった。

大慌てで担いできて良かった。

道中慌てすぎて、3回くらい川神百代を落つことしたが急いで良かった。

凄い速さで走りながら落としたもんだからアスファルトと擦れてえらいことになってたけど。

そのせいで川神百代の容態が著しく悪化したような気もするけれど、俺の判断は間違っていなかった。

「まあ少なくとも3日は動けんがの」

…って、3日？

「死にかけたにしては短くないですか？」

「気の流れさえ正常になれば後は百代の瞬間回復ですぐに治るでの」

ああ、そうですか。

死にかけても3日で元通りって。

台所で見かけるあの黒い昆虫を超える生命力だ。

いや、むしろ凄いのは、その川神百代よそこまで追い詰めた柿山か。

「しかしどうしたらこうなるのか不思議でならん。いかなる武術を以てしても、こんな風に気を乱すことが出来るとは思えん。川神流にも、こう言った秘術が無いことはないが…秘術、禁術の類での、川神流以外の人間が使えるとは思えん。この前君と一緒に追ったあの女の子にそんな術を教えられるような師匠が居ると思えん」

「イエ…一人だけ、居マスよ。川神流以外で川神流の技を使える人間が」

「まさか釈迦堂が！」

「彼がこの件の裏に関わっているトシタラ…」

「釈迦堂が柿山と言う子に武術を教えたということかの？たしかにそれならば川神流の弱点を理解していてもおかしくはないが」

なんか、凄い推理が始まっている。

盛り上がっているとこ申し訳ないんですが。

「あの…多分違います」

「む？」

「その、借家堂って人が何者かは知りません、けれど、柿山が誰かに弟子入りしたりとかはあり得ないですよ、アイツはそんな迂闊な事はしません。誰かに武術を教われれば、自分の力を秘密にしきれないことは理解しているはずです。それにあいつは自分の力を試したことが無いと言っていました。それが嘘だとは思えません。彼女は練習を含め対人戦は今まで一切していません。たんだと思います」

「しかし、ではどのようにして彼女の気の流れを断ち切ったと言うのかの？それが不可解じゃわい」

「今までどんな達人も彼女をココまで追い詰めたことは無かったんだヨ？それも大きな外傷もなく、体には数力所の痣が有るだけ。こんな不思議な武術、独学で思いつけるワケナイよ」

「たしかに独学で武術を思いつくなんて、いくらチートな俺達でも不可能だ。」

「しかし独学でなければ？」

「武術を編み出すそれなりのヒントがあったら？」

「この武術に心当たりがあります…」

「そうだ、俺の記憶が正しければ、の武術は間違いない。」

「…蠍殺道っす」

「「蠍殺道？」」

「俺の言葉に二人は大きく首をかしげた。」

おそらく蠍殺道の名前に聞き覚えがないのだろう。

「灸の要素を取り入れた武術で、相手の経穴や経絡を刺激し、相手の運動能力を麻痺させた気の流れを阻害する。

その、獲物の動きを封じ仕留める蠍の如き戦法から蠍殺道と呼ばれる武術です、そのあまりの危険性により、弾圧され闇に葬られた武術です」

「闇に葬られた武術とな、柿山と言う娘は武術をやっていなかったのでは？」

「そもそも、なぜ彼女がソレを？まさか彼女は隠れた武道家の家系なのか？」

いや、彼女は純粹たる本屋の娘ですよ。

「いや、その・・・蠍殺道ってのはたしかに武術なんすけど、本当に存在しているわけじゃなくって…つまり…」

分かる人にはわかるマイナーネタなんだけど、武道家の人に普通に言つと本気にされて困る。

「・・・漫画に出てくる奴です」

ダイヤモンドな番長な。

「「はあ？」」

俺の発言に二人とも目をひん剥く。

「おんなじ立場だから、わかるんすけど、武術の練習してないくせに力が強いとなると、結局そいつたフィクションのマネをしたく

なるんです。実際俺もこっそり試しました」

「よい子眠眠拳」とか「百壺裂拳」とか…こっそりね。

小さいころ、かめはめ波の練習とかした経験は誰でもあると思う。人間にとって漫画の必殺技を真似しちゃうことはもう、贖いきれない習性みたいなもんなんだ。

「しかも、アイツ、人体のツボ100とか、コレが体の危険なツボだ！とか「週刊人体のツボ、増刊号はおねだん半額」のシリーズとか読んでましたから・・・」

実践で試すのは初めてだろうけど、。実現可能な能力と知識は有るわけだ。

「そ…そんな技に百代は負けたのか？」
信じられないと言った様子の学園長。

まあ、そんな技だ。

漫画の真似をしただけの技。

正直ふざけてる。

ふざけているけれど。

「いや、アイツの気を感じればわかりますよ、ありやなんていうか、神様の悪ふざけとしか思えませんか。正直、自分も十分にチートだと思いましたが、ありやなんていうか…化物、いや…悪魔的です」

俺が知る限り、この世界の誰よりも強い。

ハッキリ言つて今のKAKIYAMAは下手な核兵器より危険。
それこそ、この世界を破壊できるレベルの危険度だ。

「しかし彼女はナゼ突然こんな事を。」

「ふむ、今日まで力を隠していた彼女が突然その力を開放した理由がわからん」

「実際のところ俺にもよく解らないんです。なんでも、俺にしる柿山にしる、この世界とは乖離した存在でそれが武蔵みたいな普通の人間と関わる事が許せなかったみたいなんですけど…」

「強者故の孤独という奴かの？」

「それともマタ違うような様子だったヨ？」

俺の言葉に再度頭を捻る二人。

実際は俺と柿山しか知らない事実。

即ち「異世界人としての孤独」が原因なのだが、それを態々伝えるようなことはしない。

言つて信じてもらえと思えないし、言つたところで事態が好転すると思えない。

それに今一番大切なのは、ナゼ柿山がこんな行動に出たかではなく。今後柿山がどんな行動に出るかだ。

こちらに言いつなれば。

「兎に角アイツの暴走の理由は俺にも今ひとつ分かりません。ただ、一つはつきりしていることがあります」

それ即ち。

「柿山を見つけないことには事態は解決しない」

[illegible]

というわけで第一回柿山搜索会議がカワカミーンで開かれることになった。

出席者は、俺が助けを呼びに行った際にタマタマ２－Ｆに居た関係者の方々、

即ち大和先輩、赤髪の君、マツチヨ、金髪、あとなんか影の薄い
すごい平凡オーラ出してる…誰だ？こんな人いたか？

まあいいや、影の薄い人。

学園長と体育の先生ことルー先生は現在川神百代に気を送り込む作業に没頭中で不参加だ。

交代制で休憩時間以外は常に川神百代に気を送り込まなくてはならないらしい。

「まず状況を整理しましょう。理由はよくわかりませんが、現在『KAKIYAMA』の目的は武蔵をぶつ殺す事です。

そのためにこの川神院にて武蔵は厳重な警備のもと丁重に保管されています。

とはいえ、このままでは事態は解決しません。柿山が痺れを切らして攻めてくれば良いですが、何かちがうアクションを起こす可能性もあります。

なにせ柿山の考えは兎に角先が見えません。
それこそ癪癪を起こして短気な破壊活動に出る可能性すらあります」

正直俺でさえ今の柿山の行動を読むことは不可能だ。
ナゼ柿山がこんなになっちゃったのかさえ理解出来ていないんだから。

「姉さんレベルの人間が破壊活動って…」

「正直想像したくないね」

俺も想像したくはない。

とはいえ、あらゆる可能性が有る以上、最悪のケースも想定しなくてはいけない。

「そんなことにならないためにも、いち速く彼女の居場所を探し出して、何とか取り押さえ…もとい説得をしなくてははいけません」

物理的に押さえられるとは思えない。

何とか彼女を説得する方向で事を進めなくては。

とは言ってもコレが実に厄介だ。

説得が不可能というより…

「でも居場所っていつても、宿泊施設なんてそれこそ星の数ほどあるし、そもそも市内にいるかどうかも解らないんでしょ？」

影の薄い人の言うとおり。

そもそも、柿山を見つける事ができなければ何も出来やしない。

正直、何処にいるか全く検討がつかない。

速くも搜索活動は暗礁に乗り上げている。

「駅やバス停は真っ先に川神院の門下生が抑えている。

勿論彼女のダッシュ力を以てすれば自分の足ですぐに県外に飛び出ることも可能だろうけど、そんなことをすれば気が漏れ出るのですぐに発見できるはずだ。しかし、それらしい気配は誰も察知していない。つまり、まだ彼女は市内か、その近郊に居るってことだ」

大和先輩が、そういった。

すげえ、これで搜索範囲がかなり狭まった。

「とはいえ川神市内だけでも相当に広いぞ。なにか、心辺りはないのか？」

金髪さんがそう聞いてくる。

「一応アイツの実家には連絡をして見ましたが、帰ってはいないそうです。もし見つかったら連絡をくれるようにお願いしてあります。同様に彼女の知人には全員連絡済みです。しかし、柿山が他人を頼るとは思えません。」

ここで注意して欲しいのは、柿山は頭がオカシイですが頭が悪いわけでは無いと言うことです。

他人を頼ればその人間から足が付くとしっかり理解しています」

「しかし居場所を絞り込めないと、いくらなんでも探し切れないよ」

影の薄い人の言うとおりだ。

正直、何処にいるか全く検討がつかない。

やっぱり速くも搜索活動は暗礁に乗り上げている。

「外も暗くなつて人通りも減ってきている。人ごみに紛れるのも難しい時間帯だ。」

宿泊施設は身分証が無いと泊まれない、学生は無理だ。

漫画喫茶も、学生は深夜になると追い返されるから無理。

かと言って街を徘徊していれば警察や川神門下生に見つかる。

そうなると考えられるのは、24時間営業のファミレスやカラオケで一晩過ごすか、森や山に潜伏するか・・・」

大和先輩がスラスラと搜索箇所を狭めていく。
え？この人どこぞの名探偵のお孫さんか何か？

「取り敢えず、それらを虱潰しに探していくか」
そう言つて大和先輩が立ち上がった。

「役割を決めよう」

そう言って先輩がメンバーそれぞれを指さす。

「ワン子は山、公園はクリス、ガクトは市内を風漬しに、モロは此処で市内のファミレスとカラオケボックスのリストを出して街中の川神門下生に指示」

「了解！」

「御意！」

「うっし！」

「よし来た！」

大和先輩がそう言うとなそれぞれ立ち上がり、影の薄い人がいきなりパソコンを取り出してなにやら調べ始めた。

本当に大和先輩は凄い。

今こうして、柿山の搜索活動が出来るのもこの人が居ればこそだ。俺一人がお願いしたところで、川神院や先輩たちはこつも積極的には動いてくれなかったらう。

こつという状況で、いろいろな人にコネクションを持って指示が出るこの人の存在は本当に頼もしい。

「ええと俺はどうすれば？」

「実は彼女の自宅に行ってみたほうが良いと思うんだ」

「あいつの下宿先っすか？帰ってるとは思えないっすよ？」

流石に何事も無く家に帰るほどに豪胆な奴では無いはずだ。

「それでも可能性はゼロじゃ無い。それに本人が居なくても何か居場所の手がかりになるような物が有るかもしれないし」

「たしかに…そうっすね」

たしかに、アイツの意味不明な行動を理解する何らかのヒントがある可能性は高い。

「そっちは俺も付いて行こう、俺の予想が正しければ俺の経験が生きてくるはずだ」

そう言っただち上がる大和先輩はなんだかカッコよく見えた。

年齢は俺と一つしか変わらない。

むしろ前世の経験を含めれば俺より年下だ。

それなのに沢山のコネクションをもち、冷静な判断力を持ち、そして実行力を持つ。

肉体的チートな俺なんかよりよっぽどこの人のほうが凄い。

かつて柿山は大和先輩に注意するべきと言っていた。

笑顔の下で利益の計算をするたぐいの人間だと。

たしかに今、彼が俺に協力してくれているのは打算による物かもしれない。

たんに柿山の存在が自分たちに被害を及ぼすのを未然に防ぎたいだけなのかもしれない。

川神百代の敵討ちのつもりなのかもしれない。

俺に恩を売りたいのかもしれない。

それでも、先輩の協力は俺に取ってこの上なくありがたかった。

柿山。

お前の発言は正しい。

大和先輩は川神百代なんかよりもよっぽど厄介な存在だ。

そして、それは言い換えれば。

味方にした時、素晴らしく頼りになるって事だ。

力こそ無いがそれ以外の全ての物を持っている。

理性的に考え、その考えに基づいて人を導く力を持っている。

この人は常に俺の一步先を進んでいる。

[illegible]

そして到着しました。

柿山の下宿先。

近くに来たことは多々あれど、部屋の中に入るとは初めてだ。

部屋には電気はついておらず、柿山は帰宅していないようだった。

「コレは居ませんね」

「部屋に入らなくて分かるの？」

大和先輩が不思議そうに尋ねる。

たしかに柿山の気配遮断スキルは完璧だ。戦闘態勢でもない限り俺でも見破れない。

電気を消して部屋に潜伏する可能性も考えられるのだが…。

「性格の問題です、隠れるならそもそも部屋に帰ったりしないでトコトン隠れる、家に居るなら逆に堂々としている。そういう性格の奴です。部屋の電気が消えているなら、おそらく本当に帰って居ないんでしょう」

良くも悪くも極端な性格なんだ。

「じゃあ鍵は、大家さんに頼んで・・・」

「フンヌ！」

そう言っただけはドアノブをねじ切る。

「先輩？速く入りましょう」

なに固まってるんですか？

「…うん、そうだね」

何故か呆れ顔の先輩。気分でも悪いんスか？

俺はドアを開けて手探りで電気のスイッチを探す。

容赦なく侵入しておいてなんだけど。
俺は正直電気を付けるのが怖かった。

初めての柿山の部屋。

元々変な奴だとは思っていたが、この度さらに異常者で有ることが判明した柿山。

「部屋の中身が普通だとは思えない。」

それこそ、

宇宙人の剥製やら、河童のミイラやら、猿の手やら、人体模型やら。

そんなモノで溢れていたらどうしよう。

とはいえ、いつまでも電気をつけないワケには行かないので、意を決してスイッチを触る指に力を入れる。

ええい。

ままよ。

そして俺は部屋の電気をつけた。

「コレは！」

その部屋は…

俺の予想に反して。

普通だった。

「普通っすね」

普通のベット

グリーンのカーテン

合板のタンス

本棚に入っている本がちよいとオカシイが、
然程変なところのない、普通の部屋だった。

しかし、この部屋の様子を見た先輩の様子は強ばっていた。

「いや、俺の経験では一見すると普通だが…」

そう言って先輩は本棚から一冊のバインダーを取り出した。

「ひらいてみて」

俺は言われるがままにそのバインダー、タイトルには「UFO研

究資料その4」と書かれていたそれを開く。

その中には。

びっしりと貼れた写真。

そしての内容は・・・

俺

俺

俺俺俺俺俺俺。

俺俺俺俺俺俺。

俺俺俺俺俺俺。

俺俺俺俺俺俺。

飯を食う俺、寝てる俺、風呂にはいる俺、鼻をほじっている俺。

歯を磨く俺、走る俺、コケる俺。
プリンに舌鼓を打つ俺。

俺尽くしだ。

ウワァ…

・・・ちよつと待て！

ひよつとして。

この本棚のバインダー全部俺の写真なのか！？

「あと…机の引き出しが、タンスの引き出しを引っ張り出した奥と
か見てみて」

「……………」

大和先輩にそう言われて、机の引き出しを引っ張り出してその奥
をみると…

「何だコリヤ」

そこにはいくつかの瓶が入っていた。

ええつと？

歯型のついた消しゴム。
使い古した鉛筆。

毛、爪、俺の無くしていたと思っていたハンカチ、

・・・丸まったティッシューパー！。

「…うわあああああああ」

コレは引く。

正直引く。

たしかに柿山は変なやつだが…コレはない。
恐怖と言うか、それ以外の、もういかんともしがたい感情に支配
される。

そして俺とは対照的に、先輩は冷静のこの事実を受け入れていた。

「やっぱりか。彼女どうも何処かで感じたオーラを出していると思
ったが…これだったんだ」

「コレって？」

どれ？

「俺にもこういうことする女の友達がいるんだよ。アイツの部屋も
確かこんな感じだった。

一見すると普通の部屋だけどおもむろにアルバムを開いたが最後、
俺に関する研究データがびっしり書かれたのには正直引くとかそう
いった次元を超越したナニ力を感じた」

先輩…頑張れ。

そして…俺。現在進行形で頑張れ。
って言うか、先輩の「俺の知識が役に立つかも」ってコノ事だっ
たのかよ。

「で…どうする？」

「どうするって？何がですか？」

「この部屋から、彼女の行き先のヒントを探すんだろ？」

「…」

この部屋を…探す？

少し探っただけで、これだけヘビーなものが現れているコノ部屋

を、さらに探す？

無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理

[illegible]

もう俺の精神のライフはゼロよ。

「俺、無理ッス。正直挫折そうです！」

「うん、だろうね。俺もそう思う」

優しい笑顔で先輩はそう言うてくれた。

「ちなみに他にも壁紙の裏とか、押入れの天井とか、下着入れの奥とかがヤバイんだけど」

「いいっす！見ないっす！っていうか、これ以上ヤバイものが！？」

断言したよこの人。

「いたい、この人はどんな被害をうけたんだらう。」

そして俺も、どんな被害を受けているんだろう。確認したいけど、確認したくない。

それにしても。

まさか、こんな事においても先輩が俺より精通しているとは。

先輩は俺より一歩先に行っているとは思ったが、

こんな部分でさえ俺より進んでは思わなかった。

5月9日 忽然と消えた物（後書き）

用語解説

・借家堂

主人公の想像した釈迦堂の字。
急に貧乏臭くなった。

・よいこ眠眠拳

歌と動きで良い子を眠らせる技。
残念ながら主人公は成功したことがない。
理由は、主人公がよいこ眠眠拳を会得しきれていないのか、
それともこの世にもう「良い子」が居ないからかは不明。

・百壺裂拳

百烈拳ではないところがポイント。
右手を工事に使うドリルの如く振動させ何発ものパンチを瞬間的に浴びせる技。

主人公が使うと衝撃波でなんか違う技になってしまった。

・ダイヤモンドな番長

知ったことかーが口癖の超絶番長が、日本の平和のために頑張る
熱血コメディー漫画。ちなみにダイヤモンドは日本語で金剛石

・週刊人体のツボ、創刊号はおねだん半額

毎週身近なツボから危険なツボまで、あらゆる人体のツボを網羅
したシリーズ。

激振孔や命門も載っている永久保存版。創刊号は半額の上バイン
ダーがついてくる。

柿山は定期購読していた。

・激振孔

真の天才が発見した秘孔、心臓の運動が血管を破るほど急激に増幅する。相手は死ぬ。

・命門

相手の秘孔をつく。一分後。相手は死ぬ。

・大和先輩、赤髪の君、マッチョ、金髪、あとなんか影の薄いすごい…

それぞれ、大和、ワン子、ガクト、クリス、モロのこと。

・身分証がないと

実はラブホなら身分証なしでも泊まれたりするけれど…まあスルーの方向で。

・歯型のついた消しゴム。

コーラの匂いがする消しゴム。

つい無意識に噛んでた。

・丸まったティッシュペーパー

ナニに使ったティッシュかはご想像にお任せします。

・無理無理無理無理

このように沢山同じ文字が並んでいると、なんだか文章が斜めつて見えることがある。

コレを文字列傾斜錯視という。

この文字列傾斜錯視が顕著に現れる言葉では「杏マナー」や「夏ワナー」などが有名。

他にも「化学同人」や「豆ヲマケナー」などでも出来る。

例、

豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー
豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー

ーナケマヲ豆ーナケマヲ豆ーナケマヲ豆ーナケマヲ豆
ーナケマヲ豆ーナケマヲ豆ーナケマヲ豆ーナケマヲ豆

豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー
豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー豆ヲマケナー

・もう頑張れとしか言い用がない

川神ストーカー被害者男性の会、結成。

5月10日 ユーザー ヒーロー（前書き）

今回の話は何度か書きなおしていますが、
何回直しても、結局、上手くかけませんでした。

あんまり時間かけすぎて、停滞するのもアレなので、
取り敢えず
アップしますが、いずれ手直しするかもしれません。

5月10日 ユーザー ヒーロー

結局柿山の部屋の家宅搜索は殆ど行われなかった。
物理的にというか、精神的に不可能だった。

甘いと思う。

あるいは此处にアイツの行き先に関するヒントがあったかもしれないけれど、それでも無理なものは無理だった。

というわけで、俺達は取り敢えず川神院に戻ることにした。

収穫なしでの帰還。

とはいえ落ち込んでいる暇はなかった。

情報収集は常に行っていていかんくはいけない。

道中も、ただ歩いているだけじゃなかった。

俺は気配察知を最大レベルでしていたし、大和先輩は俺の隣で歩
きながらも情報収集をしていた。

「はいもしもし！うん。山には人間が入った気配なし、公園も同様
…うん…分った、じゃあ川神院に合流で」

「はいもしもし…ああ、写メ確認したけど、違うつぱい。引き続き
見回り頼む」

大和先輩は道中も引つ切り無しに掛かってくる電話に対応し、さ
らに的確な指示をだす。

正直、俺と柿山の為に、ここまでしてくれる大和先輩には感謝し
きれない。

「ああ、もしもし！源さん？何か解った？」

いや。

大和先輩だけじゃない。

彼が話している相手。

本当にたくさん人間が、柿山搜索に協力をしてくれている。
中には俺達のことを知らない人も居るだろうに、そんな人達さえ
手伝ってくれている。

♪♪♪♪♪

陽気な着信音で俺の思考は中断された。

俺の携帯に電話：だれだコレ。

まあ。声聴きゃわかるか。

「はいもしもし」

『私です』

どちらさま？

電話口から、万引きした主婦みたいな声が聞こえるんですが。
具体的に言うとボイスチェンジャーを使った声。

「ええっと…何星人の方ですか…？」

まさかの事態にとうとう異星人の助けが？

コレは超展開キタコレ！

「あ…ああ、ん。失礼。私です」

「あ、その声は冬馬先輩」

何だ冬馬先輩だったのか。って言うか、何で先刻まであんな声に？

「実は柿山さんが失踪したと聞いて、私の方でも知人から情報を集めていたのですが」

「マジっすか」

さすが先輩だ。情報が早く行動力もある。

が。同時に心苦しくもあった。

冬馬先輩は本来ならば真っ先に協力を仰ぐべき相手だ。経済力と人脈を大和先輩とは違った方向で持っている。

この状況下ではすごく頼りになる存在だろう。

でも。

俺と先輩たちは、柿山との共通の知人でもある。

つまり、彼らが俺に協力するということは言い換えれば柿山を裏

切ると言うことである。

俺が、彼らを裏切らせている。

それがなんだか嫌だったんだ。

でも、俺のそんな罪悪感はやそれに、冬馬先輩は自ら動いていた。きっと先輩は罪悪感とか感じるより前に、俺達のために動こうと考えたんだろう。

柿山

お前は自分たちはこの世界では異質だと言った。

この世界の人間と馴れ合えないと言った。

でもな。柿山。

この世界の人達はこんなにも俺達のために動いているぞ？

こんな事態になっているのに、誰ひとりとしてお前に対して暴言は吐いていない。

お前を潰すとか、倒すとか、殺すとか、そんなことを言った人は一人もいないんだ。

皆揃って、お前を「止める」と言っている。

ただ純粹に、暴走したお前を止めようと、それだけのために動いている。

なあ柿山…俺達は本当は…

「そして我々スタッフが一生懸命、一生懸命捜しました。柿山さん見付けました」

・
・
・

え？

俺の思考を遮るようにして放たれた、冬馬先輩の言葉。

柿山が。見つかった？

「え？マジか源さん、そんな事に！？」
少し離れた場所で大和先輩の大声が聞こえる。

「あの柿山さんですが、その、つまりなんです、何処で何をしてるかと言うと…」

「おい！あの娘の居場所が解ったぞ！あの柿山って娘は…」

大和先輩の口と受話器越しと、2方向から同時に同じことが告げられる。

柿山が今いる場所。

それは。

「青空闘技場で暴れてる」

[illegible]

青空闘技場

街の喧嘩自慢、ゴロツキ、不良、バトルジャンキー、格闘マニア。兎に角そういった喧嘩大好き共が集まって戦いあう場所だ。それでもってギャラリーがその対戦者にマネーを賭ける。

川神学園の決闘に似ているけれど、こっちはそれ以上に後暗く、エグイ。

なにせ賭けられるのは食券では無くて現金だし、ルールは有ってないようなものだし、なにより客層と選手層が全く違う。

親不孝通りの近くに存在して、俺の危険スポットマップにおける危険度率は「特A」

『絶対に近づいてはいけない地点』

話で聞くことは何度かある場所だったが。じっさいに訪れるのは初めてだ。

ただ、初めて訪れた青空闘技場は、俺の想像とは全く違う様相だった。

そこはもう、地獄絵図と言うか。

兎にも角にも死屍累々の山。

体格の良さそうな輩達があたり一面に倒れ、至る所から呻き声や、泣き声や嗚咽まで聞こえた。

それを見て実感した。

俺達の日常はすでに壊れてしまった事に。

勿論そんなことは柿山がイツちゃった瞬間から分かってはいたんだ。

でも実感が無かった。

心の何処かで、コレは柿山得意のジョークの一種で。最後は柿山が「It's a joke!」って言って笑顔で終わるような、そんな一抹の希望を持っていた。

しかしこの光景がそんな楽観的希望はあり得ないと言っことを俺に突き詰めた。

倒れる人、それを抱き起こす人。
タンカで運ばれる人、唸る人。
うずくまる人。

まるで戦場じゃないか。

「俺が来たときにはもうこの状況だった」

俺達より先に来ていた不良っぽい人がそういった。ええっと確かこのひと、エレガントナントカの人だ。

「柿山…之をやった女の子は？」

「さあな、俺が来たときにはもう居なかった」

「あの…それで…」

俺の口は決定的な疑問を彼に投げかける。

「死人は？」

決定的な言葉。

それは柿山の犯した罪の重さ。

聞かないわけには、確認しないわけにはいかない。

でも聞くのが怖かった。

それを知れば、もう、俺は…

「ゼロだ」

…WHAT？

「は？」

予想外の一言に、俺は間抜けな声で返事をしてしまう。

「全員気絶しているだけ、大した外傷も無い」

…気絶しているだけ？

これだけの大立ち回り。

この世界の人間が無駄に生命力が強いとは言え、この惨状だ。普通に考えて死人の一人や二人は出るはずである。

「一人も死んでない？」

「なぜわざわざそんな事を？」

「さあな、俺が聞きたい」

手加減して全員を戦闘不能に追い込むのは意外と難しい。

少なくとも柿山にとってはそんな事しないでぶち殺したほうがよっぽど楽なはずだ。

ワザワザ面倒な思いをして手加減する理由。

普通に考えれば、彼女にまだ人間の心が残っていたということなんだろうけど。

あいつの今の異常さからして、その可能性は残念ながら低そうだ。

そうなるか…

絶対というほどではないが、一つ考えられる可能性がある。

「俺の予想言ってもいいですか？」

「うん」

「何だ？」

「多分この一連の行動は柿山にとっての練習なんだと思います」
「練習？」

ナンノコッチャと言った様子で大和先輩が聞き返す。

「ええ、対・俺の」

「？」

先輩は今ひとつ理解出来ないと言った様子で俺の方を見ていた。

「あいつの目標は武蔵をぶつ殺すことです。その場合障害になりえる相手。川神百代は戦闘不能、そうすると他にあいつとマトモに戦えるのは川神院に居る数人の武術家と、他でもない、俺自身です」
「うんまあ、現状、一番戦闘力がありそうなのは君だし」

「純粹に戦ったらそりゃ、柿山が勝ちます。ただそこで問題なのは俺を殺しちゃう可能性です。」

柿山の話から推測するに、俺をぶつ殺すのは本意では無いようですので、なんとか俺を殺さないように無力化しなくちゃいけません」
「なるほど」

そう言って大和先輩は相づちを打つ。

「ところが柿山には実戦経験が無い。純粹に強いのは確かですが、手加減や手心と言ったテクニクが苦手なはずです」

事実として、川神百代はもう少して死ぬところだった。

「そこで練習です」

実践経験がないならば経験をすれば良い。

そもそも、物覚えには定評のある柿山だ。

少し戦うだけでもメキメキと実力をつけることだろう。

「しかしあまり必要以上に動いて警察組織や自衛隊出動なんてことになってしまえば行動しにくくなる。」

「それでココか」

「ええ」

ココは常日頃から暴力に依存した人間たちが集まる場所だ。今、全員が暴力によって倒れたとしても、警察は左程この件に関して真面目に取り合わないだろう。どうせいつもの喧嘩だと思うだけだ。

さらに言うならばココの奴らは大抵スネに傷を持っている。自ら警察に行ったりすることすらしないだろう。

結果、国家権力がこの件に介入してくる可能性は低い。

柿山の練習相手として之ほど適任な奴らは他には居ないのだ。

「先輩、川神院に戻りましょう、ココの様子を見る限り練習はバツチリですよ。ぼちぼちカワカミーンに攻めてくるかもしれないかもしれません」

「そうだね」

「俺も一応ココが片付いたら川神院に向かう、たいしたことが出来とは思えんが、まあ居ないよりはましだろう」

「源さん…」

「勘違いするんじゃない、こんな状況が頻発したら困るから協力してやるだけだ」

その一言で俺は、この目の前の目付きの悪い人が、凄いつンデレだということを理解した。

このカワカミーン最大の臨戦態勢でもって、柿山を倒す。
川神百代が居ないといえ、ここは世界のカワカミーン。

学園長やルー先生、それに俺。それ以外にも沢山の猛者が居る。

下手な軍隊なんかよりずっと高戦力なはずだ。

しかし。

しかしそれだけの戦力であっても、柿山を止められる可能性は依然として低い。

それ程に柿山は強い。

ただでさえ俺より強かった柿山だが、青空闘技場での経験が間違
いなく彼女を成長させている。

どんな成長をしたのかはわからないが、もう俺じゃ手も足も出な
い様な状況になっている可能性は高い。

正直倒せる気がしない。

あいつを倒すなんてそれこそ勇者やヒーローでも無ければ不可能
に思える。

「しょぼくれた顔してるな」

「元気だせ」

不意に声を掛けられたので後ろを見ると。
そこには準先輩と雪先輩がいた。

ああ、準先輩と小雪先輩も来てくれたのか。

…って。

「小雪先輩!？」

「やほ!」

「なんでこんな超危険区域に来てるんですか？」

「え?手伝い？」

手伝いつて…。

「今此処は下手な戦場より危険地帯だつて理解してます!？」

俺の大声に対しても二人は動じなかった。

「そんなこたわかつてるよ。でもさ、だからこそ微力でも手伝おう
と思つてな。」

若も此処にはいないがシツカリ情報収集なんかしてるし。

俺達の好きでやってることだからさ、まあ、そんな気張らないで
軽い気持ちで受け入れてほしいね」

「うん」

そう言つて笑顔をみせる二人。

やべ、ちょっと泣きそうなくらい感動した。

「でもさ、正直な話驚いたぜ、柿山ちゃんが川神百代以上のチートとは」

準先輩がそう言った。

気持ちはわかる。

実際それを目の当たりにしている俺でさえ未だ信じきれていないんだ。

「いや、実際俺も驚きましたよ。ありや、もはや魔王ツス」

「そんなに？」

「勇者とかヒーローとかじゃないと倒せないレベルっす、先輩ヒーローとか勇者の知り合いとか居ないツスカ？」

「まあそんなのが知り合いにいたら苦労しな・・・」

「居るよ」

「「居るの!？」」

小雪先輩のまさかの発言。

超展開キタコレ!!

「…今、僕の目の前に!」

「…は？」

「他人のピンチに現れて、事態をアツサリ解決、僕の憧れ、スーパーヒーロー……は、いま、僕の目の前に居るよ」
「え……ええとですね。それ……俺のことですか？」

ひょっとして準先輩が！？とも思ったけど、どう見ても小雪先輩の視線は俺の方を向いている。
揺るぎないほどにガン見である。

いや、先輩？

俺はそんな崇高な人間じゃないですよ？

「僕のことを助けてくれたでしょ？」

「いや、アノ、アレっすよ。アレは別にそういうんじゃない、何というか別に俺じゃなくてもああいった行動は取りましたよ」
そう。

たしかに俺は小雪先輩を助けた。それは事実だ。

しかし、それは社会的一般常識としてやった行動でしか無いんだ。

「でも僕は君に救われたよ？あの時の君以上のヒーローは僕は知らない」

違っんだ。

「救ってねーっすよ。俺があんなことをしたのは、それが俺の中で常識だったからです。良心とかそういうたのがあったからじゃねーんですよ。先輩が憧れてくれてるのはアレですけど、本当の俺は褒められような人間じゃないんです。むしろ最低な奴ですよ。他

人を救いたいとかそんな気持ちはなくて、ただ、自分が平凡でいたいからという理由でああしたんです。」

そうだ。

俺は常識的な行動をしただけなんだ。

俺の心には、正義とか、優しさとか、そんなものは殆ど無かった。

むしろ、あの状況でその感情を抱かなかった俺は。罵倒すらされて当然の人間なんだ。

「気持ちとかは関係ないよ。あの時僕を助けたのは君だけだったし、病院に向かう救急車の中で手を握ってくれたのも君だったし、君が何を思っていたかは関係ないし、実際のところ僕を助けてくれたのは君だよ。君が何を言っても君は僕のヒーローだったよ、たとえ君がどれだけ嫌がっても」

「でも…」

「ダメダメ、君がどんなに否定しても、君がどんなに嫌がっても、君が僕を助けたことは変わらないし、私は君に感謝し続けるよ。君がどんなに困っても、私は知ったこっちゃ無いもん。あの時の君は僕にとつてのヒーローだったし、それは絶対に変わらないんだ」

「諦めろよ、ユキの言うとおり。お前は十分ヒーローの素質あると思うぜ？少なくとも今ここにいる誰よりもヒーローに近いよ」

そう言って小雪先輩も準先輩も笑顔を俺に向けた。

ヒーロー。

男だったら一度くらい憧れたことがある存在。
実際俺は憧れた。

ガラス割り犯が現れたとき、逃走用車をひっくりがえしたのも俺のなかにヒーローに憧れる心があったが故だ。

もし、俺に前世の記憶なんてものがなくて、チート力だけがあったのなら、俺はヒーローを目指していたかもしれない。

しかし、俺には前世の記憶があった。

この世がヒーローを求めていないことを知っていた。

この世が善悪の二極じゃないことを知っていた。

力は物を壊すことしかできないことを知っていた。

現実にはヒーローなんて居ないことを知っていた。

俺はどうしたってヒーローになれないことを知っていた。

だから、そんな非現実的で馬鹿らしい生活をするよりも、目の前にある平凡で楽しい生活を精一杯満喫して生きていこうと思った。

それでも、

それでも。

例えば突然、悪の組織が現れたり、

突然イルカがせめてきたぞっ！ってなったり、

アレン帯に異常が発生したり。

そんなすごい事件が発生して、俺が解決するなんてことを夢見た
りすることがある。

だってそうじゃないと説明がつかない。

俺にこんな力があつて、
前世の記憶があつて、

俺がこんなに異常なものには何か理由が有るんだと思いたかった。

強大で恐ろしい敵に立ち向かう、かっこいいヒーローに。

そして実際現れた。

強大で恐ろしい敵。

その名も柿山衣子。

彼女を倒せるのがヒーローだというならば。

俺がヒーローになるしか無い。

倒せないとか、柿山が強いとか、そんなことはどうでもいいんだ。

柿山を倒さなきゃいけないんだ。

ほかでもない俺自身が！

俺はまた、小雪先輩を助けた時みたいに。
ヒーローにならないと。

「先輩、もし、あの時の俺がヒーローだとして、
俺は又あの時みたいなヒーローになれますかね？
先輩を救えた時みたいに、
この状況を解決出来ますかね？」

気がついたらそう聞いていた。

その質問に対して。
小雪先輩は、

「……ムリ」

驚くほど空気を読まない発言を返してくれた。

準先輩がお前流石に空気読めよと言った表情を小雪先輩に向けるが、

でも、それで良いんですよ。

無責任なことやお世辞を言わないで、思ったことをハッキリと言ってくれる小雪先輩だから聞いたんです。

「無理だよ。だって君はずーっと。もうすでにヒーローなんだもん」
「は？」

思いも寄らない彼女の言葉の続きに俺は呆気に取られた。

「今までだって、今だって、之からだって！ずっとずっとヒーロー！何でもすぐに解決しちゃうスーパーヒーロー。すでにヒーローな人はこれ以上ヒーローになれないよ」

そう言って笑う彼女の表情には、まったく屈託がなくて。その言葉は心の底からそう思っている言葉だった。

先輩、

買いかぶります。

買いかぶりにもほどがあります。

でも、有難う。

「先輩、やってみます。おれ、柿山を止めますよ」

「うん！」

「そのテンションなら問題なさそうだな」

小雪先輩と準先輩、そして俺は笑顔を向け合う。

決意は固まった。

俺は今、自らの意思で戦うことを選択した。

今まで、成り行きでしか戦ったことのなかった俺が。
自分から戦おうとしている。

さあこい柿山。

俺がお前を止めてやる。

ちなみに。

古い友人と昔語りをしながら来るべき戦闘に備える。

あれ？これって死亡フラグじゃね？と気づいたのはその数秒後だった。

5月10日 ユーアーザ ヒーロー（後書き）

用語解説

・源さん

もちろん、原作に登場するイケメンツンデレ不良の源さん。決して大工の人ではない。

・まさかの超展開キタコレ！！

ラスト直前で宇宙人介入とか、ラスト直前でヒーロー戦隊介入とか。

流石にそこまでの超展開は無理。

・ボイスチェンジャーを使った声

何故冬馬がそんなものを使っていたかは原作参照。
彼は彼なりに色々と協力してくれている。

・我々スタッフが一生懸命、一生懸命搜しました。柿山さん見付かりました

残念ながらこの後、感動のご対面とは行かなかった

・戦場

実はけが人の中に何気に板垣家の長男が混ざっていたりする。

というか、冬馬に柿山の情報を教えたのは彼。

残念ながらその後スケキヨのごとくドブに突っ込まれた。

彼の女性に対する苦手意識はさらに強くなるだろう。

ちなみに当初、混乱して看護者に襲いかかる彼を、主人公が颯爽と抑えつけ、フラグが立ち上がるというイベントも考えていた。こ

れ以上フラグ立てると話が終わらなくなるので流石に書かないでいた。

・まるで二ヶ月以上も5月9日をやっているような気分だ。
うん、ごめんね、更新遅くて。

・悪の組織

実は地元にフロシャイムという悪の組織が存在することを主人公は知らない。（原作参照）

さらには、主人公はフロシャイムの人を構成員を何度か見かけているが、町の清掃活動をする偉い大人として認識している。という
か容姿で気付け。

・イルカがせめてきたぞっ

質問、人間よりイルカのほうがあたまがいいのですか。

答え、イルカが陸の上で生きるとしたら、きっと人類を負かしてしまうだろうという人も居ます。

・アレン帯

地球の磁場にとらえられた、陽子、電子からなる放射線帯。
実際は燃えない。

このネタを知っている主人公は、オッサンどころか初老の可能性もある。

・死亡フラグ

こう言った行動をとると死亡、もしくは敗北につながるというフラグ。

戦闘前の昔語り。嫁や娘自慢。将来設計の説明など。

例

あの頃は楽しかったな、お互い子供で。それがいつの間にか国家の犬になっちまった。俺は仕方ないさ、碌でも無い人間だ。でもさ、お前まで付き合うことなかったんじゃないか？なあ、俺もお前ももう嫁さんもらって一児の親父だ、この戦いが終わったらさ、足洗ってまっとうな生活を…

ちなみにコレはその時話している相手を庇って死んでしまうパターン。

5月10日 ラストバトル（前書き）

何か打ち切り漫画みたいな終わりがたですが、
正直、コレ以外の終わり方が思いつかなかったので…コレで。

なつとくが得られるかどうかは分かりませんが、広い心で読んで頂けたら幸いです。

5月10日 ラストバトル

深夜の川神院に轟音が反響した。

柿山の奇襲に、川神院は大慌てだ。

柿山の殺気に潰される物。

柿山の動きによる衝撃波に潰される物。

柿山の攻撃で潰される物。

まるで自然災害と戦っているようだった。

誰も柿山を倒せない。

止められない。

近づくことすら出来ない。

川神院にいた人々は次々と吹き飛ばされて、
結局、最後まで柿山と向かい合っていたのは、
俺だけだった。

とはいえ、力も、技も、気迫も、全てにおいて俺のほうが劣っている。

このままでは逆立ちしたって勝てはしない。

しかしただ、一つだけ。

俺が勝てる要素がある。

一つだけ俺にはあって彼女には無いアドバンテージが存在する。

という夢を見ました。

ええそうです。

夢オチですとも。

実は先刻まで居眠りしていたんだ。

緊張感が無いという無かれ。

緊張感は物凄く持っていたさ。

それこそ、冷戦時代のアメリカとソ連レベルの緊張感だ。

しかし。そんな緊張感を持って柿山を待ち構えていたのに。

アイツ来ねえ。

覚悟を決めてからかなりの時間待機しているが、全く来る気配がない。

そりゃあ居眠りの一つもすると言つものだ。

流石に。朝御飯の時間になっても来ないとは思わなかった。
これは柿山流の何か作戦だろうか。

たしかに効果的ではある。

昨日一晩気張っていただけに、集中力が切れて居眠りまでしていたんだから。

大広間では、皆も眠そうな顔をしながら朝食をたべている。

「むゝしゃ、むゝしゃ。しあわせーzzzzzzzz」

「こらこら、食べながら寝ないで…ああ、西京漬けが床に…」
小雪先輩なんぞ完全に夢のなかである。

もはや準先輩は小雪先輩の介護士に成り果てている。

こうなつては戦闘で役に立つとは思えない。

「アイツいつごろ来るんでしょうね」

四杯目のご飯を食べながら俺はそういった。

「朝駆けはたしかに有効な戦術だけれど、にしても遅すぎる時間だな」

と大和先輩。

「どっかで朝御飯でも食べてるんじゃない。朝はシツカリ食べたほうが出ろし」

と赤髪さん。

「一種の牛歩戦術かも」

と金髪さん。というか、外国の人なのに良くそんな日本語知ってるな。

「寝てんじゃねえの？」

と、マツチヨの人。

「流石にそれはないと思うよ？」

と…あんだ誰だ！？

それぞれが、何故柿山が来ないかについて予想を言うが、どれもなんだか違うような気がする。

たしかに柿山は突拍子も無い奴で、しかも今は暴走中だから、行動を予想するのは難しいけれど。なんとなく、違うような気がする。

「しかし本当に遅いな、そろそろ学校も始まる時間だ」

そう、普段の朝ならば学園にむけて登校する頃合いだ。

いつもの朝ならば、俺も登校を開始していただろう。

「案外普通に学園に居たりして」と言う赤髪の人。

「それはさすがにないでしょ」

「考えにくいな」

「あまり可能性は高くない」

「無い」

「ZZZZZZ」

「ああ、だから寝ないで、鼻ちようちに青のりが」

と、一部を除いて一同は否定するが。

俺は…あり得るような気がした。

なんとなく。

本当になんとかなくだが、柿山がいつも通り学園に登校している様子が想像できてしまった。

「だいたい何で学園に行くんだよ。この状況下で普段どおりに勉強したりとか友達と遊んだりするのか？」

大和先輩のその言葉。

普段どおり。

学園。

友達。

それはまるで天啓だった。

というより、本来ならばもっと早くに気がつくべきことだった。

柿山の狙いは本当に武蔵だけなのか？

柿山は俺になんて言っていた？

そもそも柿山がこんなふうに暴走した切掛は？

何故気がつかなかった？

「…何を言っているんですか!？」

先輩たちの意味不明な言葉に、俺は混乱するのだった。

[illegible]

すぐさま黛女史に電話をしたが、通じなかった。電源を切っているようだ。

何か事件に巻き込まれた可能性が頭をよぎるが、そろそろホームルームが始まる時間なので、黛女史が自主的に電源を切っている可能性も高い。彼女はそう云うルールを守るタイプだから。

そもそも柿山が必ずしも黛女史を狙うと決まっていたわけではないのだ。

しかし可能性はある。

十分考えられたことだ。

昨日のうちに彼女には川神院に避難を促すべきだったんだ。

なのにそれをしなかった俺の愚かさ。

あまりの状況に、目の前の武蔵を守ることに頭がいっぱいでそれ以外の事に考えが及ばなかった。

だが、事態はそう流暢でもない。
兎に角、彼女を保護しなくではいけない。

俺は一人で学園に向かう。

一人でだ。

柿山が学園に居る保証はどこにもない。
そろそろと皆で学園に向かった結果、武蔵の警備が疎かになって
は本末転倒もいいところだ。

だからこそ俺一人。

校舎の階段を駆け上がりながら、俺は唇を噛み締める。
とんでも無い速さで走る俺を、周りの生徒は奇異の目で見が、今
はそんなことを気にしている余裕はない。

「スイマセン！！黛女史はどこに居ますか！？」
1-C教室の扉をぶち壊さんばかりの勢いで開けながら俺は叫ん
だ。

クラスの全員が俺の剣幕に驚いた様子だったが一人の女子が答え
る。

「まゆっちなら、さっき別のクラスの女の子とどこかに行っちゃ
ったけど？」

「！！！」

ヤバい！それ絶対柿山だ！

最悪のタイミング！

いや、まだ、事が終わっていないのなら最悪とは言い切れない。
「さつき」という表現からは、まだ柿山と黛女史がコンタクトを取ってから然程の時間は経過していないことが伺える。

「どこに行くって!？」

「さ…さあ。屋上じゃないかな、廊下を左に向かってっただから」
「屋上!!!」

俺はそのまま走って屋上に向かう。

間に合え!

間に合ってくれ!

神に祈りながら。俺は走る。

階段を五段飛ばしで、屋上へのドアまで駆け上がり、

「どりゃ!!」

開ける時間も惜しかったので屋上のドアは蹴り飛ばした。

ガッンというでかい音がして、ドアがコンクリートごと吹っ飛ぶ。
半壊した壁の先に見える屋上の広場では。

柿山と黛女史が向い合って立っていた。

「間に合ったか!」

見たところ黛女史に外傷なし！
戦闘の痕跡も無し！

まだ、なにも起きていない！

「やあ、昨日ぶり」

「え？あれ？」

笑顔でこちらに手を振る柿山と、
驚いた様子で俺の方を見る黛女史。

まるで昨日の出来事が無かったのような平然とした様子だった。

「…おう、早い再会だな、ちくしょう、武蔵がダメなら黛女史か？」

「はは、なに、順番はチグハグだがね、まあとりあえず出来ることからというのが私の信条だ」

「黛女史、取り敢えず逃げてくれ、全速力でダッシュ、川神院に行くんだ」

俺は柿山から視線をそらさずに黛女史にそう言った。

おれの大童な様子に、黛女史も異常を感じたのだろう、訳がわからないと言った様子ながら、目付きは真剣なものになっていた。

「おやあ、私がそれを許すと思うかい？」

「足止めくらいなら何とでもなる」

とは言ってみたものの。

正直、足止めも出来るかどうか怪しい。

状態はかなり切羽詰っている。

そんな俺の心の中を見透かしたように柿山は不敵に笑う。

そして次の瞬間。

殺気が辺りを支配した。

昨日の武蔵の時と同じだ。

あまりにも濃密な殺気に筋肉が萎縮して動けなくなる。

俺はまだいい。

この殺気を浴びるのは2回目だ。それなりに慣れた。

しかし黛女史はその限りではない。

殺気を浴びて、事態の異常性と危険性を理解したのだろうが、体は震え、動くこともままならない様子だ。

彼女が動けるようになるには時間がかかる。

が、それを待っていられるほどに状況は悠長ではない。

そうなる、この状況を打破するには…。

「俺が柿山の気をそらす、其の内に川神院に走って逃げろ」

俺は黛女史にそう言って柿山の前に出る。

俺のその行動が気に入らなかったのだろう。

柿山は分かりやすく表情を悪くして、不機嫌そうに言った。

「そうやってその女を庇う。それが君の悪いところだ。孤独になりきれていない」

「今ひとつ良く解らん、何で俺が孤独じゃなきゃいけないんだ？」

「そりゃそうだ。君はね、すごい人間なんだ。人気者の素質があつて、ヒーローの素質がある。だから、だから、このままだと、私なんか見ることなく、皆の輪の中心になつてしまう。私から離れて、私を捨ててしまふ！君はね、私なんか必要としない人間なんだよ！だから一人じゃないと。私を見ないだろ？だから孤独に成らなきゃいけないんだ。だから私が、この私がそうなるように君の性格を誘導したんだ。変えたんだ」

何だその超理論は！

「ふざけんじゃないぞ！俺は人気者の素質？ヒーロー？お前が俺を変えた？オマエモナ、同類なら気がつけよ！俺は！俺は！生まれる前から小者で！生まれた時から小者で！これからだって小者なんだよ！！お前が俺の周りでピーチク囀ったくらいでな、俺の小者の人

生は変わりやしねーんだよ！」

買いかぶりもいいところだ。

俺は自他共に認めるダメ人間だぞ！

人気者の才能？

あるワケ無いだろボケ！

あつたらもう少し人生を幸せに生きているわ！

「いいや、そんなことはないね、誰よりも君を見てきた私だからこそわかる。

まあ、いいさ、どっちにしろ君が孤独になれば、さすがに私を見ざるを得ないだろ？」

「だからって実力行使はよろしく無いぞ」

「はは、まあ、普通に考えたら悪手だがね、ありがたい事に、私は道理も常識もねじ伏せる程度の実力を持っているから」

そう言つて柿山が構えた。

交渉終了。

これ以上の話し合いは無理。

思った以上に柿山はイツちゃつてる。

「はは、結構練習してね、今はなんだ、神様だつて殺せるような気分だ。うん」

柿山がそんなことを言つた。

次の瞬間。

俺達は動いていた。

俺と柿山の拳がぶつかる。

衝撃波、

静電気、

発熱と発光、

そして轟音が巻き起こる。

たった一発の打ち合い。

それだけで地面には大きなヒビが入って、屋上の柵がへしゃげた。

一見互角。

俺達のパンチは拮抗したが、この一発で理解する。理解してしまう。

このままじゃあ勝てない。

スピード、力、テクニク、全て柿山のほうが上。

今のパンチが拮抗したのも、柿山が本気じゃなかったからだ。様子見の一撃だった。それに対して俺の一撃は本気。手を抜いた柿山と、本気の俺でやっと互角な程度の戦力差。

勝ち目がない。このままだと足止めすら出来ない。

ちらりと後ろを確認するが、黛女史はまだ逃げないでそこにいた。柿山の殺気に当てられているというより、いまの一発にビビっていると言った様子だ。

このままだと柿山は簡単に俺を潰して彼女を殺すだろう。何とかもう少し時間を稼がなくては。

柿山を足止めしたい。

理想を言うのならはこの場で倒してしまいたい。

確実に不利な状況だ。

実力が上である人間を倒すのは実に困難なのだ。だが、

勝機がないわけじゃあない。

一つだけ、俺にはアドバンテージがある。

俺に唯一残されたアドバンテージ。

柿山は俺を殺さないよう動くが。

俺は違うということ。

この差は大きい。

そして俺はのアドバンテージを使った行動を開始する。

近くにあったパンダのオブジェを柿山に投げつける。

それ自体には殆ど攻撃力は無い。

別に気でコーティングしたわけでもないオブジェをただ投げつけただけだ。

案の定、パンダは柿山が軽く掌を返しただけで粉微塵に砕け散った。

だが、それでいい。

パンダは罠。

攻撃力は殆ど無いとはいえ、それを振り払うのに、少なくとも片手はつかう。

意識も一瞬だがパンダに移す。

柿山がパンダを粉碎したその瞬間。

その瞬間に俺は柿山の腹にタックルをかます。

そしてそのまま。

柵を突き抜けて屋上から飛び降りた。

落下する時、特有の浮遊感を感じるが、次の瞬間にはそれは圧力に変わる。

落下スピードが上がったのだ。

なにせ落下エネルギーに加えて俺の気による推進力をプラスした。液体酸素も真つ青な推進力だ。状況としてはかなり大がかりな無理心中。

地面にぶつかれば俺は死ぬ。それだけの勢いが付いている。

今柿山が本気で俺の手を降りきって俺を下に向かって叩きつければその反作用で柿山は助かるだろう。しかし柿山はそれが出来ない。

しない。

なぜならそれをすれば俺が確実に死ぬから。

柿山は俺を殺せないが。

俺は自分の命を捨てるような攻撃をする。

それが俺の唯一のアドバンテージだ。

流石に俺が死ぬレベルの攻撃ならば、柿山もただでは済まないと思う。

黛女史でも取り押さえられる程度には弱るんじゃないかな。

じゃあな、柿山。

でかい地響きと轟音が辺りに響いた。

校庭にはクレーターのような大穴が出来上がってまるで巨大隕石がぶつかったようだ。

粉塵が舞い、辺りはまるで霧が立ち込めたようになっている。

突然のグラウンドの轟音に驚いた生徒達が、校舎の窓からグラウンドの様子を伺っている。

校門の近くでは、遅刻寸前に登校して来た生徒がこの惨状を見て今北産業と呟いていた。

皆混乱しているが無理もない。

突然グラウンドにクレーターが出来上がったんだ。

そしてそのクレーターの中心には。

「女の子を屋上から突き落とすとか、正直最低だぞ？」
「マジかよ」

ピンピンしている俺と柿山がいた。

之だ。

衝突の瞬間に相転移空間が鮮明に目視できるほどの防御膜を気で作り上げやがった。

おかげで俺も柿山も全くの無傷。

おれの命をかけた一発も、あっさりと無効にしくさる。
俺の覚悟返せ。

改めてコイツは魔王だ。

特に気の量と防御力がありえない。

しかも何が魔王って。

これだけのことをしていながら、
彼女は未だに本気を出していない。

手加減、

違う、それ以前の問題だ。

彼女は遊んでいる。

まるで本物の力士が子供相撲の相手ををするように。

俺の全身全霊の攻撃を、戯れとしていなして居るんだ。

「本気を出さないつもりか」

「いやいや、結構本気だよ？ただ、アツサリとこの戦いが終わっても惜しい気がしたのさ、なかなか楽しい、いや、本当はすごく楽しい。正直、君の手が私の体に当たるたびに、私は軽く絶頂しているのだよ」

・・・

・・

いまゾワッってした！
ゾワッて！

無いわ！

その性癖は無いわー！

違う意味で戦いたなくなるわ！

「ははは、正直、キミとならば永遠に、戦い合っていて良いとすら思ってしまうから不思議だ、何かイケナイ性癖に目覚めてしまいたいそうだよ」

ヘンタイだ！ヘンタイが目の前にいる！！！！
うわ、何か背中が痒い。

そんな俺の様子を見ながら、柿山はしばらくケラケラ笑っていたが、その表情は徐々に真面目なものになっていく。

「とはいえ、何時までもこうしているわけには行かないな、君が踏ん切りつかないのあの女のせいだろう。つまりアイツが死ねばみんな解決。憂いは早めに取っておかなきゃ、そうすれば私と君は晴れてハッピーに付き合えるんだから。」

そう言っ て彼女は俺の後方、恐らくは黛女史が居るであろう辺りを指さした。

「そろそろ本気で行くよ」

一段殺気が強くなる。

笑顔も消えて、柿山の表情が真面目なものになる。

恐らく次に必殺の一撃を放ってくるんだろう。

先程よりずっと強力な攻撃。

それこそ、魔王の一撃が。

俺はどうすれば良い？

迎撃は？無理だ。俺の如何なる必殺技も、それこそ「目からビーム」だろうが意味を成さないだろう。

逃走は？無意味だ。俺がいなくなれば、柿山は悠々と黛女史や武蔵を殺す。

説得は？不可能だ。そもそも話が通じない。

時間稼ぎをする手段すら無い。

いや、一つ。

部の悪いかけだが、可能性のあるものがある。

技というか、もう、ちょっとした悪ふざけみたいなもんだけれど、

もしかしたら今の柿山の注意を少しでも反らせるかも知れない。
ダメで元々と、試してみるのも悪くはない。

うまくすれば少しくらいの時間稼ぎにはなるだろう。

柿山が動いた。

然程早くないが、恐ろしいほどに力のこもった動き。
何をして止まらないであろう絶対的な動き。

そんな柿山に対して。

俺はカウンター気味に体を前に出す。
体当たりに近い動きだ。

彼女は避けられない、というか避けない。

柿山に取って俺の攻撃なんて食らったところでさしたるダメージは受けないんだ。

だから彼女はあえてそれを喰らいながら、そのまま動き続けるつもりなんだろう。

俺は、彼女の動きにあわせて。
一世一代の大技を繰り出す。

それはシンプルな行動。
たったのワンアクション。

それは柿山も予想外だったらしく、見事に決まった。

まるで世界の時間が停止したみたいに、すべてが止まったような気がした。

一瞬が永遠みたいに感じた。

俺の一世一代の行動。

それはある意味、俺の柿山に対する答えであり、俺の気持ちを代弁する行為でもある。

乃ち、キッスだった。

5月10日 ラストバトル（後書き）

用語解説

- ・ 冷戦時代のアメリカとソ連レベルの緊張感
凄じ緊張感。

- ・ 西京漬

西京味噌に魚の切り身を漬けたもの。

サイキョーズケという響きから、「最強漬」と勘違いされがちだが、別に最強と言うわけではない。？でもない。
主人公の好物。

- ・ 朝駆け

明け方に行く奇襲のこと。

朝という時間は、

夜襲に備えて緊張していた敵の、緊張が解ける頃合いでもあり、
相手は寝起きで力が入らない頃合いであり、
ある程度明るく、味方の混乱も少ない頃合いでもある。
奇襲を行う時間としては夜襲同様にとっても有効な時間とされている。

- ・ 牛歩戦術

ゆっくりうごく戦術。主に議会などで使われる。

元々は政治用語だが、転じて、相手のペースを乱すためにわざと
ゆっくり行動する戦術などを指すこともある。

- ・ あんた誰だ
モロです。

・衝撃波、静電気、発熱と発光、そして轟音。

衝撃波・ソニックブーム。音速を超えると発生する。

静電気・コロナ放電。空気との摩擦によっておきた物、紫電。戦闘機などで良く見られる現象

発熱と発光・運動エネルギーが熱と光に変質した物、隕石などで見られる現象

轟音・爆発音に近い。

・パンダのオブシエ

正式名称パンダライド。

良くデパートの屋上とかにある100円入れると動くあのパンダ。何故そんなモノが学園の屋上にあるのかは不明（原作に描写があった）。

しろうまバージョンもある。

・液体酸素

昔っからロケットの燃料として使われている。

世界初V2ロケットから現在のスペースシャトルまで。伝統と格式の燃料である。

しかし、今回はわかりやすい液体燃料を例に出したが、ロケットを語るならば個体燃料のほうがロマンがあると筆者は思う。

本当はテルミット系推進剤とか書きたかったけれど読んでいる人がポカンとすること必死だったので自粛した。

ブラジルロケット爆発事故？チャレンジャー号？さあ、知りませんな。

・相転移空間が鮮明に目視できるほどの防御膜

物理法則を無視した絶対防御。並の攻撃は簡単にいなせる。

唯一の弱点はポジトロンスナイパーライフルだが。

残念ながら主人公は装備できない。

・魔王

魔王「お前が大好きだ。可愛いその姿が。いやがるのなら、力づくで連れて行くぞ」

可愛い坊や「オトーサン、オトーサン！　魔王が僕をつかんでくるよ！　魔王が僕を苦しめる！」

作曲シューベルト。

・今北産業

「いま来たので状況を三行で分かりやすく教えてほしい」という意味の言葉。

ちなみに今回の話しは今までで一番長いが、

柿山まゆつちを狙う

主人公と柿山戦う

結局キスしておわる。

という実に簡単な内容である。

・予想外の行動

相手の思いも寄らない行動をして、相手に隙をつくる。

たとえ格上の相手であっても、気をそらしてしまえば勝機が見える。

無理矢理に隙を作り出す技。

そう、つまり之は。

セクシーコマンドーである！

実はこの話はセクシーコマンドー最強説を唱えるためのSSだったのだ！（嘘）

エピソード（前書き）

最期まで読んでくださった皆さん本当にありがとうございました。

エピソード

結論から言おう。

俺の決死の行動は成功した。

悪あがきにも近い行動だったが、予想以上の効果を発揮した。
というか発揮しすぎた。

柿山を混乱させられれば、
少しでも時間を稼げればと思つての行為だったが、それ自体がも
はや必殺の一撃となるとは。

キスした直後。

校舎から祝福の太合唱、それはもう凄い声が聞こえた。

考えて見れば、校庭で行われていたバトルは、全生徒が窓から見
ていたわけで、

即ち、俺のキッスもしっかり見られたしまったわけで。

その瞬間に全校生徒から大歓声と拍手が俺達に向けられた。
そしてその、拍手と歓声の中。

柿山は大量の鼻血を噴出しながらぶっ倒れた。

そう。

ぶっ倒れたんだ。

俺はキッス一つで魔王を倒してしまった。

馬鹿みたいな決着だ。

アレだけの覚悟をして、本当に殺す覚悟も、死ぬ覚悟もして。
キスの一回でおわりって。
ふざけてると思うだろ？

俺もそう思う。

でも本当にそれで終わりなんだ。
それで全て嘘みたいに解決した。

ぶっ倒れた柿山は数分後に目を覚ました。

起き上がった柿山は、もう、テンションが有頂天でとどまることを知らないといったような様子だった。

もう、武蔵とか、黛女史とかどうでもいいといった感じで、今後の俺達の展望とか、新婚旅行の行き先とか、作るべき子どもの数とかばかり話し始めた。

正直俺はそのテンションに圧倒されるばかりだが、この混乱に乗じて、武蔵や黛女史に手を出さないように再度説得を試みたら、

あっさりと了承しやがった。

つまりはこう言うことだ。

あいつは世界が邪魔で、俺が柿山と付き合わないと思っていたんだ。

だから邪魔者を排除して無理矢理にでも俺と付きあおうとしていたわけ。

俺が柿山を受け入れさえすれば、そもそも世界を排除する必要は

なかったわけだ。

つまり。

俺が最初から付きあおうとでも言っていれば、そもそもこんな大惨事にはならなかったのだ。

柿山の告白に対して、俺が返事をしなかったせいで関係各所にあんなにもご迷惑をおかけしてしまったわけだ。

コレは大問題に発展するのではとも思ったが、思ったほどでは無かった。

アレだけの騒ぎを起こしたのだから退学どころか、ポリス沙汰なっても仕方がないと覚悟したのだが、結局さしたる問題にはならなかったのだ。

決闘システムを介さない戦闘行為はたしかに大きな問題なんだけど、

俺達のバトルは「決闘」ではなくて「壮大なる痴話喧嘩」と言う事にされた。

幸い直接的な被害者も、親不孝通りの後ろ暗い奴らを除けば、川神百代と武蔵しか居なかった。

親不孝通りの奴らは警察に駆け込んだりしないし、そもそもあそこで非合法に殴り合っていたような輩だ。ちよつと強めに殴つちやったくらい大した問題には成り得ない。

川神百代は自分から戦いに飛び込んで来たわけだし、本人も戦え

て満足らしい。

俺に対する貸しもできたし万々歳の状態だ。

武蔵が一番憐れといえば憐れだ。

なにせ訳もわからないうちに俺にぶん殴られただけ。

それでも、本人は「人生乃之日々修行！」と、なんだか満足気だったのでまあ良いか。

唯一の問題といえば、校舎とグラウンド破壊の弁償として、俺と柿山の貯金がすべて吹っ飛んだくらいか。

貯金だけじゃまかないきれず、お金持ちな先輩、具体的には冬馬先輩と準先輩に低金利でお金を借りたりもした。

「愛に投資はつきものですよ」

と言いながらニギニギと俺の手を握りながら、先輩は快くお金を貸してくれた。

感謝感激ではあるが、何か危険を感じたのはなぜだろう。

兎にも角にも。

拍子抜けするような終わり方だが。

こうして俺と柿山の起こした大騒動は幕を閉じた。

それもそのはず。

あんなバトルを繰り広げた末に、キッスで終わる超絶痴話喧嘩を全校生徒にバツチり見られたのだ。

俺達は「学園公認世界最強カップル」という、認識を周りにされてしまったわけだ。

通学途中は冷やかされるのが常。

「どうしてこうなった」

思わずつぶやいてしまう。

「良いことではないか！」

そう言いながら柿山が俺の腕に抱きついている。

あれ以来柿山はずっとこんな感じだ。
超上機嫌の超ハイテンション。

「ええっと…柿山さん？」

お前…柿山だよな？

なにその行動、お前のキャラから乖離しすぎじゃね？

「何だね？いや、柿山なんて他人行儀な言い方は宜しくないな、せっかく恋人関係になったんだもの、そうだなやはり下の名前呼び捨てで「衣子」と呼んではくれないかな？いや、ココは幼なじみっぽく「イツちゃん」とかも捨てがたいぞ？いや、待て待て、落ち着け私、之はもしかして、「マイハニー」と呼んでもらえるチャンスかも知れな…」

駄目だ、柿山にかかったメダパニがまだ解けていない。

誰か助け…

「おはよう御座います！」

「プレミアムにおはよう！」

俺の心の呟きを聞きつけたのか、黛女史と武蔵が挨拶をしてきた。

「やあやあ、黛女史、武蔵君も一緒に登校かい？」

上機嫌に柿山が挨拶する。

アレだけのことがあったのに、柿山とこの二人仲よさ気だ。

まあ、二人とも別に直接的被害を柿山から被ったわけじゃないし。武蔵を殴ったのも柿山じゃなくて俺だし。

然程蟠りもなく、あっさり和解したようだ。

「ええ、そうなんです、いやあ、柿山さん達は相変わらずお似合いでラブラブですね」

「さすがだぜーまゆっち。見え透いたヨイショが冴え渡ってるぜ」

「というか、私としては、今まで実は付き合っていなかったという事実に驚きだわ。いつも一緒にいるから、てっきり二人はすでにそういうプレミアムな関係だと思っていたのに」

松風氏の言うとおり、社交辞令的ヨイショだが、この言葉は柿山に対して効果がバツグンだったらしい。

柿山はわかりやすく嬉しそうだ。

「フハハそうだろうとも、そうだろうとも、なにせ私たちは生まれ

たときからの運命によって結ばれていたりもするわけだ。コレはもはや何人たりとも切れることは出来ない太い糸でもって、がんじがらめにされているのだああ」

「柿山落ち着け、っていうか黙れ」

お前そんなキャラじゃなかったろ？

「なんだよう、恥ずかしいのか？良いじゃないか、べつに。愛しい恋人のちよつとした惚気ぐらい、むしろご褒美だと思って受け止めるべきだと思うよ。このテ・レ・屋・さ・ん」

スマン柿山、俺は前とガチバトルした時以上の殺意を今のお前に対して抱きつつある。

「で…では、おじゃましてもアレなので、私たちは先に行っています」

「プレミアムにまたあとで！」

そう言って二人は春風のように去っていった。

きつと俺達二人に気を使ったのだろう。というか柿山の惚気状態から逃げたな。

俺を見捨てて…

友達がいの無い奴らめ。

とはいえ、こうして普通に挨拶もしてくれるし、学園でも今までと然程の変わらない関係だ。

俺達が超絶パワーを持っていると知っても、今まで通りに接してくれている。

彼女たちは本当にいい友だちと言えるだろう。

なんてことを考えていたら。

「やつふ〜！」

この背中に感じる甘美でかつ危険な感触は！

「小雪先輩！？」

「ヤッホーオハヨー」

いつものとおりに先輩は俺の背中に柔らかいものを押し付けてくる。後ろには準先輩と冬馬先輩の姿も見えた。

背中 of 甘美な感触に俺の理性が…

っていつか柿山が暴走！！！！

俺は慌てて柿山の方を見ると、不思議と柿山は笑顔だった。

「なに、問題ない、真の連れ合いというものは決まってるたえな。後で埋め合わせはしてもらおうし」

なにそれ怖い。

柿山は恐ろしいほどの笑顔だったが、ただその笑顔がとても怖かった。

「こらこら、学園公認最強カップルにそうやってちょっかいかけちゃいけません」

「ブーブー」

そう言いながら準先輩に無理矢理引き剥がされる小雪先輩。

「安心してください、私もユキも、別に貴方達の恋路を邪魔する気なんて毛頭ないんですから。むしろ祝福しますよ。おめでとうございます。」

そう言って冬馬先輩は笑顔を俺達に向ける。

「はあ、あ、ありがとうございます」

「祝福には感謝で答えますよ」

この三人にも実に迷惑をかけた。

冬馬先輩は水面下で動いてくれていたし、準先輩と小雪先輩は態々柿山対策本部に助っ人として来てくれた。

さらには、学園の補修費用の一部を貸してくれたりしている。

正直足を向けて眠れない。

「貴方達には幸せな家庭を作って幸せになってほしいと思っているんです」

さらにはこんな祝福の言葉までかけてくれている。

とはいえ、有り難いお言葉だがちょっと気が早すぎでもある。結婚とか家庭とか、正直まだ実感がわかないし。

「その上で私とユキを愛人にしてほしいんですから」

・・・ええつと。

「え？」

「冗談ですよ？」

「冬馬先輩？目が全然笑ってませんけど？」

あと柿山も、目が全然笑ってませんけど？

あれ、なんでだろう、二人の背景に龍と虎が見える…。

「フフ…ではココは若いふたりに任せて、我々は先に行きましょうか」

一触即発かと思われた雰囲気も、冬馬先輩がそう言ったことで収束した。

どうやら本当に冗談だったようだ。

「じゃあ又な」

「ニッゲロー！」

そう言って三人は先に進んでいってしまった。

きつと俺達二人に気を使ったのだろう。

本当に気のきく先輩方である。

あの人達と友人になれたのは、俺達にとって本当に幸運なことなんだろう。

そして彼らの姿が見えなくなったと思ったたら。

「ずるいぞ！俺が栃木にイチゴを食べに行っている間に全部終わってるなんて！」

突然俺の真横からそんな事を言われた。

言ったのは、頭にバンダナを巻いたイケメン。

確かエレガンテ何とかのキャップさんとか言う人だ。

俺がナニを言われているのか理解できずに混乱していると。

「ホラホラ、キャップ。ご迷惑だから」

ヤマト先輩が現れて、キャップさんをなだめ始めた。

気がつくとも目の前にはあの日お世話になった2・Fのメンバーが揃っていた。

「あ、先輩方お早うございます、その節はご迷惑をおかけしました」
「ええ、どうにも迷惑をかけたようで私からも謝罪をしますよ」
そう言っただけ俺達は頭をさげる。

思えば、先輩達にも本当に迷惑をかけた。

「いや、俺、別にたいしたことしてないし」

そう言っただけに、かんだ笑いを浮かべる大和先輩。

「いえいえ、先輩のおかげでほんとうに助かりました」

武蔵の保護、柿山搜索、さらには朝御飯までごちそうになってしまった。

結果、さしたる戦闘は起きなかったわけだが、迷惑をかけたのは事実だ。

「チックショー！大和達だけ、なんか凄く関わってずるい。俺も、俺もなんか重要なポジションに居たかった！」

「はいはい、キャップ、じゃあお口にチャックしましょうねえ。ほら、暴れないで！ガクト、足持つて、足」

暴れるキャップさんを大和先輩とマツチヨな人が抑えつける。

「おう、じゃあなお二人さん、本当だったら嫉妬の炎が炸裂するところだが、正直二人の実力だと軽い気持ちでからかった結果、殺されかねないから、自粛するぜ！」

「素直におめでとうって言えばいいのに」

「まあ、何にせよ、解決したんだ良いことじゃないか」

「おめでとー」

それぞれが俺達に祝福を投げかけながら、キャップさんを連れて先輩たちは行ってしまった。

騒がしいけれどもいい人達だ。

アレだけの騒動に巻き込んでしまったのに、文句の一つも言わない。

其処か、祝福すら投げかけてくれる。

今回ご迷惑をおかけした人達全員が、こうして俺と柿山に祝福をかけてくれている。

ん？

全員？

誰か一人忘れているような……

具体的にいうと、いま、俺の後方にある好戦的な気配の持ち主……

「只今参上！」

川神百代があらわれた。

もう回復したのかこの女！

「さあ、お前には貸しがあつたぞ！さあ勝負だ！やれ勝負だ！」
そう言つて彼女は殺気を垂れ流す。

ああ、たしかに貸しがあつたよ？
でもホラ、アレはなんていうの？

そのばのテンションって言うか、
そもそも俺にも心の準備…

「柿山！作戦・・・〇〇〇〇」先輩・・・ウザイので私たち二人の
時間を邪魔しないでください！」「

俺が逃走作戦を柿山に頼もうとしたら、それにかぶせ気味に柿山
が不機嫌な声を出した。

「いや…でも約束が…」
不機嫌そうな柿山に川神百代もたじろぐ。

「負け犬が吠えるな、文句があるならまず私に勝ってから言いなさい・・・。」

そう、コレ戦闘狂のルール。

柿山は前回の騒動で川神百代を負かしている。
言わば勝者である。

敗者に対して勝者の言葉は絶対。
百代が柿山に意見するには、柿山に勝たなくてはいけないのだ。

「ぬぬ。ではまずはお前と・・・。」

「私と勝負？は！彼にも勝てなかった貴方が、私と勝負？そう言う
のはまず、彼に勝ってから言うことです。彼に勝てたのならば、私
も貴方との勝負を考えても良いですよ？」

そう言って柿山は俺を指さす。

ええっと俺と戦うには柿山を倒さなくてはいけない、

そして柿山と戦うには俺を倒さなくてはいけない。

なんてこった、これだと川神百代は俺達と戦えない！
凄いロジックだ！

「うぐぐぐぐぐー!!」

「負け犬は勝者の言う事を聴くものです」

くやしがる川神百代に対して、柿山はシッシッ！と野良犬でも追
い払うような仕草をした。

「チクショー！コレで終わっったと思うなよ！大和にとびきりの作戦
を考えてもらうんだからなー!!」

そう言いながら川神百代は半泣きで走り去っていった。

大和先輩スイマセン。

俺、恩を仇で返してます。

とはいえ、目下危機は過ぎ去った。

「さすが柿山」

「ふふ、もつとほめたたえたまえ。何なら抱きついてても良いよ」

さすが柿山さんだ腕力だけでなく、口八丁も達者。

彼女のおかげで俺は川神百代との戦闘フラグを何とか潰せたけれ
ど。

ただ、一つ気になる点が。

「でもさ・・・之だと俺が一人になった瞬間、やばくないか？」

そう、柿山が言ったのは「二人の時間を邪魔しない」ということだ。

つまり、二人じゃない時間は川神百代は俺と戦えることになる。

「なに、問題ない。その辺もじっくり考えてある」

「マジかよ」

さすが柿山、頼りになる。

「すなわち一人にならなければよいのだ」

「……」

ええつと？

「君は川神百代に絡まれなくてハッピー。私は君と居られてハッピー。二人が幸せになれる素晴らしい案ではないか。」

そう言って柿山は、

魅力的に笑うのだった。

.....

問題だらけの毎日だ。

変わり者や、とんでも無い化物的パワーを持った奴らに囲まれて、自分自身もその化物で、それでもって恋人が一番の化物。

さらにそれらの事実全校生徒に知られて、もう俺達は平穩も平凡も手に入らない位置に居る。

それもそのはず俺たちはイレギュラーだ。

この世界にいちやいけないような人間だ。

そんな俺達が平凡に生きられるはずがない。

きつとこれから色んなトラブルに巻き込まれていくんだろう。というか、この状況がすでにトラブルだ。

俺はもう、俺が一番恐れていた異常な世界にどつぷりと肩まで浸かっている。

きつと抜け出すことも出来ない。

でも、この世界の皆は俺達を祝福してくれている。受け入れてくれている。

平凡も平穩もない人生だけでも。

俺と同じ異世界人の柿山の隣で。

今俺は確かな幸せを感じていたりする。

終わり。

エピソード（後書き）

用語解説

・キスの一回

「戦う前に一つ言っておくことがある 君は私を倒すのに『殺す覚悟』や『死ぬ覚悟』が必要だと思っているようだが…別になくても倒せる」

「な 何だって!？」

「そしてお武蔵と黛は襲うふりだけで別にどうでも良いと思っている。あとは私を倒すだけだなクツクツ…」

（ゴゴゴゴ）

「フ…上等だ…俺も一つ言っておくことがある このオレの前世や名前に重大な秘密があるような気がしていたが別にそんなことはなかったぜ!」

「そうか」

「ウオオオいくぞオオオ!」

「さあ来い!実は私は一回キスされただけで鼻血を吹くぞ!」

…ご愛読ありがとうございました。

・ドメスティックバイオレンズ

学園入学前の主人公の「ドメスティックバイオレンス学園」発言は現実のものになった。、他ならぬ主人公自身の手によって

・メダパニ

範囲：敵1体、威力：混乱誘発、消費MP：5

・作戦〇〇〇〇

作戦「俺がお前でお前が俺で」

別名「転校生」

どんな内容か、詳細は不明だが、どうも柿山と寸劇を繰り広げるらしい。

・二人

本来ならば用語解説に載せるべき事柄ではないが、最後なのであえてここに記入する。

危うい二人である。

精神的に脆く、それでいて力が強い。

柿山は精神的に異常、主人公も普通とは言いがたい。

柿山は時に暴走し、主人公も屡々暴走する。

何かのきっかけで、今回のような騒動は起きる。

その時に今回のように平和的解決ができるとは限らない。

そんな二人だ。

しかし、これだけは決まっている。
決めている。

筆者がコノ言葉を書くために、この話を最後まで進めてきたのだから。

その後二人はずっと。

ずっと幸せに暮らしました。

その後の話1 (前書き)

この話は、本編のイメージを少し変える話です。

まあ番外編ですので、外伝として本編とは別物と考えるもよし、
読まないもよし。

スルーするもよし、
受け入れるもよし。

その後の話 1

放課後。

本来ならば私は彼と二人、寄り添って帰宅する。

それは連れ合う二人の特権であり、当然の行為だ。
むしろ寄り添っていない状態こそがイレギュラーであり、異常なことなのだ。

が、この日はそれが出来なかった。

どうしても外せない用事があったのだ。

「今日は用事がある」

私がそう言うと、彼が不思議そうな顔をした。

「ふーん、珍しいな、今日は別に部活の日でもないんだろ？」

「ああ、今日は部活はない」

それよりもずっと大切な用事なのだ。

「なに？どんな用事？」

彼が聞いてきた。

その言葉は嬉しい。
とても嬉しい。

私の動きを知りたがる。

私に依存した言葉。

しかし残念だ。

全てを語ることが出来ない。

「今日は『魑魅の匣』の日なのだ」

「…何それ」

「それは言えないなあ。まああれだ、男子諸君が魑魅の宴で販売会をするのが秘密のように、魑魅の箱の内容も秘密なのだよ。」

「ちょっ・おま。」

ふふ、驚いた声を出しているね。

この学園のトップシークレットの一つ魑魅の宴。なぜ私とその存在を知っているのか。ふしぎなんだろう？

知っているとも。

魑魅の宴がどんなものかも。

君がそこで小雪先輩の写真とか買っていることも。

私という恋人ができてそこを追放されたのも。

ゼーんぶ筒抜けなのだよ。

「というわけで今日は一人で帰ってくれたまえ、それとも何かね？一人で帰るのは寂しいかい？怖いかい？大丈夫だ、離れていても私達の心は通じ合っているよ？それにだ、離れている時間が、二人をより強く結びつけるのだ。正直私だって寂しいさ、出来ることならば24時間365日一刻たりとも別れたくないとも思うよ。布団か

らお風呂まで、勿論墓の中までだ、しかし、……」
「……あ、俺、ゲーセンよって帰るから、じゃ」

そう言つて彼はそそくさと行つてしまった。

つれない態度だ。

きつと私の嫉妬心を煽っているんだな。

まったく、女ゴコロを弄ぶのが上手い小悪魔ちゃんだな君は。

それとも私と居られないから拗ねちゃったのかな？

仕方ない、あとで埋め合わせにメールを20通ほど送つておこつ。

彼の後ろ姿を見送つた私は、人目を避けるようにして、とある教室に向かう。

普段は使われることのない、校舎一番奥の教室。

掃除も行き届いていないし、日当たりも悪い場所と言つこともあつて、その教室周辺だけ実に暗い印象を得る。

よもや、そんな教室で魑魅の匣が行われるなんて誰も思わないだろう。

「合言葉は？」

私は教室の扉の前に立つと中からそんな言葉が聞こえた。

「丘の上のラムロツサ」

私がそう答えると、扉はゆっくりと開く。

教室の中にはメンバーが既に集まっていた。
どうやら私で最後のようだ。

「椎名センパ・失礼、猩々様スイマセン遅くなりました」

「大丈夫、そんなに待ってないし」

「では早速開始しましょうか」

担当員の号令で魑魅の匣が始まった。

魑魅の匣。

この魑魅の匣のは魑魍の宴の真逆にあるといえる。

軟派な気持ちを持て余し、写真で自分を慰める魑魍の宴に対して、
魑魅の匣は、絶対の依存相手だけを対象とし、それを本気で攻略
する、実践硬派な会だ。

ただ、雛鳥のように与えられた写真で満足するようなあんな会とは
違い、自ら動き、ほしい物を手に入れる。

他のメンバーはそれを手助けする。言わば協力者たちの集まり。
共同体だ。

我らは同士であり、協力者であり、そして異常者である。

「まずは成果報告から」

そう言って私は立ち上がる。

そして胸をはって。今回の成果を発表する。

「さて、この度会員番号002こと、私『カッキー』はめでたく目的を達成致しました」

次の瞬間、部屋中に拍手の音が響く。

その部屋の中の誰もが、私の思いの成就を祝福していた。

「皆様にはご協力いただきまして誠にありがとうございます。特に会員番号3番には色々と動いていただきまして、感謝であります」

「へいへへい」

そう言って会員番号3番は笑顔で手をふる。

「詳細は皆さんも御存知だと思いますが。後ほどレポートにして提出いたしましたよう…兎に角、今回の件で『危なっかしくて守ってあげなくなっちゃうタイプ』はモテるといふ噂が事実である事が証明されたわけです」

その言葉に全員が頷く。

やっぱり「守りたいタイプ」と言うのは男性に取って王道パターンのようだ。

「さて、私の目標は達成されたわけですが…さて、次はいよいよ、猩々様の目的を達成するべき時であります」

「うん、私もカッキーには勇気づけられた」

そう言って猩々様は目を輝かせる。

そもそもだ、この魍魎の匣は猩々様を中心に構成されている。発起人は私だが、代表は他ならぬ猩々様なのだ。

本来ならば、一番最初に猩々様の願いを成就させるのが筋なのだが、今回私の思いが先に成就された。

まったく、猩々様初めこの魑魅の匣のメンバーには本当に感謝である。

この恩は猩々様の目的達成という形で返させていただく。

「それでは今度は猩々様の恋愛成就大作戦の計画の説明に入ろうと思います」

そう言いながら私はプロジェクターのスイッチを入れた。

プロジェクターには一人の男性が映しだされる。

「さて、では状況のおさらいです。2 - Fのターゲット、大和氏は現在の猩々様との関係はとても仲の良い友達であります。また。彼は猩々様の好意を理解しており、それを拒絶こそしないが受け入れもしないと言った状態です」

大和氏と猩々様の関係は、ある意味私と彼の関係に酷似してる。近すぎてその相手の重要性に気がつかないパターンだ。

友人という関係が長すぎると、その関係の心地良さに相手がそれ以上の関係に発展したがないのだ。

「まず攻略作戦第一弾として外堀から埋めていってしましましょう作戦を提案します」

「外堀？」

不思議そうに尋ねる猩々様に私は作戦の詳細を伝える。

「事実というのは後から付いてきます。そこで一年の間で、お二人はすでに付き合っていると言う認識を広めます、なに言霊部の協力者に渡りはつけてありますので直ぐに噂は広がります。」

「でも、噂が立つことで、意固地にそれを否定してしまう可能性もあるのでは？」

猩々様がそういった。

なるほど、当然の懸念である。

が、心配ご無用。ちゃんとその部分も考慮している。

「勿論その対策も考えてあります。猩々様とターゲットの恋人疑惑と同時にもう一つ噂を流すのです……」

先輩のゲイ疑惑をでっち上げます」

「おお！」

「なんという！」

「ザワ…ザワ…」

教室内がざわめく、そして猩々様の目がなぜか輝いていらっしや

る。

「そして先輩はこう思はずです。ゲイ疑惑よりは、女性と付き合い合っている噂のほうがマシだ！っと。そして先輩は付き合っているという噂を否定しなくなります」

「完璧」

そう言って狸々様はサムズアップをした。

「では、実行は明日13：00より開始予定です。客員にはそれぞれ今夜メールにて具体的な行動予定を連絡します」

明日から狸々様の作戦開始だ。
気合を入れなくては。

「では次に連絡事項を」

そう言って連絡担当の会員番号8番が立ち上がり連絡事項を読み上げる。

「科学研究部の会員11番および、お医者さんの娘さんである会員3番のツテでグリセリンやホルマリン、他標本用の薬品が大量に手に入りました。今後は標本作成の幅が広がると思われます。また、ピントタイプコレクションの第一人者であるヒューム氏のアポイントが取れましたので、いずれ講習会を開きたいと思えます。」

ほう、グリセリン標本か。

髪の毛や爪等の劣化を考えると中々に魅力的な保存方法だな。

私はピンセットコレクションは然程力を入れていないが、講習会は得るものもおおそうだ。

なにせ、今の私の立場なら、彼の私物を失敬し放題なのだ。

今後コレクションが大幅に増えることが予想される。

あらゆるコレクション方法を模索する必要がある。

「では最後に、入会希望者の審議に入りたいと思います」

そう言いながら担当者が立ち上がる。

実はこの魑魅の匣、かなりの数の入会希望があつたりする。

秘密の会では有るのだが、乙女の情報網というのは凄いもので、秘密なんてものは在って無いがごとくである。

とはいえ、誰でも入会出来るわけではない。

同士足りえる熱い想いと黒い狂気を持ち合わせている必要があるのだ。

そしてその判断方法だが…。

「では取り敢えず順番に読みあげていきましょう」
そう言って会員番号12番が手紙を読み上げた。

そう。

手紙なのだ。

古風なようだが、直筆の手紙にどれだけの熱い想いを書き込める

かで入会できるか否かを診断するのだ。

「私は3年のとある女子です。ある人を愛しているのに、その人が振り向いてくれません。せっかくアノ人の机にそれと無く私の私物を混ぜたり、あの人の私物をこっそり盗んでいるのに、彼が全く気付いてくれないのです、もう私一人の力では限界を感じています、どうか魑魅の匣に入会をさせて下さい」

「では審議に入ります」

「意中の相手と手紙の主の関係は？」

「無いようです。手紙の主の一方的恋慕で、相手は手紙の主のことを一切知らないようです」

手紙に書かれていない内容だが、12番は確信を持った声で答ええた。

事前調査がされているのだ。

その調査段階で魑魅の匣にふさわしくないと判断されればそもそも審議にすらかけられない。

「

保留で。此処はただ恋愛を成就させる会ではなく、単に手伝いあう共同体。本人にアタックする意思が無ければ我々ではどう仕様も無い」

「ええ、まあ、今後彼女が自分の意志で行動を開始するならば改めて入会を審議しましょう」

まあ、素質はあるが、我々はただのストーカー団体ではない。

その一歩先にいるのである。

彼女自身がストーリーカーからレベルアップをしたのならば、その時は晴れて入会が出来るだろう。

「では次は会員番号3番の推薦ですね、ええっと……私はとある二年生の男子生徒です。実は最近とある1年生の男子が気になってます。彼に対しては、恋とも違う何か素晴らしい感情をいだいているのですが、実は自分自身その感情に戸惑っています。

彼とは別に性的関係を結びたいというわけではないのですが、出来れば生涯と一緒に過ごしたいとも思います

ただ、その男子生徒には先日彼女が来てしまいました。

でも。男女関係はそれで確定としても、男男関係はまた別の話だとも思います。

もしよろしかったら助言の程を、というか『カッキー』さん、偶に彼を借りるくらいならゆるし……………」
「それはシュレッダー行きですな」

というか此処は男子禁制だ。

「な……なんという。個人的には大いに推奨していききたいきもするけれど……」

と、トンデモないことを言い出す狸々様。

「流石に不許可です、というか、彼にそんな性癖を開花されては私が困ります」

私は紙をはさみで裁断しながらそういった。

「会員番号3番、今日帰ったらこの男のケツをおもいっきり蹴り上げておいてください」

「うん」

そう言いながら会員番号3番がキツクの素振りを開始する。

全く、ただでさえ、3番との協定があるのに、これ以上状況をややこしくされてはたまったもんじゃない。

「ええっと、コレは最後ですね私はある人が好きです、とても好きでたまらないのです。この気持を押さえられません。でもその人はとても人気で、私はその他大勢のウチの一人でしかありません、お願いです、どうか、その人が私の方を振り向くお手伝いをしてほしいのです…ええと、コレは事前調査の結果、彼女のいう、好きな人と言つのは2・Sの冬馬氏であることが判っています」

「コレは、ただのミーハーの予感」

「まあ、そのようですね、特に接点があるわけではないですし。タマタマ冬馬先輩に優しくされて勘違いした女性のようなです」

「当然却下」

にべもなく猩々様がそう言った。

「最近この物事を勘違いした輩の入会希望が多くてこまります」

周りのメンバーも呆れ顔だ。

というか、コレは本来ならば事前調査の段階で勿ねるべき手紙である。

「一過性の熱病みたいなものを恋と勘違いして行動する愚か者が世の中には多い」

「此処は恋を超越した感情を抱く者の集い。生半可な気持ちで来られても困るのですかね」

「そう、我らは愛を超えた感情を持つ者の集い」

「生涯を賭けられる相手」

「生命を賭けられる相手」

「クフフフ」

「腐腐腐腐腐腐腐腐腐」

「フフフフフ」

「クケケケケケ」

「ケラケラケラケラ」

「ケタケタケタ」

一同の怪しい笑いと共に。
魑魅の匣は更けていく。

その後の話1（後書き）

用語解説

・ つれない態度
別に普通にしていますが？

・ 埋め合わせにメールを20通
が…頑張れ主人公。

・ 丘の上のラムロツサ
チチカ力湖が土砂降りならば丘の上はラムロツサでしょう。
ドチラも13なゴルゴが元ネタ。

・ 狸々様
ええ、勿論大和のオトモダチのあの方ですよ。
話に殆ど出てこなかったのは裏で動き回っていたからです。
実はユキ以上に柿山に協力的だったりする。

・ 魑魅の匣
つまりはヤンデレの集い。
発足メンバーは狸々 会員番号001 から会員番号004まで
の同志たち。
4人で始めた狸々の箱も、いつのまにやらすでに会員は二桁。
なんてヤンデレの多い学校だ。

・ 『危なっかしくて守ってあげたくなっちゃうタイプ』
危なっかしいの意味を完全に履き違えている。

・外堀から埋めていつてしましましょう作戦
大和！にげて！。

・医者さんの娘さんである会員3号
主人公が青空闘技場に行ったとき、一足早く柿山は逃げていた。
主人公が学園到着と、柿山と黛女史が屋上に行ったのがほぼ同時。
なぜあもタイミングが良かったのか。

そう、獅子身中の虫がいたのです。

・グリセリン

浸透標本といえばホルマリンやエタノール アルコール が有名
だが、ドチラも劇物であつたり発火の危険があつたり、入手が面倒
と言つこともあつて、最近ではグリセリンが良く使われている。

一応グリセリンを使った標本でも作業工程においてはホルマリン
を使う必要があるが…

・ヒューム氏

まさかの名前だけ登場。

・今の私の立場なら、彼の私物を失敬し放題なのだ
こうして主人公の部屋から…物が消えた。

・私はとある二年生の男子生徒です
冬馬工

・一同の怪しい笑いと共に魑魅の匣は更けていく。
彼女たちには友情は無い。が、同士としての連帯感と信頼は存在
している。

実は一番原作改変なのはこの部分。

原作において小雪と京は似ているが根本で相容れない関係だった。その一番の理由は、京は大和に助けられたが、小雪は誰にも助けられなかったから。

しかし、この話においては小雪は主人公によって助けられている。つまり京と小雪に仲良くなる条件が揃っているのである。

そこに柿山が混ざり。

結果…この、負の連鎖が出来上がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8364q/>

真剣に小者に恋しなさい

2011年8月1日02時02分発行